

転スラ～最弱にして最凶の魔王～

霖霧露

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「転スラ」世界に存在する魔王たち。そんな中に、一際異質な魔王が存在した。全くと言っていいほど力が無く、全くと言って物的被害が無い魔王。壊しはせず、殺しもせず、しかし心を壊す魔王。

かの魔王は人々に、そして魔王たちにこう呼ばれる。

『番外魔王』『最弱にして最凶の魔王』——

『マイナス過負荷』と……。

「まあ！オール全イス部ファン幻タ想ジーなんだけどね！」

「※一話限りの短編です。」なんて現実、僕が受け入れるわけないだろう？。」

目次

短編版

All is fantasy.

1

連載版 ー 原作開始前 ー

第一話 二次元転移にユメを見る

13

第二話 完全燃焼こそ最高のユメだろう

21

第三話 ユメ見が悪けりやキミが悪い

27

第四話 悪いユメは続くもの

34

第五話 良いユメ見るにはよく眠れ

40

第六話 力無き夢は正しくユメでしかない

48

第七話 良いユメばかりは見られない

55

第八話 寝言はユメの中で言え

64

第九話 まるでユメのような男

71

第十話 浅きユメ見し酔いもせん

77

第十一話 ボスに辛勝後の連戦は酷いユメだ

83

第十二話 運命がユメならどれ程良かったか

89

第十三話 番外魔王の番外編 ー 「最弱」と呼ばれる理由 ー

94

第十四話 見当違いなユメを見る

102

第十五話 ユメを見る

111

連載版 ー 原作開始後 ー

第十六話 ユメが始まった

119

第十七話 救われるユメを見たくて

125

第十八話 故郷の中で眠るユメは見られない

132

第十九話 綺麗なユメを見たかったかい？

142

第二十話 故郷の味を食べられるなんてユメのようだ！

150

第二十一話	無茶苦茶加減はユメの如し	158
第二十二話	ユメのような、とりとめのないひと時	165
第二十三話	あれは悪いユメだったのか？	171
第二十四話	ユメであれば……	181
第二十五話	ユメの中ならぬ霧の中	187
第二十六話	ユメは脳に詰まっている	194
第二十七話	人生最期に日を拝む、そんなイイユメ	201
第二十八話	嫌われてるのを努々忘れるな。ユメだけに	209
第二十九話	人のユメと書いて儂い、人じゃないけど	215
第三十話	誰が描いた、このユメを	222
第三十一話	再会をユメに見た、悪夢的な意味で	228
第三十二話	再会をユメに見た、今度こそ本来の意味で	234
第三十三話	雪融けの日をユメみる	241
第三十四話	ユメ枕にはまだ立てない	248
第三十五話	そのユメは夢寐にも忘れられない	254
第三十六話	世界とは、生命を微睡のユメに閉じ込める揺り籠	
262		
第三十七話	ユメと消える	269
第三十八話	これはユメだ	275
第三十九話	ユメじゃない	281
第四十話	ユメを越えて	286
第四十一話	幻想（ユメ）の終わり	298
第四十二話	理想（ユメ）の始まり	305
最終話	人のユメは終わらない	317

NEXT

短編版

All is fantasy.

「ああ……待ってたよ、この時を」

一人の男が気味悪く口の端を大きく釣り上げる。

「暴風竜ヴェルドラの消失。ああ、彼が来たんだ。リムル・テンペストが……！」

彼は待ちわびた者の来訪を予感し歓喜していた。恋い焦がれた運命の相手を見つけたように、復讐を誓った怨敵を見つけたように。

「これで世界は動き出す。300年だ。300年待った。これで、世界はもつと、もおおつと面白くなる！」

この地に来て300年。彼はこの地に来た時より持つ知識を頼りに自身の地位を確立し、待ち続けていた。原作の始まりを。

「だが、もうちよつと待とう。なに、300年と比べればほんのちよつとだ。流石の僕でも、他の魔王たちに干されるのは骨が折れるからね」

耐え難きを耐えるために、そう独り言ちて自己暗示をする。骨を折られたところでそんな現実全は受け入れ問ないが、せつかく確立した立場を台無しにすることも無いと考えた。

「全く、番外魔王とか言つて仲間外れにするくせに、ちやつかりルールは適用するんだから酷いよなあ」

彼は300年の内に魔王と認められていた。この世界に乱立する魔王の中、トップ10を纏めた括り・十大魔王には含まれていないが、その十大魔王たちから同列として扱われ、忌避されていた。その同列扱いのせいか、何故か彼らの条約には従わされ、ジュラの大森林不可侵条約のせいで待ち人に会いに行けないのだ。

「まあいいさ。そんなに焦ることもないしね。どうせこんな人生、長い永いオールイズフアンタジーたなんだから！」

彼は楽しい幻想を見て笑う。これからもつと面白くなると笑う。

彼は幻想と楽しみ、幻想と笑うのだ。

◇◇◇

魔物が居て、魔王が居て、冒険者が居て、勇者が居るファンタジーな世界。『スキル』という個々の才能を可視化するようなルールが存在する世界。

この世界には魔王が多数存在し、それぞれの領地を持って、手下の魔物を従えて君臨している。特に力ある魔王たちを纏めて『十大魔王』と呼ばれる。魔王となる者は上から二番目の危険度を示す災禍級ディザスターであり、十大魔王のほとんどもそれに該当し、中には最上の天災級カタストロフも存在する。だが、魔王であるのにランク分けある中で最低の危険度・F（戦闘能力なし）に分類される魔王がいる。

その魔王は最弱の魔王として、何度も討伐報告が上がっている。彼と敵対した者は個人・群衆に関わらずその体は無傷で生還する。だが、完全討伐を果たした者も、再び相対しようとする者も、誰一人としていない。ただひたすらに、彼と敵対して心折れた者たちばかり増えていった。そうした被害にあった多くの国が、多くの組織が、「彼を天災級カタストロフないし災禍級ディザスターにするべきだ」と言う。しかし、彼は物を壊したという事実も、人を殺したという事実も、ひいては魔物を殺したという事実もどこにもない。故に、彼は『戦闘能力なし』とされている。嘆願の受け入れられぬ彼らは、せめてもの報復として彼をこう語る。

「最弱にして最凶の魔王、『過負荷マイナス』と。」

「まあ『過負荷マイナス』は僕が自称してたのがうまいこと広まったやつなんだけどね」

◇◇◇

「不可侵条約など今この場で撤廃してしまえば良かろう。暴風竜が消えたという噂だしな。もう必要なかろう?」

十大魔王の内四柱、ミリム、クレイマン、カリオン、フレイが集まるとある一室。彼らはミリムとクレイマンのジユラの大森林に対する思惑の失敗と、その思惑を頓挫させた魔物の存在を知らされて集ま

り、その魔物に興味を持つも十大魔王間の『ジュラの大森林不可侵条約』によって干渉できないことを嘆いていたが、その嘆きもミリムによるその一言で打開された。

「そういうことなら条約破棄に反対する者もないだろう。俺は賛成だ」

「私も賛成ですわ。私の領土はあの森と接していて面倒だったのよね」

「……いいでしょう。私も条約の撤廃に賛成です」

カリオン、フレイ、クレイマンはそれぞれミリムの意見に同調し、他の魔王に条約撤廃を連絡及びそれを受理する文書に各々サインする。そして、それが魔法的効力を発揮する瞬間に事が起こった。

「ありがとう、君たち。これでようやく、僕は彼に会いに行ける」

ここに居ないはずの、ここにいる全員が聞き覚えのある声が響く。皆一様にその声の発生源に顔を向ければ、先ほどまで居なかったはずの『そいつ』が悠然と席に腰かけていた。

「てめえ、いつの間に!」

「カイ! 貴方がどうしてここに!」

「ええ? そんな驚くことかい? 僕がそんな面白そうなこと、知らないなんて現実を受けい——」

カリオンとフレイが驚愕に声をあげ、クレイマンが警戒しつつ静観している中、ミリムだけが人間の肉眼で捉えられぬ速度の拳を『カイ』と呼ばれた男の顔面に叩き込み、見事その頭蓋を砕いて見せた。

「……カイ、さっさと起きるのだ。貴様がこの程度で死ぬわけ無からう」

頭部を失い、力なく地面に横たわる死体に向けて、ミリムは冷淡に睨む。

「全く、酷いなあミリムは。僕は『魔王』だけど『ただの人間』で、君なんか殴られたら死んじゃうんだよ? 実際死んじゃったじゃないか、頭パアンって」

その部屋に居る全員が瞬きで目を閉じ、目を開けた時には死体なんて何処にも無く、先ほどミリムに殴られた男が、殴られる前の状態の

ままそこに居た。

「まあ！オールリスファンタジー^{全部幻想}なんだけどね！」

ミリムの行動を無駄だと嘲笑うように口で三日月を作る。

「それで、何の御用ですか？『番外魔王』、『カイ・ヤグラ』」

「なんだよう、そんな他人行儀なフルネーム呼びで。もつと親しみを込めて、「カイパイセン」って呼んでくれていいんだよ？あ、でもまあ君たちがくれた『番外魔王』って結構気に入ってるんだ。なんか『永久欠番』とか『裏ボス』みたいな感じで良いよね」

冷静なクレイマンの質問に、カイは道化じみた身振り手振りで、「カイパイセン」とかのセリフも裏声でわざわざ発し、何が楽しいのか気味が悪い笑顔を浮かべている。

「……………」

「はい、「質問にはちゃんと答えましょう」ってね。大丈夫だよ、しっかり学校で習ったから」

くるくると回っていたかと思えば、四柱に睨まれて大人しく席に着く。しかし、気味の悪い笑顔は崩さない。

「二何の御用ですか？」という質問の回答ですが、「ジユラの大森林不可侵条約を撤廃してくれたお礼を言いに来ただけなので、もうご用事は有りません」、です。じゃね、バイビ」

途中まで抑揚なく機械音声のように返していたが、最後はにこやかに手を振って、またここにいる全員が瞬きをした時にはカイが椅子ごと、まるで元から彼が居たのが幻想だったように消え失せている。

「く、あやつに先を越されてなるものか！ワタシはもう行くのだ！」

扉を蹴破る勢いで飛び出すミリム。他の面々はまだあのカイの衝撃から脱することができず、茫然としている。

「はあ……………」 厄介な方に感づかれてしまいました」

「厄介は厄介だがな。あいつが動くってことはマジで魔王が新生してるかもしれないぞ」

クレイマンが通り過ぎた台風にため息を洩らせば、カリオンはカイが動くことの重大さを指摘する。

「彼が動く案件と言えば、『魔王』か『勇者』くらいですものね。後は

世界のどこかをぶらついていきますけど」

ここにいる、いや全十大魔王が『番外魔王』の行動原理を知っている。狂ったように『魔王』に喧嘩を売っては殺され、『勇者』に挑んでは殺される、ただ満足のいく敗北を得るためだけに。『カイ・ヤグラ』とはそういう狂気の塊であり、そういう邪悪であるから、彼らも『番外魔王』という枷で縛り付け、同じ土俵に上げること自分たちへの被害を少なくしているのである。と言っても、彼から受けた被害は全て幻想のようになかったことにされているのだが。

ちなみに、彼が敗北を求めている、彼が挑む標的が居ない時は世界漫遊の旅をしていることも全十大魔王に知られている。

◇◇◇

「怒れる魔王など災禍そのものだ。うっかり出会って手を出すなよ」
「出さないって」

まだ名前も決まっていない、後に『ジユラ・テンペスト連邦国』と呼ばれる魔物たちの国のその一角で、その国の王、リムル・テンペストとその隣国に当たるドワーフ王国^{ドワールゴン}の王、ガゼル王が談笑していた。「特に気を付けなければならぬ魔王が一人いる。『過負荷^{マイナス}』、カイ・ヤグラだ」

「カイ・ヤグラ？」（なんか日本人みたいな名前だな。もしかして俺と同じ転生者か？）

その魔王の名に、リムルは親近感を抱き、その同郷かもしれない魔王に興味を湧いて耳を傾ける。

「最も目撃報告が多い魔王でな、その魔王は『最弱にして最凶の魔王』と言われている」

「サイジャクで、サイキョウ？」

その発音を『最弱』と『最強』に解釈したリムルはその矛盾に怪訝な表情をする。

「強いという意味ではない。彼に挑んだ者は皆悉く彼を討ち取るが、皆心折られて帰ってくるのだ」

「みんな倒せてるのに、心折られる？」悉く討ち取る「ってことは無限に復活するから、みんなそれで心折れるのか？」

「無限に復活する」というのは事実らしいが、「心折られる」というのは「討伐を諦めさせられる」ことでは無い。「生きること」に希望を、夢を見いだせなくなる」ことだ」

「はあ？」

ガゼル王は真面目にリムルに説明しているが、説明を受けているリムルは聞けば聞くほど意味が分からなくなる。

「名を上げるべくカイに挑んだ冒険者は、皆冒険者を止めて田舎に引込む。それを危険だと判断して討伐に動いた国は、それを命じた王も従った官僚も戦った兵士も、皆無気力になり、仕事をせずに引きこもる。酷い者では自刃すらするらしい」

「で、でもよ。そいつに挑まなければ、手は出してこないんだろう？」

『カイ・ヤグラ』の悪評をガゼル王に諭され、リムルは臆病風に吹かれて親近感もどこへやらかに飛んでいった。

「いや、残念ながら彼から挑むケースも確認されている。彼の標的となるのは主に『勇者』と呼ばれる者・『勇者』になると期待された者・『勇者』と自称する者。それと、『魔王』にも挑むとされている」「ううえ〜い……」

リムルは絶対勇者を国に招き入れないことと、魔王にならないこと、その2者に関わらないことを誓った。

「かなり享乐的で危険な魔王だ。出会ったならまず逃げることを勧める。いや、まずは出会わないことを祈るように勧めよう」

ガゼル王が真摯に忠告をし、その忠言にリムルが感謝の言葉を掛けるようにした瞬間だった。

「いやだなあ、全く」

聞き覚えの無い声が聞こえる。今まで感じたことのない気味の悪さを感じる。その発生源に、リムルもガゼル王も顔を向ける。

「そんなキラークラスされたら」

見覚えのない者が、いつの間にかにそこに居て、何が楽しいのか口で弧を描いていた。

「このタイミングで登場したくなっちゃうじゃないか！」

リムルもガゼル王も、そのあまりにも異質で不気味な存在に衝撃を

受けて呆然としてしまった。とりわけリムルの衝撃は大きい。その存在の装いが『白のワイシャツ』『黒のネクタイ』『灰色のブレザーとスラックス』という前世の世界の学生に似た服装と、色が抜け落ちたような短い白髪で糸目の男の気味が悪い雰囲気あまりにも釣り合っていないのである。前世の現代風の少年が、邪悪なラスボスのオーラを放っていることに、異常な違和感を覚える。

「ぎ、貴様がつー！」

衝撃がまだ少なかったガゼル王がその存在の正体を察して、臨戦態勢を取る。

「やあやあ！窓辺のマーガレットでお馴染みの、僕の登じ——」
「リムル様！」

主の危機を察知し、リムルの影から唐突に現れた狼型の魔物・

テンバスターウルフ

黒嵐星狼のランガはその危機の原因たる男の体に噛みつき、体当たりの勢いで壁をぶち破って外まで弾きだす。男とランガが勢い余って離れた時には、既に噛みつかれた腹部が食い千切られていた。

「ゲボツ」

立ち上がる筋肉も食われて横たわっている男に、二体の鬼・鬼人が歩み寄る。

「二終いじや（だ）」

満身創痍の男に容赦なく、白髪の鬼人・ハクロウは首を切りおとし、赤髪の鬼人・ベニマルは黒い炎で一片も残さず灰に帰す。

「ちよつ、お前ら!」

「なんてことをするんだ！君たちには血も涙もないのか！」

「え？」

リムルは彼らの行動に驚き、諫言しようとするが、その言葉も更なる驚きで中止されることになる。横から響く声は正しく、先ほど自身の配下に殺されたはずの男のモノだった。

「まあ！オールイーズ全フアンタジー部なんてだけどね！」

傷一つ無い姿で、ランガに襲われた場所と同じところに、その男は立っていた。口で三日月でも描こうとするかの如く笑顔で。

「ぎ、貴様！どうやってっ」

「さあ？幻想でも見てたんじゃない？」

ベニマルの質問に素っ気なく返し、されど笑顔を絶やさぬ男。

「ああ、でもさあ。夢は夢でも痛いモノは痛いじゃない？」

何気なく、ただ何も無い手を、彼に危害を加えた者たちに沿って振られたら、その者たちに釘が刺さっていた。

「！？」

ハクロウは首に、ベニマルは頭に、ランガは腹に、それぞれおよそ25寸の釘がいつの間にかに刺されている。本来その程度で死ぬはずが無い彼らだが、しかしパタリとその身を地に伏せた。

「ランガ！ハクロウ！ベニマル！」

一瞬にして動かなくなった配下たち。リムルが声をかけても微動だに動かない。

「てめえ……っ」

リムルは怒りを覚え、その男を睨むが、冷静にそいつを分析するべく手は出さない。

「いやだなあ、そんな僕が悪いみたいに。僕は彼らに殺されたんだよ？どうして僕が彼らを殺しちやいけないのさ。「復讐をしちやいけません。復讐は何も生まない」って？何で何も生まないならしちやいけないんだ？「負の連鎖は誰かが我慢して断ち切るべきだ」って？なんで先に手を出した強者にそんなこと言われて、弱者が我慢しなくちやいけないんだ？君だって、やられたらやり返すだろう？僕だってそうさ。だからさ、『僕は悪くない』！」

こんな状態でも饒舌に語りコロコロと笑う彼に、リムルは寒気を感じていた。

（大賢者、今あいつはどんなスキルを使ったんだ？）

（解。対象『カイ・ヤグラ』はこの世界の力を一切使用していません）
（そんなわけあるか！あんなのをスキル無しでやられたら溜まったもんじゃないぞ！）

いつも頼りになるはずの大賢者が、今回に限って役に立たないことにリムルは悪態をついてしまう。

「まあ！オールイースフアンタジーなんだけどね！」

次の瞬間には、彼の言う通り全てが幻想だったように倒れ伏していた者たちが、立ち上がっていた。

「いったい、何が……!」

「俺は、釘を刺されて死んだはず……」

「釘も傷も、無くなっている……」

ハクロウもベニマルもランガも、釘が刺さっていたはずの場所を確認しては何も無いことを認識し、現状を全く把握できずにいた。

(大賢者!あのベニマルたちを蘇生した力はなんだ!)

(解。個体名『ベニマル』が死亡した事実も、蘇生された事実も有りません)

(おい!どうなってんだ!?)

(へえ、僕の能力ってそういう判定なんだ)

「なっ!」

突然割り込まれた自らのスキルとの会話に、リムルは目を見開く。そうして見た男の顔は不敵な笑顔だった。

(大賢者くんちゃん、こんには!僕はカイ・ヤグラって言うんだあ、よろぴくね〜!)

(……)

(おうふ、氷点下華氏0℃だマンマミーヤ!)

受信するテンションが乱高下な怪電波は壊電波と言うのが正しそうなくらいリムルを混乱させる。

(お、お前!なんで俺の脳内に!)

(ファ○チキ下さい)

「ファミ○じゃねえよ!こは!」

リムルは混乱し過ぎていて周りにとって意味不明なツツコミを晒す。さらに言えば、完全なる同郷判定に気付いていない。

「あつはつはつはっ!やっぱり君は楽しい奴だなあ!辛抱強く待った甲斐があつたよお」

大きな笑い声とともに男は気を緩める。先ほどまでの吐き気すらするような気味の悪さは、胡散臭い雰囲気まで薄まった。

「お前、何をしたんだ?」

その雰囲気の変化につられて混乱が解けたリムルは、まだ警戒したまま男の一挙手一投足を見逃さぬよう凝視する。

「何もしてないよ？幻想でも見てたんじゃない？」

「……こっちの手下が手を出して悪かったな」

男がまともに取り合うつもりがないことを理解し、リムルは事を収めようと頭を切り替える。

「大丈夫さ、君の配下はとも利口な子たちだからね。僕に手を上げたりなんか、そんな現実^全は受け入れていないよ？」

「……そうか」

「でもまあ……」

あちらがこちらの不備に対して咎めないということだと思つて安心したリムルだったが、またもや男の雰囲気が元の気味の悪さに戻り、解きかけていた警戒心を入れ直す。

「僕はね、自分の失敗を他人に謝らせる奴は大嫌いなんだ。本当に悪いと思つているなら本人が謝るべきだし、他人が謝つたつて本人が反省してないんじゃ意味がないだろう？」

リムルと男の一騎打ち状態で、途中から蚊帳の外だったハクロウたちは男の言いたいことを理解し、主の前に出て頭を下げる。

「本当にすまなかつた」

「僕に敵対した者達は例外なく心を折ることにしてるんだけど。魔物の『弱肉強食』の心を折つたつてことで、良しとしようかな」

代表してベニマルがそう言葉を発せば、男の気味悪さが薄まっつていくのを感じる。

「ところでお前、何しに来たんだ？」

「え？遊びに来ただけだけど？」

リムルは肩をガクツと落とした。今までの一触即発な殺伐状態は何だったのかと落胆してしまう。

「あつはつはつはつ！とつても楽しかったよ、リムル！じゃ、もつと国が発展した辺りでまた来るよ！じゃあね、バイビ」

そこにいる全員が瞬きした瞬間には、男の姿はまるで幻想であつたかのように消え去つていた。

「何だったんだ？あいつ……」

彼が居たという痕跡はないが、リムルたちの疲労感が、彼がそこに居た証明だった。

◇◇◇

「ああ、本当に楽しかったよ。あんな格別な異常^{アブノーマル}、本当に存在するんだなあ」

カイはリムルから感じた多大なる異常度^{ブラス}に歓喜していた。あれこそが、自分という魔王^{マイナス}が挑むに値する主人公^{プラス}だと。

「やっぱり魔王つてのは、主人公に打倒されてこそだよね！」

敵役が適役な自分^{マイナス}であるからこそ、主人公役が適役なリムル^{プラス}を求めていたのだ。いつか満足のいく、完膚なきまでの敗北を味わうために。

「つまらないものなんて見ずに、面白^{幻想}いものを見よう。所詮こんな人生^{全部幻想}、オールイズファンタジーなんだから」

く終く

氏名：八倉海^{カイ・ヤケラ}

能力（原作）：幻^{オールイズファンタジー}実当避（めだかボックス）

能力説明：めだかボックスにおける過負荷^{マイナス}を海が現実で発現してしまったオリジナルの力。現実を受け入れずに否定し、幻想を受け入れて肯定する、幻想を現実に変えてしまう能力。その能力にはいちおう適応範囲外があり、都合の良すぎる幻想は現実に変えられない。

本作における使用例：

・現実から「転スラ世界」への転移（部分成功・本当はリムルが転生する前後の時代に転位したかったが、300年前に転移してしまっただ）

・死んだはずが蘇る（完全成功）

・過程をすつ飛ばして十大魔王になる（完全失敗・おかげで魔王たちに喧嘩売って実力を示すしかなかったし、結局十大魔王にはなれなかった）

所持スキル：無し
(^{マイナス}過負荷が^{プラス}長所を得られるはずが無い)

連載版 〱 原作開始前〱

第一話 二次元転移にユメを見る

いつから彼がその過負荷マイナスを持っていたのか。残念ながら、彼自身それを把握することはできない。彼は生まれ落ちたその時からその能力を持っていて、無意識にスキルを使っていた可能性が有り、それを確かめる術は無いからだ。

語るべきは「何故、彼がそのスキルを持っているか」である。彼の人生は正しく不幸普通であり、彼の母親は彼が今も生まれたと同時に死在に、彼の父は自暴自棄質実剛健で八つ当たり気味に彼を虐待し、彼は周りから好味好かれ悪がられ苛められ、いつも笑顔を絶やさぬ男だった。そんな彼が過負荷を得てしまったのは当然の結果と言えるだろう。

「まあそんな僕の半生を語ったところで全く意味が無いんだけど。このモノローグだか地の文だか分からない文章で知ってほしいのは僕が神様転生とかの転生特典じゃなくて、普通理不尽に生きたまま過負荷マイナスを手に入れた劣等種だつてことだね」

彼の過負荷、「幻実当避」。

それは、現実有るモノを受け入れずに否定し、幻想無いモノを受け入れて肯定する力。最も有名だろう過負荷・『大嘘憑き』が現実を虚構にする力ならば、こちらは虚構を現実にする力である。ただ、『大嘘憑き』という最も短所らしい過負荷であるが故に、能力の制限が緩いそれに比べ、オールイスイフアンタジー『幻実当避』の制限は多少きつい。その理由はそう難しいモノではない。無から有を生み出すという性質上、自分に都合が良いモノばかり生み出して幸福プラスになれてしまいそうだが、不幸な人間にそんな事が許されるわけが無い。故に、このスキルは自分の人生を幸福にするゼロことも、主人公補正など都合主義をすることもできない。限りなく普通ゼロに近い不幸マイナスを実現することはできるが、彼が幸福プラスになることは決してない。

「さて、意味不明な能力解説は止めにして。さっさと二次元転移しよう、二次元転移。『トリップ』とか言うんだっけ？ 僕、結構憧れてたん

いである。『無限牢獄』と『絶対切断』というユニークスキルのコンビは、この世界の最強種たる竜種でさえ封印せしめる。暴風竜という名の通り世界中で暴れ回った彼は、ジユラの大森林で暴れているところを勇者に見つかり、見事そのコンボで封印されてしまったのである。（まあ、姉たちに怒られずに済んだのは僥倖だ。しばらく姉たちの怒りが冷めるまで大人しくするとしよう）

ヴェルドラは4体いる竜種の中で最も遅く生まれた存在であり、竜種に性別など無い——明確に言えば、どっちの性別にもなれる——のだが、現存する2体は女性のように振る舞っているために、ヴェルドラにとって姉であり、ヴェルドラは末弟と捉えられる。

ヴェルドラにはその姉二人に嫉けられた記憶があり、苦手意識がある。そのために、彼女らの怒りを恐れ、今しばらくの現状維持を選択した。脱出する手段が今のところ無いのだが、そこら辺は前向きに「いつかどうにかなる」と考える彼のポジティブシンキングである。（それにしても、それまでどうしたものか。思考に耽るにも限度が——ん？）

彼が瞑想を止め、目を開けた時である。目の前に、一人の男が立っていた。

「うわあお！本物のヴェルドラだ！割と成功するか五分五分だったけど、しつかり転移できたんだなあ。あ、初めまして、暴風竜ヴェルドラ。僕はカイ・ヤグラって言うんだあ！宜しくね！」

唐突に現れた男は何やら声を発し、不気味な笑顔を浮かべたまま身振り手振りしているが、ヴェルドラは意味がある言葉の羅列として認識できなかつた。

「なんだ貴様は！我を誰と心得る！世界に4体のみ存在する竜種の1体、暴風竜ヴェルドラであるぞ！」

意味の分からない男に対し咆哮をもって対応するが、男は眉を下げて身振り手振りを止めるだけで、特に堪えたような様子はない。

「あ、そうか！正規の転移じゃないから魔素とかが僕に無くて、『思念伝達』すら受信できないのか。まあそんな現実、僕が受け入れるわけが無いんだけどね！」

男は得意げに両手を広げれば、ようやくヴェルドラに意味のある言葉の羅列が聞こえてくる。

「やあやあごめんよ、ヴェルドラ君。チャンネル合わせを疎かにしたら、東京だって『仮面ライダー』が見れないよね。まあ、僕は『デイド』で見て止めたんだけど。やっぱり見るなら特撮じゃなくてアニメだね。今期は何やるんだったつけ？まあ！テレビが無いかからこの話題は無意味なんだけどね！」

コロコロ笑いながら饒舌に語る男の笑顔は、ヴェルドラをして不気味さを感じさせるモノだった。

「き、貴様は何者だ！魔素の欠片も感じられぬというのに、何故この場に平然と居られるのだ！」

「さっきのはやっぱり聞き取れてなかったね。僕のミスだからとやかく言えないけど。でもどうしようか！もう一度名乗れって言われるとちょっと大仰に自己紹介すべきだよ！そうだよ！ちよつと待って今良い感じの名乗り口上考えるから。うーん、どんなのにしようかなあ。かつこいいのをパクっちゃうのも味気ないよなあ」

ヴェルドラの冷や汗をかく姿も意に介さず、男はウンウンと唸りだす。

「いや、ここはシンプルにこうしよう」

男は組んで腕を大きく広げる。

「僕は『過負荷』、マイナス、カイ・ヤグ海だ」

口で大きな弧を描き、その糸目は何を捉えているのか悟らせず、男はあまりにも不気味で不快な雰囲気を漂わせ、名乗りを上げた。そのカイの姿に、ヴェルドラも思わず固唾を呑んでしまう。

「あ、それだけじゃ説明不足だよ。魔素が全く感じられないのは、おそらく僕が他の異界人と違う方法で来ちやっただけだと思うよ？『世界の言葉』とか聞かずに来ちやっただから、構成組織の変換だかチューナーの増設だかはすっ飛ばしちゃったんだろうね。それでそれで、そんな魔素への耐性がゼロ通り越してマイナスな僕がここに居られる理由は「ここに居られない」なんて現実には僕が受け入れられないからさ」

「ま、待て！一氣に話すな、処理が追いつかん！」

カイの雰囲気気圧されて呆然としていたヴェルドラの頭では、カイの饒舌は捌ききれなかった。

「……正規の方法での転移ではないために、魔素を持たぬ異世界人だということとは分かった。では、どうやって転移してきたのだ？「現実を受け入れない」とは何だ」

永く生きているヴェルドラでも、そのような者は見たことも聞いたことも無い。常識外れのヴェルドラからして見ても、目の前の男は常識外れだった。

「企業秘密さ。全て教えてしまっても僕としては全く問題ないんだけど、与太話すぎて信じてもらえないだろうし。それにほら、『謎の力を持つ男』ってミステリアスでかっこいいでしょ？」

カイ独特のペースに、ヴェルドラは頭痛を感じて頭を抑える。

「もう良い。我の前に現れた理由を述べてさっさと去れ」

ヴェルドラは「この男が近くに居るだけで精神が削れる」と判断し、さっさと満足してもらって消えてもらうことが、今感じている頭痛への何よりの特効薬と考えた。

「そうだそうだ、訊きたいことがあってここに来たんだった。君に会えた感動で忘れるところだったよ。ずばり訊くけど、君が封印されてからどれくらい時間が経った？」

笑顔こそ変わらないが、不気味さが鋭くなったようにヴェルドラは感じた。

「数年か十数年くらいか。20年は経っておらんだろう」

「そう、ありがとう」

お互い素っ気ない言葉を交わし、カイは踵を返す。

「あつと、そうだった」

「今度は何だ！」

顔だけヴェルドラに向け、「ようやくこの男から解放される」というヴェルドラの安堵を断ち切る。ヴェルドラが少しキレ気味なものも無理は無い。

「僕ならその封印を解ける」って言ったら、どうするっ？」

「貴様に解かれるくらいなら永遠にこのままで構わん!!」

「ありやりや、嫌われちゃったよ。まあ、いつものことだしね。じゃ、300年後くらいにまた会いに来るよ」

「二度と来るな!!」

ヴェルドラの怒号を一切気にせず、カイは手を振って消えた。ヴェルドラは幻想のように消えた彼の姿に、驚愕するより安心して溜息を漏らした。

◇◇◇

ファルムス王国のとある辺境の村。そこはジユラの大森林の境界に近く、魔物による被害が良く起こる村だ。そのために、王国兵が守護の為に巡回に来ることや腕に覚えがある冒険者が魔物討伐の依頼を受けに来ることも多いのだが、十分な戦力が整っているとは言えず、兵も冒険者も大けがで防衛に穴があくこともしばしば。今日もそんな日だったのだが、一人の少女が現れ、圧倒的な力で散発する魔物の襲撃を撃退した。

「村をお守りいただいてありがとうございます、旅の方」

「いえ、当然の事をしたまでです」

感謝を伝えるために頭を下げる村長に対し、先ほどまでの戦いの疲れを一切見せずに悠然とする少女。村長も、そして助けられた人たちも、彼女から並々ならぬオーラを感じていた。そのオーラも威圧的なモノではなく、温かみを感じるモノだった。

彼女は、『勇者の卵』を持つ存在であり、ヴェルドラを封印した「時の勇者」と呼ばれる者である。誰も本名を知らないが、その名声は聞き及ぶ。各地での魔物退治・撃退は数多目撃されている。故に、まだ『真の勇者』に覚醒していないまでも、名実ともに彼女は「勇者」なのだ。

「では、私はこれで」

彼女は村の歓待の申し出を全て断り、自らの使命を全うすべく、すぐにでも旅に出ようとする。

「やあーええつと、今は「時の勇者」だっけ？本名とかは呼んじやいけない系なのかな」

村長に背を向けた時、その余りにも不気味な男が目の前に立っていた。

「貴方は——」

「それとも、二人居るからどっちでもないって感じなのかな？」
「！」

彼女はその言葉に驚愕する。彼は誰にも話したことのない事実を知り得ているのを彼女は察した。

「いったい、貴方は……？」

最初のただの挨拶とは違い、多大なる猜疑心が込められている。

「そうだね。ここはセリフを統一しておこうか。僕は『過負荷』^{マイナス}、^{カイ・ヤヅラ}八倉海だ。そしてここで新情報！君みたいなの、神とか世界とかに愛されてる者達の敵なんだ！」

声音は冗談に聞こえるそれであるが、漂わせる雰囲気は迫真で有ることを示すように不気味さが増す。そんな手合いと会った事が無い彼女は、「勇者」と呼ばれるに相応しい強者であるにもかかわらず、気圧されて怯んでしまう。

「……敵と言われてもね。貴方は人間みたいだし、魔物だからって退治するわけじゃないから」

彼女は『魔力感知』で少なくとも彼が魔物ではないのと分かっていた。全く感じないのは違和感であったが、魔素を隠せるようになるのは一定以上の力を持つ魔物であり、そういう魔物は完全に隠しきれないほどの魔素を有している。何かのアイテムで魔素を隠しているにしても、その程度で隠せてしまう魔素しかない人間と判断した。

「それは、この村を火の海にした放火犯にも言えるのかな？」

「え？」

一瞬の出来事だった。背後から木が焼けるような音と熱気を感じ、人々の悲鳴が聞こえてくる。

「これは!?村長さん、大丈夫ですか！」

さっきまで怪我一つ無かった村長が、顔や腕に火傷を負い、服も所々焦げて倒れている。彼女は村長を助け起こし、回復薬^{ポーション}を迷いなく使う。

「ああ、人命優先するのは当然か。まあさすがは「勇者」だけあるよね。だけど、みんなを助けられるなんてのは、幻想ユメでしかないよ？」

「ツ！そんな、何が、起こったの……？」

また一瞬で状況が変化する。村長が人型の炭になり、家屋も人々も全て焼き落ち、辺りは静寂に包まれる。まるでさつきまでの光景が夢だったかのように移り変わり、しかし現状も悪夢と呼ぶにふさわしい。

「どうしてこのようなことを！」

怒りを以って剣を抜き、切っ先を「カイ」と名乗ったその男に向ける。

「そんなに驚くことかい？言ったじゃないか、僕は『過負荷マイナス』で、君たちの敵だって」

どこに愉快なことがあるのか、彼は口の端を大きく釣り上げている。

「さあ、戦おう。ほんとは完全に孵化した君と戦いたいんだけど、色々立て込んでるからね。今の君で満足してあげるよ」

大仰に両腕を開いて笑う彼は、不気味さの塊だった。

第二話 完全燃焼こそ最高なユメだろう

カイは自らが『過負荷』に目覚めた時から考え続けていた。何故自分が『過負荷』に目覚めたのか。

自身が劣等種で有ることは疑いようもなく、それに目覚める下地があったことは疑うまでもない。故に、目覚めた理由については「劣等種だから過負荷に目覚めた」という当然のモノであるから疑いもしない。

考え続けているモノは、「この世界に『過負荷』がいる意義」である。『過負荷』とは、『めだかボツクス』では兎に角悪役、主人公の敵役だった。神や世界に愛された者達の敵だった。幸福な者の敵だった。故に、カイは『過負荷』の存在意義とは、プラスの敵であること」と考えていた。

カイが思う「明確なプラス」とは、『異常』である。『異常』とは、生まれ持った『異常性』によって、やる事なす事良い結果となる、まぎれもない神や世界に愛された者達だ。だからこそ、『めだかボツクス』において、『過負荷』の統括者・球磨川禊は彼らを目の敵にし、敵対していた。

だが、カイの居た世界には『異常』が存在しなかった。如何に「それらを知らない」という現実を受け入れなくても、それらの情報が入ってこない。よって、カイは「この世界に『異常』は存在せず、『過負荷』が存在する意義は無い」と結論付けた。だからといって、カイは「意義が無いから自刃する」という思考には至れず、誰かが『異常』になるのを待ったり、それらの代わりを探し求めたり等、不確実なことや面倒なことをする性分でもなかった。

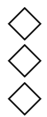
彼が至った結論は、「この世界に居ないなら、居る世界に行けばいい」というモノだ。だからこそ、彼は自身のお眼鏡に適う「明確なプラス」が居る『転生したらスライムだった件』に転移した。その世界には、神や世界に愛されていることが明白な者達がいる。多数いる勇者や魔王、そして、『リムル・テンペスト』。彼個人の主観として、あれを『異常』と言わずに何とさえいいか分からない。最上級のチー

ターであり、やる事なす事良い結果になる存在。それがリムルという存在で有り、まぎれもなく異常^{ブラス}だった。

故に、カイは『転生したらスライムだった件』の世界で『過^{マイナス}負荷』の存在意義を満たすことにした。

「あ、長くて意味が分からなかった？簡単に言えばね、僕は『過^{マイナス}負荷』らしく、敵役^{マイナス}に徹しようって話なんだ。それで、僕を打ち倒す主人公役に、『転生したらスライムだった件』のリムルを選んだわけさ。じゃあそろそろ長話もここら辺で」

「この物語はフィクションです。登場する人物・団体・名称等は架空であり、実在のものとは関係ありません。イツツオールイズファンタジーってね！え？文法がおかしい？君は言語学者か何かかな？」



目の前に立つ男はあまりにも不気味だった。寒気も怖気もする、吐き気すら感じるような不気味さの塊だった。だが、時の勇者はそれらで怒りを絶やすこともなく、その男へと剣を振り下ろした。

「おっと危ない！やっぱり「勇者」ってなると、もう僕の見じゃ追えないな」

そうおどけつつも彼女の剣は二十五寸もある大きな釘で受け止められている。魔素も何かしらのエネルギーも感じない棒であるというのに、彼女の剣で以ってしても断ち切れず、腕力で彼を弾き飛ばすだけに留まった。

「全く、その細い腕のどこに男一人押し退ける力が有るんだい？魔素ってやつはこれだから困るよ」

力でも速度でも勝てないことから、肉弾戦では敗色濃厚であるのに関わらず、その男は笑みを解くことは無い。

「貴方は、何故この村の人々を！私と戦いたいというのなら、私だけ害すれば良かったはずなのに！」

また切り込めば、先ほどの再現のようになる。彼女にとってそれでいい。この間近で、彼に問わねばならぬことが、ぶつけねばならぬ怒りがある。

「君を殴った程度で、君は怒ってくれないじゃないか。僕は君にね、怒ってほしかつたんだ。人間である僕に対して、一切の躊躇も慈悲もなく敵対してほしかつたんだよ。それくらいしないと怒らない君が悪いと思わない？君のせいでみんなが死んだって思わない？」

「思いません！」

今度は意図的に弾き飛ばし、彼我の距離を空ける。

「そうでなくっちゃ。君たち^{勇者}プラスは、そうやってマイナスの言葉なんて聞かず、正義の味方でなくちゃね。この程度で折れるくらいなら

期待はず——」

「^{デイスインティグレーション}霊子崩壊!!」

彼女は彼の饒舌となった時の隙を逃さず、魂さえ打ち砕く光の奔流を放つ。

「ははっ！言葉の途中で攻撃とは、ビックリしちゃったよ。まあそりゃアニメやゲームじゃないんだから攻撃するよね！隙だらけなんだし！」

いつの間にか生えていた大きな釘の平らな頭部を足場にし、彼は効果範囲外となる上空へと逃げていた。直撃した棒の一部は消え去っていたが、彼に傷一つ無く悠々と着地する。

（彼が使うスキル、全く全容がつかめない……）

突如現れ、突如村を火の海にし、突如釘を生み出す。全く統一性のない所業から、複数スキルを持つ相手であることを把握するが、既に使われたスキルが如何様なモノなのか、後いくつスキルを持っているのか、未知数にも程がある。しかし、攻めあぐねれば何をされるか、それこそ未知数であるために、彼女はガードしかしていない肉弾戦に活路を見出す。

「性懲りもなく錨迫り合いかい？まあ！僕の釘には錨なんて無いん——」

2号の打ち合いで切れなかったから油断していた彼は、豆腐を切る

が如く進む刃への反応が遅れる。遅れた反応の代償は右腕である。

「あつはつはつ、忘れてた忘れてた！『絶対切断』！君がそういうユニークスキルを持つてるのは知ってたけど、まさか文字通りのこともできるとはね！」

彼女の持つユニークスキル『絶対切断』。カイは封印に用いられたことは知っていたから、それは概念にしか使用できないモノと勘違いしていた。現実には物質にも適応できるスキルであり、見事不断の釘と片腕を断ち切ったのである。おかげで右腕の切断面から血を流しているが、彼はそれを『痛覚無効』の所持が疑われるほど気にした様子はない。

「……これ以上、続けますか？」

「腕一本切り落された程度で反省するような奴に、君は見える？」

彼女はもう一度の攻撃で彼の質問に答えた。釘はもはや防御の役に立たず、無情にも左足に深手を負う。もう立つことには使えないだろう。

「おいおい、僕を痛めつけてどうする気だ？残念ながら、僕はしっかりと痛みを感じて不快に思う健全者だよ？」

痛みに苦しむ姿を微塵も見せない彼は、不気味だった。だが、彼女は不気味さで己の意思が折れる程度の者では決してない。彼の左肩を貫き、地面に張り付ける。そして、彼女は真っ直ぐに彼の目を見る。

「どうして私を怒らせ、敵対したかったのですか……？」

「ああ、その話かい。それは——！」

彼の顔に落ちる雫。たかだか一滴の雫が、彼の笑顔を引つ剥がした。

「私は、貴方に嫌われるようなことを、してしまったのですか……？」
雫の源泉は、少女の瞳だった。彼女は悲しんでいた。「自分のやった行為が、自分の善意が、人の悪意を引き出してしまったのではないかと、自分自身を疑ってしまったのだ。その顔を笑い飛ばすことは、彼にはできない。心弱マイナスい者を笑うようなことは、彼マイナスにはできなかった。」

「……君だけが、嫌いってわけじゃない」

笑顔を絶やした彼の顔は、哀愁に満ちていた。

「僕はね、羨ましかったんだ。幸せそうな奴が、憎かったんだ。両親が優しいなんて奴も、必死に努力して最後に成功を収める奴も、みんな好かれてみんなと一緒に笑ってる奴も、みんなみんな大嫌いなんだ」

とうとうと語りだす彼の目は、悲しみに満ちていた。

「僕は、不幸だった、生まれた時から。生まれる時に母が死んで、それで父は良く暴力を振るって、みんなはそんな怪我した僕を「醜い」って嫌ってく」

彼の顔に雫が流れる。それは、彼女から注がれたモノではない。

「ねえ、僕は何が悪かったんだ？ いじめを告発しなかったこと？ 虐待を訴えなかったこと？ それとも、生まれたこと？」

涙を流して、笑っていた。不気味さは消え去っていた。

「憎まずにはいられなかったんだ、当たり前前の幸福を当たり前前に享受してる奴らを。だってそうしなきゃ、僕が何もかも悪いみたいじゃないか」

「貴方は……」

「まあ！ オールイズファンタジー全 部 幻 想なんだけどね！」

「え？」

哀愁を幻想のように消した彼の様子に意表を突かれて瞬きをすれば、地面に張り付けた彼はおらず、周りの焦げ臭いにおいも消え失せる。

「こ、これは、いったい……」

村が、何事も無かったように復元している。彼女の目には、彼が火の海に変える前の村と区別がつかなかった。

「どうしたんだい、時の勇者様。立ちながらうたた寝でもしてたのかい？」

声の発生源を見れば、初見と同じ不気味な笑顔を張り付けた彼が居る。

「貴方が、やったんですか……？」

「何を？」

「この村の状態です！焼け落ちた村を、焼け死んだみんなを元に戻したのですか!？」

「全く身に覚えがないなあ。幻想^{ユメ}でも見てたんじやないかい？」

彼女の鬼気迫る詰問に、素知らぬ態度で彼は返す。

「夢……？」

「それじゃあ、僕はそろそろ行くよ。勇者様もお忙しいようだしね」

呆然とする彼女に構うことなく、振り返って歩み出す彼。

「ああ、一つ言い忘れてた」

「はい？」

「世の中にはね、無条件で君みたいな才能とか運とかに恵まれた人を理不尽に恨む奴がいるんだ。「今回君が得るべき教訓は、短所すら受け入れて愛してくれる人も居れば、長所すら否定して嫌ってくる人も居るといふことだ」、なんてね。じゃね、バイビ」

彼はにこやかに手を振ったかと思えば、忽然とその姿を消した。まるで、彼が居たことそのものが、幻想だったかのよう。

「短所すら愛してくれる人も居れば、長所すら嫌う人も居る……」

彼女は、呆然としたまま、今回の教訓を反芻した。

◇◇◇

「うくん、やっぱりまだまだ青かったなあ。まああれはあれで、愛でる対象としては良かったけど。本気で負かしてもらうには、まだ熟しなかったねえ。失敗失敗」

物足りなさをしこりに、不完全燃焼な思いを抱くカイ。彼女が『真の勇者』に覚醒した後では「彼女に挑む機会が無い」と早摘みしたものの、やはり未熟なところがあるために本気で戦う気が失せてしまった。

「ま、今後に期待ってことだね。君とはもう戦えないだろうけど、リムの成長にも関わってくるだろうし。頑張つてね、クロエ・オベール」

その蕾が花開くのを心待ちにし、カイはいずれ来るだろう原作主人公との戦いを夢見た。

第三話 ユメ見が悪けりやキミが悪い

カイは自らが敵役・悪役で有ることを良しとした。彼は、「自分は悪役である」と納得し、「自分は『過負荷』である」と受け入れた。しかし、『悪』や『敵』という存在に憧れていたわけでも、魅力を感じていたわけでも無い。

彼は自覚していたのだ。「自分は根っからの悪である」と。彼は分相応であること、適材適所であることを尊んだ。世の中には『必要悪』というモノがあり、文字通りそれが必要であるのなら、彼は喜んでその役を請け負う。

そして、彼はその『必要悪』という概念に深い理解、いや、強固な持論を示していた。「それは最後に負ける者、勝利が許されぬ者である」と、彼は論じる。ならば、「悪役を買って出た自身が勝つてはいけない」と自らに戒めた。

「まあ、そうする前から過負荷は勝てないんだけどね」

『過負荷』は勝てない。絶対不変のルール、もはや自然法則とも呼べる敗北の約束が『過負荷』には付随する。如何に体を鍛えようと、才能が無いのだから強くなれる上限は非常に低く、策略や罠にはめようとしても、運の悪さがそれらを破綻させる。これらは彼にももちろん当てはまり、『幻実当避』でも変えられない。過負荷である以上、不幸である現実を逃避できないのだ。

彼はそうして、勝たない必要悪と勝てない過負荷を手にし、それらを遵守して生き続ける。

「色々それっぽいことが語られてるけど、難しく考えなくていいよ。そうなるしか無いし、そういうのも嫌いじゃないからそうしてるだけさ。だから僕に対して『憐憫』も『比較』も、まして『愛欲』なんて結構だよ？僕は好きなように生きて、好きなように死ぬるんだから、他人より幸せ者さ。不幸だけどね」

Fate／GrandOrderの概念に『人類悪』というモノがある。それらは『人類愛』から生まれ、人類を愛しているが故に、人類を滅ぼす可能性を持つ存在。それは『憐憫』『回帰』『愛欲』『比較』

等様々な意思から端を発するモノである。言うまでもないだろうが、カイはそれに当てはまらないし、人類など微塵も愛してはいない。彼は頑なまでに『必要悪』なのだ。

彼は憐れまれることを嫌っている。誰かと比べられることに虫唾が走る。自分が愛されることに寒気を覚える。彼は『過負荷』で『敵』^{マイナス}で『悪』^{マイナス}なのだ。嫌われてこそ彼の彼なのである。

「とりあえず、『魔王』って称号、かっこいいと思わない？ 思うよね？ だからちよつと僕が『魔王』であることを認めさせに行ってくるよ」

◇◇◇

「いいいいいいやあああああああー！ー！ー！ー！ー！！！！」

ウルグレイシア共和国のウルグ自然公園に存在する『精霊の棲家』。そこに幼い少女のモノのような悲鳴が木霊する。

「あつはつはつはっ！ 待ってくれよお、僕は何も悪いことをしようとしてないさー！」

「じゃあその振り回してる網は何?！」

『精霊の棲家』、その迷宮内でカイとある妖精による追走劇が展開されていた。追われる妖精は必死の形相で涙すら漏らし、追うカイは喜々として虫網を振り回している。

「現状と全く関係無い話なんだけどさ、僕が元居た世界には『オ○ホ妖精』っていうジャンルが有るんだよね！」

「言ってることは全く分かんないけど絶対危険なヤツだし絶対今と無関係じゃない！ 絶対無茶苦茶関係してる！」

「先つちよだけ、先つちよだけだから！」

「やつぱり関係してるじゃない！嫌っ、助けて、みんな助けてえ!!」

彼女のSOSに呼応して超常現象が起こる。大地が割れてはカイを飲み込み、冷気が満ちてはカイを凍結させ、火が起こってはカイを灰塵と化し、風が吹き荒れてはカイを細切れにする。

「まあ！オールイーズファンタジー想なんだけどね！」

しかし如何なる殺人方法をとっても、次の瞬間には何事も無かったかのように追ってくる。

「嫌、嫌、嫌あ!!」

逃げ惑う妖精にとつては悪夢だろう。仲間たちの魔法も効かず、自らの『精神支配』も幻影魔法も全然通用しない。

(どうして!?!アタシ魔王なのに、十大魔王の一柱・『迷宮妖精』のラムリスなのに、なんでただの人間に追い回されてるの!?)

そう、カイから無力な幼子のように逃げ惑っているのは魔物の中でもその名を名乗ることが十体にしか許されていない『十大魔王』。その称号を持つ一体、『迷宮妖精』のラムリスなのである。ラムリスは個体としては最弱の魔王であるものの、腐っても魔王である。人間どころか、下手な魔物や冒険者に負けはしない。しかし、今彼女のあらゆる攻撃を無効化して追いかけてくるのは、魔素の一切感じられないただの人間である。この事実を彼女を憔悴させるに充分な異常だった。その男は異アブノーマル常ではなくて過負荷マイナスなのだが。

とりあえず、こうなった経緯を彼女は思い出してみる。

~~~~~

彼女がいつもの如く暇を持て余して迷宮を徘徊している時だった。

「やあ」

「ううえ!?!」

唐突に男が目の前に現れるモノだから彼女は驚きの悲鳴を上げる。

「あ、アンタ誰よ！迷宮の入り口は!?!そこ通った気配を感じなかったし、他の精霊たちも気付かなかったんだけど!」

この迷宮は彼女の管理下であり、迷宮内において彼女が察知できないモノはほとんど無い。その上で精霊たちの監視も加われば、なんの

兆候も観測できず人間一人分の質量が現れるわけは無い。故に、彼女はこの異常に慌てふためいている。

「え？なんで僕が迷宮の入り口を探してそこから入るなんて面倒なことをしなくちゃ現実を受け入れなきゃいけないの？」

「はあ!？」

然も気付かれないのが当然という態度には怒りと混乱が入り混じる。

「あ、自己紹介が遅れたね。僕は『過負荷』、マイナス『八倉海』カイ・ヤグラだよ。というこ  
とで、と」

「!」

カイが何かをこちらに振り下ろし、ラミスはそれをぎりぎり回避する。振り下ろされた物を見れば、それがただの虫網であることが分かる。

「ん？どうして避けるのさ？僕はちよつと君を捕まえたいだけなのに」

「っ!」

彼女はカイの放つ不気味な雰囲気に恐怖を覚え、虫網など壊せる力が自分に有ることも忘れて逃げ出した。

~~~~~

(わけ分かんない!!)

誰も分かるわけはない。彼の行動はあまりに突拍子も無く、理解の及ぶ思考回路をしているとは思えない。混乱と恐怖の最中にあるラミスなら、尚更理解の範疇に無いだろう。

彼女は混乱と恐怖に従ってただひたすらに彼から逃げるために飛び続ける。そうしてゴールも見つからずに続く鬼ごっこだが、「いつまで続くのか」と無間地獄にすら錯覚し始めた辺りで始まりと同じように突拍子も無く終わりを迎えることになる。

「あ」

わずかな地面の隆起、それがカイの足を引っかけた。とっさに虫網を放り投げて受け身を取るべく両手をフリーにしたが、投げ飛ばされた虫網が網の部分の折られながら綺麗にカイの元へ跳ね返ってくる。

つつかえ棒になるようにカイと地面にそれぞれ棒の先を向けるが、転ぶカイにはかなり勢いがある。

「ぐ……がっ」

見事に棒はカイの胸を貫いた。恐ろしいまでの偶然なる不幸は彼の生まれついでマイナスの不幸を証明した。

「え？あれ？あの、大丈夫？」

先ほどまで何しても死ななかった男が、まさかの自爆でその体を静かに横たえた。これには追われていたラミスも心配になって安否確認をしてしまう。だが、カイの呼吸音は聞こえない。

「行けっ、○ンスターボール！」

「え？」

「ラミス、ゲットだぜ！」

カイの発言から考えられる光景と現実乖離している。実際は虫網を振り下ろしてラミスを捕らえただけである。

「え？ちよ、え？」

虫網を持つカイと少し前までカイが倒れていた場所を交互に見る。そこに死体だったカイは居らず、目の前に五体満足元気はつらつなカイが居る。

「あつ、ちよつと待って！タイム、タイムを要求するわ！」

今までのカイが精霊たちにやられた時のことを思い出して、またあの何事も無かったようにするスキルを使ったことに思い当たり混乱からは脱した。しかし時既に遅く、彼の虫網に捕まってしまったわけである。

「残念ながらこれはお遊びやゲームじゃ無いんだ。タイムなんて無いよ？」

「待って！ほんとに待って！何でもするからっ」

「ん？今何でもするって言った？」

「ひうっ」

禍々しいカイの笑みに、ラミスは恐怖を感じて怯える。徐々に彼の手がラミスに近づいてくる。体をガタガタと震わせ、彼女の視界を掌が覆ったところで目を瞑ってしまう。来たる痛みに心だけでも

備えるが、いつまで経っても痛みは訪れず、代わりに頭を撫でられる感触が伝わってくる。目を開けてみれば網など無くなっており、感触の通りにカイの人指し指で頭を撫でられていた。

「あっはっはっ、目なんか瞑っちゃってさ。いったい君は何を想像してたんだい？薄い本みたいなことかな？」

「う、ウゥス異本って何よ！アンタ、アタシが誰だか分かってるの！魔王よ、魔王！十大魔王の石柱、『迷宮妖精』のラミリスなのよ！」

彼の手を払いのけ、小さな胸（平坦な）という意味ではない）を張って尊大な物言いをする。

「知ってるよ？そこら辺のモブ妖精になんて用はないさ。東方の『三月精』だったら用事あるけど、今の僕の用事は『魔王』だからね」

「ど、どんな用事よ」

「僕が『魔王』であることを認めさせるために実力を見てもらうんだ。確か、十大魔王の3名から認められれば、『魔王』って名乗っていいんだろう？」

「腕試しってわけね。へんっ！さっきまでののはノーカンよ。アンタなんかアタシが本気出せばワンパンなんだからね！」

「そうだね。じゃあ……」

そう言つてカイはおもむろに右手をラミリスに伸ばす。

「こ、これ以上アタシに不敬を働くならギイにチクってやるんだから！いやもう遅いわ、もうギイにチクってやる！」

「まあ、『ギイ・クリムゾン』にも用があるしね。そうしてもらえれば彼も本気を出してくれるかもしれないし、それでいいよ」

涙目で訴えかけてくるラミリスをこれ以上いじるのは、さすがのカイもかわいそうに思えてきたので伸ばした手を戻す。

「後悔するわよ、このアタシを虚仮にしたこと！ギイに消し飛ばしてもらおうんだから！」

「はいはい。それじゃあ、僕はそろそろ行くよ。また遊びに来るね」

「二度と来るなあ!!!」

今日一番のラミリスの大声にも怯むことなく、カイはにこやかに手

を振ってから消えた。

第四話 悪いユメは続くもの

カイは自分が『過負荷』^{マイナス}であることを完全に受け入れた時、一つの願望が彼の中で生まれた。

「どうせ負けることが決まっているなら、文句のつけようもない完膚無き敗北がしたいよね！」

『過負荷』^{マイナス}という淀みそのもののような彼の中に生まれた、純粹な願い。運が介在したとしても、「それは相手の実力である」と言えるような、彼は負けを約束されているのだとしても、「自分は当然の結果で負けたのではなく、全力を尽くした結果、あと一步勝利に届かなかったのだ」と言えるような、純粹な勝負を彼は望んでいた。

故に、まず求める者は強者である。それも最低ラインとして、彼の『幻実当避』^{オールイズファンタジー}に対抗できないまでも、何かしら打開策を持つ強力なスキルの保有者。彼自身が考えるところ、『究極能力』^{アルティメットスキル}保有者がそれに当てはまる。

彼としてはそういう者達と本気で戦いたいがために、それらを怒らせるような行動を取る。しかし、そういう者達というのは大概思慮が有る者であり、怒らせるのは中々に手間である。

「まあ、ギイの方は怒らせたとしても全力は出してくれないだろうなあ」

『ギイ・クリムゾン』、この転スラ世界において最古にして最強の魔王。後に最強はリムルに渡すことになるだろうが、それでもこの世界の圧倒的強者である。そして、カイのギイ^皇との本気戦闘^みは叶わないだろう懸念事項がある。ギイ・クリムゾンは『調停者』であり、魔王の役目を強く自覚している。『調停者』とはつまり、転スラ^こ世界に直接的に強い干渉をしないということ。彼はこの世界を舞台に、とある男とゲームをしているのである。そのゲームではギイはプレイヤーであり、駒こそ動かすが自らは動かない。そして「魔王の役目」とは、この世界の人間を増長せぬように抑える抑止力であるということ。彼はこの世界を見守ることを、とある竜と約束している。その約束により、彼はこの世界を壊そうとせず、敵対者は容赦なく殺すが進んで殺

戮はしない。だからこそ、彼は傲慢であるものの、全力で戦闘することは無い。

「そういう意味ではルドラの方も無理だろうなあ」

『ルドラ・ナスカ』、もう一人の『調停者』。ギイとゲームをしている者であるために、こちらもいくら怒らせたところで全力を出してくれるとは限らない。そもそも彼は『真の勇者』ではあるが、徐々に衰えていることをカイは知っていた。戦いを挑むにしたら今かもしれないが、彼は上記以外の理由も含め、戦う旨みが無い。

「ま、全力勝負はリムルまでとっておこうか。今は『魔王』と認めてもらうために色々しなくちゃいけないしね」

◇◇◇

「というわけで。ミリムを怒らせるための生贄になつてね」「え？」

出来事は正しく唐突。いきなり目の前に男が現れたと思ったら、なんの脈絡も文脈もなく釘が翼を持つ女性の胸に生える。理解するための材料も時間もないまま、その女性はパタリと倒れ伏した。

「ミリムって仲良い人が傷つけられたら怒るでしょ？ 僕が知る限り、この時期で一番親しいのは君なんじゃないかなって。まあ！ 既に死んでる君に、今語る意味は無いんだけどね！」

フルブロシアという有翼族ハービレイの国で、絶命した女性に何が楽しいのか笑顔でカイは語っている。

「さて、さっさと行こうか。ああ、物的証拠は有った方が良いよねって。うん！ なかなか良い感触だけど重いね！」

死体を米俵のように担げば、女性らしい豊かな膨らみを背中に感じてセクハラ発言。さらに女性に対して失礼な発言を重ねるわけだが、彼女が翼分人間より重いことを考慮してもカイの虚弱が大きな原因である。

「ま、箱にでも詰めておこうか。箱入り娘ってね。娘って年でもないか、生娘かもしれないけど」

誰にも聞かれていないのを良いことに、無礼を重ね掛けて姿を消した。

◇◇◇

「やあ！ミリム・ナーヴァー！」

「ん？なんだお前は」

彼女の領地・失われた竜の都の付近。珍しく調子に乗って暴れていた魔人を、ミリムは暇つぶしにボコボコにし、今片手で吊るし上げて止めを刺そうとしていた。そんなところに唐突に棺桶を引きずった男・カイが現れる。魔素が全く感じられない人間の登場に興味を示し、魔人への興味が完全に失せて下した。

「僕は『過負荷』、『八倉海』マイナス カイ・ヤグラって言うんだ。よろしくね！」

「うむ？」

ミリムはそんな不気味な笑顔を携えた男に違和感を覚えた。ミリムは魔人との戦闘の際に使ったエクストラスキル『魔王覇気』を継続中である。並の魔物が近くにいるだけで死亡し、上位の魔人ですら恐怖に怯むというのに、目の前の男はその影響を全く受けていない。

「ところでさー！君って『フレイ』って魔王と仲良かったりしない？ほら、『天空女王』スカイ・クイーンって呼ばれてる十大魔王の」

「ああ、最近新しく魔王になったフレイか！以前調子に乗ってるのを諫めに行った時から仲良くしているのだ！」

ミリムが言う最近とはカイが知る限り百年以上前。千年以上生きてる最古参魔王の「最近」は信用ならない。

カイはそれを指摘することもなく、少女の見た目に相応しいミリムの無邪気な笑顔に、怪しく口の端を吊り上げる。

「それは良かった！僕の努力が無駄にならずに済んだよ」

カイは引きずっていた棺桶を無造作にミリムの前に放り投げる。地面に落ちた衝撃で蓋が開けば、その中の安らかに眠る釘を穿たれた女性があらわになる。

「フ、レイ……？」

「いちおう言っておくけど死んでるよ？」

呆然と死体を見つめるミリムに言い放てば、見開いたその目がカイへ向く。

「僕がやった。僕がフレイを殺した」

カイの笑顔に、罪悪感も、優越感も無い。ただにこやかに、愉悦を込めて笑う。次の瞬間には、大地が抉れていた。

「あつはつはつはつ、さすが『破壊の暴君』！辺りが木端微塵だ！」

ミリムが打ち込んだ拳は、カイが瞬間移動したせいで当たらなかつたが、彼が立っていた場所を削っていた。カイがそれを笑って見ていれば、ミリムは即座にそちらへと拳を振るう。

「おっと、そうはさせ———ないとはいいたいんだけどやっぱり無理そうだね」

地面からミリムの四肢を貫かんと釘が生えるが、残念ながらその釘は刺さること無く塵となる。止まらぬミリムの攻撃にまたしても瞬間移動で避ける。

釘を塵にした能力をカイは把握していた。ミリムの究極能力

『憤怒之王』

である。そのスキルは「虚無崩壊」という純然たる破壊エ

ネルギーを操作する。熱や電気など、余分なエネルギーを生み出さず破壊するだけのエネルギー。「破壊」という一点において、転スラ世界

にはそれに勝る力はないだろう。故に、『絶対切断』程度で切断される釘が、『憤怒之王』で破壊できないわけも無い。

「これは、あつはつはつ！」「すごいなんてものじゃないね！」「今の状態じゃあどうしようもないや！」

何度も振るわれる拳。人間の身体機能では対応できず、ミリムの顔がこちらに動いた時に瞬間移動するようにしてようやく避けられるミリムの猛攻に現状打開策が存在しない。

「まあ、そんな現実、僕が受け入れるわけは無いんだけどね！」

「むっ？」

怒りにかられてひたすらにカイを殴ろうとするミリムの拳が、カイを囲むようにして生えた釘に止められる。

「ふん！」

しかしそれも一度きり。加減を少し緩めれば、不壊はまた破壊へと変じる。

「ぐっ」

壊した釘の先、カイの左肩を捉えて消し飛ばしたが、代わりにミリ

ムの左肩を貫く釘が一本。

「まずは一本だ」

片や左肩が消滅し、片や左肩が刺されただけ。明らかにカイの方が負傷しているのに、カイは一切それを意識せず笑顔を浮かべ続けた。だが、その不気味さに気圧される『破壊の暴君』ではない。ミリムは釘を握るカイの右手を逃さず掴む。

「お前に次など無いのだ」

「あ、これはミスっ——」

ミリムの周囲にカイは熱気を幻視する。それは残念ながら熱気などではなく、虚無崩壊だ。

「……」

ミリムは自分を中心にしてできたクレーターを見回し、カイが肉片すら無いことを確認する。

「いやあ見事見事。さすがに今のは僕の残機が持っていかれたよ。まあ！残機無限なんだけどね！」

クレーターの外からパチパチと拍手を送るカイ。相も変わらず笑顔である。ミリムはすかさず拳を見舞おうと動く。

「ミリム！ストップ、ストローパーアップ！」

「……フレイ？」

止めた拳の先には、カイに盾にされた傷一つないフレイが居た。

「いったいどういうことなのだ？」

「私が知りたいわよ。突然この男が現れたと思ったら、気を失って目が覚めたら怒ってるミリムの前なんて、悪夢以外の何物でもないわ」

拳を振るった体勢のままに混乱するミリムと目の前の拳に冷や汗をかくフレイ。両者には現状が把握できない。

「お前は、何をしたのだ？」

「何を言ってるんだか全く分からないな。幻想でも見てたんじゃないかい？」

「夢……？」

ミリムがフレイの後ろに隠れるカイに問いかければ、カイは白を切

る。しかし、カイの言う通り夢でも見ていたような状況のために、ミ
リムとフレイは首をかしげるしかなかった。

「さて、体消し飛ばされたんだから負けを認めるとして。そろそろ僕
は行くよ」

フレイを放し、にこやかに手を振る。この後「じゃね、バイビ」と
言っただけのように去るのが彼の定番だが、今回はそううまくいかな
かった。

「ん？あれ？」

腹部に違和感を覚えて見てみれば、身に覚えのない風穴が空いてい
た。それを見て思い出したかのようにカイは吐血する。

「これほど暴れたんだ。逃げられると思うなよ」

声の方に顔を向ければ――

「ああ、これはまずいね」

「俺の友人たちに喧嘩を売ったんだ。覚悟はできてるんだろう？」

赤い髪の悪魔が立っていた。

第五話 良いユメ見るにはよく眠れ

カイは『オールドイズファンタジー幻実当避』という強力なスキルを持っているが、無敵ではないし、まして最強などではない。むしろそのスキルが無かったら最強どころか、もうこの世に生きてはいないだろう。

彼は兎角人間である。そして「自分は『マイナス過負荷』である」と受け入れてしまった人間である。彼が過負荷を捨てない限り、彼が強くなることは決して無い。だが、もしそれを捨てれば、彼は不幸から逃れられない。不幸な事故に遭い、不幸な死を遂げる。そういう現実を受け入れなければならなくなる。もちろん、彼が現実を受け入れることも、『オールドイズファンタジー幻実当避』を捨てることも無いだろう。故に目覚めた、持ち得た「現実を受け入れないスキル」である。

「……」

『マイナス過負荷』とは、人間の内から生まれる人間の力である。その点は『アブノーマル異常性』も同じだ。人間が生まれ持つ素質から生まれるそれらのスキルは人間にししか使えない。例外として『ノットイコール悪平等』という安心院なじみと不知火半纏は存在するが、彼らが人外であるのに人間の形をとるのは『人間異常性』と『力過負荷』を使うためという理由が有るのかもしれない。もしその理論が正しく、強力な力を持つ彼女らですらそのようにルールの隙間を縫わなければいけなかったとしたら、ただの『アブノーマル異常』や『マイナス過負荷』が人間以外になった場合、持っていたスキルはどうなるのか。

カイの考えた答えは「スキルが使えなくなる」だった。正否は定かではないが、『オールドイズファンタジー幻実当避』で人外になれるカイが人間枠に押し留まる理由である。

魔物が存在する世界で、カイはただの人間である。しかも、『マイナス過負荷』であり正規の転移者で無いため、彼は虚弱な人間だ。彼の持つスキルのせいで完全消滅は不可能だろうが、それでも殺す手段はいくらでもある。そして、別に彼は鋼の精神を持つ人間では無い。殺し続けられ復活するのが面倒になってしばらく死体のままであり続けることもある。そのうち復活はするだろうが、それでもしばらく彼の

動きを止めるのに最適なのは復活後即殺を繰り返すことだ。

彼を打倒するには、まず彼が人間であり、無敵では無いことを受け入れなければならぬ。「彼が弱い存在である」という認識を受け入れれば、あとは上記の通り彼との根競べを制すればいいだけなのである。

「……………」

◇◇◇

「あああああ、メンドクセエエエ」

「うるさいぞ、デイーノ」

大柄の男がテーブルに突っ伏した怠け者を睨む。

「そんなこと言われたってよし、ダグリユール。最古参の魔王三柱による魔王達の宴の開催なんて、メンドクセエことしか思い浮かばねえんだよ」

「魔王達の宴」、十大魔王三柱により発令できる強制招集。魔王の増減などの軽い議題で執り行われることもあるが、今回はそんな雰囲気では無いことをデイーノと呼ばれる男は察していた。

いや、彼で無くても察することができるだろう。何しろ、ギイ・ミラム・ラミリスの最古参三柱での発令だ。その内の一人だけが混じる発令もあるが、三人での発令は大概重要な議題の時だ。実際、この三人での発令には「聖魔大戦の告知」という前例がある。

「お前が嫌がったところで、あの三人の招集だ。まかり間違っても辞退はせぬことだな」

「しねえよ。俺だって死にたくねえ」

デイーノは面倒に思いながらも自身の命を尊重した。彼の反応は大げさではあるが、しかしその招集の強制力は確かに強い。勝手気ま

まな十大魔王たちではあるが、さすがに最古参三柱の招集は拒否できない。「したら後が怖い」ということではなく、「そこでの議題を知らないことは、他の魔王に後れを取る可能性が高い」という意味合いが強い。互いを牽制し合う十大魔王だからこそ、今回の議題は聞き逃せないのである。

間違い無く全十大魔王が集まるその魔王達ワルプルギスの宴に、ダグリユールとデイーノはそれぞれ度合いは違えど興味を持って参列することとなる。

◇◇◇

静謐なる異空間、純白に染まる四方に偽りの青空で蓋をした空間は広々としているが、円卓と椅子以外は何も無い。誰がここを維持しているのか分からない（全魔王がギイだろうとは思っているが）この空間こそが、魔王達ワルプルギスの宴の会場である。

円卓の席は決まっており、最初の魔王であるギイ・クリムゾンの席を便宜上の上座として若い魔王が下座へと回っていく。

現在、魔王達ワルプルギスの宴を発令した三柱の席以外は埋まっていた。それぞれの面持ちは固く、口を開く者は居ない。

「集まっているな。では、魔王達ワルプルギスの宴の開催を宣言しよう」

今回の発起人のギイ最・ラミス古・ミリム参が現れ、ギイが全魔王の出席を確認してから、よく通る声で宣言した。

「その前によろしいですか?」
「なんだ」

理路整然として落ち着きのあるように見える男・クレイマンの挙手に、ギイは若い魔王の話の腰折に苛立つことも無く発言を許した。

「その、肩に担いでいる人間の死体はいったい何なのですか?」

クレイマンはギイが肩に担いだズタボロの人間を指さした。クレイマン以外も気になつてはいたが、「おそらくはその死体が今回の議題なのだろう」と察してあえて問わなかった。

「ああ、こいつは今回の議題だが。先に自己紹介をさせるか」

ギイはその死体を床に放り投げる。死体は死体であることを示すように、何の身動きもしない。ズタボロの死体は深い切り傷が数か所

あるが、もう流す血も無いよう液体が漏れることも無い。

「自己紹介させるつたつて。どう見ても死んでるんだが……」

「ギイが殺し過ぎてしまったようだな。しばらくだんまりを決め込んでいるのだ！」

「いや、だんまりつて」

最古参三柱とフレイ以外、彼らのその対応に懐疑的だった。カリオンは引いてすらいる。彼ら魔王は人間を虐殺することこそあるが、一人の人間を執拗に痛めつけることはしない。する意味が無い上に、手間だからだ。拷問で何か訊き出すくらいなら、関係者を皆殺しにする方が楽である。故に、よりにもよつて最古参三柱がそんな奇行をしたというのはあまりに不可思議だった。

「おい、そろそろ起きろ」

ギイが何気なく死体を踏みつぶし、踏まれた肉片を散らす。さすがにこれには何かしら抗議しようと幾人かが発言しようとした時だ。

「これは酷い！」「ミンチよりひでえや」つてやつだね！」

『！』

肉片がどこかへと消え去り、先ほどの死体が傷一つ無い姿で直立していた。死体の突然の復活に、それを見たことの無いギイ・ラミリス・ミリム・フレイ以外は一様に目を見開く。

「まあ！^全オールイ^部ズフ^幻アンタ^想ジーなんだウボア！」

「早く話を進めろ」

得意げに両手を広げた男の腹に、ギイが無動作で風穴を空ける。

「人の決め台詞を妨害するなんて、全く無粋だなあ。まあまあご紹介に預かったことだし。やあやあ魔王の皆さんこんにちは！ん？今は「こんばんは」だっけ？まあ面倒くさいから「にやんぱすー！」つて言つところか！ああ、この挨拶は僕の故郷では時間を問わず使える挨拶なんだ。みんなもぜひ使つてね！ということ僕は『過^{マイ}負^{ナス}荷』、

『八^{カイ}倉^{ヤケ}海』だよ！」

次の瞬間にはカイの風穴が埋まり、饒舌に怪電波を発信し出す。語り出したところで話半分聞き流した者たちは良かったが、真面目に

全部聞こうとした者たちは困惑してしまった。

「でだ。こいつは『魔王』になりたい」っただけで俺たちに喧嘩売ってきた。そして、ラミスはともかくとして、ミリムや俺が相手してこの通り、殺しきることができなかった」

ギイの発言に反応は様々。驚愕する者、興味深く聞きに徹する者、鼻で笑う者、それぞれ居る。

「はっ！最古参が衰えたもんだな。高々人間一人殺しきれねえなんてよお！」

生意気に威勢を張るのは『呪術王』、カザリーム。カースロード彼のこの態度はいつものことなのでギイの感情は揺れ動かない。顔すらそちらに向いていない。

「やっていいぞ。実力くらい自分で示せ」

「あ、そう？じゃあ、あえてとびつきりかつこつけようかな」

ギイが顎でカザリームを指す。促されて何かしようとするカイを、カザリームは消し飛ばそうとするが。

『オールイズファンタジー幻実当避』！』『君たちの生存を』

彼から放たれる濃厚な不気味さ。そこに居る魔王はギイとミリムを除いて気圧され、カザリームも怯んで手を止めてしまう。間違いなくそれが命取りであった。

『無かったことにした！』『なんてね』

「む？」「え？」「あ？」「ん？」「ん？」

ルミナス・フレイ・カザリーム・カリオン・ディーノ・ダグリユール・クレイマンに、頭と胸それぞれ一本ずつ釘を生やす。魔王達はわけも分らず意識を闇に落す。

「まあ！全オールイズ部ファンタジー幻なんだけどね！」

次の瞬間には、何も無かったかのように全員が意識を覚醒させる。何が起こったのか、全員が分かっている。いない。

「で、今何をされたか分かる者は居るか？」

全員が冷や汗をかくだけで、肯定を示す者は誰も居ない。誰もが何をされたか分からない、ギイやミリムまでも。

「この中には分析系のスキルを持つ者も居るだろう。にも関わらず、

誰もこいつの能力が分からない。これこそがこいつの実力の証明だ」
「だから、ワタシたちはこいつを『魔王』に認めようと思うのだ」
「非常に不服だけどねえ」

最古参三柱によるカイへの『魔王』認可。かつてここまでの偉業を成し遂げた者はいないが、それに納得できるような力は示された。否定する者は居ない。しかし、だからと言って全員が全肯定できるわけでも無い。

「その男を『魔王』と認めることは構わぬ。しかし、魔素を持たぬ人間に、魔物を統べる王・『十大魔王』と同列に扱うのは問題であろう。魔素が無ければ魔物は従わぬ上、その男が集団を束ねる器を持つようには見えぬ」

そう述べるのは『夜魔の女王』、ルミナス・ヴァレンタイン。彼女はそう理論的に述べているが、本心は「あんな気味が悪い男と同類にされたくない」というカイに対する嫌悪である。

「ああ、それは俺も考えていた。あまりにもこいつは異質すぎる。だから俺達『十大魔王』とは別の枠組みをくれてやろうと思う。異論は？」

「……無い」

これ以上の妥協は不可能と考えて渋々承諾する。他の魔王も府には落ちないが、「それで手打ちにせざるを得ない」といった雰囲気だった。

「では、その枠組みの名前を考えよう」

『考えて無いのか（ねえのかよ）（おらぬのか）（無いのね）（無いのですか）』

総突っ込みに動じないギイは正しく魔王だった。

「名前ねえ。異質、異なる……。ああ、じゃあ『異常魔』——」

「それだけはダメだ。僕を『異常』と呼ぶことだけは許さない」

デイーノの思い付きは、カイの殺気で中断された。今まで笑顔だったカイが唐突に目を開いて殺気を帯びた視線で睨むものだから、デイーノは驚いて仰け反ってしまった。他の魔王達も突然の変化に違和感を覚えつつも、「何考えてるか分からないんだから、考えを読も

うとするだけ無意味だろう」という結論でスルーした。

「では、『番外魔王』^{エクストラ・イビル}で如何でしょうか？」

「とつても良いねそれ！響きが何となく気に入ったよ！」

クレイマンの命名にカイはさつきまでの笑顔に戻る。

「本人がそれで良いようだから、それで決定にしよう。では八倉海^{カイ・ヤグラ}、お前は今日から『番外魔王』^{エクストラ・イビル}の枠組みと、あとついでに『過負荷』^{マイナス}というのも正式に称号として与えよう」

「わあー！いいのかい？そんなかつこいいの名乗っちゃって！じゃあこれから『僕は』^{エクストラ・イビル}『番外魔王』^{マイナス}、『過負荷』、『八倉海』^{カイ・ヤグラ}だ」つて名乗るね！嬉しいなあ、人に真面なあだ名をつけてもらえるのなんて何年ぶりだろう！人生初めてかもしれないな！」

カイの身振り手振りも交えた喜びようから、本心から喜んでいように見える。周りとしては不気味だったり殺気を放ったり無邪気に喜んだりで、カイが如何様な人物かが図れず、何とも言えない心情である。ただ一様に「できる限り関わりたくない」という感想を抱いていた。

「では今回の議題はここまでだ。何か他に話したいことが有る者は？居ないな。では、解散としよう」

各々会場から退室していく。カイを睨みこそするが、特に声をかける者は居ない。そうしてカイとギイだけになった。

「お前が何の目的で『魔王』を目指していたかは知らないが、しっかりと役目を果たしてくれることを期待する。お前はどことなく、『魔王の役目』を知っているようだしな」

「『魔王の役目』？はて、「みんなの邪魔をする」以外に何かあるのかな？」

ギイにはカイがわざとらしく嘘をついているようにうかがえた。何より、言葉ではそんなことを言っているが、顔は邪悪で不気味な笑みであることが嘘をついている証拠だろう。ギイを以てすら気味の悪さに悪寒がするこの男。ギイはカイに他の魔王達とは違う、新しい魔王の可能性を望んでいた。

「さて、何やら期待されてるようだけど。他人の期待に応えないのが

僕^{マイナス}たちさ。勝手気ままにやらせてもらうよ?。」

「好きにすると良い」

カイはそのギイの許可を得てから、にこやかに手を振って幻想のよ
うに消えた。

「最後の最後までスキルが判別できなかった。全く、何もかもが無茶
苦茶な奴だ」

ギイはどこか楽し気に笑っていた。

第六話 力無き夢は正しくユメでしかない

カイが『転生したらスライムだった件』の世界に転移した理由、その本命にあたるモノは「全盛期のリムル・テンペストと全力の勝負をして、完膚無き敗北をすること」である。しかし、あくまでそれは本命であり、他に自分の欲望を満たしてくれる者が居るのならば浮気するのもやぶさかではない。それに、リムルが全盛期を迎えるのは今からおよそ300年後である。極上の御馳走が約束されているにしても、辛抱強く待つには長すぎる時間である。故に、カイは間食に手を出してしまった。

「300年も絶食してたら、さすがの僕も餓死しちゃうよ。まあ！餓死なんて現実を受け入れられないんだけどね！」

カイの間食。それはつまり、「強者との戦闘」である。と言って、彼が心の底から求める『強者』が畑からとれるわけでも無い。仕方が無いのでしばらくは間食と割り切り、ある程度強い者で我慢して的进行することにした。

カイが標的にした「ある程度強い者」は、「勇者」や「魔王」と自称する者達である。もちろん実力を加味し、後に『勇者の卵』や『魔王種』となる可能性を持つ者を選別した。

そうして始まったカイの間食を止める者は居ない。魔王達は止める意味が無い。敵対者の芽を摘み取ってくれるのだから、利益こそあれ被害は無い。それに、「触らぬ神に祟り無し」である。人類は未だ脅威に感じていない。被害に遭っているのは名が売れ出した冒険者であり、その冒険者たちも冒険業を廃業するだけで人的被害も物的被害も無い。だが、いずれは誰かが察するだろう。『八倉海』^{カイ・ヤツラ}という魔王が、着実に人類の力を削いでいることを。

「僕としては全くその気は無いんだけどね。全く、勝手に悪者にするなんて酷い話さ。まあ、今は関係無いからどうでもいいや。さあ、続きを始めようか」

◇◇◇
『約束された、勝利の剣』————!!』

男が上段から剣を振り下ろせば、魔素がビームのように放たれる。男が持つユニークスキル『騎士王』による「魔素放出」と伝説級武器である剣の特性「魔素集約」によって行使できる技である。眩い光の斬撃はその男が憧れるFateの本のアルトリアのそれに及ばないまでも、有象無象の魔人なら葬れる威力を持っていた。

「はあ、はあ……。どうだ、これが俺の、勇者アーサー・ペンドラゴンの力だ!」

男・アーサーの呼吸は荒く、精神は憔悴しているが、それでも自らの憧れる姿を遵守するために憧れにしがみ付き、毅然に立っていた。「ははっ、『約束された勝利の剣』に「アーサー・ペンドラゴン」ね。あれかい? 「同一化」ってやつかい?」

カイはアーサーの前で不気味な笑みを浮かべていた。片腕が切り落とされ、切断面は先程のビームの熱に焼かれていたが、苦痛に顔を歪めることは無い。

「つーど、どうしてっ!?!」
「どうして」って言われてもなあ。四肢欠損くらいは割と日常茶飯事だし、この程度で倒れるなんて現実を僕が受け入れるわけが無いだろう?」

アーサーにはこの現状もカイの言葉も理解できなかった。アーサーの剣はことごとく魔物を屠ってきた。『約束された勝利の剣』はその中でも窮地に陥った時に使う必殺の技である。これを放った後に立っていた敵は居ない。彼の自慢の技であり、彼の自信そのものだった。だが、目の前の魔王は生きている。アーサーは「この技ならば魔王も倒せる」と考えていた。だから理解できなかった。

アーサーはカイにその答えを求めた。しかし、返ってきた答えは無茶苦茶だった。四肢欠損が日常なんて意味が分からないし、「現実を

受け入れなかったから立っている」ととれるその発言はわけが分からなかった。だから理解できなかった。

「ねえねえ次は？君は「アーサー」なんだろう？まだ何か有るよね？今度は『最果てにて輝ける槍』かな？それとも『十三拘束解放』？」「ひっ、く、来るなっ！来るなあ！」

悠然と歩く隻腕のカイの姿はアーサーを恐怖させた。自身と同じ人の姿をしているそれは、自分の理解の範疇に無いことを理解して狂気に怖気づく。恐怖で震える体には力がうまく入らず、今までの剣の冴えが素人のそれにまで落ちてしまう。

「おいおい。刃物をそんな雑に振り回しちやダメじゃないか。……ほら、こんな風に、中途半端に刃が止まっちゃった。背骨つて結構固いんだよ？」

振り回した剣はカイを捉えるも、技術も何もない剣は胴体から刃を割り込ませ、背骨のところで止まってしまふ。しかし、カイの歩みは止まらない。

「う、あ……っ」

恐怖のあまり剣を手放す。少しでも早くその恐怖から逃げようと足を動かせば、震えた脚は小さな地面の隆起に引っ掛かり、アーサーは尻もちをついてしまふ。

「ねえ、「アーサー」君？君は他人から名前も技も借りて何がしたかったんだい？」

カイは屈んで視線の高さを合わせ、「アーサー」に問う。

「お、俺は。こ、今度こそ……。英雄みたいに、なれると……」

「ああ、転生してすごい力を得たからね！「英雄になれる」って思っちゃったわけだ！でもさ、なんで英雄になりたかったんだい？」

「え……う？」

男は呆然とする。男は今までそんなことを深く考えたことが無かったのだ。

「物語の主人公になりたかったから？意味のある人生を生きたかったから？みんなにちやほらされたかったから？モテモテになってハレムを作りたかったから？前世の鬱憤を晴らしたかったから？「俺」

「u e e e」を楽しみたかったから？」

不気味な笑顔の追及に、男は冷や汗をかき続ける。浅ましい自分の欲を見透かされているようで、悪寒を覚える。

「どうして？生きるためには英雄になる意味なんて無いのに」

「意味なんて、無い……？」

「そう、意味なんて無いんだよ。今日と明日の分、着る服と食べる物と住む場所が有ればいいんだから。「英雄」なんて危険だし面倒くさいこととするより、農家の方がよっぽど安全で生産性が有って良いと思わない？「英雄」なんて、意味が無いよ」

「意味が、無い……」

「そう、意味が無いんだ」

「他人のためになることも」

「他人に褒められることも」

「他人にちやほやされることも」

「他人に好かれて囲まれることも」

「自己実現欲求を満たすことも」

「尊厳欲求を満たすことも」

「英雄になることも」

「英雄に憧れることも」

「夢を見ることも」

「だって！オールイズファンタジーなんだから！」

皮肉で不気味な笑顔のカイが、男には真理を説く賢者に見えた。

「ああ。そう、だな……。全部、幻想だったな……」

男は項垂れる。男は、全てが幻想であることに気づいてしまった。

「おはよう。良い幻想見れたかい？」

「ああ。「英雄になれる」なんて夢を、見ていたよ……」

カイの顔を真っすぐ見る男の目は、夢を失っひかりていた。



「はあ……、今回も期待外れだったなあ……」

カイは徒労に肩を落とす。

これで何人目か覚えていないが、少なくとも二桁の戦闘回数に二桁の年数を費やした。しかし、ただの一度も欲^腹が満ちない。間食なのでから小腹くらは満たしてほしいものだが、それすら叶っていないかった。

「うくん、モブキャラじゃやっぱりダメかなあ……。でも十大魔王と戦うのも良くないなあ。レオンってもう来てるんだっけ。来てても『真の勇者』になるまでしばらくお預けか……」

『真の勇者』となる『レオン・クロムウエル』の存在に期待するが、それもまだ先の話であることに気づいて落胆する。

「はあ……。良い感じの子を見つけても少し我慢すべきかもねえ。うん、少し間食はお休みしようか。その間は世界漫遊でもしようか！世界のB級グルメ食べ歩きだね！」

カイは意識を切り替えて街道を歩く。

「ん？」

カイは向かい側からこちらに歩み寄る人影を捉えた。

「よ、よう」

人影の正体は『十大魔王』の二柱、『眠る支配者』^{スリーピング・ルーラー}デイーノだった。

デイーノは仕事をするのとカイに話しかけることの倦怠感を隠さず片手を上げる。

「デイーノ？どうしたんだい？君は働かないことで有名じゃなかったのかい？被らないようにしてるキャラを自ら崩すなんていったい何が有ったんだ。そんなんじや『眠る支配者』^{スリーピング・ルーラー}の名が泣いてしまうよ？「眠る」なんて名前を冠してるんだから、の○太並みに眠ってなきや」「はは……。お前は相変わらずって感じだな……」

カイの怪電波に、デイーノの頭痛を感じるとともに気怠さが増す。彼は「できる限りカイに関わりたくない」とは思っているのだが、それでも『仕事』は熟^{こな}さねばならない。

「何か僕に話したいことが有るんだね！いいよなんでも話して！面白い話だったら十大魔王全員に広めるから！」

「口を閉ざすって気はねーのかお前は！あーもうチクショウ！」

真面にとり合っていたら頭がおかしくなることを察したデイーノは、頭を掻きむしりながら「早く用件を済ませてしまおう」と考えた。「お前は何で勇者候補や魔王候補をつけ狙ってるんだ？お前の目的は、いったい何なんだ」

「そんなに疑問に思うことかい？魔物だったら「強い人と戦いたい」って思うのは不思議じゃないだろう？まあ、僕は魔物じゃないんだけどね」

「そこが一番問題なんだよ。どんなスキル持ってるのか分かんねえが、お前が人間であることは確かなんだ。その人間が、どうして『魔王』になりたがった。どうして強い奴と戦ってる」

カイはどうにもデイーノの様子に違和感を覚えて考え込む。デイーノはその称号が表す通り、不真面目で怠惰な魔王だ。実力は確かであり、危害を加えてくる者には容赦しないが、危害が無ければ何もしないはずなのである。しかし、目の前のデイーノは何か義務感で動いているように感じられる。

「……ああ！『監視者』か！」

「なっ、お前！どこでそれを！」

カイが思い当たったことを口にすれば、デイーノは今までの気怠さなど吹っ飛ばし、焦りによって捲し立てる。

「大丈夫大丈夫。安心していいよ、デイーノ。僕独自の情報網ってやつさ。他の人には多分バレてないし、僕からバラすこともしないよ。僕は君の仕事を邪魔したりしないさ。そうすると、僕の目的も達成できなからね」

「お前、いったいどこまで知ってやがる……」

「何でもは知らないわ、知ってることだけ」。なんてね」

カイの不気味な笑顔をデイーノは睨みつける。

「全く、ずいぶんと疑り深いなあ。そんなに睨まなくてもほんとに邪魔しないって。君の主は強い人だろうか？僕は強い人と全力で戦いたいのに、君の主を邪魔する意味なんて無いじゃないか。君の主が全力で戦えるようになるまで、僕は「東の帝国」に手出ししないよ」

「……信じていいんだな？」

デイーノは「東の帝国」というワードまで出てきたことにカイがかなり深く知っていることを理解しつつ警戒心を強めるが、カイの様子から「嘘はついていない」と考えた。

「そんなに疑うんだったら、全力で僕を、排除するかい？」

「い、いや、よしとくよ……」

背筋すら凍えるようなカイの気味の悪い雰囲気、デイーノは気圧されて後退った。

「そうかい？それは良かった」

デイーノにはカイのその台詞が意味深長に聞こえた。が、どういう意思が込められているかが、カイと今すぐに敵対する気にはなれなかった。できる限り関わりたくもなかったが、「それでもいつか処理しなければならぬ危険人物」と考えた。

「そろそろ僕は行くよ。しばらくは候補狩りも止めるんだあ。その間は世界B級グルメツアーさ！世界のグルメが僕を待っている！」

「……」

デイーノは街道を沿って歩くカイをただ見送るだけだった。

第七話 良いユメばかりは見られない

カイは『過負荷^{マイナス}』であることを受け入れた人間である。己の醜さを理解し、己の短所を理解し、それらを嫌悪すること無く受け入れた。だからこそ、自分の気味の悪さを制御できる。気味の悪ささえ抑えれば、彼は一片の疑いようも無い人間であるために、人間社会に紛れ込むのは容易である。だが、それはあくまで雰囲気と容姿だけの話である。

カイは何人もの有力な冒険者を引退に追い込んだために、人間社会では現在最も有名な魔王となっていた。ただ、危険視する者は非常に少ない。敵対した者は引退に追い込むが、一切の外傷は与えないからだ。さらに、標的が有力な冒険者であるならばほとんどの人間に害は無い。故に、『八倉海^{カイ・ヤングラ}』であることに気づいても、邪険に扱わない者も少なくない。

カイを明確に敵視するのは冒険者だ。そして、冒険者の中には「無傷で帰ってきた」という情報だけを汲み取り、「死なないならば」と挑む者が多い。もちろんカイはそんな者達の攻撃を無抵抗に受けるわけも無く、ことごとく彼らを幻想^{ユメ}から覚まさせた。しかしそんな被害者が出て「今までの奴らが軟弱者だったただけだ。自分たちはそうならない」という考えの冒険者が少なくなき、挑んでは冒険者を引退する者が後を絶たない。カイ自身としては手応えも無いために暇つぶし程度にしかならなくて辟易している。

『過負荷^{マイナス}』か、いつそ『異常性^{アブノーマル}』に目覚めてくれてもいいんだけどねえ。そんな都合の良い話は無いよねえ」

故意に「同族^{マイナス}を増やしてしまおうか」とも考えたが、残念ながら素質^{スペシャル}が有る者は一人も居ない。居てもせいぜいが『特別』程度で、スキルを付与したり無理やり目覚めさせたりできないカイには施しようが無い。カイができるのは『過負荷^{マイナス}』に目覚めさせる切っ掛けを与える程度だ。

「ま、それはどうでもいいや。問題は、イングラシア王国だね」

イングラシア王国、冒険者をまとめる自由組合^{ギルド}の本部が設営され、

冒険者に対する様々な商売で少くない利益を上げている国である。特に、現国王は冒険者を意識した政策を立てている。その王にしてみれば、カイは邪魔で仕方ないだろう。だからこそ、王はカイの排除を考えた。おあつらえ向きに「魔王討伐」という大義名分があり、兵を動かすにも不都合無い。さらに、「魔王討伐の指揮」という名声も付いてくる。問題となるカイに心を折る精神作用のスキルに対する王の勝手な勘違いも、「大勢の兵により問答無用で殺せば、幾人かは犠牲になっても討伐は可能だろう」と考えた。王が躊躇する要素は何も無い。

「まあ！オールリス全フアン部タ幻ジー想なんだけどね！僕は気にせずグルメツアーを続けるだけさ！」

◇◇◇

「準備はどうだ、クレイマン」

「問題有りません、カザリーム様。カイがあの男条約締結に気づいた様子は無く、監視も察知されていないようです。今監視している者の目から、イングラシア王国に馬車で向かっているあの男を確認しました。その情報も既にイングラシア王へ流しています」

クレイマンがテーブルにカイが映る水晶を置き、カザリームとともに計画が順調に進んでいることに不敵な笑みを浮かべる。

「これで今後あの気味の悪い笑みを見なくて済むと思うとスツキリするぜ。あの時の借りも返せる。万々歳だ」

カザリームとクレイマンは魔王達の宴ワルブルギスの釘を刺されて殺されたこと件からカイに恨みを持ち、カイの排除を計画していた。魔王を束ねて最強の魔王・ギイを打倒する目論見においても、邪魔になる可能性があるカイは排除したかったのだ。もちろんイングラシア王がどうにかできるとは思っていない。彼らにとって王は当て馬だ。あくまで本命は『条約』である。

「条約締結には魔王三柱の協力が必要になるから、他のやつらに呼び掛けるつもりだったが。まさかデイーノが乗ってくるとはなあ」

カザリームは集まっているもう一人・デイーノに向けて、意外感を込めて視線を向ける。

「……そう驚くことでもねーだろ。アイツを邪魔に思ってるのは俺も同じってだけだ。いつ何されるか分かんねーから、安眠もできねーんだよ」

デイーノにとってカイは危険分子であり、正しく邪魔なのだ。故に、カイを葬れる可能性を持つカザリームの計画に乗ったのである。

「へえ、そうかい。ま、そういうことにしといてやるよ」

デイーノの俯きに含みを感じるが、カザリームはそれを詮索しないことにした。後で強請りのタネになると考えたからだ。

「後は、あの男がかかるのを待つばかりですね」

「ああ、今から楽しみみだぜ。アイツはどんな命乞いをするんだろうな」
計画の成功を疑わぬカザリームとクレイマンが喜悦に水晶を眺める中、デイーノだけが一抹の不安を抱えて俯き続けていた。

◇◇◇

「それでねそれでね、僕はただの虫網で妖精さんを捕まえたのさ！妖精さんなら虫網なんて容易く壊せるのにね、気づかないままプルプル震えてたんだあ」

「あはははははっ、なんじゃそれ！いやあ、あんちゃんのホラ話は面白れえなー！」

「僕は現実を見ないだけであって、嘘をついているわけじゃないんだけどなあ」

イングラシア王国へと向かう幌馬車の中、カイは同乗している乗客に小粋な笑い話をしているのだが、どれも真実と思ってもらえていない。他に話したことが「魔王に風穴空けられた」とか「勇者候補の蛮勇を論じた心を折った」とかなら信じてもらえないのも仕方ない。

「ん？なんだあ？」

馬車が急に止まり、乗客は訝しむ。周りから聞こえるのは門の前の検問待ちという賑やかさではなく、鎧が奏でるような金属音がいくつ

も響いているのだ。そうして乗客が外の様子を確認すべく、出入り口の垂れ幕を上げる。

「な、なんだお前ら!？」

出入り口の前に立っていたのは甲冑の騎士である。それも目の前だけでなく馬車を囲むようにして居ることに気付いた。

「この中に八倉海カイ・ヤグラは居るか」

「か、八倉海カイ・ヤグラって魔王じゃねえか。こんなところに居るわけ——」

「あ、僕だね」

乗客は目を見開く。到底信じられることではなかったが、カイをよく見れば世に出回っている『八倉海カイ・ヤグラ』の情報通りの姿をしている。乗客はそれでようやくカイが本物の魔王であることを察し、驚愕するあまり体が固まってしまう。

「バレルのが早いなあ。おいしい物食べる余裕はあると思ったんだけど。まあ僕マイナスたちにそんなうまい話はないよね。二重の意味で!よいしょつと」

カイは固まった乗客を押しつけて幌馬車を降りる。

「運転手さーん、行っちゃっていいよー!彼らだって一般人を好んで巻き込んだりしないさー!そうだよね、騎士さん?」

「……彼らは邪魔になる。道を空けて行かせてやれ」

目の前の騎士が静かにそう指示し、周りの騎士はそれに従って馬車が通れる程度に円を崩す。馬車は怯えるように走り出し、すぐにこの騎士の輪から脱した。

「魔王『八倉海カイ・ヤグラ』。大人しくお縄に着き、国王にその首級を——……え?」

話していた騎士の頭を、兜もお構いなしで釘が貫く。その騎士は静かに倒れ伏した。

「強キャラ感出して話してる内はやられないと思った?そんなのは二次元だけの幻想さ」

カイは不気味な笑顔で倒れた騎士を見下ろす。彼から放たれる強烈な気味の悪さに、周りの騎士たちは怯んでしまう。

「な、何をしている!?!剣を構えよ!この男は魔王、我々の敵だ!!」

どうか一人が立ち直って威勢のいい声を上げれば、それに発破かけられるように全員が剣を抜く。

「国王って言ってたから今回悪いのは王様だよ。直談判しに行かないきゃー!」

カイはイングラシア王国に向かって悠々と歩き始める。まだ数キロあるが、それでもあえてカイは歩くことにした。

「かかれ!」

おそらく倒れた騎士の次に偉い騎士が剣でカイは指し示す。騎士たちは一斉にカイへと向かって剣を振り下ろした。カイはそれを一切の抵抗なく受ける。

「なっ!?!」

いくつもの切り傷と刺さったままの剣に構わず、カイはゆつくりと歩き続ける。

「な、何が、どうなって……。何故死なない……」

「そんなに動揺することかい? 僕が剣で切られたら死ぬなんて現実、受け入れるわけないだろう?」

さも当然というように、血を流し、切断面から生々しい肉を晒しながら、それでもカイは歩き続ける。目の当たりにした多くの者がその異様な光景に正気を失う。

「う、うわあああああああ!」

「死ね死ね死ね死ね! 死んでしまえ!」

「あれ、俺、何してるんだっけ……?」

発狂して金切り声を上げる者、狂気から暴力的に剣を振る者、健忘症に陥る者。もはや統率も何もない混沌が生み出される。

「おいおい、人を神話生物みたいに扱うのはよしてくれよ。僕はTRPGやる友達が居ないから、いまいちルールが分かってないんだからね。発狂なんてされても精神分析なんてできないよ?」

その声に応える理性が有る者はもうここには居ない。気味の悪い笑顔で肩をすくめつつ、ただ悠然と歩き続ける。

「さて、歩いて何分だっけ! 僕としては最寄駅から5分が良いかな。家賃高そうだけど!」

◇◇◇

「何が起こっている！送った騎士たちは、増援は！なぜ一人も戻ってこない！」

「偵察に送った者の目から、どうにか現状を把握できましたが。以前、魔王『八倉海』^{カイ・ヤグラ}は健在で、真つすぐこちらに向かっているようで」

怒声を上げるイングラシア王に、そばに控えていた高官が微かに震えた声でありながら明瞭に報告する。

「騎士たちは！あの人っ子一人殺せない最弱の魔王に何を手こずっている！」

「それが、見えた限りですと叫び続ける者や呆然と立ち尽くす者など、統率が完全に失われております。魔王に切りかかっている者もいまですが、切られても意に介すること無く魔王は進行中。……今城壁の門を、突破されました」

高官が覗く水晶には、幻想のように消された門を潜るカイの姿が映っていた。

「全兵を城壁に集めろ！これ以上奴を進ませるな！間違っても玉座まで来させ——」

「来ちゃった！」

その男は正しく唐突に現れた。何の前触れもなく、その悪寒を感じさせる笑顔で、『八倉海』^{カイ・ヤグラ}がイングラシア王の前に立っていた。王も高官も驚愕を露にするが、より衝撃を受けたのは高官だろう。水晶で確認していたその男の傷が、全て消えているのだから。その衝撃故に、高官は声を発することができなかつた。

「貴様、先ほどまで城壁にいたはず。何故ここに居る！」

「ん？面倒になったから城壁^{ウォール}に居る現実^{シチュエーション}を受け入れなかつただけ^{ただ}だけど？」

イングラシア王はその不思議そうに首を傾げるカイが理解の範疇に居ないことを察し、人も殺せぬ非力な魔王という認識は人間の手に負えない化け物に一変した。

「さあ、お話ししようよ、イングラシア王。僕は君に訊きたいことがたくさん有るんだ」

「く、来るな、化け物お！」

ゆつくりと近づいてくるカイに、王は腰に下げていた宝剣を構える。体の震えた構えは見るに堪えず、宝剣は装飾を散りばめた飾りである。戦う者の姿には全く見えない。

「化け物呼ばわりなんて酷いなあ。僕は人間だよ？例え僕がたくさん殺しても蘇るような不死身な存在だとしても。居るだけで周囲の気分を悪くさせる人間社会の異分子だとしても。何もかもが現実と思えない社会不適合者だとしても。僕は人間さ。人間の、悪性の生き物さ」

口の端を大きく吊り上げ一步一步を踏みしめる。王は恐怖しか感じなかった。

「う、あああああああああ！」

カイが徐々に距離を詰めるのに恐怖を感じた。目の前の徐々に近寄る存在に恐怖を感じた。王は、その恐怖を、その根源を消し去るべく、自らカイへと走り出し、カイの胸に宝剣を突き立てた。

「はあ……はあ……。これで……」

「僕の胸に飛び込んでくるなんて、僕の話をそんなに聞きたかったのかい？でもできればそういうのは性転換してから頼むよ」

「そんな、馬鹿な……」

その一撃はある意味でこの王の祈りだった。目の前の魔王を倒す切なる思いだった。残念ながらそういうのを無茶苦茶にするのが、過負荷であり、カイである。王は無力を悟って膝をついた。

「ねえねえ王様？なんで王様は王様なんてしてるのかな？」

カイは膝を折り、王と視線を合わせてその目をのぞき込む。

「何故？何故ってそれは、王になりたかったからで……」

「なんで王様になりたかったの？」

「王になれば、名誉も、富も、ついてくるだろう……」

「ねえ、なんでその名誉とかお金が欲しかったの？お金なんて、王様は王家筋だから生きる分には十分すぎるほどお金があったよね？名誉だって生きるのには必要ない、意味なんてないモノなのにさ」

「意味なんて、ない……？」

カイはその呆然としながら疑問を解しようとする王の姿を見て、非常にうれしそうな背筋の凍る笑顔を浮かべる。

「そう、意味なんてないんだよ。名誉なんて得たところで、その後に一度でも失敗すれば返上してしまうようなモノさ。得ていた名誉が大きいほど、些細な失態で周りからけなされるんだよ？そんなの意味が無いじゃないか」

「意味が、ない……」

「そう、意味が無いんだ」

「必要以上の金を得ることも」

「名誉を得ることも」

「名誉を誇ることも」

「名誉を振りかざすことも」

「自己実現欲求を満たすことも」

「尊厳欲求を満たすことも」

「王になることも」

「王に憧れることも」

「夢を見ることも」

「だって！オールイズファンタジー全部幻想なんだから！」

皮肉で不気味な笑顔のカイが、王には真理を説く賢者に見えた。

「そう、だな……。全部、無意味な幻想だったな……」

王は自らを着飾る衣装を見る。王は、それら自身の誇りが幻想であることに気づいてしまった。

「おはよう。良い幻想見れたかい？」

「ああ。「地位や名誉、富を得る」という夢を、見ていたよ……」

カイの顔を真つすぐ見る王の目は、夢ひかりを失っていた。

「君も目が覚めたみたいだし、僕はそろそろ——ん？」

ここから移動しようとした時、カイは鎖に巻き付かれ、その場から強制的に転移させられた。

◇◇◇

「あれ？束縛だけじゃなくて目隠しも？ちよつと僕にはハードすぎるプレイだなあ。で、ここはどこなんだらう」

無重力のような感覚を味わってすぐに視界が奪われたが、肌を感じる風の質が違うことをカイは知覚した。

「よお、クソツタレの番外野郎。ここがてめえの墓場だ」

「カザリーム？」

身動きと視認が封じられた状態で、カイの耳はそんな聞き覚えのあの魔王の声を捉えた。

第八話 寝言はユメの中で言え

カイの過負荷、『幻実当避』^{オールイズファンタジー}。そのスキルは、現実を否定し、幻想を肯定する、言わば現実を改変する能力である。決して、なかったことにする能力ではなく、改変する能力なのだ。

例えば、カイが死亡した際に蘇る事例。それは、その死因となる出来事がある現実をそんな出来事がなかった現実に改変し、その原因となる出来事がなくなつたがために結果である死がなくなる。死んだことをなかつたことにするのではなく、死ぬ原因を改変して死ぬ結果をなくしているのである。

この能力は「個人」を対象にした改変ができない。あくまでこの能力の対象は「現実」の一点に絞られている。異世界に転移するのも、釘を生み出すのも、自らを蘇生するのも、全て「現実」を改変した結果なのである。

「個人」の記憶を改変することはできないこの能力であるが、「現実」の記録は改変できる。カイが誰かを殺したという「現実」を改変すれば、あらゆる痕跡が存在しなくなり、結果となる誰かの死がなくなる。人にその事実が記憶されてしまうが、世界にその現実が記録されない。この能力の強みは世界から痕跡を消せることとも言えるだろう。おまけに後出しが利く能力だ。世界からの何某かの強制に、『過負荷』^{マイナス}の運命を除いて、後出しで抜け出すことができる。世界のルールを利用した取り決めも、違反した後で違反した痕跡を消せば、違反時の罰を回避できる。

そして、もう一つ覚えておかなければならないことがある。『過負荷』^{マイナス}は「転生したらスライムだった件」のスキルではない。故に、『過負荷』^{マイナス}は転スラのルールに則らない。『過負荷』^{マイナス}、そして『異常性』^{アブノーマル}はあくまで「めだかボックス」のルールなのである。そのことに、転スラ世界の固定観念に囚われたその世界の住人たちは気づけるだろうか？



「気分はいかがですか？八倉海」カイ・ヤグラー

「クレイマンも居るんだね。女の子は居ないのかな？居たらこの後の展開にワクワクできるんだけど」

「よくこんな状況で微塵でもワクワク展開を期待できるなー、お前」

「なんだ、ディーノも居るのか。もしかしてあれかな？僕の誕生日パーティかな？みんなそういうサプライズはびっくりするからよしてくれよお。後一つ言っておくと僕の誕生日は3カ月ほどズレてるよ？後、僕は永遠の17歳だから蝋燭は17歳分にしてね！」

「ゲーキは用意してねえしそもそもお前の誕生日パーティじゃねえ！お前の頭にはいったい何が詰まってんだ!!」

この危機的状況でもいつものように気味悪く陽気に振る舞うカイに、カザリームは怒りを表した。

「夢と希望と欲望さ！」

「聞いてねえ!!いいか説明してやる！お前を縛る鎖は『条約』違反の制裁、物質体マテリアルボデーだけじゃなく精神体スピリチュアルボデーも星幽体アストララルボデーをも縛り、さらにスキルも封じる特別製だ！如何なるスキルだろうと抜け出せねえし発動もできねえ！」

「……ちよつと待って？条約？僕、そんなの聞いた覚えがないんだけど」

カイは目こそいつもの糸目だが、その口も眉も端が下がっていた。「そうさ、そうさ！お前は『魔王』の中でもイレギュラー。魔素も持たないお前は魔王の『条約』告知を受けられない！ああ、俺たちもまさかとは思ったんだ。だが、試しにお前が違反しそうな条約作ってみても、お前は全く反応しねえし条約に触れそうな行動も自重しねえ！それでお前は見事『条約』違反したわけだ！」

『条約』の内容は、イングラシア王を殺さぬまま直接的に王位から降ろさせる行為の禁止。違反した場合は物質体マテリアルボデー・精神体スピリチュアルボデー・星幽体アストララルボデー

を束縛され、スキルを封印するというモノ。他の魔王なら王位剥奪に手間のかかる不殺などしない。そもそもイングラシアの王など微塵も興味を抱かない。だからこそ、こんな条約は他の魔王が違反するはずもないのである。

カイだけを狙った条約は、カザリーム・クレイマン・デーノの三柱の可決で施行され、他の魔王はその思惑に気付いたまま撤廃しなかった。しかし、そもそもイレギュラーであるカイに『条約』違反が適応されるかは不明確であったが、何の問題もなく適応されたのが現在である。

カザリームはようやくカイの笑顔を崩せたことに喜びを感じる。ようやく臨んだ展開になると。

「ま、待ってくれ！ぼ、僕は違反するつもりなんて無かった、知らなかったんだ！」

「知らなかったで済まされるかよ。俺たち魔王がしっかり守ってるルールだぜ？それをお前は破っちまったんだ。分かるだろう？他の奴らもきつとお冠だ。代表して俺が罰しようって話じゃねえか」

「お願いだ許してくれ！何でも言うこと聞くから！」

誇りも情けもない姿に、カザリームだけでなくクレイマンすら笑みを禁じ得ない。二柱は必死に笑い声を抑える。

「何でも言うこと聞いてくれるのか？」

「もちろんだ何でもする！靴でもなんでも嘗めろと言われれば嘗める！」

「そうか、じゃあ。死んでくれよ」

「……え？」

カザリームの貫き手がカイの胸を貫く。心臓を潰した感覚を手に感じ、引き抜いた。カイは力なく、支えもなく倒れ伏した。その目がもう開くことはない。さつきまでも開いているか怪しい糸目だったが。

「くくっ、くふふ……、あーはっはっはっはっ！ちっぽけな人間ごときが魔王になんぞ憧れるからだ身の程知らず！」

「ふはははははっ！やりましたね、カザリーム様！もうこの忌まわし

き男に気分を害されることもありません！」

今回の計画者である二人は、気味が悪かった男の亡骸を見て哄笑を響かせる。

「本当に、やれたのか……」

デイーノだけが動き出さなにか気が気でなく、仔細に監視し続ける。動かない。動くはずがない。あの状態から復活することは例えギイやミリムのような『真なる魔王』でも不可能だろう。しかし、それでもデイーノは不安が拭えなかった。

「クソツタレのクソ人間が！この俺様を怒らせるからこうなるんだ！悔しかったらなんか吠えてみる！」

「ワンワンワン、ワンワンワン、ワンワンワワン、ワンワンワン。僕らはイヌだぞ元気だぞ」、なんてね」

「は……？」

先ほどまで何度も踏みつぶしていた死体。ボロボロになるまで踏んでやろうと思っていたカイが突然消え、鎖に縛られたまま五体満足な姿で立っていた。

「な……何故だ！条約違反してその鎖に縛られたらスキルなんて使えねえはずだ！てめえ、いったい何をしやがった！」

驚愕に固まるクレイマンとデイーノ。カザリームも怒りを燃料にどうにか動き出して怒鳴る。

「あ、この鎖も邪魔だね。まあ、鎖に縛られたままなんて現実、僕は受け入れないんだけど」

「なっ!?」

ついに鎖すらもどこかへと消し去られる。長く生きてきたカザリームでも、そんな光景は今の今まで見たことはなかった。あるはずがなかった。あの鎖はこの世界のルールを用いて生み出される最高の鎖だ。逃れることなどはこの世界の住人にできるわけがない。

「踏みついたり罵倒したりは、まあ僕も条約違反した身だからね。お互い水に流そう。なんて僕が言うわけないだろう」

次の瞬間にはカイが吐き気すら覚えるような笑顔を浮かべ、三柱の足を釘で地面に縫い付けていた。

「ぬ、抜けねー!」「ただの釘がどうして」

「逃がさないよ?だって君たち、僕をはめるためだけに僕が違反しそうな条約作っただろ?みんなで寄って集って僕を虐めて。酷いなあ、本当に酷い。だから……」

「ひっ……」

カイは目を見開いてカザリームの目を見つめる。その目はカザリームをも脅えさせるほど、生き物が嫌悪するモノすべてを煮詰めたように、暗く濁っている。

「君たちにも酷いことをしようと思うんだ」

足元の空間に穴が開く。下を見れども底の見えぬ穴に、三柱もカイも吸い込まれるように落ちていく。

「Ygnaiih
トウ フル トウ クン ガ
t h f l t h k h , n g h a」
ygnaiih,

カイの呪文に呼応するように、どこまでも落ちる空間が軋むような音を立てる。

「我が手に銀の鍵あり。虚無より現れ、その指先で触れ給う。我が父なる神よ、薔薇の眠りを越え、いざ窮極の門へと至らん!」

底の見えぬ穴の先、深淵の虚空がボコボコと泡立つ。生じた泡は割れることなく徐々に増え、その泡の隙間から海産物のような触手が生える。泡が玉虫色に変色すれば、爛々と、まるで一つ一つが恒星のように輝きだす。

「なんだ、あれは……。何なんだ、あの化け物は!」

カザリームたちは本能で理解する。あれは、異世界の存在、宇宙からの侵略者であると。彼らは「コスミック・ホラー宇宙的恐怖」とでも言うべき未知の恐怖に心が侵食される。

「さあ、脳に瞳を宿そう。宇宙は屋根裏にある!なんてね、あっはっはっはっ!」

カイが楽し気に両手を広げたのを合図にして、化け物の触手がカザリームたちへ伸びる。

「何だよこれっ、何なんだよこれ!」

「ああああああああああ!カザリーム様!カザリーム様!!」

それを呆然と見ていた。

第九話 まるでユメのような男

ギイは考える。

カイという男はあまりに謎だった。如何なる分析系スキルを以てしても、スキルも魔素も持たぬただの人間としか分らない。しかし、スキルを持つていないということはあり得ない。

カイが死ぬ瞬間は何度も確認されている。だが、一度も死んでいない。間近で見た者の記憶には彼が死んだ記憶がある。それにもかかわらず過去視や痕跡調査などの過去観測が可能なスキルを使っても、彼が死んだ過去を見つけない。そう、世界から痕跡が消されているのだ。

そのことからギイは自らの情報を隠すスキルと過去を改変するスキルの二つを持っていると考えた。だが、その予想も違うことを理解した。

カイを目の敵にするカザリームとクレイマンの企てを、予想の正否を確かめるために邪魔しなかった。もし予想が当たっていればカイは死んでいたが、たかが一人、魔王の石柱としてギイにはさして問題とならない。「その程度の魔王を振るい落とせた」と喜びこそすれ、惜しむことも悲しむこともない。

そんな思いとは関係なく、前述の通りその予想は外れ、カイは生き残ったわけだ。条約違反の鎖から抜け出したことは驚くこともない。スキルが封じられた状態からスキルを使用したことなんてギイもやろうと思えばできることだ。カイが予想以外のスキルも持っていたと考えれば不思議ではない。

だが、その後カイが行ったことには度肝を抜かれた。いや、いつぞ恐怖したと言っても過言ではない。

カイは、異世界の創造主を呼び出したのである。

輝き放つ泡とうねる触手の化け物。その見た目からも異世界の生命体であることが分かったが、その見た目以上に観測される魔素量に驚愕した（正確には魔素ではなくそれに似たエネルギーだ）。転スラ世界の創造主、始まりの竜種・星王竜ヴェルダナーヴァに及ば

ないまでも、『真なる魔王』を凌駕するエネルギーの塊だったのである。ギイ自身すら上回るエネルギー量に、ギイはそれが異世界の創造主であることを確信した。

では、そんなモノを呼び出せたカイは何なのか。単純に考えれば、あの異世界の創造主に仕える者。そしてそれが正解なら今までわけが分からなかったカイのスキルも、異世界の創造主に与えられた究極贈与アルティメットギフトと考えれば納得できる。

その結論に至ることで疑問のいくつかは解消されたが、重大な疑問が一つ浮かび上がる。

「あの男は何をしにこの世界に来たのだ？」

カイの目的は不明瞭だった。一時期は勇者候補や魔王候補の心を折り続けていたが、今は世界中を旅する傍らで挑んできた者の心を折っていた。戦闘狂というには誰も殺さず、旅好きというには血の気が多い。はたから見て、頭の端から狂っているとしたか思えなかった。「問い質す必要があるな」

魔王に任命した時は見逃したが、この世界を壊す危険性があればそうしてやるほどギイは魔王として、『調停者』として怠慢な男ではなかった。

すぐにカイの足元にワープゲートを作り、今自分のいる白氷宮の玉座の間に繋げる。何の抵抗もなく、カイはワープゲートから逆さまで降ってきた。

「久しぶりだな。って、ん？」

カイは着地に失敗して頭から落ち、首をあらぬ方向に曲げながら横たわっていた。

「……今ので死ぬか、普通」

「マイナス僕に普通なんて世間の常識が通じるわけないだろう？」

次の瞬間には無傷なカイが目の前に立っていた。ギイは既に見慣れた光景なので驚きもしない。

「僕を3メートル以上の高さから落とすのは止めてね？スペランカーみたいに足腰が弱いわけじゃなくて、不運が重なって頭から落ちるんだから。人って3メートルくらいでも死ぬるんだ！そう、頭から落ち

ればね！」

相も変わらず何が楽しいのか分からないが笑顔のカイ。過^{マイナス}負荷としての気味の悪さは抑えていても、その生来の気味の悪さは隠せていない。

「カザリームとクレイマン、あとついでにディーノも返り討ちにしたらしいな」

「身に覚えがないな。幻想^{ユメ}でも見ウボア。……冗談さ。確かに条約違反とかで難癖付けられたから、ちよつと酷い目に会ってもらったね」

はぐらかそうとしたところをギイに風穴空けられ、冗談も通じないのを理解してカイは苦笑いで話を合わせることにする。風穴はもう消えている。

「もしかしてまずかったかな？彼らが魔王から降りたりした？心まで折った覚えは本当になんだけど」

「いや、アジトに籠っただけでまだ覇気はあるようだ。ディーノはダグリユールのところで自棄酒しているみたいだが。まあ、魔王がいくら減ろうが増えようが俺の気にするところではない。俺が気にしているのは、お前の召喚したアレについてだ」

ギイは声のトーンを下げ、鋭くカイを睨む。下手な魔物ならそれだけで縮み上がりそうだが、カイは意に介さない。

「ああ、ヨグⅡソトースのこと？彼が、いや彼女だっけ？まあなんでもいいや。で、ヨグがどうしたの？」

「そのヨグⅡソトースというのとお前の関係は何だ」

ギイは怪訝な表情をする。仕える身にしては主の呼び方がフレンドリーだったことに違和感を覚えたのだ。そういうフレンドリーな主という可能性がまだあるが。

「ヨグとの関係？んゝ何だろうね。かかると思ってたなかった電話番号にかけたら出ちやっただ感じ？」

「はっ」

「F^{ヨグ}G^のの^{巫女}アビゲイル^{さん}の真似したら呼べちゃったんだあ。さすがの僕もびつくり！本来はもっと複雑な手順を踏まないと呼べないはずなんだけどね、僕の場合その手順を省いて最後の、呪文？を唱えるだけ

で呼べちやうんだ。まあ、やっぱり正式な呼び方じゃないみたいだからヨグも怒るんだけどね！ちよつと悪夢見せるくらいで許してくれるんだ！」

「……」

ギイは久方ぶりに感じる頭痛に眉間を押さえた。カイの言ってることは意味不明だ。

「お前があれに仕えているとか、お前があれを従えているというわけではないんだな？」

「ヨグに仕えるくらいなら安心院あんしんいんさんに仕えるよ。従えるのも無理だね。そんなことしようとしたらヨグが本気で怒っちゃうよ。さすがの僕も「虚空」に追放されたらどうしようも無いだろうしね」

知らない個人名とおそらくニュアンスが違う単語が出てきたが、説明されても意味が無いモノだと流す。ギイは少なくとも、「安心院」というのが「ヨグ」より言葉の通じる存在、「虚空」というのが神出鬼没なカイすら脱出できない異空間と認識した。

しかし、カイの言葉が真実ならば疑問は最初に戻る。

「お前は、何が目的で動いているんだ」

情報の断片では確かな真実に至れないと踏んだ単刀直入な問い。ギイは虚偽を許さぬように威圧する。

「ああ、それが訊きたかつたんだね。いいよ、答えよう。そう変なことでも調停者君たちの邪魔になることでもない」

カイはいつもの笑顔のまま目を見開く。人の悪性を煮込んだような濁り切った沼。ギイの感想はそれだった。

「僕はね、負けたいいんだ。僕は僕と全力で戦える存在との戦いで、悔しさも恥ずかしさも言い訳も微塵も残らない完膚無きまでの敗北がしたいのさ」

「全力で戦ったうえで、負けたい？」

ギイには分からなかった。ギイ自身にも全力で戦いたい欲があり、そうしたい相手がいる。だが、間違っても負けたいとは思わない。最後に立っているのは自分であると、それこそが全力で戦う意味だとギイは思っている。

「まあ、^{君たち}プラスには分からないだろうね。詳しく説明する気はないけど、^僕マイナスは勝てないんだ。最終的に負ける運命にある。でもだからって戦わないというのは勿体ないよね？せつかく力があるんだから、全力で振るってみたいと思うのは当然だろう？だから僕はそうすることにした。いつか僕と同等、いや、正反対の人に全力を振るって負けるんだ」

濁った沼であるのに爛々と輝く目が、如何に本気かをギイに悟らせる。

「……その相手は俺や、ルドラではないんだな？」

「うん、違う。いつか来るんだ、^こ転スラ世界に、『^彼リムル』が。僕は彼が来るまで暇つぶしをしてるだけさ」

カイは糸目になる。今までは本心を晒しているようだったが、今も別に嘘をついているようではない。高ぶっていたのが落ち着いたのだろう。

「その、いつか来る『^彼』というのは調停者^俺にとって、魔王にとって敵か」

「いいや、彼は敵じゃないよ？むしろ味方だね、魔王にとっても世界にとっても。強いて言えば、^僕アブノーマル^敵さ」

「そいつに負けた後、お前はこうする」

「この世界からは出ていくよ、それ以上の目的はないからね。まあ、生きてればの話だけだ」

カイはともすればリムルが自分を完全消滅させる可能性も考えていた。が、むしろそれは望むところなのだ。『^{オールドイースファンタジー}幻実当避』でも復活不可能な状態にされたら、それこそ「悔しさも恥ずかしさも言い訳も微塵も残らない完膚無き敗北」なのである。

ギイは内心驚愕する。この男すら完全に殺しきる存在がいずれ来る。俄かには信じられないが、虚偽とも思えなかった。

「ところでお茶か何か出ないの？お茶請けでもいいよ？ああでもそうになるとやっぱりお茶が欲しくなるよね！」

「……喉が焼けるほど美味いとおきの酒があるが？」

「消化器官が全て焼けそうだから止めとくよ。じゃあ僕はそろそろ行

くね。じゃね、バイビ」

カイはにこやかに手を振って幻想のように消えた。ギイも特に止めることはない。訊きたいことはおおよそ訊いた。

『『過負荷』、マイナス八倉海カイ・ヤグラに。『彼』、ね……』

ギイは楽しそうに微笑む。「次の聖魔大戦こそ、ルドラと決着がつけられるかもしれない」と、ギイはその時が待ち遠しくなった。

第十話 浅きユメ見し酔いもせん

カイが転スラ世界に転移して約100年。最初の数十年間は勇者・魔王候補に挑み、後は飽きて世界漫遊に費やした。そうして当てもなく彷徨って、ようやくこの空虚を少しは埋められるだろう報せが耳に届いた。

魔人を討伐し続ける勇者が居る。

そんな報せだ。その勇者は村を救ったり人を助けたりはしていない。魔人討伐がそういう結果をもたらしたこともあるだろうが、それが主目標でないことに周りは気づいていた。

——異世界の人間を召喚する方法を知らないか？

勇者は討伐する魔人に毎度その質問をしている。知らない魔人は殺された。知っていると騙った魔人は殺された。何が目的かは知られていないが、数十年間勇者的行動を続けたことは確かである。良くも悪くもその名は広まり、魔王にも知られている。

野良の魔人を殺すだけなら魔王は誰も気にはしない。だが、何を考えたかカザリームが手下の魔人をけしかけた。彼はもしかしたらカイと同じ人間である勇者に憂さ晴らしをしたかったのかもしれない。しかし、それが彼の失策となる。最初からカザリーム自身が動いていれば、初めから全力で当たっていれば、その勇者が順調に『勇者の卵』を成長させることはなかったろう。その実力をさらに磨くことはなかったろう。

カザリームはそろそろ痺れを切らす。心の深奥に潜むカイ^{人間}への恐怖を怒りで消し去り、彼は勇者に挑むだろう。『勇者の卵』、『レオン・クロムウエル』に。

「で、わざわざ僕を呼び寄せたんだからその光景を見せてくれるんだよね？ ギイ・クリムゾン」

「文脈をしっかりとしろ。何が「で」で、何が「その光景」なんだ」

世界漫遊を続けていたカイはまたいつの間にかにギイのワープホールに落され、彼の玉座の前にいた。彼の相棒はまた居ないよう^{ヴェルザード}だ。

「じゃあまず何故僕を呼んだのかから訊こうか」

「お前が一番勇者候補の情報を集めていた。カザリームが挑もうとしている勇者候補はどの程度だ」

「ああ、僕の予想が当たってて良かったよ。彼は君のお眼鏡にも適うんじゃないかな? 『勇者の卵』を持つ本物の『勇者』候補だからね。それに、魔王の素質もある。結果は勇者的だけど、過程は魔王的だからね」

カイが今回の勇者候補も調べていることは明白だったが、ここまで情報をこちらに流した行動がギイは違和感を覚えた。

「あれはお前の言っていた『彼』か?」

「違うよ? まあ彼も惜しいとは思ってるから、カザリームがやられた辺りで僕も挑んで来るけどね。ほら、早くしないとカザリームがやられちゃう。生中継してくれなきゃ僕はもう生観戦に行っちゃおうよ?」

「……ほら、これで良いだろう」
カイの目の前に水晶が置かれたテーブルが現れる。ギイとしてはまだ訊きたいことがあるので、気味が悪いとしても引き留めざるを得ない。

「わあい、ありがとう! この中継者が居れば遠くを見れるスキルも便利だよねえ。僕はどう足掻いても覚えられないけど」

「カザリームはやられるのか?」

「うん、惜しいとこまでいくだろうけどやられるね。空いた十大魔王の枠はこの勇者候補を誘うと良いよ」

まるで見てきたかのようなカイの発言をギイは訝しむ。

「何故そこまで確信を持って言える」

「勇者候補君も大分経験値を貯めこんでるからね。今回の戦闘で『真の勇者』に覚醒するよ。強敵に出会って成長するなんて、お決まりのパターンだろう?」

ギイの玉座にひびが入り、周辺が抉れる。ギイによる無秩序の魔素放射。カイに対する威嚇だ。

「『そう言える確証は何だ』と訊いているのだが。お前は体に訊いた方が良いのか?」

「そうカツカするなよ。憤死しちゃうよ?」

殺意すら込めてギイが睨むのを平然と気味の悪い笑顔でカイは見つめ返す。数秒はそうしていただろう。

「止め止め。もう君には負けてるから僕には戦う意味がないんだ。さすがの僕も「次は勝てる」なんて幻想ユメは見れないしね」

そうして膠着状態を解いて肩をすくめるのはカイの方だった。

「なんて言えばいいのかな?僕が未来を知ってるとか言ったら笑わない?」

「笑えない冗談だ」

「あつはつはっ!ほら、信じてくれないじゃないか!僕はだから言いなくなかったんだよ。ほらじゃあ予言してあげよう。勇者候補君は今回の戦闘で究極能力『純潔之王』アルティメットスキルメタトロンを獲得する。僕の予言が当たってるかどうかは、見てのお楽しみってやつさ」

「……」

ギイは自らの手のひらに水晶を呼び出す。カイが未来観測のスキルを持っているかどうかは分からないが、少なくとも予言の正否だけは今この場で確認できる。

「ああ、良かった。大事な場面は見逃してないようだ」

水晶には、カザリームとレオン・クロムウエルの戦いが映っていた。

◇◇◇

「てめえら人間が、調子乗りやがってよお!この俺様の企てをことごとく無茶苦茶にしやがって!」

カザリーム率いる中庸道化連の面々と相対するレオンの間には多くの骸が横たわっている。それらはカザリームの配下だった者たち。手にかけてしたのは、たった一人の人間、レオン・クロムウエルである。今やカザリームの配下で残っているのは幹部であるラプラス・フットマン・ティアの三名だけだ。肉壁程度の魔人も居たが、強者も居たはずだった。量で圧倒する計画が個人の質で狂わされ、カザリームはその怒りを隠すこともない。

「くっ……」

しかし『勇者の卵』たるレオンでも量は量だ。その四名まで追い詰

めたのは正しく高い質の成せることであれど、『勇者の卵』ではそれが限度。レオンは膝を屈するまで疲弊していた。

「くはっ、はっはっはっ！さすがにもう動けませんってか！良いぜ、ようやくだ。じゃあ塵も残さず消えろや、人間！」

カザリームとその配下で囲まれた四方。その四方から純粋な殺意がレオンに差し迫る。

(こんなところで……。クロエ、俺は……)

妹のように大切だった者、クロエ・オベール。レオンは自分の目の前から忽然と消えた彼女を呼び戻すため、知識を求め、魔人を狩り続けてきた。彼にとって、彼女を守ることこそが全てだった。彼女を取り戻すことが全てである。今まさに、自分の終わりが目の前に見えるこの一瞬すらも。

(そうだ、俺は……あいつを取り戻すまで！)

折れかけていた意思が奮い立つ。震えていた四肢が屹立する。

「クロエに会うまで！死ねないんだ!!」

レオンの瞳に光が灯る。逆境においてなお立ち上がる高潔なる精神。正しくそれは、『真の勇者』のそれだった。

《『勇者の卵』の孵化を確認しました。究極能力『アルティメットスキル純潔之王』を獲得……成功しました》

レオンの中に満ちる力、レオンはその力を感じるままに眩く輝き出したレイピアをカザリームへ突き出した。

「砕けええええええええ!!」

一筋の閃光が駆けた一瞬の後、光は拡散して世界を白く塗り潰す。それはただの光ではない。魔を打ち払う聖なる光である。

「そんな、バカな……」

世界が色を取り戻した時には、拡散した光によって四方からの攻撃は打ち消され、カザリームは右半身を失っていた。最初の一闪に直撃していない他三名も重大なダメージを負っている。半身を失った事実を受け入れたようにカザリームはゆっくりと倒れ、炭のように砕け散った。ここに、約束された逆転劇は幕を閉じる。

「勝った、のか……」

レオンは灰燼を呆然と見つめる。カザリームの配下たちは逃走を決め込み、どこかへと消える。

今まで戦ってきた魔人とは格の違う敵。レオンは魔王と名乗った存在を打ち破った現実が、今だ受け止められずに立ち尽くしていた。そんなレオンの気を引くように、何処から拍手の音が聞こえてくる。音の方を見れば、白髪で糸目の男が気味悪く笑いながら手を叩いていた。

「おめでどう、レオン・クロムウエル。君は物語の勇者さながら、寄せ来る敵を、魔王を打倒した。そして、名実ともに『真の勇者』になつたわけだ」

「……お前は？」

唐突に現れたその男。どう見たって怪しい者であるが、魔素が一切感じないがゆえにレオンはただの人間だということを知覚していた。だからこそ、人間に対する程度の警戒しかなかった。

「観戦者さ。君が倒した魔王、カザリームって言うんだけど。彼とはちよつとした因縁があつたんだ。彼が戦っているようだからね、事の成り行きを見守ってたんだよ。そしたら見事、君が倒してくれたじゃないか」

「因縁？」

「彼にね、はめられたんだ……。そして殺されてしまった」

「……そうか」

レオンは彼の下がった眉を見て察した。この目の前にいる男は、誰か親しい者をあの魔王に殺された被害者であると理解した。

「せめてものお礼だ。受け取ってくれると嬉しいな」

「これは？」

男より投げ渡された物は液体が入った瓶だった。

「フルボーション完全回復薬さ。死んだ人一人蘇らせられない出来損ないだよ……」

「……」

レオンには男の悲しみを如実に感じ取ってしまった。彼自身、大切な人と離れ離れになってしまったからだろう。

「そんな僕の話はどうでもいいさ。さあ、その薬を飲んで見せてくれ。」

僕に勇者を称えさせてくれ」

「ああ、分かった」

レオンは疑うことなく瓶に入っていた液体を自身の腹へと流す。効果はすぐに現れ、レオンの傷と疲れ、消耗を回復させていく。

「傷は癒えたかい？」

「ああ。礼を言う」

「礼なんていらないさ。僕は僕のしたいことをしたまでだからね。それじゃあ……」

「っ!？」

レオンは空気の変化を感じる。魔力感知によるモノではなく、もつと生物の根幹にあるような受動器によるモノ。背筋が凍るような不気味な雰囲気を感じ取った。

「戦おう、レオン・クロムウエル。僕は『エクストラ・イビル番外魔王』『マイナス過負荷』、カイ・ヤグラ八倉海君の敵さ」

不気味に笑う目の前の男の特徴と世に伝え聞く「最凶の魔王」の特徴が一致していることに、レオンはようやく気付いた。

第十一話 ボスに辛勝後の連戦は酷いユメだ

ギイは静かに驚いていた。水晶で観戦した勇者候補・レオンとカザリームの戦闘がカイの言っていた通りの結果となったからだ。正しく予言通りだった、究極能力『純潔之王』に目覚めたことすらも。アルティメットスキル 究極能力の素養を見抜けるギイは大罪系ならばどんな究極能力アルティメットスキルに目覚めるか予想できる。しかし、美德系なら話が変わってくる。

ギイに不可能な美德系究極能力アルティメットスキルの覚醒の予想を、カイはして見せた。いや、カイの言動から察すれば、それは予想ですらない。カイが言ったように、それは予言だ。

（未来観測のスキル、そんなものが実在していたとは……。いや、そのスキルを持つているにしては奴の動きが不自然すぎる……）

カイはカザリームの仕掛けた罠に一度はまっている。未来観測ができるならばそんなものは回避できたはずなのだ。

（観測できる未来が限定されている……？）

限定的な未来観測。ギイの中で最もあり得ると思えたのがそれだった。カイは確かに言葉の節々に未来を知っているような素振りがある。だが、未来全てが見えているとしたら、以前のカイに対するギイの不意打ちは通じていないはずだ。現実は通じていた。

（なににせよ、奴は未来を知っている。そして、奴が『彼』と呼ぶ者に敵対する……。奴は、俺にとって敵か？）

ギイはカイがこの世界にとっての敵か凶りかねていた。目的はある者との戦闘。しかし、曰くその者は世界と魔王の味方なのだとかイは言った。では、その者の敵となるカイはギイにとって敵なのか。ギイには分からなかった。

（情報が少ない。そも、その『彼』の来訪が事実かも分からん。ならば、後に敵になるにしろならないにしろ、実力を見ておくのに越したことはないか）

ギイは一旦今までの思案を打ち切って水晶を覗く。水晶には、カイとレオンの戦闘が映っていた。ギイはその光景に観測系スキルを用いながら凝視する。カイの手の内を一つでも暴いてやろうと。

◇◇◇

何度も閃光が駆ける。何度も閃光が爆ぜる。しかし、人間は傷一つなく立っている。

「おいおい。強能力持った瞬間それブツパなんて、オンラインゲームだったらチンパンジーって言われても仕方ないよ？ 思い人も愛想尽かしてしまいかもしれないね。いや、尽かされたから君の元から消えたのかな？」

「貴様！ 知った口を利くな！」

思い人との絆を侮辱されたレオンは激情する。攻撃がどんどん単調になっていく。

「全く酷いなあ。君の思い人のこと、色々教えてあげようとしてるのに」

「ほざけ！」

あまりにも真つすぐで読みやすい踏み込みによって放たれるレイピアの突きは、地面から突如生えた釘の壁に阻まれる。

「クロエ・オベール」

「なっ!? 貴様、クロエを知っているのか!!」

「さつきからそう言ってるじゃないか。少しは人の話を聞いた方が良いや? それこそ、本当にその子に嫌われちゃうからね」

「……っ」

挑発だと分かっているけどレオンの怒りは収まらない。早くこの不気味な男を半殺しにして情報を訊き出すことしか頭になかった。

「まずだけどさあ。君って「クロエ・オベール」の姿を覚えているかい?」

「何をバカなことを。俺がクロエの姿を忘れるはずが——」

「じゃあ髪の色は?」

「髪の色だと? クロエの髪は綺麗な……。……!」

レオンはカイの問いかけでようやく気付いた。クロエ・オベールの髪の色を思い出せない。

「目の色は? 肌の色は? 性別は? 性格は?」

思い出せない。

「その子にしてもらったことは？その子にしてあげたことは？その子にかけられた言葉は？その子にかけた言葉は？」

思い出せない。

「その子との、絆は？」

何も、思い出せない。

「そんな……そんなはずは……」

レオンは自覚させられた記憶の穴あきに空虚感を覚えて膝から崩れ落ちる。

「ねえ、いつまで大切な人が居たなんて幻想ユメを見ているんだい？」

「夢……？」

「そう、幻想ユメさ。心ココロの重圧ジュウアツから身を守るためにそういう妄想を生み出す話、結構あるだろう？」

レオンは空間の歪みだか時空の亀裂だかに飲み込まれ、この世界に転移してきた。平穏だった日々がなんの脈絡もなく奪われ、明日の命すら不確かな世界に放り込まれた。間違いなく相当なストレスがあつただろう。そんな自分を必死に生かすため、脳が記憶を捏造し、生きる活力を生み出すというのも無理な話ではない。

「俺は、今日まで何のために……。どうして俺は……」

レオンは渦巻く心をうまく言葉にできず、その感情すら無意味な夢に思えてきて虚無感に苛まれる。

「辛かったろう？今まで必死に自分を騙してきて。でももう良いんだ。もう幻想ユメなんて見なくて良い。僕が、このオールイズファンタジー全な世界から解き放つてあげよう」
「……」

俯くだけのレオンに、カイはゆっくりと近づいていく。

「良い目覚めを、レオン・クロムウエル」

レオンに今、カイの釘チウが振り下ろされようとしていた。

「バカか貴様は」

「え？ぐっ！」

釘を持つ右の腕が捕まれて意表を突かれ、カイは一瞬固まってしま

「クロエは、俺の大切な家族だ」

カイの腹部へと光球が叩き込まれる。魔物でなかりうとも問答無用で焦がすミニチュア太陽のようなそれが、カイの腹部に直撃して爆ぜる。光の氾濫が収まった時、倒れ伏すカイをレオンが見下ろしていた。

「ぐふっ……。どうにも、手加減した、みたいだね……」

直撃した腹部が熱で炭化してるのはともかく、その他の部位は重度の火傷で済んでいる。あの至近距離で全力のそれを食らっていれば、カイは灰になっているはずだ。

「ああ、お前は色々知っているみたいだからな。あえて生かした。最後に油断したな、魔王カイ・ヤグラ」

レオンは心を折られたフリをして、カイが警戒心もなく近づいてくるのを待ったのだ。直撃さえ当てれば倒せることは、カイが瞬間移動までして避け続けていたのを見れば明白であった。ならば、後は隙を突くだけ。そうしてレオンは見事、カイの隙をついて一撃を叩き込むことに成功した。

「クロエの、記憶……。全部覚えてるはずは、ないんだけど……」

「あいつが俺の妹みたいなものだって覚えてるだけで充分だ。後はあいつを取り戻してから考えればいい」

如何なる理由で記憶が薄れているとしても、自分にとってクロエが大切な家族であることは覚えている。それが真実であると、レオンは微塵も疑わない。

「はは……。自分を信じてってやつかい……。全く、少年漫画の、勇者みたいなことを……」

カイから見てその行動は王道の勇者を想起させ、「自分を信じる」という点に人間の善性を感じた。その姿はまさに、『真の勇者』だった。「ああ……。やつぱり、負けるのは良いね……。君みたいな、勇者プラスに負けるのは、全く、清々しい……」

悔しいが、恨めしくはなかった。少年漫画のような展開。約束された悪役マイナスの敗北。カイが望む最高のそれには及ばないが、100年程の渴きを潤すには事足りた。

「勝手に満足するんじゃない。お前には、色々喋ってもらおうぞ」
「ああ、良いよ……。勝者は、褒賞を受け取る、正当な権利がある……。それこそ、魔王を倒した勇者には、金銀財宝を、てね……。僕の知る限りのことは、そうだね……。三つまでは、答えてあげよう……。」「ぬかせ。全てだ、お前にはクロエについて全てを訊き出す」
レイピアをカイへと向ける。「お前の命は俺が握っている」と言うかのように脅す。

「その手の脅しは、オールイズフア——」

その瞬間、カイは何者かに踏みつぶされ、その体は肉片を散らす。カイの命は無残にも刈り取られた。レオンは飛び退いてレイピアを構え、カイを踏みつぶした男を視認する。男は、赤い髪をしていた。「随分と呆れた倒され方だ、カイ・ヤグラ。全力勝負を望んでいると言うが、お前はいつも手を抜いているではないか」

侮蔑した視線で赤髪の男はカイの死体を見下す。レオンがその行動に懐疑心を抱いて一つ瞬きをすれば、いつの間にか死体が消えている。

「本当の全力は、『リムル』^彼まで取って置いてるんだ。『リムル』^彼くらいじゃないと、何もかもが無茶苦茶になっちゃうからね」

最初に見た時と同じ不気味な笑顔を携えた男が、最初に見た時と同じように五体満足で立っている。レオンは敵とも分らない者が目の前にいることを忘れてレイピアを取りこぼしそうになった。

「何故だ、今さっき死んだはず……」

「そんな驚くことかい？僕が一度殺されれば死ぬなんて現実、受け入れるわけないだろう？後、退魔の光に浄化されるってのもね。そもそも僕は純粋な人間だから浄化なんて意味がないよ？」

「お前が「純粋な人間」というのはひよつとしてギャグで言っているのか？だとすれば微塵も笑えない」

「ギャグじゃなくて事実だからね。……微塵も信じてないって顔だね。いったいなんて言ったら僕の言葉を信じてくれるのさ」

苦笑いじみた笑顔のカイを男は猜疑の視線で睨み続ける。

「お前が悪霊の類だと言うなら信じてやろう」

「何だい？君も神話生物扱いかい？酷いなあ、僕ほど純然で整然で真
正な人間は居ないって言うのに」

カイは天を仰ぎ見てから項垂れるが、どこか演技のようで真実味が
帯びない。そんなカイの様子では男も態度を変えるわけがない。レ
オンはそんな仲が良いのか悪いのか分からない交流を見て唾然とし
ている。

「ところで。彼に用があつて来たんだらう？そろそろ無視は可哀そう
だから構つてあげたら？」

「それもそうだな。初めて会うな、レオン・クロムウエル。カイとの戦
いは見ていたが、カイが不甲斐なくてな。その実力を十全に測れな
かった。だから……」

今までのまだほんわかとしていた雰囲気は消え去り、男からレオン
に戦意が向けられる。カザリームとは比べ物にならないエネルギー
を感じ、レオンは緩みかけていた気を引き締める。

「このギイ・クリムゾンが直々に見定めてやろう」

『真なる魔王』ギイ・クリムゾンが、『真の勇者』レオン・クロムウエ
ルに喧嘩を申し込んだ。

第十二話 運命がユメならどれ程良かったか

レオンは思い知ることとなった。今まで多くの魔物を、魔人を狩ってきた。魔王すら倒すことに成功した。過信をしているつもりはないが、自分は強いのだと思っていた。故に、自分が「強い者」ではあるが「最強」でないことを理解した。

今対峙しているのは魔王。それも倒した魔王、カザリームとは比べ物にならない力を持ち、なおその実力を秘める魔王。その魔王は「ギイ・クリムゾン」と名乗った。何かの書物で見たことのある名前、その書物では確か『最古の魔王』だと記され、伝説の天災級だカタストロフと伝えられていた。

レオンもそれに否を唱えるつもりはない。読んだ当初こそ眉唾物だと思った伝承が事実であるだろうことを目の前の魔王が如実に語っている。

攻撃が通じない。アルティメットスキル『純潔之王』の閃光すら逸らされる。レイピアの攻撃も体に触れようが傷つかない。ユニークスキル以下は無効化される。埋めようもない実力差を知覚して、少なくとも絶望を味わっていた。

「くっ……。はあ……はあ……」

体力が限界を迎える。カイとは別ベクトルでどうしようもない敵にレオンは膝を屈した。そも、カイすら生きている現状に生き残れる可能性があるので疑わしい。

(諦めるな！俺は、クロエに会うまで死ぬわけにはいかないんだっ！)
この絶望的な状況でさえレオンの瞳は輝きを失わない。立つ体力もないというのに、まだレイピアを支えに立ち上がる気力に満ちている。

「ふむ、これは良いな。まだまだ青いが伸びしろもありそうだ」

「お、君も高評価みたいだし。空いた枠を彼で埋めるってことでファイナルアンサー？」

「ああ、実力は申し分ない。前の魔王を倒したのだ。他の奴も文句はないだろう」

「この場合つて魔王達ワルプルギスの宴はするのかい？」

「いや、推薦を告知して異論がなければそのまま決定だ。他に候補者がいるなら戦わせて勝った方になる」

魔王二人はレオンが放つ殺気を度外視して何やら話し合う。なめられていると感じたレオンはその気迫を強めるが、ボロボロの姿では様にならない。

「とりあえずおめでとう、レオン・クロムウエル！まだ気が早いかもしれないが君は僕と、いや僕は『番外魔王』エクストラ・イビルだから違うね！彼と同じ十大魔王になる訳だ。僕も一応魔王だから仲良くしてね？仲間外れは傷つくからね？ということだからからは僕たちと一緒に自分たちが優等種族だと思ってる人間どもを懲らしめよう！」

「誰が、貴様らの仲間なんぞにつ……」

「これは決定事項だ。逆らうというなら、ここで死んでもらうだけだが。それでいいか？」

「クソが……」

何食わぬ顔で「死んでもらう」と述べるギイはこれから人を殺す顔には見えないが、そんな気軽さで人を殺せるのだということとをレオンは察してしまった。そのため、選択肢がない。魔王と肩を並べるなど屈辱を感じる。しかし、レオンはクロエに会うまで耐え忍ぶ道を選んだ。

「では、後は任せる」

「え？僕に任せるの？」

ギイはカイの言葉に答えず、ワープゲートを通つてこの場から失せた。

「あ、マジで僕に任せるんだ。嫌だなあ全く。自分でボロボロにしといて回復もしてあげないだなんて。そもそも僕が戦った後に間髪入れず戦闘開始したし。魔王なら魔王らしく挑む前に全回復させるくらいしてほしいよねえ。あれじゃラスボス失格だよ。せめて戦う直前の部屋に回復もできるセーブポイントを置くくらいしなきゃさあ」

困った笑顔をまませの悪態をつくカイ。レオンは未だ警戒していた。

「ん？ああ、そんなに警戒しなくていいよ。僕は負けたら二度と手を出すつもりはないんだ。諦めない限り勝てる、なんて幻想ユメは見れないからね。負けは負け。僕は何度やっても負けるモノ。それに、君との戦闘は割と満足してるんだ。勇者に負ける魔王、良いねえ。実に良い。気持ちが高ぶる！正しく王道！ありがちな英雄譚！それでも少年の心に火を灯す熱い展開さ！ということではない、完全回復薬フルボーシオン。魔素は回復しないけど体力は回復できるでしょ」

急に興奮しだして語り出したかと思えば、急に冷静になつて懐から瓶を取り出す。テンションの乱高下にレオンは相変わらず気味の悪さを感じていた。

「いらん。お前の出した物なんて、二度と飲むか」

「あつそ。で、そのまま「ハアハア」言いながら僕に色々訊くの？興奮してるみたいで気持ち悪いんだけど」

「気持ち悪いのはお前の方だろうチクショウが！これで良いんだろうこれで！」

レオンはカイから瓶をひったくつて頭から被る。完全回復薬フルボーシオンはかけても飲んでも良しの優れ物だった。

「うんうん、素直が一番さ。僕みたいな正直者とはいかないまでも、誰彼構わず噛みついてちや世の中生きづらいよ？」

ニコニコ笑顔のカイを睨むレオンの怒りは一層強くなる。

「はいはい。さっさと大人しく色々と話せてね。急かすのはいいけど質問してくれなきゃ僕も答えられないよ？さっきからこんなに饒舌に喋ってるのは君が質問を考えている間を埋めるための僕の甲斐甲斐しい努力なんだ。もし僕の言葉が聞くに堪えない物だとしても早く質問してくれない君のせいだから僕は悪くない」

「……。三つしか答えないと言ったな。それは何故だ」

怒りを抑え、レオンは頭を回転させる。レオンにはカイの「三つしか答えない旨」が引つ掛かった。

「特別にその質問はカウントしないで答えてあげよう。クロエ・オベールという人物はこの世界の重要人物だからだよ。彼女について深く知れば知るほどこの先のネタバレになるからね。だから、無制限

には答えられない。三つにしたのは気まぐれさ」

レオンはカイへの警戒度を上げた。この男は、何かを深く知りすぎている。

「何故お前がクロエのことを知っている」

「そんなくだらない質問をするのかい？ 悪いけどここからカウント開始だ。まず一だね。僕がクロエ・オベールについて深く知っている理由は、「僕が知らない」という現実を受け入れなかった」からだよ」

レオンは「現実を受け入れなかった」というのを考察する。これはカイの能力に関することだと考えた。カイは「夢」という言葉を強調して使っていた。そして今の発言に出た「現実」。「夢」と「現」。おおよそであるが、カイの能力は幻影魔法を発展させたモノではないかと予想した。

では、後二つの質問をカイの能力当てに使うか。レオンの答えは否だった。目の前にいる男の力が如何様なものであると、邪魔をするなら滅ぼす。それ以上にクロエについての数少ない情報源を失うのは非常に惜しかった。

「何故俺のクロエに関する記憶が曖昧になっている」

「二つ目だね。その答えについては僕も表現が難しいよ。なんて言えば良いのか……。彼女が今曖昧な状態になっているから、かな？」

「曖昧な状態」というのにレオンは焦燥する。まさか、クロエが死にかかっているのではないかという最悪の事態が頭をよぎった。口を開こうとするレオンに対し、カイは人差し指で当てて口を閉ざすことを促した。

「このままじゃ三つ目の質問も面白くなくなるから。補足してあげよう。クロエは死にかけてるわけでも消えかけてるわけでもない。あくまで今は不純物が混ざっているというだけの話さ。君が何かする必要もなく、何れその不純物は取り除かれるから安心しなよ」

表現自体が明確にされていない答えにレオンは視線を鋭くするが、カイはにこやかにそれを受け止めるだけ。これ以上明文化はできないと表していることをレオンは理解する。そして、そもそもこの二つの質問はあまりにも自分の目的に迂遠であることに気付いた。単刀

直入に、自分の目的を果たす答えを求める方法を訊けばいいと思いついた。

「クロエを召喚する方法はなんだ」

その質問をした瞬間、カイの口の端は大きく吊り上がった。

「何が可笑しい！」

「いやいや、何も可笑しくはないさ！可笑しくないからちゃんと答えてあげよう！君には無理だ！」

「ふざけるな!!」

怒りに任せてカイの胸倉を掴み上げる。それでもカイは笑顔を絶やさない。

「おいおいせっかちな奴だなあ。君はもしかして同性愛者なのかい？」

「今すぐにでもかき消されたいかつ」

「あつはつはつ！そんなに熱くなっちゃって。僕が嘘をついてると思うなら何度も試してみると良さ。アドバイスを二つ上げよう。特定の人物を狙うなら条件を絞るために長い年月を準備に当てた方が良さ。それと、後々異世界からの召喚が得意な異世界人もこっちに来るから当たって見たらどうかかな？」

それを聞き終えると同時にレオンの拳がカイの顔を殴り飛ばす。さすがに本気ではなかったようで1mぶっ飛ばされる程度で済んだ。

「このクソツタレな嘘つき野郎が！貴様の言葉など信じるか！」

「いたた……。全く、僕は逃避癖があるだけで、虚言癖はないんだけどなあ」

言い訳とも言えぬ言い訳に、レオンはただ侮蔑を以て数秒睨み、舌打ちをしてから踵を返す。

これから彼は思い人のために長い年月を犠牲にするだろう。カイはその背中を見つめて不気味に笑っていた。

「頑張れよ、レオン・クロムウエル。それが君の現実だ」

第十三話 番外魔王の番外編「最弱」と呼ばれる理由

カイは世間で最も有名な魔王である。他の魔王たちが自分の領地に引きこもっていたり、目立たないようにはいたり、他の魔王が目立った行動をしないのも原因だが、それにしてもカイ・ヤグラの目撃報告はともも多い。故にカイは世間によく認知された通り名がある。

『番外魔王』^{エクストラファイビル}や『過負荷』^{マイナス}は通り名と言うより二つ名、カイの自称という認識が強い。そちらで呼ばれないこともないが、カイの通り名とされているモノは『最弱にして最凶の魔王』というモノだ。

カイが多くの冒険者に挑まれたことは周知の事実であり、イングラシア王国の兵隊とも戦ったのは知られている。それらとの戦闘において生き延びているカイが何故『最弱』と冠するのか。メタな話をすれば「過負荷^{マイナス}だから」と言えるだろうが、それはカイとそれについて良く知る者たちの結論である。

では何故『最弱』と呼ばれるのか。単純な話、そんなに強くない者たちに負けた事実があるからである。

基本的にカイは自分に敵対した者に対して勝敗が付く前に相手の心を折る。勝負を有耶無耶にする方法で対処する。しかし、相手が攻めてきてしまっている以上、勝負は始まっているのだ。なら、その勝負に負けるのは過負荷^{マイナス}なのだから当然。カイが心を折る前に不運^{マイナス}で敗北を喫することもある。

では、その敗北が如何なるモノか。その時のことをご覧いただく。

「こちらが確認のVTRです、なんてね」

◇Case 1

「ま、待ってくれ！お、俺たちは魔王を襲うつもりはっ、ひぎいああ!」
盗賊団の一人が腕を釘で貫かれ、情けない悲鳴を上げる。

「するつもりがなかったら許されるのかい？実際僕は襲われたのに？
幌馬車の旅を楽しんでいたのにさあ。その幌馬車が襲われてこれから
徒歩で向かわなくちやいけないんだ。で、そうされた僕はそうした君
たちを許す必要があるのかい？」

あまりにも不気味な笑顔を浮かべた男が盗賊団のアジトである洞
窟へと踏み込んでいた。

事の発端はそう難しくない。盗賊団はいつものように行商人と旅
人の馬車群を略奪目的で襲っただけだ。だがいつもとは違い、その旅
人の馬車にカイが同乗していたのである。実際いつもだったら馬車
を故意的に壊すことはないが、護衛役だった冒険者たちの抵抗が激し
く、勢い余って攻撃を当ててしまったのだ、カイが乗っている馬車に。

「た、助け……」

「ねえねえ、訊きたいんだけどさ。君って襲った人たちに似たような
台詞言われたこととか記憶にない？」

釘を刺されている盗賊はカイの質問の意味を深く考えることなく、
それに答えれば助命されると勘違いして縦に首を振る。

「あるんだね？じゃあ、その台詞を聞いて助けたことって、あるのか
なあ？」

盗賊は察した。質問は自分を助けるモノではなく、むしろ追い詰め
るためのモノであると。盗賊は気づいて冷や汗を流すが、この質問に
首を縦に振れなかった。

「ないんだね？じゃあ、似たような台詞を聞いて、それを助けなかった
君を。その答えを聞いた僕が助けると思えるかなあ」

「あ、ああああああ!!」

盗賊は助けてもらえると見えなかった。震えて立てない体を、釘が
刺されてうまく動かない腕を引きずってでも這いずる。少しでも助
からない未来から遠ざかろうと夢を見る。

「正しく幻想ユメでしかないね。じゃあ、おはよう」

「か、はっ……」

胸を釘に貫かれ、その盗賊は静かに横たわった。

「そんなところで見てたって仕方ないよ？そんなバレバレな隠れ方してたら盗撮役は任せられないなあ。あ、でも盗撮風に見せるのならありかな？僕はそっち系に詳しくないから知らないけどね！」

積み上げられた樽の影に隠れていた男が恐怖で震え、樽を崩してしまった。樽はカイの傍まで転がるようにばら撒かれ、もう隠れられる影はない。

「ゆ、許してください。か、金なら出しますから、命だけはっ」

男は跪きながら硬貨が入った腰巾着を両手で掲げて差し出す。

「そうか、お金はあるんだね？旅をするにも美味しい物食べるにもお金はいるんだ」

「じゃ、じゃあ……」

「うん！お金取った後に報復されるのとか怖いから、殺してから貰うね！」

一縷の望みが砕かれた男は絶望する。ゆつくりとこちらに近づいてくるカイの姿に男は死神を幻視した。

「く、来るなっ、来るなあ！」

「来るなっ。そっちから来たんじゃないか」

男は破れかぶれに物をカイへと投げつける。腕が震えているせいか狙いが定まらず、一つたりともカイに当たらない。いつも持っている酒瓶も地面に落ちて割れ、地面と樽を濡らすだけ。足元に落ちていた石も洞窟を照らす松明に当たり、それを地面に落とすだけで終わってしまう。

「殺さないでくれ！死にたくない！」

「君に良い言葉を贈るよ。「殺しているんだ。殺されもするさ」ってね」

壁際まで追い詰められた男へカイが釘を振り下ろすべく掲げる。

「じゃあ、おは……。ん？なんか焦げ臭い？」

カイは何かが燃える匂いに鼻腔をくすぐられ、何が燃えているのか確認しようと振り返る。見れば、酒が引火して樽を燃やそうとしてい

た。

「あ、落ちが読め——」

樽が爆ぜ、天井が崩れる。盗賊は目を瞑って死を覚悟するが、音が鳴りやんでも痛みが来ず、目を空ける。

「ば、爆発落ちなんてサイテー……、なんてね……」

崩れた天井の岩に下半身を潰されたカイがその言葉を残して力尽きた。

「い、生き残った、のか……?」

岩は奇跡的にカイだけを潰し、道は塞がれていなかった。男は命がらながら、未だその死体が動くのではないかと恐れてその場を逃げ出した。その放って置かれた死体は、大きな音を聞きつけた冒険者によって洞窟より引つ張り出された。その後、大々的にカイの死亡が世界に報じられた。遺体は嘗て確認された再生能力を考慮し、封印を得意とする者たちで多重に過剰に封じられた。

「まあーオールイズファンタジーなんてだけどね！」

後日確認された封印場からは、カイの遺体が幻想だったかのように消えていた。

◇Case 2

「冒険者なんてやっててさあ、命をチップに金を稼いで。死ぬかもしれない相手に挑んで、君たち程度じゃ三日くらいの生活費をしか得られない。ねえ、君の命ってそんなに安いのかい？生きるか死ぬかを賭けて、三日分だよ？冷静に考えよう。そんなことしてるより、機を織る、畑を耕す、鶏を育てる。その方が安全だろう？基礎さえでき上ってしまえばそれで一生暮らしていける。夢が見たい？僕を倒せば一攫千金？なあ、自分が大層な幻想ユメを見ていることに気付こうよ。そんなのはオールイズファンタジー全さ」

「ああ、そうだったな……」

盾役の甲冑を着込んだ冒険者が項垂れ、膝を屈する。彼は幻想ユメから覚めてしまった。

「さあ、君たちも僕とお話をしよう。幻想目だと知るような良い話を聞かせてあげるよ」

カイの目の前に居るのは斧を持つ前衛、弓を持つ後衛、杖を持つ支援の三人。先程の盾役とチームを組んでいた冒険者たちだ。カイにかけられた多額の懸賞金に目が眩み、たまたま街道で見つけたカイに襲い掛かったのだ。何人も心折られているという事実を目を瞑って、彼らは一攫千金を得る幻想を見てしまった。

「な、仲間の敵！自らの死で償え！」

弓を弾き、矢を放つ。自身めがけて飛んで来るそれを、カイは避けようともしない。

「ナイスショット。良い腕してるね、君」

見事に眉間を射抜く。これでカイの頭を貫く矢が三本になった。

「う、うああああああ!!」

叫びにも似た気合の一声と共に斧でカイの肩を叩き切る。

「右肩の次は左肩かあ。両腕を失っちゃった。酷いことをするね。これから両腕の使えない僕はどうやって生きればいいんだい？」

両肩に深い傷を負いながら、痛みなど感じさせない不気味な笑みを浮かべる。使えないと言いながら、その両腕をグルグル回している。

「どうして、頭を射られて、両肩を深く切られて、死なないの……」

何もできない支援役がただただその様子を言葉にし、絶望している。

「君たちってさあ、「因果応報」って言葉知ってるかい？ああ知らない。大丈夫だよ、体に教えてあげるから」

両肩を切った前衛の両肩に、頭を射抜いた後衛の頭に、釘が穿たれる。後衛はもちろん動かなくなったが、前衛は痛みで絶叫している。使えなくなった両腕は握っていた斧を取りこぼした。

「悪いことをしたら自分に返ってくるんだ。いやあ為になったねえ。

これからはしつかり善行を積むと良いよ。良いことしたら良いことが返ってくるって言葉でもあるからね」

そこまで声を張っているわけでもないのに前衛の絶叫に潰されることなく、まるで脳に響いているがごとくはつきりと聞こえた。支援役にとつてそれはカイの不気味さを際立てるモノにしかならなかった。

カイはゆつくりと五体満足な支援役に歩いて行く。支援役は恐怖で腰が抜け、その場に尻餅をついて動けなくなった。

「ご、ごめんなさい……。戦いを挑んでごめんなさい殺そうとしてごめんなさい倒せると思ってごめんなさい仲間が盾で叩いてごめんなさい弓で射貫いてごめんなさい斧で切り裂いてごめんなさい」

涙を流しながら、ひたすらに謝罪の言葉を並べる。

「おいおい。女の子が泣いちゃったら、まるで僕が悪いみたいじゃないか。勝手に泣いて勝手に悪者扱いして勝手に先生に通報して。それで謂れもなく先生に怒られてる僕を陰から見笑うんだろう？ 君たちの方から殺しに来たんだから正当防衛だろう？ 僕は何も悪くない。だって攻撃してきた君たちが悪いんだから」

一歩、カイはその少女に近づく。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

壊れた機械のように同じ言葉を繰り返す。カイはその号泣の彼女にっこり微笑んでこう言った。

「だから？」

「許し——」

「許すわけないだろ」

少女の衣服を何本もの小さい釘で地面に縫い付ける。逃がす気はさらさらないという意思を表明する。

「っ—————」

少女はもはや恐怖で声を発せない。ただただ一歩一歩、カイが近づく音だけが聞こえて来る。

「あ」

何か地面に落される音がした。丁度、人間くらいの重さのモノが地面に落ちるような音だ。何が起こったのか、顔だけでも上げようとした少女の横に何か転がってくる。

「つつっ!!!」

それは、カイの首だった。突然不気味な笑顔のままのカイが首だけで転がってくるのを目で見て、少女は気を失った。何故か少女の股の辺りが濡れている。

真相は盾役の盾に躓いて転んだ先に、奇跡的に刃を上に向けて落ちている前衛の斧が丁度カイの首を捉え、見事カイの頭と体は別れを告げることとなったのだ。

誰もが動けない状態にあったその場に街道巡回の騎士が通り、冒険者は保護され、カイの死体は騎士によって騎士の国に納められたのである。その冒険者たちはカイと死闘を演じて討伐を果たしたモノと勘違いされ、多額の懸賞金を得た。その後、その四人が大きな牧場で畜産を始めたのはまた別の話。

カイは封印ではどうにもならないと、完全に焼却されることが決まり、多くの炎の魔術師によって火葬された。

「まあーオールイズファンタジー全なだけどね!」部

業火の中から燃えながらも飛び出し、何処ぞへと走り去るカイの姿が確認された。



「ま、そんな感じにたくさん討伐報告も上がってるから『最弱』って話さ。あ、ちなみに。僕が誰か殺したなんてオールイズファンタジー全だからね?」部

カイは世界にその名を轟かせる。

壊しはせず、殺しもせず、しかし心を壊す魔王。

『番外魔王』『最弱にして最凶の魔王』——
『過^{マイナス}負荷』と……。

「じゃあ今日の話はここら辺で。じゃね、バイビ」

第十四話 見当違いなユメを見る

「く……うう……」

魔法陣のような円形の幾何学模様の中心。そこには所々重度の火傷を負った少女が身を伏せ、痛みのでいで現状把握に回す思考リソースもない。周りを見ることもなく蹲るその少女を、金髪の男が顔を覗き見る。

「クロエ、じゃない。か……」

レオン・クロムウエルはその少女の容姿を見て、自分の大切な人ではないことを察した。

「クソ！数十年条件の絞り込みをしてこの精度かつ」

異世界からの召喚失敗を嘆き、レオンは怒りを壁にぶつける。そう、この魔法陣はとある魔人の書架から見つけ出した異世界からの召喚をなす知識の再現である。しかし、その精度は見ての通り。そもそも、何処の何時に飛ばされたかも分からない特定の個人を召喚することとは不可能と言っても過言ではないほど可能性が低い。だからと言ってレオンが諦められるはずもない。

「また条件の絞り込みからか……。この工程は省略できないのか！」

レオンは踵を返し、もう何度も試して現状手がないことを掘り返す。残念ながら、異世界からの召喚という知識は発展する必要性がないこの世界において、全くと言っていいほど研究されていない。その知識自体、召喚能力に特化した者が偶然にも見つけてしまった奇跡のような物であり、その際のことを珍しいケースとして詳細に記されただけに過ぎない。

「異世界から君の身勝手に呼びつけておいて、目的の人じゃなかったら「チェンジで」って？まさに悪魔の所業だね、プラチナムレベル白金の悪魔？」

唐突に現れたカイに対して、問答無用に光線を放つ。儀式場の壁が穿ってしまおうがお構いなしだ。もちろん、カイがそれに当たるわけもなく、立ち位置が一瞬で変わっている。

「お前こそ呼んだ覚えがないぞ、クソ野郎」

「僕の名前は八倉海カイ・ヤグラだよ？五文字くらい覚えられないのかな？」

レオンは当たらないことが分かっているても幾筋の光線を放つ。虚しいことに、カイの不気味な笑顔が消えることはない。

「何の用事だ、カイ・ヤグラ！消されることが望みなら大人しくのたれ！」

「嫌だなあ、僕を自殺志願者みたいに。それと、もう少しその光を操れるようにした方が良いと思うよ？真つすぐ飛ばしたり、拡散したりじゃ芸がない——って、全くせつかちだなあ。用事ね、用事」

言葉の最中も関係なく光を放つが、壁に穴が増えるだけだった。

「その死にかけの少女、どうするのかなつて」

「はっ、知ったことか」

「君が呼び出しておいて、人違いだったら無関係つて？自分のしたことの責任も取らないのかい？これは酷い話だ。君の思い人が聞いたらどう思うだろうねえ。そんな人でなしになつちやつた人を、家族つて呼んでくれるのかなあ？」

「……………」

「おいおい、僕を睨むなよ。僕はちよつと疑問を述べただけだよ？僕に怒りを向けるのはお門違いさ。だって、責任を取らない君が悪いんだからね。もし僕が君の思い人に、君の悪事を全部教えようと考えても、君が悪いことしたせいさ。僕は悪くない」

カイの怒りを煽るような発言にレオンの我慢の限界を迎えようとしたが、その会話を割くような音が混じる。

「ゲホツゴホツ」

先ほどから放置されたままだった少女が吐血した。どうにももう長くないように見える。

「さて、どうするんだい？このまま放置だと、君は何の罪もない人間を殺したも同然なわけだけど」

「チクシヨウがつ、イフリート！あの少女に憑依しろ！」

突然空中が発火したかと思えば、その炎が集まり人の姿を形作つてからレオンに一礼。その後少女へと近づいていく。

「嫌……。火は、嫌つ……」

少女は焦点定まらぬ目で、しかし火が近づいていることだけ感じた

のだろう。その少女から全てを奪った火を。カイはそんな姿を見て、とても愉快気に口の端を吊り上げる。

「火が恐いかい？どうして怖いんだい？」

顔こそいつものカイのモノだが、しかし声音は恐ろしく優しい。火の塊があるというのに、レオンが背筋を凍るような幻覚を覚えるほど、チグハグで不釣り合いで、不気味だった。

「火が、火が全部……燃やしちゃう……」

「そうかい、君は火に奪われたんだね。好きだった人を、好きだった場所を、好きだった時間を、何もかも全て。でも、それなら恐れて避けるよりも、もっと良い方法があるよ」

「良い、方法……？」

「全てを奪ったその火を、憎むんだ。憎んで飲み干せば、火はなくなる。全て奪った火から、今度は全てを奪ってやるんだ。やられたならやり返さなきゃ、不公平だろう？」

「火を、奪う……」

そこに異変が生じた。先程まで少しでも離れようとしていた少女が、今度は手を伸ばす。するとイフリートがまるで吸われるかのようになり、その体積と魔素量を減らしていく。吸われた魔素が少女のモノになっていくことを、火傷が治っていく様子が表していた。

「これは!? 貴様、カイっ!」

異変を止めさせるべくレオンはカイにレイピアを向けるが時すでに遅く、イフリートの姿は消え失せ、少女の外傷は完治した。カイはそれを一部始終仔細に観察しているが、口はへの字になっていた。

「うぐ……えぐ……。父さん、母さん……」

火は消えた。しかし、体の痛みが消えただけで心の痛みは消えない。少女の家族は返ってこない。火に対する憎しみより、その悲しみが少女の中で上回った。

「ああ、まあ。思った通りはいかないか。まあ、マイナスの企てがうまくいかないのはいつものことだけだね。ちよつと幻想ユメを見すぎたかな」

「カイっ、貴様はいったい何をした!」

期待外れと肩を竦めるカイの胸倉を、レオンを掴み上げる。

「僕は何もしてないさ。ちよつとマイナス^{面白}に誘導してみようかと思っただけけど、無理だったね。いやあ、素養はあると思っただけだなあ」

東京大空襲に巻き込まれて異界に召喚されるという不幸なこの少女なら、もしかしたら過負荷^{マイナス}に目覚めるかもしれないとカイは思った。が、そう思い通りにいかないのが過負荷^{マイナス}である。

「貴様、初めからそれが目的で——っ！」

瓦礫が崩れるような大きな音がレオンの立つ儀式場まで響いた。レオンが空けた穴が原因ではない。それを原因にするには響いてきた方向も違うし、距離も離れている。

「レオン様、時の勇者が現れました！」

儀式場にて駆け込んできた銀の鎧を着込んだ騎士が焦りを携えたまま報告する。カイの存在に気付かないほどの焦りには事態の深刻さが窺える。

「ちつ、またあの勇者か。仕方ない、この場を放棄する。全員に通達、撤退だ！誰一人欠けるな！」

おそらく思念伝達で手下たちに指示するレオン。目の前の騎士も頷き、否は唱えない。

「おいおい、まさか勇者から尻尾巻いて逃げるのかい？魔王として恥ずかしくないの？」

「魔王」なんぞ貴様らが背負わせただけの名前だろうが。それに、あの勇者は危険すぎる」

レオンはカイの挑発には乗らず冷静に頭を回す。あの勇者には何度も召喚の儀式場・研究拠点を潰された。手下も何度かやられかけるほどの実力者であり、戦うべきではないとレオンの直感が告げている。

「この子はどうするの？」

「貴様が面倒見ろ」

「え、それはちよつ——今ものすごく鼻で笑ってから消えたね」

カイの困り顔が見られたことで少し溜飲が下がったのか、彼は鼻で

笑ってから消えた。消えたと言ってもカイが見逃すほど高速に移動しただけだが。

「全く、魔王たちってのは身勝手だねえ。君もそう思わないかい？」
「……」

まだ涙の軌跡は乾いていないが、それでも泣き止んで現状を整理しようとしていた少女に問いかける。その少女は多すぎる情報を整理できず疑問符を浮かべるばかりだ。

「ま、時の勇者が来るまでは面倒見てあげようか。僕はいつだって弱者の味方なんだ。マイナスを助け、プラスを挫くってね」

断続的に破壊音が響く中、椅子が二つ当然現れる。カイはその片方に座り、もう片方を少女に勧めた。少女は勧められるままに椅子に座る。

「僕は八倉海。君と同じ、地球の日本出身だ。より厳密に言うくと、愛媛県出身だから少し違うかな？まあ、どうでもいいか。君は？」

「わ、私は井沢静江です。えと、東京出身です」

少女・静江はにっこりと微笑むカイを警戒しながらも身に付いている礼儀的な自己紹介を返した。

「色々と訊きたいことがあるだろうけど。そうだな、僕からじゃないと教えられないモノからいこう。まず君は後の日本では東京大空襲と呼ばれる空襲中、幸か不幸か異世界に召喚された」

「い、せかい？」

「そう、君が居た日本とは、地球とは世界が違う場所に来てしまったんだ。この世界は魔物とか魔人とか魔王とか、人間にとつてこわあい存在が居るんだ。ちなみに、君を呼んだのも魔王、さっきの金髪ね。レオン・クロムウエルって言う魔王だ。あ、ちなみに僕も魔王ね。最弱だし人間だけだ」

「??？」

全く分かっていないという風に首を傾げる静江。しかしカイはそれを意に介さず言葉を続ける。

「それと、さっきのことについてね。あの魔王が君の傷を癒すために精霊、まあ良いことする幽霊だね。それを君に憑依させようとした。

火の幽霊だから火傷も治るわけだ。だけど君は憑依じゃなくて、同化してしまった。君がこの世界に渡る際に得たスキルのせいだね。二つのモノを融合・分解するスキル、『変質者』で……。ん？ちよつと待て？イフリートと融合したばかりってなんか自由が利かないって話じゃなかったっけ？」

カイは「融合」というワードを取っ掛かりに違和感を覚えるが、差異を感じる原作知識は200年以上前の記憶であり信憑性が低い。細かく思い出そうとするが、そんな都合の良いことはできず唸るしかない。そんな唸るカイを見て静江はさらに疑問符を増やす。

カイが悩み、それを静江が大人しく見ているシユールな空間に突如轟音が響く。音の方を見れば、壁をぶち抜かれ、そこに立つ女性が居た。通路があると言うのに壁を壊して進んでいた辺り、この儀式場を目指していたのかもしれない。決して道に迷って面倒だから壁も気にせず直進していたわけではないだろう。

「やあ！時の勇者ちゃんじゃないか！元気にしてたあ？君の活躍は僕も耳にしてるよ」

「貴方は、カイ・ヤグラ!?ルベリオスで封印されたはず！」

「ん？それって80年くらい前の話じゃないっけ？あ、それはブルムンドか。いや、ブルムンドは火葬だったような……。その後封印されたっけ？燃えながら脱出したのはいつだったけかなあ。とりあえず三回封印されたのは覚えてるんだけど。あれ？二回だっけ？まあいいや。とりあえずこう返しておこう。「残念だったな、幻想トリックだよ」、なんてね」

驚愕する時の勇者の言葉に、カイは首を捻ったり考える人のポーズをしたりした後気味の悪い笑顔で返した。

明確なことはルベリオスが一番最近の封印で、やることが特に思いつかなくなつたカイがしばらく封印されたままで過ごし、そろそろ静江が召喚される頃かと封印かされた現実脱を逃避出したのである。

「あれほど嚴重な封印を突破するとは……。いや、貴方が意味不明なことは昔からでしたか。冒険者の心を折ったり、盗賊を壊滅させた。今度は女の子を攫って何を企んでいるのですか！」

時の勇者はカイの傍に居る静江を目に納め、事実を曲解してカイに剣を向ける。

「久しぶりの再会だって言うのに、TMレボリユーシヨンの真ごっこした後のような濡れ衣は止めてよ。何でもかんでも僕のせいになれば良いと思つて。そうやって悪と決めつけた冤罪はいくつあるんだろうね?」

「貴方はこれを差し引いたとしても、多くの冒険者を引退に追い込んだ罪があります!」

「酷い言い様だね。僕は懇切丁寧に、冒険者なんて割に合わない仕事だと諭して善行を積んでいただけなのに。言うに事欠いて罪かい? 君は彼らにあのまま冒険者をつらつて言うのかい? 死と隣り合わせの仕事を強要するのかい? そっちの方が罪だろう? 世が世なら自殺教唆じゃないかな」

「黙りなさい!」

時の勇者が剣をカイへと振るつたその時だった。

「待つて!!」

時の勇者とカイの間に静江が立ち塞がる。時の勇者はどうか寸でこのところで剣を止められた。

「何をしているんですか? この人は魔王、世界の悪者なのですよ?」

「この人は、私を助けてくれたんです」

「彼が、ですか?」

時の勇者は静江の真剣な表情から嘘はついていないことを理解するが、だとしても信じられないと啞然としている。カイという魔王は確かに不殺不壊で有名だがその悪名も轟いている。人の心を壊す魔王、悪夢の魔王であるとはよく聞く話だ。

「カイさんが、レオンって言う魔王に私を助けるように言つたんです。だから、私はカイさんに助けられたんです」

「くくっ、あはははははははっ!」

静江の続く言葉に堰を切つて笑いだしたのはカイだった。その表情は、愉快というより不快そうに眉間を歪め、目を見開いている。

「いったい何を言い出すかと思えば。僕が君を助けた? なんてプラス

な思考なんだ君は！ああ君に期待した僕が馬鹿だったお仲間が増やせると思った僕はまさにマイナスだ愚者！よくもあの状態で助けられたなんて考えられるもんだ。君はいつだって前向きに生きているのかい？僕と違って人生虹色なのかい？いつでも終わりは結局ハッピーエンドなのかい？」

突然笑顔のまま怒り狂ったように饒舌になる。時の勇者は以前との雰囲気の違いに呆然とし、静江はいったい何がカイの怒りに触れたのか分からず啞然としている。

「期待外れも良いところだ。興が冷めちやったよ……」

カイの目はいつもの細目になり、がっくりと肩を下ろす。そして大きなため息を吐きながら通路の方へと歩いて行く。

「待ちなさい！この子は!?!」

「身寄りのない子供一人置いて行くなんてことはまさかしないよね、勇者様？その子の教育は任せるよ。多分才能とかあるから鍛えれば一人で冒険者やれるくらいにはなるんじゃないかな」

声の拍子はまだ気落ちから回復できていないような気だるげで、そう述べて幻想のように消え去った。

「あの魔王は!!」

時の勇者のカイとの遭遇は今回で二度目程度であるが、一度目のインパクトが恐ろしく強く頭に刻まれている。人を虚仮にしたかのような台詞回しに終始マイペース。人の迷惑省みないあの人格は時の勇者を沸騰させるには充分だった。

「あ、あの……」

「あ、ごめんね？貴女は身寄りがないのね？」

「はい。えっと、イセカイ？に呼ばれたばかりなので……」

「!……そう、分かりました。しばらくは私と一緒に旅をしましょう。『先生』みたいになまく教えられるかは分からないけど、私が教えられることは全て教えます」

時の勇者は全てを察して、静江の面倒を見ることにした。

「それなら！カイさんについて教えてほしいのですが!」

「あの魔王はダメです。少なくとも精神修行をしてからでないと汚染

されてしまいます。ああ、そうなる前に来れて良かった。あの魔王は
とつても、とつつても危険な魔王なんですよ？」

親身な時の勇者の忠告に、静江は首を傾げるだけだった。

第十五話 ユメを見る

人間が知り得ぬ常夜の国の奥深い場所、そこに建てられた城で『夜魔の女王』ルミナス・バレンタインは紅茶を飲んで優雅な一時を過ごしていた。目の前に薄気味悪い笑みの男が現れるまでは。

「やあ、ルミナス・バレンタイン。ティーカップで飲んでいるのはトマトジュースかな？」

「貴様に妾わらわの名を呼ぶ榮譽を与えたつもりはないが」

「おっと辛辣だね？名前も呼んじやいけないのかい？それなら僕はどうやって君と仲良く会話すれば良いんだ。友達と会話するのに名前も呼べないんじや……。そうか！あだ名、あだ名だね!?あだ名を付け合って呼び合えばそれはとつてもすばr——」

ルミナスは聞くに堪えないカイの毒電波を、片手で発した魔素の刃によってその首を落とすことで止める。

「殺すなら吸血で殺してほしいんだけどなあ。作品によっては吸血されるのって気持ち良かったりするだろう？」

しかし、ルミナスが一つ瞬けば寸分違わぬ立ち位置で相も変らぬ不気味を放ち続けるカイが居る。消えぬと分かってなおも憂さ晴らしに（憂さの原因もカイだが）ルミナスは片手を振ろうとする。

「待つて待つて。僕だつて何の手土産もなしに仲良くお話をしようなんて思つてないさ。僕たち魔王は一応互いを牽制するのも仕事だからね」

「手土産とな？」

それを聞いてようやくルミナスはカイの方に顔を向ければ、カイは何やら大きな箱を背後に置いていた。それはとても大きな、まるで棺桶のような箱だ。

「君つてヴェルドラに一度国を襲われた経験がないかい？」

「……それが土産と何の関係があるのだ」

話の繋がりが見えず、唐突に変わった話題にルミナスは怪しみ、答えを濁す。

「まあまあ、そう焦るなつて。それで、ヴェルドラに襲われた時、少女

に助けられたりしなかったかなあ」

「何故、貴様がそれを」

その出来事は確かに過去にあった話だが、カイの活動が確認された時より前。おそらく転移してきた異世界人であることを察せられるカイがこちらに転移してくる前の話である。カイに関わりがないだろうその話に、ルミナスはより一層の警戒で目を鋭くする。

「ああ、あつたんだね。良かった良かった。僕の頑張りが無駄にならずに済んだよ」

ルミナスの視線になんら怯えることもせず、ただ不気味に笑い続けるカイはその箱をルミナスの前へ倒す。

「なっ、これはっ!」

「ハッピーバースデー、ルミナス・バレンタイン!バースデープレゼントだよ、君の誕生日なんて知らないけどね!」

倒された勢いで蓋が空いたその箱から覗くのは、水晶に閉じ込められて眠る少女。ルミナスが良く知る少女。

「君を救った『時の勇者』の封印水晶を、君にプレゼントだ!!」

水晶の中で眠っているのは『時の勇者』とその名を轟かせる勇者であり、カイが語った通りルミナスを救った恩人だった。

「貴様っ、彼女に何をした!!」

恩人に手をかけたカイへ、ルミナスはその激昂を魔素と共に放出し、カイを壁へと叩きつける。

「嫌だなあ、君へのおききのプレゼントとして持って来てあげたんじゃないか」

壁にめり込みながらも笑みを絶やさぬカイは激昂していたルミナスをも一瞬怯ませ、その頭を冷やさせた。

「如何に貴様が『最凶』と呼ばれようと、『最弱』であることは変わらない。その貴様が勇者を討ち取るのは不可能であろう。何をした」

「あれ?もう冷静になっちゃうのかい?君が苛烈に攻めてきたところで、高らかに笑って失せるつもりだったんだけど」

頭が冷えたとはいえ怒りは冷めぬルミナスははぐらかそうとするカイの四肢を魔素の刃で切り落とす。

「おいおい。四肢を切り落とすくらいなら吸血して傀儡にでもした方が早いんじゃないかい？吸血鬼ならそういう能力あるだろう？」

「貴様の血など一滴も飲みとうない。疾く答えよ。徐々に切り落とすぞ」

「あつはつはつ！四肢を切つといてこれから削るのかい？痛みはほとんど変わらないだろう？脅し文句としては微妙なところだね。脅迫は苦手かな？」

「疾く答えぬか!!」

ルミナスは怒りに任せてカイの腹を切り落とす。未だに痛みにも苦しむことはなく、カイの表情は気味が悪い。

「方法なんてどうでも良いじゃないか。とりあえず僕から言えることは、その封印は僕でも君でも解けないってことだ。解ける奴が見つかるまで大事に守りなよ？」という口で。じゃね、バイビ」

言いたいことを全て言い切ったカイはその場から幻想のように消え、流れた血も壁のヒビも消えていた。ただそこにある水晶だけは現実だった。

「あのクソ野郎が！許さぬ、許さぬぞ!!見つけ出して蘇る度に引き裂いてやる!!」

消えたカイに向かって叫ぶ絶叫は虚しく、死に至らしめる魔素と成って一帯に被害を出すだけだった。



あれから幾年月が流れたろう。はっきり年数を言ってしまうと私の年齢が割り出されてしまうので伏せるけど、一人の少女が『爆炎の支配者』なんて大層な名前を頂くほど永い時間だ。

『時の勇者』と呼ばれる女性と旅をした。一人で生きていけるよう生活の術を学び、自身の身を守るよう護身の技を習った。

——腕が良いね。やっぱり、異世界人だから基礎のステータスが高いのかな

——ありがとうございます、勇者様。勇者様も異世界人なんですか？

——うん、そうだよ？ずいぶん遠くまで来ちゃったけどね

勇者様は遙か遠くを寂しそうに見ていた。いったい何を思っているのかは分からなかったけど、その時の言葉が、私には異世界に来てしまった以上の意味を含んでいると感じられた。

——勇者様、ごめんなさい……。勇者様に怪我を負わせてしまうなんて……

——そんなに落ち込まないで？ちよつと火傷しただけだから。私も貴女がイフリートとの融合の経緯を失念してた。これは私のミスでもあるね

——勇者様……

同化していたイフリートが暴走し、勇者様に火傷を負わせる失敗をしてしまったことがあった。あの時、勇者様は私を許し、イフリートの力を抑える仮面をくれた。私にとって、やはり炎は忌むべきものだった。カイさんと、レオンはイフリートで傷を治してくれたが、やはり私に炎は受け入れられない。

——あの、ここはいつたい……？

——勇者様、この子はもしかして

——ええ、おそらく異世界人ね

旅の途中、故も知らずこの世界に転移してしまった少年・神楽坂かぐらざか優樹ゆうきを保護した。優樹にはユニークスキルらしいスキルがなかった。身体能力こそ原住民より高いが、冒険者としてやっていくのは難しいと考えてイングラシア王国の王都に彼を置き、勇者様と共にしばらくの面倒を見た。

——先生、勇者様。僕はこの冒険者互助組合の改革と、それと異世界人を保護する施設の設計をしたいと思います

優樹は良く頭が回った。勇者様と私の助力で当時の冒険者互助組合の役職を得て、次々と組織を改善・改革していった。優樹はその辣腕りつぽんを振るい、組織を自由組合キルドマスターと改めて総帥グランドマスターにまでなり上がった。私ができることを平然とやってのける優樹に今でも感心している。

——勇者様、大丈夫ですか……？

——大丈夫、大丈夫だから……。貴女も、まだ諦めちゃ、ダメ……。異世界人の少女・坂口日向さかくちひなたを助けた辺りだったか。勇者様は日に日

に弱っているように見えた。今まで手古摺らなかった相手にも手傷を負うようになり、時折強く自身を抱きしめて蹲っていた。その時の「貴女」が誰を指していたかは教えてもらえなかった。

私は気付くべきだったのかもしれない。それが終わりの先触れであることに。

永い時間だった。少女が英雄として召し上げられるほど永い時間だった。辛いこともあったけど、すぐ傍で誰かが見守ってくれる素晴らしい日々だった。でも、幸福がいつまでも続かない。そんな当たり前のことを、私はその日が来るまで忘れていたんだ。

◇◇◇

「勇者様！勇者様っ！」

目の前に弱々しく横たわり、その姿を徐々に透かす時の勇者へ静江は叫んでいた。消えてほしくない大切な人の手を握り、涙を流し続けてなお静江は祈り続けていた。

「ごめんね……、シズ。お別れの時間みたい……」

静江に微笑みかける時の勇者に覇気はなく、自らの終わりを悟り切っていた。日向を助けた日から時の勇者は弱り始めたのを自覚している。それがこの兆候だということを時の勇者は理解した。同一の存在は同時期に存在できない、と。

「勇者様、お願いです、諦めないでください！私にはまだ、教えてほしいことがいっぱい……」

「ごめん、ごめんね……。貴女も、ごめんなさい……。あの人たちに、会わせてあげられなくて……」

どうしようもない現状に静江は嗚咽し、時の勇者は静江と自身の中に居るもう一人にか細く謝る。悲しい静寂が訪れようとしていた。

「やあ」

そんな空気を読まず、笑顔を張り付けたカイが颯爽と現れる。

「カイ・ヤグラ……。最期に見るのが貴方なんてね……。残念だろうけど、私に貴方と戦う力は、もうないわ」

「嫌だなあ人を戦闘狂みたいに。僕にはマイナス弱者を甚振る趣味はないんだ。欲しいのは勝利ではないしね」

この場に急に現れたカイに時の勇者は自分の衰弱した姿を晒す。カイが過去に強者とやり合っていたことを思い出した時の勇者は、自身の最期に戦いに来たものと判断した。カイはそれをやれやれと訂正する。

「カイさん！助けてください、勇者様が！」

カイの、自身を助けた姿と挑んできた者を返り討ちにしてきた姿しか知らない（時の勇者に嘗ての悪事を聞いても信じていない）静江はカイに縋る。自身を助けてくれたカイなら、時の勇者様を助けてくれるはずだと。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。僕の話聞いてくれれば万事解決さ」

カイは縋り泣く静江をなだめつつ、胡散臭く口の端を吊り上げる。

「時の勇者ちゃん、こんにちは！今日は雲一つない晴天だね。天国に旅立つには丁度良い日だ！」

「……」

いったい何が言いたいか全くわからず、されど聞き入るしかない時の勇者はカイの言葉を静聴する。

「それで満足なのかよ」

瞳の見えぬ細目と月を描く口が打って変わり、カイは悲しげな眼で時の勇者を見つめ、憐れむように口を開く。

「……どういう、意味ですか？」

「世のため人のために働いて自分の人生を生きる時間も惜しんで人を助けて私利私欲もなく公平に人に尽くして弱音も願いも吐かず間に終わる。そんな英雄譚強みたいな話があるか？そんなアブノーマル人が居るか？」

いつもの不気味な笑顔ではなく、そんな話を、そんな人間を、カイは本気でバカにする。

「いや、そんなものは英雄じゃない。人間ですらない。機械だ。人を救うように組まれたプログラムだ」

カイは拳を強く握る。そんなものは人間の姿ではないと嫌悪する。「欲を捨てられるほど人間は強くない。欲を抱かないほど人間は賢く

ない」

強固な持論を語り終えたカイは、そうして人を救うように組まれたプログラムの見下ろす。時の勇者から見たカイの目は、同情や嫌悪を緋い交ぜにしたような目であり、人を弱らせる毒沼でもあるように感じた。

「私は……」

「強がらなくていいんだ。今ここに、君を強い人間と思う人はいない」
時の勇者の自制心を、カイはマイナスで溶かしていく。

「私は、レオンお兄ちゃんにもう一度会いたい！」

勇者として抑えてきた欲を、強い願望を時の勇者は吐き出した。

「まあ！強く宣言したからってオールイズファンタジーなんてだけどね！」

「なっ！くっ……」

カイがいつものような気味の悪い笑みを浮かべた瞬間、時の勇者の周りが凍り出す。いや、それは氷結ではなく、時間の固定化だ。

「こ、これは!?!」

「時の勇者ちゃんの力を暴走するよう現実を受け入れなかつただけだよ。具体的に言えば、『絶対切断』で周りの時間と空間を切らせ、『時間』に関する力で丁度切った空間内の時間を停止させて、おまけに『無限牢獄』で封印。余程のことがない限り解けない封印の完成さ！」

静江の困惑に、カイは悪事の成功を祝うかの如く笑い出す。

「カイさん！今すぐ止めてください！」

「無理だよ？さつきも言っただろう、「余程のことがない限り解けない」って。それに、僕が勇者の封印を解くなんて善行、できるわけないだろう？」

「そんな……」

無力に打ちひしがれて座り込む静江の横で、時の勇者は完全に封印され、水晶のようなその中で眠る。カイは満足げだった。

「それじゃあ、これは持つてくね？君が持つててもどうしようもないだろう？」

「ま、待つて……」

「答えは聞いてない！」なんてね」

カイは静江の懇願を聞き届けることもせず、その場から時の勇者と共に消え去った。

「……」

静江はただ、勇者が横たわっていた場所を見つめ続けた。時の勇者との記憶を幻想だと受け入れられないように。

連載版　　～原作開始後～
第十六話　ユメが始まった

―俺と友達にならないか？

―し、仕方ないな。我が友達になってやるわ

当事者のやり取りとしてはそんな軽いモノ。しかし、このやり取りこそが世界を激震させる大事であり、波乱万丈の物語、その始まりのページだった。

「やあ。そんな大変なことが起こってる中、僕を呼ぶのなんて君は大概酔狂だねえ。ギイ・クリムゾン？」

「戯け。自らの居場所を知らせるような事をしたのは貴様だろう。まさか、ヴェルドラ消失と無関係なんて言わないだろうな」

最近大人しかったカイが冒険者に目を付けられて騒ぎを起こし、その存在を知らしめていた。ギイが丁度カイを探していた時に分かりやすく存在を表したのだ。今、世を騒がせている「ヴェルドラ消失」と騒ぎ出したカイが無関係とはギイには考えられなかった。

だからこそギイはまた自身の城に呼び寄せ、その真相を問い質す。今回は隣に透き通るような白い肌と白髪を備える美^{ヴェルザード}女も控えている。

「いやあ、最近ルミナスに追われてたからねえ。彼女の執念は大したものだ。何度殺したって無意味なのにね」

「ルミナスと何かあったようだな。いったい何をしたのやら」

カイが人の神経逆なでる行為を得意としているのはギイの知るところ。というか周知の事実だろう。いちいちどう逆なでたのか訊くのも意味がないので、ギイは呆れるだけで興味を抱かなかった。魔王同士の小競り合いも珍しくはない。

「誤魔化しは結構です。貴方がヴェルドラ^弟を消したのか、そうでないのか。素直に答えてください」

ヴェルザードは二人のやり取りに焦れたのか、笑顔でありながら冷気と殺気を放つ。笑顔も営業スマイルだが。

「弟？君のような美しい女性の弟なんて、僕には面し^k——」

「誤魔化しは結構」とも、「素直に」とも申し上げました」

警告を無視したカイに対し、ヴェルザードは一瞬でカイを氷塊に閉じ込めた。

「全く、酷いなあ。僕が何でも知っていると思っているのかい？君がヴェルザードで、その弟がヴェルドラのことだって初見じゃ誰も気づけないさ。まあ！僕は知ってるけどね！」

氷塊は何処ぞへと消え、何事もなかったかのように立つカイは不気味に口の端を吊り上げる。カイへ向けられる殺気と冷気が増した。

「はいはい、さっさと答えろってね。ちゃんと話は聞いてるさ。端的に言えば僕は消してないよ？正すならそもそも消されたわけではないしね」

「消されてない？」

ヴェルザードは前提を訂正されて疑問を呈す。

「僕の質問にも答えてよ。一方的じゃフェアじゃないだろう？ずばり、なんでそんな警戒してるのさ。魔力が高密度大容量で集まった存在とはいえ、生物という体を取ってるんだから、死があるのは当然の話だろう？」

「竜種を消滅せしめる力があるとして、それを警戒するのは当然のことではないでしょうか」

「まあ、そういうものか。「恐怖を克服することが生きることだと思おう」って^何ジ^何ョ^カの^帝DI^王Oも言ってたし、^何F^何a^カt^カeの^慢ギ^心ルガメツシユも友の死を経験して不死の霊薬を探し出すくらいだし、そうおかしくもないのかな」

カイは目の前の長寿兼強者がそんなモノに脅えるのかと頭を傾げるが、自身が上げた例もあることで一応の納得を示した。

「君の質問に答えるよ。ヴェルドラは消滅したんじゃない、異空間に封印ごと転移させられただけさ。封印もそのままだから、相変わらず力は使えないだろうけどね」

「竜種を異空間に飛ばす？そんなことができるはず……。いえ、弟も同意したということですか」

「大正解」

スキルが全て封印されているとはいえ、それは尋常じやないエネルギーの塊だ。抵抗の意思があるそのエネルギーを転移させることは不可能であり、故にヴェルザードは早くもその結論に至った。カイはニツコリと笑う。賞賛の言葉のはずだが、ヴェルザードは微塵も嬉しくなかった。

「暇にかまけた弟を言いくるめることは難しくないでしょう。ですが、弟が居ることによつて並の人間や魔物では危険な場所に入ることができ、なおかつ異空間に飛ばすようなスキルを持っているような存在。そんな者が私たちから身を隠せるとは思えません」

「いや、なるほど」

「ギイ？」

ヴェルザードがカイの言葉を出まかせと否定していけば、そこになにやらギイが得心して言葉を挿む。

「異世界人だな。こちらに來たばかりの、しかも転移した場所が封印の洞窟という大バカ者だ」

「くくっ、あつはつはつはつ！正解だよ、ギイ・クリムゾン！彼はある意味で大バカ者。この世界の都合なんて考えず、自身のために世界を改革するアブノーマル^{異常者}さ！」

愉快痛快と大笑いするカイにギイは目を鋭くする。ヴェルザードはもう聞きたいことを聞き終わったようで、玉座の横に佇んでいた。

「貴様が言っていた『彼』とはそいつか」

「ああ、勿体ぶるつもりはない。『リムル』^彼が僕の待ち人さ。だから間違つても手を付けないでね？僕だつて獲物を横取りされれば、むしろくしゃして無茶苦茶にしたくなるから」

目を見開き、今まで以上の気味の悪さを放つカイ。ギイは本気で言っていることを容易に察する。

「他の奴には言わないのか」

「ああ、言わないさ。どうせ『彼』の敵になったら悉く踏み台にされるから。君だけは今の彼じゃ無理だし、悪影響を与えかねないと思つただけだよ」

敵となる魔王が全て成長の糧にされる可能性を示唆されたギイは、その『彼』が危険な存在であり、この世界にとつて良くない存在であるかを考え、目の前の脅威を度外視して自身が排除に動くべきかを逡巡する。そこで、以前カイが言っていたことを思い出した。

「そいつは、世界にとつても魔王にとつても味方なんだな?」

カイが以前言っていたこと。『彼』が世界にも魔王にも敵にならないということ。ギイは改めて確認する。

「安心して良いよ。それだけは僕の……何に誓えば説得力あるかな? まあ何でも良いや。じゃあ安心院さんにでも誓つとこう。その言葉に嘘はないさ」

なんとも釈然としない誓いであるが、糸目に戻ったカイが嘘を言っているようにも見えない。

「しばらくは様子見してなよ。きつと『彼』自身が面白いモノを見せてくれるさ。君はただ、より良くなっていく世界を見守ってれば良い。それが君の役目だろう?」

「……言われるまでもない」

ギイはとりあえず、目の前の男より『彼』を見定めることにした。その方が結果ははつきりするだろう。ギイ自身、自分らしくない思考にうんざりしてそう切り捨てた。

「言いたいことも言い切ったし、僕はそろそろ行くね。じゃね、バイビ」

いつもの如く幻想のように消え去るカイ。ギイはきつきまでカイが立っていたところに視線を留めたまま、これから起こるやもしれない動乱を予見し、考えをまとめようとしていた。

「時がくれば、動くだけだ」

結論は単純。『魔王』という役割を知るギイは、平静に、平常に、『魔王』としてあることを決断した。

◇◇◇

「で、君も僕に用なのかい?今回は雑談パートかな?」

「ふざけるのもいい加減にしろ」

「ふざけてないし、ふざけてるにしてもまだ一回目なんだけどな。随

分と狭量だね、レオン・クロムウエル」

今度はレオンの玉座の前でカイは笑っていた。レオンには睨ま
れっぱなしだ。

「僕も久しぶりにグルメツアーしてたんだ。そこに騎士甲冑を寄越し
て「すぐに来い」だなんて。僕を便利な情報屋だと思ってるかい？君
たちは。そう思っているなら対価くらいは欲しいんだけどね」

「質問の返答のみ口を開け。それ以外は閉じてろ」

「だったら早く質問を言ってくれよ。口で言わなきゃ思ってることな
んて伝わらないよ？」壊れるほど愛しても、三分の一しか伝わらない」
らしいしね」

意味の分からないカイの饒舌に一筋の閃光が走る。しかし、それが
カイに当たることはない。もはやテンプレと化したやり取りで、レオ
ンは青筋立てながら質問のために頭を冷やす。

「数年ほど前にクロエとの記憶をはっきり思い出した。それは何故
だ」

「少しは自分で考えたら？いつも人に聞いてちゃ頭がダメになっちゃ
うよ？」

また一筋の閃光。が、ダメ。

「クロエの不純物が取り除かれたのか？」

「人に話を訊く態度じゃないなあ、これは」

また一筋の閃k (ry

「クロエはこの世界に来ているのか？」

「ちよつと待って。今閃光を避けるのに集中してるから」

「いい加減にしろよお前!そんなに遊びたいんだったら踊ってる!!」

レオンは堪えかねて怒りを露にする。幾筋もの閃光が様々な方向
から走り、いくつもカイを捉えた。

「あつはつはつ！手から以外も出せるようになっただね。良かった
良かった。はいはい分かってるさ。全部しつかり答えてあげるよ」

穴が数か所空きながらも笑顔で両手を上げるカイ。レオンは煮え
滾るような思いを一旦溜息と共に吐き出し、玉座に腰を落ち着ける。

「二つ目は、そうだね。今クロエはクロエとしてあるから、曖昧になっ

ていないせいじゃないかな？二つ目は、ノーだ。ただ、今は不純物のない方が居るけどね。三つ目は、どっちとも答えられない。来ていると言えれば来ている。来ていないと言えれば来ていないね」

「……」

レオンはカイの答えが余りに矛盾だらけで口を噤む。「曖昧ではない」、「不純物のない方が居る」、「来ているともいないとも答えられない」。曖昧ではないとは？不純物のない方とは？どちらとも言えない状態とは？思考すれどもレオンは答えに至れない。

「……これ以上答えるつもりはあるか？」

「ないよ？今回答えたのだって特別さ。思い人を甲斐甲斐しく待ち続けるマイナスへのささやかな慰めだね」

更なる質問が可能か問えば、即座に否を唱えられる。カイは前にも「無限には答えられない」と言っていたことからこの返答をレオンは予想していた。しかし、それでも聞きたかったからレオンはカイを呼び寄せたのだ。しかし、今回も三つまでが限度。拷問も痛みなど知らぬようなカイに対しては徒労に終わるだろう。

「そうか……」

「で、情報を上げた僕に何か報酬はないのかい？ただ働きは御免さ。働きたくもないんだからn——。ドッジボールじゃないんだから、顔面はアウトだよ？」

言葉の途中でレオンはカイに向けて金の入った小袋を投げつけ、まさか投げて寄越すとは思っていなかったカイは顔面アウトとなった。

「知るか。さつさと去れ」

「はあ、まあお金貰ったからとやかく言わないよ」

カイは眉を八の字にしたままレオンの注文通り消え去った。旅にもグルメツアーにもお金がかかる。レオンはお金でとはいえ、カイを黙らせることに成功したのだ。

「クロエ、お前は何処に居るんだ……」

そんなことに達成感はなく、レオンは隣に居てほしい人が居ない虚無感を呟いた。

第十七話 救われるユメを見たくて

時の勇者が居なくなつて幾年月。燃え尽きたように無気力な時期もあつたが、優樹に励まされ、自由組合ギルドで冒険者の教導などで優樹を手助けした。意図せず転移してしまつた異世界人の子供たちの面倒を見たりもしたが、そのうちの一人、坂口日向は「時の勇者様も居ない以上、ここで学ぶことはもうありません。さようなら、先生。もうお会いすることもないでしょう」と姿を消した。優樹はどうか所在を探していたが、イングラシアを出国した辺りから行方が分からなくなつたらしい。

やはり人生は良いことばかりではない。日向が去つてからだつたか。悪夢にうなされ始めた。灼熱の大地、周辺を焼き尽くす業火。私が日本で最後に見た光景が、私の夢を侵食していった。私はそうして直感した、「イフリートがもうすぐ主導権を奪う」と。

何処へ行けば良いだろう。イフリートに体に乗つ取られれば、少ない被害を及ぼす。自害すれば良いか？その場合、イフリートが解放されるだけではないか？私には分からなかつた。これからどうすれば良いのかさえも。

「カイさん……」

ブルムンドで受けた魔物狩りの依頼を終えた森で私は一人、最後に頼れるだろう人、頼りたい人の名前を口から零した。

「呼んだ？」

「!?カイさん!」

「何だい？人を呼んでおいて實際来たら驚くのかい？」

人は不気味という白髪の男の笑顔、場の空気に囚われないマイペース。間違いなく本物であるカイに私は溜めていた涙を一筋流す。

「カイさん、助けてください。私は、多分もう永くないんです。イフリートを抑えられません。どうか、どうか私にどうすれば良いか教えてください！」

私は恩人の一人である時の勇者を封印した張本人であることも忘れて、カイに縋つた。

「ん？ああ、もうそういう時期か。あれ？でも確かレオンを一発ぶん殴りに行く話じゃなかったっけ？どうだったかなあ……。忘れちゃったし良いか」

頭を掻きながら何かを考えるカイはしかし考えるのが面倒になったのか、私の顔を真つすぐ見た。

「ジュラの大森林に行けば良いんじゃないかな。もしあそこで暴走しちゃっても、魔物がどうにかしてくるでしょう。そう、『リムル』がね」

「ジュラの大森林ですか？そこに行けば、どうにかなるんですか……？」

「ああ、万事解決さ」

「……分かりました」

具体的なことは教えてくれなかったが、私にはカイの助言以外に頼る物がない。カイを信じて従うことにした。

「じゃね、バイビ」

「あ、待ってー！」

伸ばした手は空を切る。まだ訊きたいことが多くあったのに、どうか最期を看取ってほしかったのに、カイはそんな思いなど知らずに幻想のように消え去る。

手を胸元へと戻す。一人寂しく、虚しい気持ちが私の心を占有していた。どうかかこの気持ちを吹き飛ばすことはできないか。そんなことを思案しながら町に戻った私の耳に、少し騒がしい三人組の会話が届いた。

「二行って良いぞ」じゃねーよー！」

「それ、自由組合ギルド支部長の目の前で言ってほしいでやす」

「うんうん」

「……」

とても明るい会話。冒険者チームなら珍しくもない会話に、私は惹かれた。

「三日後にまたジュラの大森林かあ」

「短すぎる休暇でやすね」

「言うな、お前ら……」

誘蛾灯に誘われる蛾のように、私は彼らに近づいた。

「失礼。君たちはもしかしてジュラの大森林へ向かう予定か？」

「え？あ、はい。そうですけど」

「私の名はシズ。もし迷惑でなければ、同行させてもらえないかな？」

偶然か、運命か。私はエレン、ギド、カバルとジュラの大森林へ向かうことが決まった。

◆◆

「離せお前ら！意地が悪いぞ！」

「意地が悪いのはどっちでやすか！あつしが育てた肉をよくもお！」

「私のお肉よー！」

「……」

目の前で肉を奪い合う三人を、リムルは呆れて見ていた。

目の前で争っている三人（ギド、カバル、エレン）、それとリムルの隣に座る一人（シズ）はヴェルドラが消失したジュラの大森林を調査に来た冒険者であることをリムルは聞き及ぶ。原因と違って突いたモンスターの巣穴から出てきたモンスターに襲われていたところをリムルの配下であるゴブリンたちが助け、バーベキューで持て成していた。

「シズさんだっけ？どんな死に方したかは訊かないが、アンタも大変だったろう」

リムルはその冒険者との会話で、唯一シズだけに異世界人であることが見抜かれ、シズの方から自身も異世界人であることを明かされた。妙な親近感を抱いてリムルは気安く声を掛けた。

「ううん？私は死んでないよ？」

「え」

「私はこつちに転移する直前は死にかけだったけど、レオン・クロムウエル、『白金の悪魔』と呼ばれる魔王に召喚されたの。それで死にかけの私を、カイさん、『過負荷』^{マイナス}カイ・ヤグラがレオンにお願いして助けてくれた。重傷を治すために、イフリートを憑依させられちゃったんだけどね」

魔王という単語が出てきたことにリムルは内心感動しながら、嬉しくも辛そうにも見えるシズの語りを聞く。

「ん？」「イフリートを憑依させられちゃった」ってのは？」

「イフリートは炎の精霊で、憑依できればその精霊の力を借りられたりするの。多分、カイさんとレオンは私の大火傷に有効だと思って憑依させたんだろうけど。私とは少し相性が悪くてね。私は、炎が嫌いだから……」

「……」

リムルは真剣な面持ちで（スライムだから面持ちも何もないが）静聴し、シズも不思議な親近感で話の続きを口にする。

「私が元の世界で最後に見た光景は一面の炎。とても怖い音が鳴り響く中、住み慣れた町は紅蓮に染まっていた」

「……もしかして、空襲か？」

「正解。カイさんが、東京大空襲だって教えてくれたよ」

リムルは目の前の女性が年齢にそぐわない見た目であることに驚きつつ、シズの悲惨な人生を憐れんだ。

「炎が嫌いな理由は、それだけじゃなくて。私は、この炎の力で冒険者としての先生を傷付けてしまったの。幸い、その人は強い人だったから大怪我は負わなかったけど。この貰った抗魔の仮面がなければイフリートを御せなくて、今でも人に近づくのが、少し怖い」

シズは仮面を外し、膝の上で寂しそうにそれを撫でる。

「でも、やっぱり仲間は良いね。彼らのお互いを信頼したり、遠慮なく喧嘩し合ったりする姿を見て、そう思った。ちよつと危なっかしいけど。彼らと旅ができて良かった」

目の前で肉の奪い合いをするのを微笑ましく感じた後、シズはその笑顔のままリムルへ顔を向ける。リムルはシズの人間性に惹かれ、もつと話したいという欲に駆られた。

「腹ごなしに散歩でもどうだ」

リムルはその欲求に従い、シズを外に連れ出した。

散歩、と言いながらリムルは配下である嵐狼牙族テンベストウルフのランガの背に自身とシズを乗せ、疾走させていた。

「凄いね、魔物の町なんて」

「俺たちの町は気に入ってもらえた？」

「とつても」

シズは通り過ぎていく綺麗な街並みの感想を率直に述べた。リムルはその感想を聞いて少し照れ臭く、誇りに思う。

「そうだ！面白いモノを見せてやるよ」

「面白いモノ？」

リムルは『大賢者』に『思念伝達』で記憶の一部をシズに見せられるか確認し、可能であるという返答を受けて実行する。

「これは……？」

シズの脳裏にはボロボロの町を清掃する人々や徐々に発展していく町の様子が映し出された。

「終戦後の復興の様子だ。俺が直接見たわけじゃないけどな。みんな戦争で負けた後、自分たちの町を立派にしようって頑張ったんだよ」
「そっか、こんなに綺麗になったんだね」

映し出される景色はシズの故郷とは似ても似つかなかったが、それでも感じた郷愁と感慨深さにシズは胸の内を暖めた。

「こっちでも同じさ。みんな楽しんで住めるような立派な町を作る。そのため俺たちも頑張ってるんだ」

強い意思を以ってリムルは断言する、良い町を作るのだと。町を作ろうとした最初の目的である「自分が楽に暮らせるように」というのはあえて口に出さなかった。

「もつと発展させるつもりだからさ。良かったらまた遊びに来てくれよ」

「……ありがとう、きつとまた。うっ」

シズは脳裏の美しい街並みが火に沈むのを幻視した。そして、刻限が来てしまった。

「シズさん？どうしたんだ、顔色が……」

「うぐ、ああああああああ！」

「!？」

心配して顔を覗き込むリムルを、シズはぎりぎり残っている意識で

遠く突き飛ばす。

「主よー！」

「おつとと……。シズさん、どうしちゃったんだよ!？」

離れた主の元へランガはすぐに向かう。リムルは突然様子がおかしくなったシズに呼び掛けるが、シズは応えずに殺気まで放っている。

(対象の魔力が増大しました。警戒してください)

そう『大賢者』がリムルに警告すると、シズを中心として大きな火柱が上がった。

「リムルの旦那!なんかすげえ火柱が見えたけど……て、げ!?あ、あれ、シズさんか?なんだってこんなことに」

木々すら突き抜けた火の手を視認し、カバル、ギド、エレンが駆け付け、カバルがその異変に畏怖を言葉にする。

「ま、まさかあの炎。シズさんって、『爆炎の支配者』シズエ・イザワだったでやすか!!」

「な、なんだってー!!?」

ギドの名推理への解答にうるさい反応するカバルとエレンの声のかき消しをするように地面が一度爆ぜる。

「あんたら、さっさと逃げろ!」

「そんなわけにはいかねえよ。ここまで世話になったんだ」

「それに、一時とは俺たちの仲間でやす」

「ほっとけないわ!」

「……分かった。気を付けろよ」

三人の意思が固いのを理解し、リムルはここに残ることを許した。リムルたちは毅然とシズを睨む。

「ハナ、レテ……」

「シズさん!」

「オサエキレナイ……。ワタシカラ、ハナレテ……」

シズは苦悶を浮かべながら、リムルたちを傷つけないように必死に意識を保っていた。

「心配するな、シズさん。俺たちがアンタをその炎から解放してやる」

「デモ……」

「任せろ」

「……オネ、ガ、イ」

シズは心優しいリムルの言葉と、リムルがカイの言っていた『とびっきりの魔物』であることを信じた。

「さあ、行くぞ」

リムルの発破に呼応するように――

「G A A A A A A A A A A A!!」

シズの姿は変質し、辺りは燃え、そして凍った。

第十八話 故郷の中で眠るユメは見られない

「なっ、どうなってんだ！イフリートって使えるのは炎だけじゃないのか!？」

辺りに延焼と氷結が広がる光景を目に納め、リムルは自身の予想していなかった物に驚愕する。

「し、知らないでやすよ！少なくとも、『爆炎の支配者』が氷魔法を使っただって話も、炎の精霊が氷魔法を使えるって話も聞いた覚えがないでやす！」

リムルの驚きに返答するギドもリムルと似たような状態で、目の前の光景に理解が及んでいなかった。

(大賢者！これはどういうことなんだ!?)

(解。不明です)

(不明!?)

(観測された魔素パターンから、対象・精霊変異体とイフリートとの近似を確認しました。精霊変異体はイフリートから変異したモノと思われまます。しかし、そのイフリートが変異した要因は観測できませんでした。推測として、外的要因で変異したと考えられますが、その要因は不明です)

(マジか……)

転スラ^こ世界とリムルの前世の世界の知識を持ち、その知識にあるあらゆるエネルギーの観測を行える『大賢者』を以てしても解き明かすことのできない精霊変異体に、リムルは小さな恐れで身震いする。

リムルは思い当たってはいないが、『大賢者』が導き出した答えは精霊変異体が上記二つの世界以外の力が要因である可能性を示すものである。それが分かったからといって、現状の打開に繋がる情報ではないが。

「GRRRRRRR……」

両手両足で地面を踏みしめ、喉を鳴らすその精霊変異体の様子はまるで獣の様であった。一切の理性を感じさせず、ただ暴走状態であることを表している。

その精霊変異体と睨み合うリムルたち。氣勢の読み合いなどお構いなしに動き出したのは、やはり理性なき精霊変異体の方だ。

「G A A A A A A A!!」

咆哮が魔素を放射し、その魔素を受けた空気が火の玉、または氷の礫となつてリムルたちを襲う。

「うおっとー!」

「あつちい! つめてえ!」

「無理! 無理でやすー!」

「死んじやうー!」

リムルはランガの背に乗り、ランガが悠々と炎と氷を避ける。カバルたち三人は悲鳴を上げつつもどうにか武器で切り落したり、魔法で撃ち落したりで捌いていた。リムルはその三人を見て、まだどうにか保つと判断する。ただ、それも一時であることは分かっている。

(何か良い手はないか、大賢者!)

(解。有効な攻撃手段の獲得として、精霊変異体の攻撃を取り込むことにより、攻撃を解析及び習得できると思われます)

(肉を切らせて、つてやつか……)「ランガ! 俺をあいつの真ん前に投げろー!」

「しかし、主! いえ、分かりました」

一瞬主を危険の渦中に放り投げる行為に躊躇したランガだが、主であるリムルの意思が固いことを感じ取り、指示に従う。

「よっとー!」

(告。炎魔法及び氷魔法の解析、習得に成功しました)

放たれる炎と氷をリムルが『捕食者』で取り込み、『大賢者』が一瞬で解析し終える。

「食らいやがれ!」アイスファイアショット『氷炎大魔散弾』!」

「G U R R A A A A A A A A!!」

即興で作り上げたリムルの魔法散弾が精霊変異体に命中し、相手は痛みに鳴き上げる。リムルは確かな手ごたえを感じた。

「G R R R ……、G A A A A A A A A A A!!」

しかし痛みに怯むはほんの数秒で、精霊変異体は次なる手を打つ。

炎と氷の塊が成形され、精霊変異体と同一の形を成していく。

「これは……！」

理性はないとはいえ、精霊変異体はその生存本能で脅威を選択し、標的を定める。作り出された分身の多く、特に氷の分身がリムルを取り囲み、炎の分身がカバルたちを牽制する。

「リムルの旦那！」

囲んだ氷の分身たちが逃げ道を塞ぎ、そうしてリムルの足元に魔法陣が浮かび上がる様子をカバルが警告するが、それは遅すぎた。魔法は行使され、リムルは氷柱に閉じ込められる。

（クソ、まさか今世は氷に包まれた凍死なんて。シズさんを救えずに終わるのか。無念だ……）

なす術もないと勝手に思い込んでいるリムルは自身も凍り付く時を待ちながら、悔しさを噛みしめる。

（転生して数カ月。思えば短い人生、いや、スライム生だったな……。……これ、いつまでモノローグすれば良いんだ？全然凍る様子がないし苦しくもないんだが）

（……告。『熱変動耐性』の効果により氷結の無効化に成功しました）

（あ!!）

待てどもその時が来ないリムルに『大賢者』は呆れが伝わってくるような多少遅れた報告をする。リムルは『大賢者』への毒付きを胸の内に潜めながら、氷を内側から捕食した。

「GU!？」

「悪いな、二元イフリート。俺に炎と氷は効かないんだ」

数秒前の失態などどこ吹く風。リムルは精霊変異体を『粘糸』で捉えた。

「シズさんを返してもらおうぜ」

かつこつけながら『捕食者』を発動する。対象は、シズに同化する精霊変異体のみ。

（告。精霊変異体のみ捕食に成功しました）

『大賢者』の平静な報告を聞き、リムルは倒れ掛かるシズを受け止める。

「あり、がとう……。スライムさん……」

シズはか細い感謝を伝え、ぎりぎり保っていた意識を途絶えて眠りについた。

◇◇◇

シズが眠りについて一週間。彼女の眠るすぐ横で目覚めを待ち続けるリムルは、彼女が眠り続ける原因を『大賢者』から聞かされていた。曰く、「彼女はイフリートとの同化で延命していた」と。曰く、「彼女はぎりぎりのところで耐え、永くはなかった」と。

「スライムさん……」

「シズさん、気が付いたのか！ちよつと待つてろ、今水を——」

「良いよ。もう、必要ないから……」

「え……」

シズの諦めに似た言葉に、リムルは動きを止めてしまった。

「何十年も前にこっちに来て、辛いこともたくさんあったけど。良い人たちにもたくさん出会えた……」

語られるのは、遺言のようなそれ。物語の締めくくりのような言葉。

「レオンとは、最後まで話し合う機会はなかったけど。一言くらい、感謝を伝えたかった。カイさんや時の勇者様にはたくさん助けられた。先に逝ってしまうのは、不孝者かもしれないけど。今でも、感謝してる……」

シズは多くの出会いに感謝をしていた。自身に様々な不幸が降りかかっていたことを自覚しつつ、それでも自身は幸福な存在だと思っていた。

「可愛い教え子たちにも出会えて。カバルさんたちみたいな、良い冒険者仲間にも出会えて。そして最期に、リムルさんと出会えた」

レオンに延命してもらい、時の勇者に育ててもらい、カイに導いてもらい、リムルに助けてもらった。シズは感謝していた。神などではなく、目の前のリムルも含めた恩師たちに。

「心残りが無いわけじゃないけど。私は充分生きたから」

シズは「もう良いのだ」と、何処か寂しそうな笑顔で暗に語ってい

る。

「シズさん……。俺に、何かできることはないか？心残りがあるなら言ってくれ」

「リムルさん……」

リムルはそんな妥協したような彼女の顔に満足できずに口を開く。シズはリムルに自身の無念を背負わせたくない、言葉を詰まらせた。

「あなたの力になりたいんだ。言ってくれ」

「……じゃあ、私を食べて。リムルさん」

「シズさん、それは……」

「懐かしい故郷の景色の中で、眠りたいの……」

リムルの強硬に折れ、シズはそれに甘えてしまう。まるで止めを頼むようなことに、リムルは血の気が引くが、シズはリムルにしか頼めないことを頼む。最期は帰れなかったあの故郷の中で眠ることを、幻想だと分かっているにも、シズは頼んだ。

「分かった、シズさん」

「ありがとう、リムルさん」

シズの最期の願いを聞き、静かになってしまったシズを、リムルは苦汗をなめながら捕食した。せめて安らかな眠りを、リムルは祈った。



「まさに幻想だね。静江ちゃん？」

「え？」

意識が闇に落ちる感覚、暖かく柔らかいモノに包まれる感触を味わった静江は、それで終わりを迎えず覚醒する。目に入った景色は木造の一室。かつて通っていた学び舎の教室のような場所だった。

「か、カイさん？」

「やあ、おはよう。井沢静江ちゃん。長い人生お疲れ様」

カイはいつもの笑顔で教卓に腰掛けている。

「ここはいつたい……」

「ん？ああ、あの世とこの世の狭間に僕が現実を受け入れなかつた空間だよ。安心院さんが封印された場所を真似て作ったつもりなんだけど。ちよつと古めかしくなっちゃったね。まあ良いか。とりあえず、あの世に行く前に君に用事があるんだ」

何食わぬ顔でカイが告げるその異常に静江は固まるが、しかしカイの不死たる所以に触れた気がした。あくまで気がしただけの勘違いだが。

「君の異常。ああ、異常と言っても異常かどうかは定かじやないけど。君はあのリムルですら測れない力に目覚めかけていた」

固まったままも静江を置き去りに、カイは得られた情報を整理して至った一つの事実には笑顔を浮かべる。

「目覚めるもよし、目覚めないもよし。ここで最後の一押しを、てね」

目を見開いた不気味な笑顔のカイに指さされ、静江は自身の体に何かが起こったことを感じる。自身の悪性を暴かれるような悪寒が走り、その悪性が形を持つとうとしている。そんな感覚に静江は恐怖を抱いた。が、それもすぐに収まった。

《確認しました。過負荷『遺魂』を獲得。更に『当然変異』によって『遺魂』が分化・変異されたことにより消失。新たに過負荷

『不幽靈』と異常性『結言状』を獲得しました」

「は？」

「え？」

唐突に聞こえた機械音声のアナウンスにカイも静江も呆けた。カイは「世界の言葉」が『過負荷』や『異常性』という別世界の単語を使ったことに。静江は聞き覚えのないその二つの単語、四つのスキルと思われる固有名詞を聞いたことに。

「く、あはははははははははは！」

「か、カイさん？」

先に呆けから抜け出して笑い出したのはカイだった。

「いやいや、これはほんとに面白いね！いつの間に過負荷なんて持ってたんだい？それが新しく手に入れた過負荷を変化させて過負荷と異常性を生み出すなんて！あっはっはっはっはっ、これはめだかボックス主人公も安心院さんも驚くよ！」

「？」
無邪気な子供のようになやみに邪気まみれで腹を抱えるカイ。最初の会った時のようにわけも分からず静江は首を傾げ続ける。

「はー……、いやー笑った笑った。ここまで面白可笑しいことになるとは思ってなかったよ。ということ、笑わせてもらったお礼だ。色々教えてあげよう。本来ならそんなこともしないんだけど、今日この場に限り、君に限り、特別だ」

高笑いを止めてから、それでもいつもの不気味さにウキウキとした高揚感を含む笑みのカイはフィンガースナップを鳴らす。そうすると黒板に今までなかった文字が書き出された。『めだかボックス』には一切触れていないが、カイの独自解釈でありつつも『過負荷』と『異常性』、そして、その力を持ちうる人種に関する詳細がそこに記されている。

「こ、これは……」

記された多くの情報を読み解きながら、静江は自身が如何なる力を手に入れたか理解して息を呑む。それはつまり、「幸運と不運を約束された力だ」と、静江は解釈した。

「カイさんも、この力を……?」

「そうだよ? 逆に言うと、僕は『過負荷』^{マイナス}しか持つてないんだあ」

「カイさんがよく襲われたり、死んだりするのはその力が原因つてことですか……?」

「良く襲われたり死んだり、そういう不運だから過負荷^{マイナス}であるとも、過負荷^{マイナス}だから不運であるとも言える。どっちが先かを考えるのは無意味さ。結局は不幸^{マイナス}なんだから」

その答えに静江はカイの見え方が変わった。「過負荷^{マイナス}であることを受けて受け入れた悲しい人」にも、「過負荷^{マイナス}であることを楽しんで受け入れた狂っている人」にも映り出す。兎角、静江は目の前に居る存在が、怪物のような人間に見えた。

「私も、不幸になるんですか?」

「不幸になる、というか不幸だったよね。まあ、君は異常^{アブノーマル}でもあるみたいだから、そうだね。幸と不幸の上がり下がりが激しいとか?」

『過負荷』と『異常性』^{アブノーマル}を両方持つ人物は存在した。しかし、その人物が不幸なのか幸運なのかは不透明。そも、幸不幸は個々人の尺度によるもので、明確な区分などないのだから解明するも何もない。

「君の能力について説明しとこうか。長く尺使うのもなんだし、巻きでいかないとね」

カイは再びフィンガースナップをすれば、黒板の文字が書き換わる。書かれているのは静江が今持っている『過負荷』^{マイナス}と『異常性』^{アブノーマル}についてだ。

『当然変異』^{オルタナティブ・エイト}

○分類不明。おそらく『過負荷』^{マイナス}

○スキル保有者の保有するモノ（物質・非物質問わず）を分化・融合させる。分化・融合させる際、絶対に対象が変異し、別のモノになる。元に戻すことはできない。

『不幽霊』^{スリーピー・ホロウ}

○『過負荷』^{マイナス}

○スキル保有者を魂のような状態で現世に保存する。現世の生物は五感で知覚できるが、相手からは知覚されない。魂でも幽霊でもな

いので霊感などでも知覚不可。

○オンオフが可能であり、好きな時に成仏できる。(魂でも幽霊でもない)ので「成仏」は不適當だが、過程はほぼ合っているので便宜上「成仏」と表現している)

『結言状』
ダイイングメッセージ

○『異常性』
アフノーマル

○スキル保有者の死後、伝えたい相手に伝えたいことを伝える。

○補足

・『不幽霊』ホロウで現世に保存された状態は死後の状態として扱われるため、現状はいつでも『結言状』ダイイングメッセージが使える。

「これが、私の力……」

静江は目覚めた実感のないそれらの力をどう扱うべきか、全く分からなかった。

「さあ、色々と悩んでいるところ悪いけど。君に選択肢を提示しよう」
カイは静江の机の前に、一枚の紙、「進路希望調査」と見出しが付けられたそれを置く。そんな見出しがあるのに内容は「留まる」と「成仏する」の二択に、「前の質問で「留まる」を選んだ人にお聞きします。留まって何がしたいですか？」という質問に対する空白の解答欄だった。

「……」

静江は何も書けない。すっかり芯のどがったHB鉛筆も角張った消しゴムもあるのである。

「まあじっくり悩むと良いよ。しばらくはここに居て良いしね。ついでだ、判断材料も置いておこう」

カイは棒で取っ手を引っ掛けて黒板の前のスクリーンを広げ、最前列真ん中の席にプロジェクターを置く。映し出されたのは、転スラ世界の何処かの街並みである。

「僕の居る辺りを映すようになってるから、映画鑑賞気分で見せてね。じゃあ僕はこの辺で。じゃね、バイビ」

にこやかに手を振り、ここから消える。スクリーンには確かにカイが映され、光景はカイの歩みに追従する。

「……」
ただ一人、取り残された静江はそのスクリーンを黙って見ていた。

第十九話 綺麗なユメを見たかったかい？

「まさか、ユウキがそんな人間のはずは……」

あの世とこの世の狭間空間。静江はカイが告げたユウキの本性が信じられずにいた。

「まあそうだろうね、君の前では優しい子をうまい事演じてたんだし。実際君が信じる部分も間違いではないと思うよ？ だけど、彼はそう、無邪気なんだ。子供みたいな発想を本気で取り組む。世界征服なんて幻想ユメのために何でも騙し、何でも利用する」

揺れ動く静江を誑かして愉悦を感じるように、カイは笑顔で腰掛けた教卓から追撃している。

「でも、そんな……」

「言っても信じる訳はないか……。ま、いいさ。「論より証拠」って言うしね。実際に見せてあげよう。じゃあ、行ってくるね！」

さすがに盲目に信じ込んでいた人の言葉でも静江は信じきれない。

カイはそんな静江に事実を見せようと、何処かに消え去った。

◇◇◇

「それで、クレイマンの方はどんな調子？」

「着々と。今のところヴェルドラ消失に関して詳細不明で不安な要素ですが、同時にジユラの大森林付近はより不安定になっているため計画のいくつかの手順が省略できるかと」

イングラシア王国の自由組合ギルド本部、その最奥とも言える自由組合グラントマスター総帥執務室。その場で自由組合グラントマスター総帥・神楽坂優樹とその秘書・カガリが誰にも侵入と盗聴を許さぬ結界を張りながら企みの進捗を確かめ合っていた。

「今のところは計画通りか。……カイ・ヤグラの干渉もない？」

「全くありません。あの男も『ジユラの大森林不可侵条約』に縛られております。その条約がある限りは、干渉を防げるでしょう」

優樹はカイの干渉を警戒していた。最も有名で神出鬼没な魔王『カイ・ヤグラ』。自身と同じ日本出身であると察しながらも、ネジと常識が外れた行動を繰り返す異常人だ。警戒しない訳がない。

「はあ、全く。何してくるか分からない相手っていうのが一番厄介だよ。君がカイに何されたか覚えていれば、まだ能力が割り出せて対策もできるんだけどね」

「勘弁してください思い出させないでください。いえ、絶対に思い出せはしないのです。しかし、少しでもあの男にやられた記憶を掘り返そうとすると、手足が震え、冷や汗が止まらないんです」

カガリは絶対の上司である優樹に対し、その命令だけは絶対受け付けない。彼女の言葉通り、まだ『カガリ』ではなく『カザリーム』だった当時のやられた記憶は今思い出そうとしてみても思い出せず、刻まれた恐怖心だけがぶり返す。ヨグ^S||ソト^Aース^N召喚^直の事態を考えれば、ある意味で生命保存の本能だろう。

「まあ仕方ないね。とりあえず、カイが手出しできない内にジユラの大森林でのプロセスは終わてしまおう」

「ええ、その方が良いでしょう。計画を見直し、省略できる箇所を洗い出します」

これで一端の話し合いは終わりだ。

ここに、闖入者が居なければの話だが。

「そんなに焦って大丈夫？」「急がば回れ」って偉大なる先達は有りがたあいお言葉を残してくれたよ？」

「な!?!」

声の間こえた方、応接用のソファアに優樹とカガリが視線を移せば、勝手に紅茶を飲んでくつろいでいるカイが居た。

「ど、どうして貴方が!」

「こんにちは、オカザリちゃん!あ、カガリだっけ?まあどっちでも良いから僕に性転換の方法を教えてよ、カザリーム!」

「ひっ……………」

自分の正体が見抜かれている恐怖にカガリは脱兎の如く恥も外聞もなく優樹の背後へと逃げ込む。彼女にとって何故知られたかなど考慮する事ではなく、絶対カイに興味を向けられない事が最優先事項だった。

「美少女になるなんて全人類の夢だよね!全身義体にTS転生、

ヴァーチャル美少女受肉！僕らはいっだって美少女になりたくて仕方がないんだ！そして全人類美少女にして美少女だけでイチャコラしようぜ！世界はそれで平和になる！」

カイは応接用のテーブルに乗る程興奮しながら饒舌に語る。仔細に観察する優樹からしても、それが演技なのか本気なのか分からない。

「こんにちは、魔王カイ・ヤグラ。いえ、親しみを込めてヤグラカイさんと、お呼びした方が良いでしょうか？」

敵か味方か、目的は何か、聞いて答えるとは思えないが、優樹は奇々怪々のカイに冷静な対応をする。

「あ、僕の名前は数字の「八」に倉庫の「倉」、青い海の「海」で「八倉海」ね？親しみを込めるなら下の名前呼び捨てで構わないさ。同じ日本出身の異世界人なんだ！仲よくしよう！」

ハグでも誘うように腕を広げるカイだが、さすがに優樹はそこまで乗らず、笑顔を浮かべながらいつでも動けるよう浅く座り直した。

「本日、ご訪問頂いた目的は？性転換の方法でしたらお教えしても構いませんが」

「マジで？ああでもいいや。多分君くらいしかできない方法だろう？性転換しようと思えば自前でできるし、僕でも他人に施せる方法じゃないと全人類美少女計画は達成できないからね。それに、それが主目的って訳でもないし」

あわよくば「そんな理解不能な目的であれば」と優樹はカイの発言を真面目に受け取ってみるも、やはりそれが目的ではなかった。カイはわざわざソファアに座り直して頬杖を突きながら、その細く不気味な笑顔を優樹へ向ける。

「目的は、そう。ただの確認だよ。「静江ちゃんの教え子が本当に世界征服なんて考えるのかなあ」って、事実の確認がしたいのさ」

あっけらかんと優樹の計画を知っていることを明かすカイに、優樹は笑顔を崩して睨み付ける。優樹にとってカイの発言には計画がバレている事ともう一つ、どうにも聞き捨てならないワードが含まれていた。

「どうしてお前がシズ先生の本名を知っている。先生は勇者様に付けてもらった「シズ」の方を愛用して、「静江」の方は滅多に名乗らないはずだ」

「え？気にするのそこかい？まあうん。あり得なくはないか。君って静江ちゃんには懐いてたみたいだからね。はいはい、そう睨むなつて。答えはそんな難しくないさ。静江ちゃんが転移してきたばかりで心細い時に、ちよつと優しくしたただけだよ。そうしたら、君が静江ちゃんに懐いたみたいに、僕に懐いちゃったって訳さ」

「嘘を吐くな!!」

優樹は机を握り拳で強く叩き、椅子をひっくり返す。カイは優樹のその様子を怪訝に思った。「もしかして、演技じゃなかったのか？」と思ひ直すくらいには、優樹の様子は迫真である。

「先生がお前のような魔王にそそのかされる訳がない！先生は、僕を救ってくれた、聖人のようなお人だ！」

「訳が分からないな。そんな人を、そんなに尊敬しておきながら君は悪の道に走るのかい？」

「ああ、僕がしている事は、その過程は間違はなく悪だろう。だが、世界を救う最短距離だ！これから先、先生のような不幸な人を生まないための最低限の犠牲だ！「悪」と誇られようが、誰かの恨みを買おうが、僕は止まらない。僕はこの理不尽な世界を救って見せる！」

優樹は静江への尊敬を嘘にしないためにその理論をぶちまけた。「決して彼女の教え子である僕が、完全なる悪ではなく、仕方のない犠牲を出す正義の味方なのだ」と静江に泥を塗らないよう、今日の前で静江を汚した男に論じる。

「あつはつはつ！なるほど、「清い人に育てられた僕は清い人の代わり」に汚れを引き受けてる」ってそんな理論？ああ、なるほどなるほど。舞台裏を見た気分だ。まあ、僕が多少なり関わつちやつてるから原作正史とはズレてるのかもしれないけどね」

「……」

優樹は押し黙る。愉快そうなカイの語りにも思考する。「舞台裏」「正史」、優樹にはなんの暗喩なのかは分からない。だが、「この男は僕以

上に何かを知っている」と察した。

「まあまあとりあえず。静江ちゃんが僕に懐いてた証拠くらいは出してあげようか。じゃあまず、何故静江ちゃんは亡くなる直前にジユラの大森林なんかに行ったと思う?」

「……先生があのお森の調査依頼を受けたからだ」

「おいおいおい。自由組合総帥なんて肩書持つてる君が、支部の依頼とはいえ、受注者を把握してないのかい?」

「……受注者に腕を見込まれて、後から参加したんだろう。先生は困っている人を無視できないお人だった」

「く、はははっ」

「……何が可笑しい」

カイはついつい笑いを零してしまい、優樹はそれに苛立ちを募らせる。カイにとつてみればそれすらも可笑しい事だ。優樹は理解していて逃げている然も正しい言い分で答えに至らないようにしている。それこそが、答えに至っている証左だ。

静江の死ぬ前の行動は、死に場所を探していたにしても、ジユラの大森林を目的地としたのは不可解なのだ。自身が危険な状態だと知っているはずの静江だったら、その危険な状態の原因たるイフリートごと消し去ってくれる存在、例えば魔王、一番可能性が高いのはレオン・クロムウエルの元へ行くはずだ。しかし、静江はそうしなかった。とするならば、静江は誰かにジユラの大森林へ行くよう仕向けられたのだろう。その仕向けた者はいったい誰なのか。

「逃げるなよ、神楽坂優樹。真実は、目の前にある」

カイは毒のような真実をひけらかし、不気味に口の端を吊り上げる。

「お前が、先生をあの場所に送ったのか。先生を、死に場所に追いやったのか!」

「死に場所に追いやったなんて、酷い言い草だなあ。僕はより良く眠れる場所を教えたただけだ。それに、君は静江ちゃんを止められなかったろう?彼女の危険な状態を、君は改善できなかった。そうして暴走による死が回避できなかったんだから、死は必然だろう。それに、被

害が出ない場所で死んでくれて良かったじゃないか」

優樹は堪忍袋の緒が切れ、異世界人の異常な身体能力でカイを蹴り飛ばした。優樹にはどうにもカイの一言一言が静江への侮辱に聞こえて仕方がなかったのだ。特に「死んでくれて良かった」という言葉には耐えられなかった。優樹は、叶うなら生きていてほしかったのだ、恩人たる井沢静江に。そして、叶うならば、彼女に平和になった世界を見てほしかった。そんな切なる願いを嘲笑う目の前の男に、優樹は敵対すれば厄介と分かりながら攻撃した。

「お前に、何が分かる！人の形をした化け物が！この悪烈で悪逆で性悪の魔王がっ！お前には人の心が分からないんだろう！分かったたまるものかっ！」

冷静さなど何処へやら。優樹はただ怒りをそのままにカイを罵る。「あの、主様。あの男、テーブルの角に頭をぶつけて死んでいるんですが……」

カガリはカイの様子を窺いながら落胆した。蹴られた勢いで角に叩きつけられたものだから、カイは頭から出血して横たわっている。「どうせ死んだフリだ。何度も討伐報告が上がっていて一度も消滅させられていないなら、何らかの不死性があるんだろう」

「死んだフリとか不死性とかじゃなくて、本当に死んでるんだけどな。まあ！オールイス全フアン部タジ幻ー想なんだけどね！」

カイは優樹の予測に反さず、何事も無かったかのようにソファーに座っていた。優樹は何度でも殺せるように臨戦態勢を取っている。「全く、酷いじゃないか。キックボクサー以上に強く蹴れば、僕なんか容易く死んじゃうよ？ロギア系能力者じゃないんだから。エースは何か、ロギア系なのに「マグマは火を焼く」とかいう謎理論で殺されてたけどね」

「今……何て……」

「ん？」

優樹の様子が一変して、呆然としたものになる。

「今、エースが殺されたって……」

「ああ……」

優樹が呆然とした理由にカイは思い当たり、すごく楽しい悪戯を思いついたように笑顔になった。

「そう、そうなんだ！ワンピースのエースは実は白髭海賊団の裏切り者に捕まって処刑されることになって、白髭海賊団とルフィが助けに来てくれたんだけど結局マグマグの実を食べたマグマ人間の海軍大将・赤犬に殺されちゃうんだ！しかもしかも、エースはゴールドロジャーの息子だったんだって！」

「う、嘘だあ!!」

「それとそれと！ブリーチは崩玉使ってすつごく強くなった藍染に一護が「最後の月牙天衝」とかかって死神の力を失う代わりに使えるすつごい攻撃を噛まして倒すんだよ！さらにね、なんと実は一護は死神と滅却師^{クイーンシー}を親に持つ超サラブレッドだったのさ!!」

「や、止めろお!!」

「それにそれに！ナルトのカカシ先生、やっぱりあの写輪眼はうちの一族の友人から譲り受けたものでね、その友人は任務中に失ったんだけど実は生きててね！それが暁で「トビ」って名乗ってる「うちはオビト」なんだ！あ、後ナルトはサクラちゃんじゃなくて日向ヒナタちゃんとかくつつくよ!」

「そんな、そんなあ！こんな、こんな事って……」

優樹は転移して読めなくなったお気に入りの漫画をネタバレされ、その多大なる精神ダメージで崩れ落ちた。

「あーはっはっはっはっはっはっはっ！ねえ今どんな気持ち!?読みたくて読みたくて仕方ない漫画の続きを荒唐無稽に暴露されてどんな気持ち!」

「おのれ……。おのれっ、魔王カイ・ヤグラ！お前だけは、お前だけは絶対に許さない!!!」

勇者の友を殺したように高らかに笑うカイへ、優樹は大切な友人を殺された勇者が魔王への復讐を誓うように、涙を流しながら殺意の波動に目覚めていた。

「いやあもうその言葉が聞けて大満足だよ、僕は。じゃね、バイビ」
主目的から大分逸れたが、思いもよらない展開になったが、それで

もカイは愉悦に心満たしてその場から消え失せる。

「くそっ！絶対だ、絶対お前は殺してやるぞ、カイ・ヤグラあ!!!!」

逃してしまった怨敵に、優樹は怨嗟を吠えた。

◇◇◇

「で、どうだった?」

「いえ……その……。私はどうすれば良いんでしょうか……?」

「笑えば良いと思うよ?」。なんてね」

狭間空間で、途中までシリアスで最後まで二人の会話的にはシリアスだったけどギャグになっていた展開に、シズはどういう感想を抱けば良いか混乱している。カイは素っ気なくテンプレ的に返した。

第二十話 故郷の味を食べられるなんてユメのよう だ！

「まだっかな、まだっかなあ」

狭間空間。一回死んだカイはすぐに蘇る事なく、机に腰掛けて足をブラブラ揺らしていた。行動も言動も、あからさまに何かを待ちわびている。隠す気がない、というよりは、隠す気が起きないという感じだ。ワクワクし過ぎて、そのワクワクがカイから溢れていた。

「何がそんなに待ち遠しいんですか？」

カイが先程旅途中の落石で圧死した光景に似つかわしくない程上機嫌なので違和感を覚えつつ、理由は言動にあると考えて静江は訊ねた。

「うくん？ いやあジュラの大森林で魔王種が死んだみたいただからさあ、そろそろあの森の不可侵条約が撤廃される頃だなあって。あゝ早く会いたいなあゝゝゝ」

どうすれば魔王種が死んだ事が不可侵条約撤廃に繋がるのか、原作知識など持たない静江には到底理解できず、首を傾げるばかりだった。そも、何処から魔王種が死んだ事を知り得たのか。その疑問にカイの固有能力を静江は思い出した。

「カイさんの『過負荷』^{マイナス}は未来予知とか情報収集ができるスキルなんですか？」

「そいえば僕の『過負荷』^{マイナス}について全然説明してなかったね。ま！僕は最近ミステリアスボーイを気取りたい気分だからスキルの詳細は秘密さ！情報収集というか、知りたい情報を知る事が僕のスキルの一部だとは言っておくよ。小出しに情報出していくの、ラスボスっぽいだろう？」

「ラスボスっぽいかは知らないが、カイさんらしくはある」というのが静江の感想だった。そんな感想を述べるよりも、静江はカイを推し測るべく、その言葉の一部を拾い上げる。

「カイさんは、その「ラスボス」、最後の敵になりたいんでしょうか」

この狭間空間でカイを観察し続けているが、静江にはどうにも彼の目的が見えてこなかった。落石で死んだり、酒場で喧嘩に巻き込まれて死んだり、食中毒に当たって死んだり、その他諸々多種多様の死亡シーンだけで何が目的か当てられたら名探偵を名乗って良いだろうが。

「……少し違うかな。うん、君に打ち明けるのはどうかと思うけど。まあ『過負荷^{マイナス}』の先達として、一つの在り方を示しとくのは悪くないかな」

少しの逡巡、少しの恥じらいを挟んだ後、カイはその口を重たく開く。さっきの上機嫌とは打って変わって、しわがれた哲学者のような雰囲気携える。

「何度も見せてるから分かり切ってるだろうけど、僕はとにかく死にやすい。スキルのおかげでそんな現実から逃避できてるけど、それでも何度も死ぬ。ただの事故で、ただの不幸で」

いつもの笑みは消えている。薄く開いている目も、悲し気に下に向けられていた。

「面白くないだろこんなの。特別な力を持つてるんだ、僕は。そんな僕が、何の物語もなく死ぬ？ふざけるな、ふざけるな……っ」

悲しみは怒りに注ぐ燃料となり、炎を燻らせる。

「僕にはもつと相応しい死があるはずだ、僕にはもつと満足できる終わりがあるはずだ！世界がそれを約束してくれないのなら僕は世界を無茶苦茶にしてやる！そうされたくなくば、僕に宿敵を用意しろ！僕に本気で渡り合える相手を用意しろ!!僕に満足の行く終わりを用意しろ!!」

カイは燻りを業火へと変貌させ、その業火を体現するかのよう荒々しく叫び上げる。

「この僕にっ、終わりを受け入れさせてみる!!!」

「……っ！」

静江は息を呑んだ。

そこにあるのは狂気だった。そこに居るのは負の塊だった。悍ましく、痛ましく、恐ろしく。しかし純粹な感情。一滴も正の感情が混

ざっていない、清らかな負の感情。人が持つ、悪性の本性。

「ああ、これが『過負荷』か」と、静江に直感させる。カイはそれほど頑なに『過負荷』なのである。

「まーオールイズファンタジーなんだけどね！」

カイは悪を体現していたかと思えば、コロっといつもの笑顔に変わった。

「ほら、なんかそれっぽい事語ってるラスボス感増すでしょ？」

「そ、そうですね」

激しい温度差に付いていけず、静江は生返事な対応をするしかなかった。

「まだっかな、まだっかなあ！ああこういう焦らされ方は悪くない気分だけど、やっぱりどうしてもじれったいなあ。僕自身が撤廃できれば良いんだけど、それは都合が良すぎるし。まあまあ、待つんだカイ・ヤグラ。300年も辛抱強く待ったんだ。後数年、ほんの数年待てば良いんだ。ステイ、ステイだカイ・ヤグラ。今までの300年を無駄にしてはいけない！君は、今までの犠牲を無駄にするつもりか!？」

何やら独り芝居を始めてカイをどうすれば良いか分からず、静江はただただその『過負荷』を観察していた。

「我が右腕にい！憑りついたあ！悪霊がああああ！」

観察、というか呆れながら見ていた。

◇◇◇

「それでは、ジュラの大森林不可侵条約の撤廃に賛成、という事で間違いないですか？」

「ああ、文句つける奴もいないだろう」

「ええ。私にとってはもとより邪魔な条約だったのよね」

「うむー」

魔王クレイマンの招待に応じた三柱の魔王、カリオン、フレイ、ミリムがそれぞれ条約の撤廃に賛同する。

条約が結ばれた背景にあったヴェルドラの封印はもうない。そこに居るのは詳細不明の新勢力。隣接する国を治める魔王たちが見過ごすはずもなく、彼らは調査に動こうとしていた。そのための条約撤

によろやく彼らの思考回路は再起動する。

「あの食道楽の魔王が、いったい何の目的でスライムを？」

「あのスライムが立ち上げた国にはそんな旨いものが……。いや、アイツは一番重要な事に「あのスライムに会いに行ける事」を上げてたな。食事目的じゃねえのか？」

「……カイ・ヤグラが一時期、魔王候補や勇者候補とも呼ぶべき強者たちに戦いを挑み続けていました」

カリオンとフレイの見当違いな憶測をクレイマンは修正する。そのように弱気を零してしまうほど、現状を受け入れなくなかったのかもしれない。

「あれだけ喜んでいたってという事は、とびっきりの強者が居るって事？」

「……」

クレイマンはフレイの質問に沈黙し、流す冷や汗を隠せなかった。

◆◆

「魔物の危険度？」

「そうだ、大まかな区分だがな」

リムルの拓いた町が王都と呼べるくらいに隆盛した頃、ジユラの大森林に隣接する魔王領地以外の国、ドワルゴンのガゼル王がその町の調査に訪れていた。

リムルとしてはドワルゴンは技術者を（追放という形だが）提供してくれた恩ある国であり、これから国として繁栄させた場合の隣国となる。協定を結べるなら結びたいのがリムルの本心だ。

「魔王ならば上から二番目、S級・災禍級ディザスターといった区分だ。間違っても手を出すなよ。怒りを買っても助けてやらんぞ」

「出さないって。ああ、でも「レオン」って奴にはちよつと用事があるな」

手出しするなど注意されても、リムルはシズの残した言葉が気になっていた。どれほど危険だろうと、彼女が抱いた思いを伝えなくてはリムルの気が晴れないのだ。

「レオン」、『白金の悪魔』ブラチナデビルか。かつて英雄視されながらも魔王となつ

た男だな」

「は？英雄だったのに魔王になったのか？」

「目的が不鮮明だが、魔人を狩りつくしていたのだ。今に思えば、魔王となるために魔人から力を奪っていたのかもしれない」

「へえ〜」

200年前の個人の行動だ。詳細な記録など残っておらず、対外的な事実から有識者が推測するに留まってしまふ。ガゼル王が事実と異なる解釈をしたとしても無理はなく、リムルはシズの言葉から受け取っていた印象の解離に頭を回した。

「あ、そうだ。「カイ」って奴は知ってるか？そっちにも用事あるんだけど」

「んぐっ！ゲッフ、ゴッホ！」

「お、おい！どうした!?!」

ついでに思い出した「カイ」の名前をダメもとで聞いてみれば、ガゼル王はむせ返って咳き込む。自身の言葉に理由があるのを察しても、まさかむせるほどガゼル王が動揺するとは思ってもみなかった。

「貴様、よもや「カイ・ヤグラ」の事を、あの『災禍級』デイザスターよりも災禍デイザスターな魔王の事を言ってるのではあるまいな！」

「え、いや、「レオン」と一緒に並べて言ってたから、多分魔王だと思っただけど……」

ガゼル王の焦りようにヤバい奴を話題に出してしまったかと、リムルは言葉の尻をすぼめていく。

「悪い事は言わん、あの魔王だけには関わるな。いや、ここの料理を思うにあの魔王が立ち寄ってもおかしくない」

「うんうん、やっぱり日本食は最高だからね！」

「え？何？その魔王グルメなの？」

「ああ、世界中の美食を求めて旅をしているという噂だ。俺の国にも来たが、丁重に食事を振る舞って追い返した」

「うん、ドワルゴン料理も中々おいしかったね！」

「ええ〜〜〜……」

リムルはガゼル王の語りに微妙な気分を味わった。目の前の威厳

溢れるガゼル王が「飯食わせて追い返した」なんて言えば、それは微妙な気分にもなるだろう。

「その美食巡りがあの魔王の行動範囲を広めていると考えれば怖気が走る。気分を害せぬように扱うのは神経をすり減らす思いだ」

「えっと、どうしてそんな怖がつてるんだ？今んところグルメってのしか分かってないんだが」

ガゼル王すら怖がつているという事実は分かったが、リムルには何故怖がつているかの理由が分からない。

「ああ、すまぬ。あの魔王の危険性を話していなかったな。端的に言えば、物理的な被害は一切ない魔王だ」

「……尚更訳が分からなくなったんだが」

「魔王カイ・ヤグラに挑んだ者は多かった。今も度々いるくらいだ。ただ、挑んだ者全てが無気力になって帰ってくる。挑んだ冒険者は冒険者業を止めて田舎に引っ込んだ。退治に乗り出した王は王を辞めて怠惰になった。対峙した兵士には自刃する者すらいたらしい」

「……え？」

急にその危険度のスケールが上がった事にリムルは理解が追いつかない。

「奴が持つ異名はいくつかある。『最弱にして最凶の魔王』、エクストラ・イビル『番外魔王』。だが、俺が最も奴を表していると思う異名は『マイナス』。全てを負に墮とす魔王だ」

「……」

鬼気迫るガゼル王の解説に、リムルは恐怖を伝えられて固まってしまった。

「別にそんなに怖がらなくても大丈夫だって。僕に酷い事しなきゃ、僕は何もしないよ。ほら、よく言うじゃない？「やられたらやり返す、倍返しだ！」、なんてね」

さつきから聞こえていた少年の声。何故か先程まで存在に違和感を覚えなかった少年に、やっと二人は目を向ける。

「あ、これえびの天ぷらかい!?おほくく、二度と食べられないって覚悟してたよくく!さっすがリムルだね!」

「貴様はっ、カイ・ヤグラ！」
「えっこいつが!？」

第二十一話 無茶苦茶加減はユメの如し

その男は一切の気配もなく、存在感もなく、唐突に現れた。

「伊達巻に揚げ出し豆腐、こりやまた懐かしいな。思えば300年間食べてなかったのかあ」

そして、カイはリムルが提供した覚えのない重箱を突いている。

「お前、いつの間に!」「貴様、いつの間に!」

リムルとガゼル王の驚愕の声が重なる中、カイは心底不思議そうに箸を止めた。

「ん?」「いつの間に」って、最初から居ただけど?」

「貴様をこの場に呼んだ覚えはない!」

「ええ、酷いなあ。古くからの親友にそんな態度を取るのかい?」

「親友?馬鹿を言うな。貴様と仲良くなれるような精神をしていたら、俺の国はとっくに破綻しておるわ!」

「え?本当に忘れちゃったの?」

「な、何をだ」

口をへの字にするほど疑うカイに、ガゼル王は動揺した。

「君の国に魔王たちが侵攻しないよう取り持ったのは僕だったじゃないか」

「そ、そんなはずは……」

「君が僕との友好を忘れるはずがない。誰かに記憶を操作されちゃったのか?」

シヨックを受けているようなカイに、カゼル王は何故か自身が信じられなくなった。

「リムル、リムルの方は?」

「え?俺?」

カイは次にリムルへ視線を移す。

「ベニマル、当時は名前のないオーガだったけど。彼らが襲ってきた時や、豚頭魔王オレク・ディザスターと戦った時だよ。僕は君と共に戦ったじゃないか!」

「そ、そんな覚えはないんだけど……」

「そんな……、リムルまで僕のことを。いったい誰がこんな酷い事をしたんだ……」

箸を落として項垂れるカイを見て、リムルは自身の記憶の整合性を疑い始めた。

「まあ！真つ赤な嘘なんだけどね！」

さつきまで項垂れていたカイが打って変わって気味悪く口の端を吊り上げる。リムルもガゼル王も目を丸くした。

「どう？どうだった、僕の演技。なかなか堂に入っていたらう？」

「き、貴様あー！」

おちよくるカイにガゼル王は激昂して剣に手を掛ける。

「まあまあ、そんな怒るなよ。ちよつとしたお茶目じゃないか。こういうユーモアを忘れちゃうの、僕駄目だと思ふなあ」

カイは悠々と立ち上がり、今にも剣を抜きそうなガゼル王を気にせず横を通る。何をしようとしているのか、全く予想できないリムルとガゼル王はただ出方を窺っていた。そうしてカイはそのまま縁側まで歩き、外に出る。

「リムル、食事はとつても美味しかったよ。モドキだけど日本食を食べれたのは感動だね。だから——」

振り返ったカイが不気味な気を放つ。それが生命として根幹に根差す受容器を揺るがす。命を脅かされるような恐怖心に二人は総毛立たせた。

「お礼をしよう」

カイが言葉を言い終えた後、二人が一つ瞬けば、景色は一変する。

「なつ、これは！」

「お、俺の屋敷が！」

会食していた屋敷は消え去り、カイを中心に空間をくり抜いたかのように砂が広がっている。くり抜かれた端、砂の終端の先に何の異常もないリムルたちの町がある光景が、本来当然の光景を返って異常に思わせる。

（リムル様）

「こんな時になんだソウエイ！今ちよつと色々ありすぎて頭が——

「（無礼を承知で報告します。西の空を高速で飛び去るモノを確認。リムル様の元へ一直線に向かっています）」

「えっ!?!」

わざわざ口に出さなくても良い『思念伝達』で口に出してしまうほど混乱しているリムルに、彼の配下である鬼人・ソウエイから追加の異常事態が報告された。

「あ、ちよ、マジだ！こっち来てる！」

「いったい何事だ、リムル！」

「いや、凄いや魔素の塊がこっちに飛んで来てるんだ！」

リムルは報告の裏を取るまでもなく、『大賢者』により大容量の魔素の接近を警告されて危機感を覚える。事態が転々とする現状に、ガゼル王は威厳を保つので精いっぱいだ。

「ああ、やっぱりすぐに来るよね。砂こに変えたれのが無駄にならずに済みそうだ」

それを余所に、カイは自然体のまま来る者を待った。それはもうカイですら目視できる。

「カイーーーーー!!!」

少女の声と共に、その高速飛来物体はカイのすぐそばに着弾した。

「くっ」

「うおっ」

着弾の余波に体を吹き飛ばされそうになるが、ガゼル王とリムルはその場で持ち堪えた。巻きあがった砂が、徐々に晴れていく。

「カイ！抜け駆けは許さんのだ！」

爆心地の真ん中に居るのは少女。感じられる魔素量とさっきの爆発のような着地に目を瞑るなら、幼げで活発そうな少女だ。現実見るなら少女の形をした化け物だ。もちろんリムルもガゼル王も現実を見た。

「狸寝入りなどしても騙されぬぞ！起きるのだ、カイ！」

少女の形をした化け物・ミリムはカイの胸倉を掴み上げ、ガクガクと振り回す。カイは無反応、というか白目を剥いて首が曲がってはい

けない角度まで回っている。明らかにそれはもはや物言わぬ死体だ。しかし、ミリムはまだ起こそうと高速横回転を見舞っていた。遠心力で服が千切れていないのは奇跡である。

「狸寝入りどころか永眠してるんだけどなあ。全く、酷いじゃないか、ミリム。僕はね？君に勢いよく飛び込まれただけで死んじやうような脆弱な人間なんだよ？そうして君はいったい何人の罪のない僕を殺すんだ」

突然に掴まれていたカイが消え、それと同時に屋敷が復元される。砂の空間が幻想だったかのように元通りになっている。

「まあ！オールイズファンタジー全 部 幻 想なんだけどね！」

その屋敷の中で、カイは何事もなかったように食事を続けていた。

「いったい、何が起こっている……」

「何が何やら……」

「カイ……」

ガゼル王とリムルが困惑に陥っているのを余所に、ミリムはカイに再び突撃する。

「おいおい、危ないじゃないか。食べ物が出っ飛ぶところだったよ。食べ物を無駄にしちやいけないって習わなかったのかい？」

「カイ、貴様という奴！魔王に推薦してやったのに全然面白い事をしてないで、あまつさえワタシより先に面白そうな奴に会いに行くとは！恥を知るのだ！」

ギリギリ重箱を避けておくことでミリムの突撃から食べ物の窮地を救ったカイはまたミリムにガクガクと振るわれる。一応事前に注意されたから威力を抑えているようだ。

「あ、そっちも？そっちも怒る原因だったの？でも困るなあ、僕に「面白い事しろ」だなんて。滑る事請け合いだよ？それよりほら、美味しいものでも食べて落ち着かない？」

「それより」とはなんだ、「それより」とは！ワタシの暇つぶしにもならぬのなら、今ここで滅ぼさむぐっ」

虚無崩壊の予兆で本当に滅ぼされそうになったカイは、無理矢理ミリムの口に伊達巻を突っ込む。

「……」

「どうだい、味の方は」

無言で咀嚼するミリムに問うまでもないだろうが、カイはしっかりと答えを確認しようとする。

「な、なんなのだこれは!?!今までこんな美味しい物、食べた事がないのだ!!」

ミリムは見た目相応の無邪気で天真爛漫な笑顔を咲かせた。

「そこの彼が作らせた料理だよ。料理人は違うけど、アイディアは彼のモノさ」

「え!?!このタイミングで矛先向けるのか!?!」

ほぼカイとミリムで話が成立していたところ、急に話題に出されたリムルは驚きつつ嫌な予感を覚える。

「そうか。つまりアイツを部下にすれば、ワタシは美味しい物食べ放題という訳なのだな」

「いいいい!?!待った、本気で待った!?!おい、どうかしてくれよ、お前が連れて来たんだらう!?!」

リムルは『大賢者』のおかげでミリムとの戦闘に勝機がない事を知っている。そんな相手がやる気満々なのだから藁にも縋りたくなくなるだろう。ただ、縋った藁がカイなのは誤りだ。

「リムル、僕の好きな事を一つ教えよう」

「な、なんだよ。今と関係あるんだらうな……」

「投げっぱなしジャーマン!!じゃね、バイビ」

一言言い残して、カイの姿は幻想のようになくなった。

「アイツっ、押し付けるだけ押し付けて逃げやがった!?!」

縋った藁はまさに藁。いや、それどころか何かを掴んだ幻覚だった事を知り、リムルは激怒やら困惑やらを縋い交ぜにして叫ぶ。

「どうするのだ?そっちから来ないのなら私から行って良いのか?」

「ま、待て。話せば分かる」

「うむ、降伏なら受け入れるのだ!」

「話聞いてない!」

ほぼ一方通行の会話に愕然としつつも、リムルは平和的解決と負け

ない方法を思案する。

「そう、そうだ。美味しい物が食べたいんだよな？」

ミリムは「美味しい物食べ放題」が目的である事を思い出し、リムルはそこに一縷の望みを託す。

「うむ、「伊達巻」だったか。あれをたくさん寄越すのだ！」

「伊達巻だけで良いのか？本当に？他にもっと美味しい物を食べたくないのか？」

「だ、伊達巻以外にもあるのか……、この世に美味しい物が……！」

好奇心に目を輝かせ、食欲に涎を垂らすミリムをリムルは見逃さない。そこにゴールが見つけた。

「あるぞ？そして、これからも増やす予定だ」

「増やす……！」

「でも俺なあ、上司に縛られると新しい美味しい物が思い浮かばなくなるし、作らせたくなくなるんだよなあ……」

「それは良くない、良くないのだ」

「そうだろそうだろ？」

ミリムの食いつきようで勝利を目前とするリムルは、余裕を取り戻しつつも慎重に言葉を選んでいく。

「よ、よし！ワタシに良い考えがあるのだ！お前を部下にするのは諦めよう！」

「ほほう？」

「も、もちろんそれだけではない。今後ワタシがお前たちに手出しをしないと誓おう。その代わり、お前たちはワタシに美味しい物を食べさせるのだ！……どうだ？」

互いが対等になる条約など考えた事のないミリムが、美味しい物食べたさに頭を捻ってどうにか捻りだす。しかし、拙い事に自覚があるのでミリムに自信はない。

「うくん、まあ仕方ないなあ。その条件で呑もうじゃないか」

少し悪戯っぽく、自身の方が優位であるように取り繕ってリムルは頷いた。

「おう！お前、なかなか話が分かる奴なのだ！」

さっきの自信のなさはどこへやら。ミリムはリムルの両手を掴んだ大仰なシェイクハンドで喜びを余すことなく表現した。リムルはシェイクハンドに付き合いながら、小さくほっと溜息を吐く。

こうしてどうにか、リムルは危機を脱却したのだった。

ちなみに、ガゼル王は色々放棄し茶をすすって事の成り行きを見守っていた。

第二十二話 ユメのような、とりとめのないひと時

「いやいやはやはや、「知る」と「見る」じゃ違うね。「百聞は一見に如かず」と言うけど、あれは確かにびつくりだ。見ただけで異常それつて分かるのは中々だねえ。レオンとか時の勇者の時も感じてたけど。やっぱリムルは段違いだ。あれが、真に選ばれた者原作主人公、という訳だねえ」
カイは狭間空間で連ねた机に横になりながら、感慨深いようにしみじみと感嘆していた。

ちなみに、今度は野生の魔猪に轢かれて死んだカイだった。リムルの目の前から消えてすぐの出来事である。

「リムルさんが、「宿敵」なんですか？」

カイのだらけ様や惨めな死に様はいつもの事なので気にせず、静江はまたカイを探る。

「そんな事も言ったっけね。その言い方はちよつと正しくなかったんだけど、場の流れとか空気とかあるじゃない？あの時はラスボスみたいな事を言ってみたかったから、そういう言い方になっただけさ」

カイは静江の質問に明確に答えるべく、「よいしょつ」と静江の方に向き直る。寝そべったままだが。頬杖突きながらの姿は様にならないが、こういう人だと静江も知っている。

「以前言った気がするけど、君には言っていなかった気がするね。誰に言ったんだっけ……。ギイ辺りだったような……。どうだったかなあ……」

「何を言っていなかったんですか？」

話が逸れそうなのを静江は無理矢理修正する。彼女にとって、聞いておかねばならない事のように感じたのだ。

「おつと失礼。僕の目的についてさ。静江ちゃんには僕が転スラ世界こに居る理由、言っていなかったよね？」

「はい、聞いてないと思います」

「じゃあまあ単刀直入に言うと、僕は完膚なきまでに負けたいのさ。一片の恥ずかしさも惨めさも悔いも憂いもない敗北が、僕はしたいんだ」

カイから不気味さが漏れる。それは意図的に出したようなものではなく、本当に漏れてしまったような不気味さだ。静江からして、それは隠していた本性を晒すような自然さだった。

「完膚なきまでの敗北……。それは、終わりを受け入れさせてくれるモノ、ですか？」

カイはいつも不気味に笑っていて何を考えているか分からない。時折その糸目を大きく開いたりする時もあるが、その時の言葉が本音かというと、それも分からない。ただそれでも、言葉の所々に真意が混ざっているのを静江は直感していた。

「完膚なきまでに負けたい」のも本心だろう。そしておそらく、「終わりを受け入れさせてみる」というのも。

「最上がそれだろうね、僕の『幻実当避』オールドイズファンタジーでの復活不可能な敗北。それこそ、終わった後で恥ずかしかったり悔しかったりしないだろう？」

カイはニツコリと微笑む。

「終わりを求めているなら……」

「ん？」

「私の『当然変異』オルタナティブウエイトでカイさんの過負荷マイナスを変化させれば、カイさんを終わらせられる可能性があります」

静江が述べ終えた瞬間、静江の目の前の机が大きな釘に串刺しにされて爆散した。静江は驚きはせず、ただ悲しく俯いた。

「……その顔見るに、僕がそうした動機は察してるのかな？」

「……はい」

糸目から薄く瞳を覗かせるカイに、静江は頷く。

こうなる事は予想できていた。カイが怒るだろう事を静江は理解していた。

カイが求めているのは『敗北』だ。間違っても『死』ではない。それを理解しているながら、しかし静江はよりカイを理解するためにそうしたのだった。

「なんだよなんだよお！人が悪いじゃないか、静江ちゃん。怒ると分かかってやるなんて、さては君も過負荷マイナスに染まってきちやったかなあ

？」

「私は『過負荷』持ちですよ？」

「いや、そうなんだけど。そうじゃないんだよなあ……」

静江の天然な返しに頬杖を瓦解させるカイ。カイと静江が言及する「過負荷」はそれぞれ食い違っている。その辺りちよつと期待外れな静江に、カイは落胆するばかりだ。

「私は、カイさんのようにはなれませんか……」

恩人であり先達、同族にして同種族のカイ。その期待に応えられず、またカイのようになれない自分に、静江は虚しさを募らせた。

「そもそも僕に倣おうとしてるのが間違いなんだよねえ。『過負荷』っていう人種は揃いも揃って人格破綻者だけどき、各々の個性があるのさ。そもそも、『過負荷』とか『異常性』とかのスキルって、割とその人の個性やら人格やらに由来してるからさ。いや、そういうスキルを持つてたからそういう個性・人格になったのかもしれないけど。とりあえず、人それぞれなんだよ。「十人十色」って言うだろう？そんなもんさ」

「人、それぞれ……」

「そう、人それぞれ。君らしくやってみれば良いさ。「好きなように生き、好きなように死ぬ」、なんてね」

静江の感じ入る姿に、カイは何処となく暖かな笑顔を浮かべていた。頬杖突き直しているが。

「その、もう一つ良いですか？」

「一つと言わずいくらでも。君の質問にはできる限り答えてあげよう」

「どうして、私の質問には全て答えてくれるんですか？」

静江の質問に、カイが答えを洩った事はほとんどない。それだけではない、静江のためにプロジェクターまで用意され、カイから何か学べるように準備されている。

それらの対応はあまりにも優しすぎる。少なくとも静江が疑問視するくらいには、カイは静江のための行動をいくつも取っていた。

「ん〜？僕が誰かに優しくするのは、そんなに変かい？」

「その……、はい」

「すっごい躊躇った上で正直になったね、君。即答されるより地味に傷付くんだけど」

今度は読めてたので頬杖は崩さなかったカイ。だが読めていたとしても、傷付くモノは傷付く。

「ご、ごめんなさい」

「大丈夫、他人に分かりづらい優しさなのは自覚あるから」

「そもそも優しいのか」という静江の猜疑の目に、カイは目を逸らす。

「さて、その質問にもしっかり答えるけどさ。結構恥ずかしい事だから、一度だけだ。ちゃんと耳を傾けて聞いてくれ」

「……」

カイは寝転がるのを止め、わざわざ静江と机を繋げて対面の椅子に座る。さながら二者面談のように真面目な場を整えるカイに、静江は聞き逃さぬよう傾聴の姿勢を取った。

「君は、僕にとって初めての仲間で、初めての後輩なんだよ……」

とても静かに、本当に恥じ入るように言葉を零すカイの様子は、不気味さより寂しさが目立つ。

『過負荷』の、ですか？」

「その通りさ。僕には、仲間が居なかったんだ。故郷でも、転スラ世界でも」

カイは肘を突いて手を組み、その目を隠す。吊り上がった口だけが見えるカイの顔は、無理して笑っている男の顔のように静江からは見えなかった。

「これでもね、『過負荷』の素養がある者を探したんだ。でもさ、やっぱり生まれた時から敗北を約束されているような人間ってそう居ないんだよ。居なかつたんだよ……」

自分の生まれ故郷でも探した。この世界でも探した。しかし、カイは静江以外の誰一人として『過負荷』を見つけられなかった。静江も、カイにとっては最後の希望だったのかもしれない。

「ようやく、ようやく君が、僕と同じ力を得てくれた。本当、ようやく

さ。最初に会った時、僕の恩人扱いを怒ったろう？君だけだったんだ、僕にとつて、君だけが……仲間になってくれるかもしれない人だったんだ……。そんな人すら、希望がないって知ったら……。僕はもう、馬鹿みたいに叫ぶしかなかったのさ……」

語りに小さな嗚咽が混じる。カイの机を、いくつかの水滴が濡らした。

「でも、その後に君はちゃんと『過負荷』マイナスを手に入れてくれた……。正直、最後の一押しでダメなようだったら、もうここに籠ってようかと思つてたんだ……。美食なんてしても、慰めにもならないからね」

そこで一旦言葉を切り、カイは顔を拭う。そうしてから顔を隠すのを止め、カイは真つすぐ静江を捉えた。

「それでだ。仲間になつてくれるかもしれない人だけど、僕の態度次第では仲間になつてくれないかもしれないんだ。それなら、優しくもするだろうか？」

「カイさん……」

「ま！オールイズファンタジー全 部 幻 想なんだけどね！」

カイはシリアスをぶち壊すかのように、椅子を蹴飛ばしながら勢よく立ち上がり、静江に背を向ける。声音こそいつもの茶化したそれだが、静江には、そういう時の不気味さが伝わってこなかった。

「ふふつ、そうですね。そういう事にしておきましょう」

静江は可笑しくてつい微笑を抑えられず、抑えられなかった事に開き直つて朗らかな笑みをそのままにした。

「なんだいなんだい？自分で勝手に納得しちゃつて。そういう自分の胸の中だけにしまつておくのさ、なんだか乙女のロマンチックみたいでこの小説の趣旨から外れてないかい？」

静江の方に振り向いたカイは既に不気味さを纏い直している。しかし、先程の現実には確かに静江の胸に刻まれていた。

「何を言ってるのか全く分かりませんが。カイさんが割と嘔吐きなのは分かりました」

「残念だけど、僕に虚言癖はないよ？逃避癖はあるけどね」

「それはそれで何となく分かりますね。カイさんって現実を受け入れ

ないところがありますから」

「うん、まあ、君の僕に対する理解度が上がったようだね」

「はい」

「それは上々」

静江の強い肯定を受け取ってから、カイは教室の出口へと歩いて行く。

「じゃあ、そろそろあっちに戻るよ」

「そうですか。良ければ何か面白いモノでも見せてくださいね？」

「言うようになったね、静江ちゃん。良いぜ、今度はどんな死に様を見せて上げようか」

「はい。帰ってくるの、待ってますね」

静江もカイも、そうして互いに笑顔で別れた。

第二十三話 あれは悪いユメだったのか？

「わはははははーむだむだむだむだああ!!」

魔王ミリムは高笑いをしながら、リムルとその配下である鬼人たち（ベニマル・ソウエイ・シオン）を屠っていた。敵対して戦闘になった、という訳ではなく、リムルたちから願ひ出た訓練である。

ミリムの手には『ドラゴンナックル』という武器とは名ばかりの、むしろミリムのパワーを抑える装備がされている。つまるところミリムは微塵も全力ではない。それでも馬鹿みたいなパワー・スピード・スタミナにリムルたちは歯が立たなかった。

そうして幾ばくかの訓練の後、リムルが休憩に入った事によりミリムも休憩。ベニマルたちはジュラム・テンペスト連邦国の戦闘指南役たる鬼人・ハクロウの元に通常訓練へ戻るのだった。

「ところでさ、ミリムって、何で魔王になったの？」

休憩中のリムルとミリムの談笑。彼らは気軽な談笑をする程仲を深めていた、主にリムルの涙ぐましい努力によつて。ミリムの面倒を見ている際、リムルは親戚の子供を預かった時の事を思い出したという。ミリムの力を考えるなら、子供の時と比べ物にならない緊張感があつたが。

「うーん、そうな……何でだろ？何か、嫌な事があつて、ムシヤクシヤしてなつた？」

「いや、俺に聞かれても……」

「そうだな。良く思い出せん。大昔の事だし、忘れたのだ！」

「そつか。まあ、忘れたなら、思い出さなくても良いよ」

ミリムが一瞬見せた苦しそうな顔に、リムルは追及できなくなつた。

リムルも彼女が千年以上生きている事を聞き及んでいる、何でも古い書物に彼女の名前があるとか。それで、彼女の積み重ねた歴史を慮ってしまった、「失つたモノがあるのだろう」と。そこまで思い至つて、リムルはふと思う。

「お前つてさ、家族というか、心配してる人は居ないのか？ずっとここ

に居るけど、誰かに連絡しなくて大丈夫か？」

もしかしたら失ったモノに繋がってしまうかもしれないが、それでも「ミリムを心配している人が今居るんじゃないか」と聞かずに居られなかった。

「あ!!忘れておったな。そうだな……。ちよつと行つて来る!ひよつとすると、長引くかもしれない。だが、遅くとも2〜3年したら、また来るぞ!」

リムルが予想した反応とは違うが、明るいミリムの反応が返つてリムルを安心させる。

「なんだと?突然だな、おい。今すぐか?」

「む、そうだな。まあ、これで会えなくなる訳でもないのだ!だが、まずはアイツに連絡しなければな」

「アイツ?」

リムルの疑問を余所に、ミリムは大きく息を吸い込む。

「カ イーーーーー!!! 出てくるのだーーーーー!!!」

「おわっ」

森中に響き渡りそうな大声にリムルは耳を押さえる。

「出てこないとーーーー、お前を木端微塵にしてやるのだーーーー!!!」

「超物騒なジ○リの黒いのかよ。たく、——」

「次にお前は——」

「——そんなんで出てくるのかよ」

「と言う!なんてね」

「えっ!?!」

突然背後から台詞を被せられたのに驚いてそちらに振り向けば、そこには『きさま!見ているな!』ポーズを取っているカイが居た。

「マジで出てくるのかよ!?!」

「カイ、話があるのだ!」

予想外の登場にリムルは瞠目するが、ミリムは全く気にしていない。カイに対する慣れ具合の問題である。

「何だい、ミリム。僕は美人との追いかけて楽しんでた最中なん

だ。変な用事だったら帰っちゃうからね？」

「ルミナスにまた追われていたのか？お前も大変なのだな」

「正しくはその配下が僕好みのボロ布一枚手枷足枷奴隷プレイしてて、ついついそれに釣られちゃったんだ。僕捕まえるのに恥も外聞も捨ててるね、ルミナスの配下。それともあれは傀儡にされた捨て駒だったのかな？ま、どっちでも形振り構ってないのは変わらないか」

「やれやれ」と肩を竦めるカイに「いつも通りだな」と特に何も思わないミリム。「何それ」と思ってもツツコまずに傍観するのがリムルだった。

「それよりもワタシの話を聞くのだ。ここに居るリムルとワタシは親友^{マフダチ}なのだ。だからリムルの領土で暴れたら木端微塵にしてやるのだぞ？ワタシが美味しい物を食べられなくなるからな！」

「何しても木端微塵になるね、僕。まあ問題ないよ。僕もリムルの国で暴れるつもりはないさ。美味しい物食べられなくなるからね」

「どっちも美味しい物が理由なのかよ!？」

「うむ」「うん」

我慢できなかったリムルのツツコミに二人から即答され、リムルは肩を落とす。「食べ物以外の研究も頑張ろう」とリムルは決心するのだった。

「カイへの用事も済んだ。じゃあ、行ってくるのだ」

受け答えも待たずミリムは飛び立つ。すぐに見えなくなる程の飛行速度に、リムルは開いた口が塞がらない。

「じゃあ僕は折角^{テンベスト}リムルの国に立ち寄ったんだし。何か食べてからまた旅に出ようかなあつと」

「ま、待った!」

「んん？どうかしたかい？」

ふらりとその場を後にしようとするカイへ、リムルはどうにか復帰が間に合い彼を制止する。リムルには訊きたい事が山ほどあるというのに、この前の初遭遇では訊く間もなく消え去ってしまったのだ。しかし、今度の機会を逃す気はない。

「お前が、魔王カイ・ヤグラなんだよな……」

「そうだよ? 『番外魔王』、『過負荷』とか呼ばれてる魔王さ。一番呼ばれてるのは『最弱にして最凶の魔王』だけだね。ま、良く僕を表してるし、否定が一切できないから受け入れてるけど。僕としては前二つを推したいところだよねえ。あ、ちなみに『十大魔王』とは別枠ね。『番外魔王』エクストラ・イビル って言うのが僕の枠。僕しかいない、僕に与えられた例外枠さ。この「番外」エクストラ って言うのが良いよねえ、裏ボスつぽいし。それにこう、「例外」って感じ、すっごい男心を擦らないかい? ポケモンで言えば『レッドさん』とか、アーマードコアで言えば『首輪付き』みたいでさあ。なんかすっごいだろう? 分かる? 分からない? 本当は分かってるんだらう?」

「なげえー!」

余分なものが付加されまくったカイの台詞をリムルは一蹴した。話が広がりすぎて付いていけなかったのだ。後、リムルはアーマードコアを知らない。

「ノリが悪い対応だなあ、リムルは。で、何」

「何か態度が……。いや、「なげえ」って言ったの俺だけ……。あー、ゴホン」

乱高下するカイのテンションにリムルは疲労するも、咳払い一つで持ち直す。

「お前に伝えたい事と訊きたい事があるんだよ」

「ご馳走しろ、長話にはそれが必要だ」

「お前さつきからしてるのジヨジヨ立ちだよなそれ! 同郷アピールは有難いけど何故今する!?!」

背後に現れた時の『きさま! 見ているな!』ポーズと現在の謎の頭を抱きかかえる『祝福しろ』ポーズから感じる既視感をリムルは探り当てるも、場違い感と謎チョイスに懐疑心が爆発した。

『ジヨジヨの奇妙な冒険』という作品はリムルの前世にあつた大人気漫画。前世でサブカルチャーに触れていれば誰でも知っているような作品であり、もちろんリムルも知っている。その漫画内に出てくる奇妙な立ち方・ジヨジヨ立ちをカイがしているのだから、彼がリムルと同じ日本の異世界人なのは一目瞭然である。さすがに偶然であ

んな奇妙な立ち方はしないし台詞が合致する事もないだろう。

「それさ、元ネタにも言えない？」「何でこのタイミングでそんな奇妙な立ち方するのか」って」

「止める、その指摘は敵を作る気がする」

次元の壁を突き破って届けられる敵意を感じ取ったリムルはこの話題を打ち切る事にした。

「仕方ない、飯くらい出してやるよ。情報料みたいなもんだ」

「お、言ってみるもんだね。ちなみに日本食モドキで頼むよ」

「はいはい」

カイの凶々しさに呆れて溜息を吐きながら、リムルは自身の屋敷へとカイを誘う。

シズに次ぐ二人目の同郷のよしみか、はたまた初見時のように不気味さを放っていないせいか、リムルに警戒心はほとんどなかった。

「串刺しだねえ、分かるとも！なんてね」

そんな一言の後に串カツモドキをカイは頬張る。

「んんんんんん美味い美味いけどソースが欲しいな~~~~~」

「俺も欲しいけどまだ再現できてないんだよ」

カイとリムルの会食。リムルの配下が有事に駆け付けられるよう近くで待機しているが、この座敷に居るのは二人だけだ。

「ジューズは？コーラとか」

「ジューズも全然だな。砂糖が貴重すぎて試作もできやしない」

二人で懐かしい故郷の味を噛みしめ、更なる故郷の味に思いを馳せる。日本人とは、食に拘る人種なのだ。そこに『異常』や『過負荷』、ひいては普通の垣根など存在しない。

「あ、芋焼酎モドキならあるぞ？」

「僕は未成年だから飲めないよ」

「そうなのか、勿体ないな。……いや待て、お前シズさんより長く生きてるだろうが」

カイの衣服は高校のブレザーらしき物であるし、見た目も未成年と

言われれば納得する若さを保っている。リムルは一瞬それに騙されてしまった訳だ。

「心は永遠の17歳さ!」

「そのネタもなんだか懐かしいなあ……」

郷愁に駆られるリムルは遠い目で酒を一杯呷った。

「ツツコミの切れが悪くなってないかい?ま、良いけどさ。確かに、僕はこの世界の世界に来て300年くらいは経ってるけどね。少年ハートは後生大事に守ってるんだよ?」

「口ずさむメロディーが思い出させてくれそうだな、そのハート」

ネタ密度の高さに付いて行く気をなくしたようで、リムルの様子は大分素っ気ない。思わずカイは苦笑する。

「しかし、日本酒じゃなくて芋焼酎か。稲は見つからないんだね」

「あー、お米なあ。俺も食べたいから探してるんだが、見つからないんだよなあ。こういう転生モノなら既に日本風の国が建ってて、お米とかもそこにある流れじゃないのかよ」

「異世界人自体がそんなに多くないし、日本人に限定すれば極少数だからねえ。僕が会った限りだと、リムルも含めて4人かな?」

「300年で4人か、マジかあ……」

日本のソウルフード探索に希望を見出せないリムルとカイは揃って頂垂れる。

「って、そういう話がしたいんじゃないんだよ!」

今更になって本題からかなり逸れているのにリムルは気付いた。

「何だいリムル!お米はどうでも良いってのかい!?!」

「どうでも良くはない、どうでも良くはないが!違う、伝えたい事と訊きたい事があるって話だったろ?」

「僕に言われても困るよ、君の話なんだからさ」

「いや、そうなんだけど……。何だろう、話が逸れる原因にマジレスされるのは釈然としない……。あー、ゴホン」

疲労が積み重なってきたリムルは本日二度目の咳払い。これ以上何か言っていると確実に話が逸れ続けるのをリムルは学んだ。

「まずは伝えたい事だ。シズさんが、助けてくれたの感謝してたみた

いだぞ。それと、先に死ぬのも、「不孝者かもしれない」って悔いてた」「へー、死ぬ直前にそんな事言ってたのかい」

リムルは静江の一言一句を呼び起し、間違つて伝わらぬよう真剣に言葉を選んだ。カイはそれに対し、不気味な笑みを浮かべる。

カイは静江の死後に狭間空間へ招き寄せはしていたが、ジユラの大森林不可侵条約は当時撤廃されていなかったため見に行けておらず、静江の死ぬ直前の出来事は仔細に情報収集していなかった。とは言つても、静江に今現在会いに行こうと思えば会いに行けるので、カイは最期の言葉にあまり興味がない。

「お前、シズさんに思うところはないのかよ」

カイと静江の関係を深く知らないリムルだが、それでも静江の死に笑顔を浮かべるカイへリムルは小さな苛立ちを覚えた。

「静江ちゃんへの思うところの有無で問われてるなら、思うところはあるけどさ。彼女の最期の言葉にはそれ程？」

「ん？どういう事だ？」

リムルは差異を感じ取った、認識か、あるいは現実の。

「訊きたい事があるって言ってたね。この場では、3つだけ答えて上げよう」

「は？」

「僕はこの世界について結構色々な事を知ってるんだ。その中には、今後の君の行動さえ変えてしまいかねない情報がある。だから、際限なく答える事はできない。3つってのは気まぐれだけどね。あ、これは答えにカウントしないよ？今から3つ、何を問うか考えると良い」

「……」

カイの不気味な笑みに妖しさが混じる。リムルはその笑みも言葉も意図を測りかねたが、カイの言った事に従うしかないのは分かった。カイから無理矢理訊き出せる気がしないし、そうしようとして敵対してしまった場合の被害を恐れた。『デイザスター災禍級』よりもデイザスター災禍な魔王というガゼル王のカイへの呼称が頭を過つたのだ。

そうしてリムルは熟考する。感じた差異について追及するのか、それとも元から訊きたい事を訊くのか。

「シズさんの教え子たちは何処に居るんだ？」

リムルは訊きたい事を訊く事にした。

「うーん、複数人を一纏めにしたね。その機転に免じて、全員の所在を一カウントで答えてあげよう。ただし、個人個人の名前は省略、誰かが居る国だけ答えよう」

「……まあ、それで妥協するよ」

渋々カイに承諾する。

「ほとんどがイングラシア王国、一人が神聖法皇国ルベリオスだ」

「教え子たちって子供じゃないのか……？ いや、シズさんも結構長く生きてたっぽいし教え子たちが大人になったのか……？」

カイの返答にリムルは独り言ち、自身の中で解を見出そうとする。

「特別にそこは教えちゃおうか。静江ちゃんの教え子は7人、5人が2・3年くらい前に転移してきた子供で、2人がもう少し前に転移して大人になった子だね」

「つまり、その2人の内1人がルベリオスか……」

「おつとごめん！ 静江ちゃんの教え子って事なら、もう一人ルベリオスに居たんだっけ！」

「おい、じゃあ全部で8人かよ！ しっかりしてくれよ、まったく。そいづも大人になった類なんだな？」

「ま、そうだね」

カイがより笑顔を深めたのを、リムルは忘れてたのを誤魔化そうとしていると受け取り、この情報源を信用して良いのかが不安になってきた。

リムルの受け取りは間違っているのだが。リムルは気付かないし、カイはそれをあえてスルーしている。

「じゃあ、次だ。レオン・クロムウエルは何処に居るんだ」

「黄金郷エル・ドラド。地図に載ってないんだけど、まあこつちも教えちゃおうか。イングラシア王国の海挟んで上にある大陸。そこにエル・ドラドがあるよ。魔王も数名しか場所を知らないから、探し出すのは大変なんじゃないかな。見つけて乗り込んでも、良くて門前払い、悪くて攻撃されると思うけどね」

「……」

リムルはカイの答えを聞きながらも、怪訝な表情をカイへ向けていた。

「どうしたんだい？リムル」

「いや、お前って何なんだ？」

「僕？」

「そう、お前。シズさんの教え子全員把握してるし、ほとんどが知らないレオンの居場所を知ってるし。シズさん助けてるって話で、だとするとシズさんより長生きのはず。じゃあお前もシズさんみたいに精霊が憑依してたり、そういうスキル持ってたたりするのかと思ったら、それ以前に魔力が全く感じられない。魔力漏れを抑えるシズさんのお面ですら微量に漏れてたんだぞ？」

疑問は尽きず、考え出せば切りがない。リムルのあらゆる観測系スキルを用いても魔力が全く測れない。

「お前、いったい何なんだ？」

純粹な疑問だった。恐ろしいとか怖いとかはない、未知過ぎるが故に疑問以外感じない未知。リムルからしてカイはそのように映っている。

「それは、とっても良い質問だね」

カイから一気に不気味さが噴き出す。それは、リムルどころか別室に控えている者たちすら硬直させるような、のしかかる負の威圧感だった。

「ああ、とっても良い質問だ。ちよつと君ユメに絆を見てかけてた僕を現実ユメに戻すような、とっても良い質問。だから、しっかりと答えよう。嘘を吐く事もなく、現実を逃避する事もなく、しっかりとね」

開かれた眼は沼の底のような瞳を覗かせる。

「僕は、『過マイナス負荷』だ」

「っ……」

真正面から対峙するどす黒い不気味さに、リムルは呼吸を忘れていた。

「ま、だから何だって話だよね。悪いけどそこは伏せておくよ、楽しみ

がなくなつちやうからね」

「……………え？」

カイがいつものように微笑めば、威圧感は嘘のようになくなった。「じゃあ、僕はこの辺で。」馳走様。何かあつたらまた来るよ。じゃね、バイビ」

カイは串カツモドキを2本手に取ってから、幻想のように消え失せた。

「……………え？」

威圧感の落差に、リムルは困惑に囚われ続ける。

リムルの配下が座敷に押し入るまで、そのまま固まっていた。

第二十四話 ユメであれば……

「ギイ！ワタシにマブダチができたのだ！」

わざわざギイが坐する極北の地にすっ飛んできたミリムのそんな開口一番に、ギイは首を傾げたのだった。

ギイは事情を知ってはいた。ジュラの大森林で建国された新たな国、ジュラ・テンペスト連邦国の国王とミリムは友好を結んだのだ。その国王であるリムルと名乗るスライムがどうやってミリムに取り入ったのかは簡単。端的に言えば、貢物をしたのである。今まで形ある誠意など受け取ってこなかったミリムにとって、そんな簡単な事でも友好を結ぶには充分だった。

しかし、マブダチ。ギイもそれが「親友」に類する言葉なのは知るところだが、こうもあっさりミリムが高々スライムと親友になるものと、ギイは訝しんだのだ。

「あのスライムがそんなに気に入ったのか？」

「ギイ、スライムではなくてリムルなのだ。ワタシもしよぼいスライムなど興味はないのだが、リムルは違う。リムルは面白い事をしでかす！ワタシの目に狂いはないのだ！」

自信満々に言い切るミリムの瞳はキラキラと輝いている。本当に純粹に、ミリムはリムルの今後が楽しみでワクワクしている。

ギイは仔細に、じつとミリムを観察する。一片でも洗脳の痕跡はなにか、微量でもその瞳に影は差していないか。

答えは、否である。ギイの持つあらゆるスキルを使っても洗脳の痕跡はなく、瞳に陰りはない。

「……そうか。そいつは良かったな」

そこまでしてようやくギイは安心し、ミリムに暖かな笑みを返した。

「という事で。ギイもしばらくリムルにちよっかいかけてはいけないのだ。破ったらさすがのワタシも怒るのだぞ？」

「ああはいはい。言われなくても手は出さねえよ、あんな木端魔物」

親友を守ろうとする健気なミリムに、ギイは姪の無茶振りに洩々従

うように苦笑しながらも承諾した。

「では、ワタシは行くのだ！」

ギイの答えに満足したのか、ミリムは来た時のように忙しくずつ飛んで行った。

「くく……。おい、聞いたかヴェルダ。ミリムの奴、スライムと親友になったってよ、それもあんなに嬉しそうに。本当に、お前の世界は面白いもんだ……」

ギイは遙か遠く、親友の居たあの頃に思いを馳せる。「きつとアイツが聞けば笑ったはずだ」と、楽しそうに、寂しそうに、ギイは届かない報告をした。

「だよねえ、この世界って本当に面白いよねえ」
「……」

ギイは不愉快が一周回って真顔になる。そして、指を鳴らす。

ギイの玉座の後ろから肉片が散らばり、血の匂いが広がった。

「ねえ、さすがに酷くない？ちよつと口を挿んだだけじゃないか。それで人を殺すってどれだけ狭量なんだい？」

肉片も血の匂いも消え、不満を顔に貼り付けたカイがギイの目の前に歩み出る。

「どうせ死なないだろ」

「死んでるよ？オールリス全スファ部アンタ幻ンタ想ジーだけど」

肩を竦めて「やれやれ」と、カイはその一言で抗議を止める事にした。何度も蘇るのは面倒なのだ。

「で、何をしに来た」

ミリムと話していた時とは打って変わって、ギイは警戒心と不快感を放って隠そうともせずにかいを睨み付ける。

「いやあどうせリムルの事覗いてるだろうからさ、君から彼の所感を訊きたくてね。ぶつちやけどんな感じ？」

「ただのスライムだ。短期間であそこまで成長するのは珍しいが、珍しいだけだ。特別性も感じん」

「あれ、そうなの？」

もうちよつと何かあると予想していたカイだったが、ギイは言葉が

全てのようで嘘を吐いている素振りもない。

「彼、異世界人なだけど？」

「異世界人が魔物に転生するのは稀有な事例ではあるが、類を見ない訳じゃない。実際、俺も一人二人見た記憶がある」

「あれ？マジで？ヴェルドラだって知らなかったはずなだけど……」

意外も意外で困惑するカイ。原作知識で思い出せる部分では、ヴェルドラするその事例を知らなかった。そのためカイは「リムルが初の事例だ」と勘違いしていたのだ。

「竜種とは言え、ヴェルドラは末弟だ。奴の誕生より俺の誕生の方が早い。俺はこの世界の創造者と面識があるんだぞ」

ギイはやや呆れ交じり怒り交じりに肘掛けを指で叩く。

「マジか……。そうすると君の結論は？」

「成長が早いだけ、異世界人の魂を持つというだけ。俺にとって、あのスライムはただただ珍しいだけだ」

「マジか……」

カイは天を仰ぐ、屋内なので結果的に仰ぐのは天井だが。リムルの特別性にギイが気付いていない事を受けて、「実は見て分かるような特別性がなかったのか」と落胆したのだ。

特別な存在。生まれながらにして他と格別な何かを持つ存在。端的に言えば、勇者や英雄、天才に偉人。そういった、明らかに違う存在。

カイは「そういう存在と戦いたい」と常々望んでいる。「そういう存在しか満足させてくれない」と諦観している。

「でもまあいつか。というかむしろ納得だ」

ふとカイの意見は反転した。何が良いのかと言えば「別にそんな分かりやすい特別性でなくても良いか。異常なのは僕が分かっているんだし」と、何が納得かと言えば「原作でギイがリムルにちよっかい出さなかったのはリムルが取るに足らない存在だったからなのか」と。

「俺の方から訊くが、お前はあのスライムに何を視ているんだ」

ミリムの懐きようは異常だ。カイの敵視は異常だ。しかし、ギイに

は何がそうさせるのか見当もつかない。

「自分の目で確かめないと、分からない事もあるもんだよねえ」

カイは意味深長で不気味な笑顔を浮かべる。

「まあ僕の所感を言っちゃおうか。彼の傍に居るとね、無性に彼の味方をしたくなるんだ」

リムルの傍に居ると話が盛り上がった。彼との食事はとても幸福だった。一瞬、自分が彼を宿敵に選んでいるのを忘れるくらいに。思い出しても彼と味方になる未来に後ろ髪が引かれるくらいに。

「ミリムを観察したが、洗脳系のスキルは一切使われていなかった」

「ちつちつちつちウボア……」

人差し指を振っていたカイの腹に穴が開く。それも、一瞬きでまるで幻想のようになくなるが。

「……ねえ、僕を殺すのって魔王たちの間で流行ってるの？」

「どうせ死なないだろ」

「死んでる死んでる。ま、オールイズファンタジーだけどきあ」

これ以上手間が増えるのも嫌なので、カイは溜息を吐き出すだけに留め、すぐに佇まいを戻した。

「君も観察した通り、彼は洗脳なんてしていない。スキルも使ってないしそういう技術も使ってない。だけどね、人間それだけじゃないもんだよ。それが何かと聞かれれば、強いて言うなら『運命』みたいなものさ」

「運命？」

「そう、生まれながらに持つ運命。生まれたその時に決まる道筋。逆らう事の出来ない人生という川の流れ。リムル、いや、あの三上悟人間の魂はそういう流れを持っている。だけど、多分「味方になりたくない」つてのが全部ではない気がするね。あくまでその一部つて印象を受けたよ」

リムルは多くを味方に引き込んだ。ヴェルドラも、ゴブリンも、ドワーフも、オーガも、リザードマンも、オークも、ドライアドも、自らの仲間にしてしまった。さらに、ドワーフの国とは国交を結び、最古の魔王の石柱とは友好を結び、直に人の国々とも協議を結んでい

くだらう。全てが全て味方という訳ではない。しかし、全てがリムルに利益のある形で収まってしまう。

そう、利益のある形となる。味方になったのは、その方が利益となるから。最終的に全てがリムルの利益になる、例外なく全てが、まるでそうなるように初めから決まっているかの如く。

カイはそういう点があるために、「味方になりたくなくなるのが彼の運命の一部」と評したのだ。そして、その全貌こそがリムルの『異常性』と直感している。

「……お前は、お前自身のその『運命』とやらを使いこなしているのか」
ギイの中でピースが揃った。

「人間それだけじゃない」、それは人間には転スラ世界スラの力以外にも何らかの特殊能力がある事の示唆。

『運命』、言い表し方は曖昧ではあるものの実在を確信するカイの断言。

それらの情報がカイの判別できないスキルに繋がった。故にギイは辿り着く、「カイはその『運命』を使いこなしているのだ」と。

「素晴らしい。伊達に最初の魔王ではないね」

小気味の良い拍手の音は、しかしギイには気味悪く聞こえる。カイの能力の輪郭は捉えた。しかし、返ってカイの力の底が知れなくなつたのだ。カイが如何なる運命を持ち、それをどう使いこなしているのか。一筋の光が、逆に闇の濃さを際立たせてしまう。

「……お前はあのスライムとの勝負を済ませたら出ていくんだつたな」

感じる寒気を抑え、ギイはもう一つの光明、その闇を打ち払う手段を思い出した。

「うん、それについて一切嘘はないよ。負けても勝つても転スラ世界を出ていく。でも、今すぐ戦いに行く気は微塵もないよ？君なら、察しが付くだろうけど」

「あのスライムが万全の態勢になるまで持つつもりか」

勝負とは、互いが万全、互いが本気である事に価値がある。ギイは宿敵との決着を待ち詫びる者として、その価値を十全に理解してい

た。

「その通り！だから退去命令とか横槍とかはなしにしてね？」

「しないと約束してやる。だが、そっちが言葉を違えた時は全力でお前を滅ぼす」

お茶ら気ながらも邪気を垂れ流すカイに、ギイは最大限の怒気で対抗する。

強すぎる気迫による世界の軋みも、物理的な床や壁の罅割れも気にすることなく、カイはニツコリと微笑む。ギイは一応肯定の意として受け取り、怒気を潜ませた。

「僕の用件は済んだけど、そっちは何かあるかい？」

「さっさと出ていけ。それ以上お前に望むモノはない」

「あ、そう？じゃあとつとと去るさ。じゃね、バイビ」

手を振って消え去るカイ。

ギイは先程までのカイとの会話が「幻であれば」と願いつつ、しかし現実である事を直視して一抹の不安を抱えるのだった。

「もしかしたら、俺では倒しきれないかもしれない」という不安を。

第二十五話 ユメの中ならぬ霧の中

「漫画が、漫画の続きが読める……。ああああ本当にエース死んでるうううううう！おのれ海軍……。くすん、美人薄命だ……。ああああ一護の最後の月牙天衝かつこいこいこいこい！死神の力をすべて使った一撃。最後の一撃は、切なく……。うおおおおおオビト、カカシいいいいいい！カカシ先生にこんな悲しい過去が、こんな悲しい因縁が……。涙が出、出ますよ……」

目の前で漫画を読みながら絶叫する優樹にリムルは少し引き気味になりながらも、もし自身が優樹の立場に置かれていたらと考え、「分かるってばよ」の精神に至った。

さて、^魔ジユラ・テンペスト^国連邦国の国王であるリムル・テンペストと自由組合^{ギルド}の自由組合^ド総帥である神楽坂優樹が対面している経緯だが。ざっくばらんに言ってしまうえばリムルが色んなコネを使ってアポイントを取ったという話である。

リムルはブルムンドに所属するギド、カバル、エレンの冒険者三人組とは今でも宜しくやっているし、自由組合^{ギルド}支部長であるフューズとは色々あって友情を凶れた。そのフューズの伝手で優樹への紹介状を貰ったのである。途中でブルムンド国王と国交を協議したり、冒険者に登録したりなど様々な事があったが割愛。とにかく、リムルはそうして同郷と思わしき人物と接触の機会を設け、現在対面しているのだ。

そして、会う前こそ組織のお偉いさんである人物との対面に緊張していたが、実際会ってみれば何の事はない。優樹はリムルにとって気さくな良い奴だった。少なくとも今は。

「ん？あれ？リムルさん、ナルトの最終巻は？」

「ああ、悪いな。俺も最終巻までは読んでないんだ。その前に転生しちゃったからな」

「ふむ、そうですか……」

おそろく次が最終巻だっただろう事にリムルは悔しさを湧き起こす。優樹もそれが悔しくてそう述べたと思ったのだが、一番最後の巻

を見つめて考え込む優樹の様子にリムルは違和感を覚えた。

「どうしたんだ？ナルトで何かあったか？」

「いえ、以前リムルさんとは別の異世界人から、「ナルトはヒナタと結婚した」という話を聞きました。確かにこの巻でもその結果は予想できるのですが、アイツは予測ではなく断言をしていました」

「俺より後に転移してきた奴がいたのか？」

「おそらくリムルさんが最新です。それに、アイツはそもそも300年前に転移してきたはず……。そもそもナルトどころか漫画なんて文化を知っているのはおかしい……」

当時は冷静ではなく、今でもその人物を思い出せば腹が立って冷静になれない優樹だったが、他人から糸口を得る事でその不思議な点を優樹は発見できた。

「そこって別に不思議がるどころかい？元の世界とこの世界が密接してる訳じゃないんだ。時の流れが同期していないのなんておかしくも何ともないだろう？実際僕も未来から転移してきたっぽい異世界人と会ったし。「約束された勝利の剣」って叫びながらビーム出すとか Fate 以外あり得ないからね」

「え？」

唐突に響く第三者の声にリムルは驚いてそちらを向いた。しかし、リムルがその声の主をしつかり視認するより、優樹がその声の主を蹴飛ばし、壁に叩きつける方が早かった。

次に大きく響いたのは、壁が原型なく罅割れるけたたましい音と、叩きつけられた人間が衝撃に耐えられず爆ぜる生々しい音だった。

「え!？」

リムルはその悲惨な光景と優樹の顔を交互に拝む。悲惨な光景は今世でも滅多にお目にかかれない大きな血だまりと粉々になった肉片。優樹の顔は冷徹な復讐者のような理性的な怒りの表情。そんな状態がほんの一瞬で出来上がったのだから、リムルの思考は現実を追いつけるはずもない。

「もはや『自動操縦』の域だね。僕を視界に入れたら殺す条件反射でも身に着けたのかい？神楽坂優樹」

「貴様の穢れた口で、僕の名前を呼ぶな」

そんな惨状も一瞬、何事もなかったかのように、何事もなかった一室に元通り。優樹の顔が今も復讐者の表情でなければ、先程の惨状が現実であったかが疑わしく思えてしまうだろう。

「いやいや全く、これじゃお話にならないな。僕は争いに来たんじゃないんだよ？少し話し合おうよ。話し合いで解決するのが、人間の理性だろう？」

悠然と椅子に座り、挑発的にも映る不気味な笑顔をカイは浮かべる。優樹は今更振り切った怒りがその程度で煽られる事もなく、次の殺せる機会をただ待ち続けていた。

「ちよ、ちよっと待てお前ら！いい加減俺にも分かるように状況説明をしろ、報告・連絡・相談は社会人の基礎だつて学んだだろ！それが徹底されていない会社はブラックだぞ！」

まだ頭が追い付いていないので多少発言がズレているが、とりあえず現状の理解に努めようとリムルは二人を制止する。

「ああ、ごめんよリムル。彼にはちよっと嫌われていてね。僕としては仲良くしたいんだけどさ」

「僕の恩人を死地に送っておいて、どの口が言う。これから先貴様が何をしようと、僕の怨敵であるのは変わらない、絶対にだ！」

「恩人を死地に？どういう事だつてばよ？」

片やニコニコ笑みを絶やさず、片や轟々怒りを絶やさぬ様子の中でもリムルは冷静に、こうなった原因に繋がりそうなワードを探り当てる。

「人聞きが悪いな。僕は静江ちゃんが良き最期を迎えられる場所を教えただけだよ」

「それさえなければ、貴様がかどわかさなければ、シズ先生はまだ存命だったかもしれない！」

「おいおい、希望的観測にも程があるんじゃないか？もう末期だったのは君も気付いていただろう。静江ちゃんはどうかあれ死ぬ運命だった、本来魔力を静める精霊のせいだ魔力が乱れていたんだからね。手の施しようがなかったのは、君が一番分かっていただろう？」

「黙れえ！」

優樹が怒り吠えれば吠える程、カイのその口角は吊り上がっている。リムルが見ても、彼らの関係はどうしようもなく破綻していた。「さてさて。もう充分君との話し合いは楽しんだし、ここじゃありムルとの話し合いは無理そうだしね。僕はそろそろお暇するよ。じゃね、バイビ」

カイは手を振ってにこやかに、幻想だったかのように消え去った。優樹はカイの居た場所を睨みつけ、噛み砕かんばかりに歯噛みしている。

「お、おい……。大丈夫か？」

「ええ、ええ……。大丈夫です。……見苦しいところをお見せしてしまいました」

事態の理解より先にリムルは優樹の様子を気に掛け、気に掛けられた優樹はゆっくりと怒りを鎮静させていった。

「なんか、シズさんの事で争っていたみたいだけど。詳しく訊いても良いか？」

優樹が椅子に腰を落ち着けたところで、リムルは先程の争いの理由を詮索する。正直、カイが静江の関係者というのは本人から聞いているので分かっているが、優樹が静江の関係者かもしれないのは初耳だった。静江は英雄である前に冒険者であつたから冒険者の元締めと関係があるのは当然だろうが、さっきの優樹の怒りを見ると、冒険者と冒険者の元締め以上の関係があるようだった。

「何処から話したのか……。そうですね、僕とシズ先生の関係から話していきましようか」

亡き人との記憶を想起する事に、優樹は寂しさと悲しさに苦しめられながら、ゆっくりと息を整える。

「僕はこの世界に転移したばかりの時、右も左も分からぬところをシズ先生に助けられました。魔物との戦いに非力な僕を、先生は安全なこの王都まで守り抜いてくれたんです」

「そうか……」

多少無理して話してくれている事をリムルは察しながら、優樹がそ

の苦しみを少しでも吐き出せるように、少しでも分かち合えるように相槌だけを打つ。

本来、静江だけではなく時の勇者も助けにくれたのだが。優樹は不要な情報としてそこは省いていた。

「僕はシズ先生に、少しでも恩返しをしたいと思いました。僕には戦う力はほとんどありませんが、幸いにして僕は組織を運営する知識と才能がありました。ですから、間接的にはなりますが、彼女の冒険者活動がサポートできるようと、冒険者組織を再編したんです。その結果が僕の今の肩書、『自由組合総帥』です」

リムルは優樹に感心する。彼は知識や才能があるからと組織再編・運営を実行に移した。高々数年で実際にやってのけるのは、知識と才能だけで果たせる事ではない。人一倍努力をしたのだろうと、リムルは恩返しでそこまでやる優樹を称賛していた。

「しかし、そんなモノは本当に間接的で、あまりにも迂遠で、酷く微力で……。僕は、シズ先生を救えませんでした……」

悔しさと涙を滲ませ、項垂れる優樹。リムルは促すような追い打ちの如き行為をせず、彼自身が続きを話すまで静かに待ち続ける。

「シズ先生は、身体的な欠陥を抱えていました。憑依していた精霊に拒絶反応を示していたんです」

「拒絶反応……。炎に対するトラウマか」

リムルはその言葉に思い当たる記憶がある。静江は「炎が嫌い」で、憑依しているのは「炎の精霊」と言っていた。

「シズ先生は空襲の経験者。炎がトラウマになっているのは当然でしょう。しかし、トラウマで憑依が上手く行っていないにしても、それが生命力を削る程魔力を乱すなんてあり得ないんですよ」

「ま、マジでか……」

（告。精霊と憑依者の相性により魔力の操作に何らかの不具合が起きる可能性はあります。しかし、生命に不具合を起こす可能性は非常に低いです）

（マジか……）

リムルはちやつかり『大賢者』に正否を確認し、優樹の論述が正し

い事を裏付ける。

「僕は炎の精霊に何か仕込まれたのではないかと考え、シズ先生に憑依された時の事を訊ねました。炎の精霊の元の所有者はレオン・クロムウエルという魔王であり、彼がイフリートに憑依を命じたそうですが。その場にカイ・ヤグラも居り、憑依される直前に、彼に不思議な問い掛けをされたとの事です」

「ま、まさか……」

「炎の精霊に、カイ・ヤグラが何か仕込んだのかもしれない。僕はそう考えました。実際、憑依された直後にレオンとカイが言い争っていたのをシズ先生は記憶していました。もしそれが、何かを仕込んだカインにレオンが怒っていたという事ならば……」

「カイ犯人説が濃厚になる……」

驚愕のままリムルが頭に過った思考を呟けば、優樹は確信を持って力強く頷く。

「それだけではありません、リムルさん。貴方がシズ先生を食べたと伺っていますから、シズ先生が最期はジュラの大森林で何かしようとしていたのはご存知でしょう。それで、どうやらシズ先生は、カインに促されてジュラの大森林に向かったようなのです、暴走直前の状態で」

「……っ」

リムルは固唾を飲んだ。

状況証拠が揃っていく。もはやカイに何らかの企みがあったのは疑いようもない。

リムルの中で、カイという男への印象が揺れ動いていた。

静江からの視点では、彼女を救った善人。優樹からの視点では、彼女を貶めた悪人。リムルとしてはまだカインを凶りかねていて、どちらが正しい視点なのか判断が付かない。

「リムルさん、カイは貴方も標的にしていた。何を目的としているのかは推測できませんが、暴走直前の人間を送り込む爆弾を仕掛けるような所業をしておいて、貴方と友好的に有ろうとしている。貴方を謀ろうとしているのは明白です」

「優樹の言い分も客観的に見れば正しいだろう。しかし、リムルはカイの「良き最期を迎えられる場所を教えた」という言葉を聞き逃していなかった。文面そのままを受け取れば、カイはもうどうしようもない静江にせめてもの手向けを贈った事になる。」

「リムルさん、カイ・ヤグラを倒しましょう。彼は危険だ。彼の打倒は並大抵の策では無理です。彼は多くの冒険者と戦って生き残っています。それどころか、『勇者』でも倒しきれなかった噂があります。彼を倒すには、多くの協力と、入念な準備が必要です。リムルさん、貴方もどうかご助力の程を」

真摯で真剣で本気目がリムルを見つめる。優樹がどれ程復讐に執念を燃やしているか、問うまでもないくらいに伝わってきた。

「少し、考えさせてくれ……」

何が正しいのか分からず五里霧中に陥る中、リムルはほぼ放心しながらもカイという男を間違った解釈に当てはめる事を恐れ、決定を保留にした。

第二十六話 ユメは脳に詰まっている

「準備を急がせなさい。目標が近々イングラシアを発つ可能性が高い」

「はっ！」

神聖法皇国ルベリオスにある西方聖教会、聖騎士団本部にて、騎士団長の位を持つ坂口日向ヒナタ・サカグチが部下への指示を出していた。

目標が思った以上に早くイングラシアを発つのもあって、準備は遅れている。急がせるべく、わざわざ騎士団長である日向が兵装舎にまで来ていた。

目標はイングラシアで魔素が不安定な異世界人の対処に当たっていたらしいのだが、それもすぐに問題を解決したらしい。誰も解決できなかつた問題を、早急に解決してしまった。

「脅威度設定を2段階程上げるべきね、今回の魔物は厄介そうだね。魔物を束ね、あまつさえ人の世に幅を利かせようとするのだから、頭は人一倍、いや、魔物一倍回るのかしら。リムル・テンペスト」

上記の情報を受け、日向は今回の目標に対する脅威度を修正した。

今回の目標、リムル・テンペスト。その魔物は魔物でありながら魔物を束ね、国を興し、そして人と貿易をしようとしているのだ。あまりにも常軌を逸している。

その魔物を脅威と受け取ったのか、神託が降りたのだ。魔国討つべし、という神託。教会のかなり高い格から、そう神託が降ったのだと伝えられた。

実際、それが教会の主神たるルミナスから降った物か判断が付かない。だが、日向には関係のない事だ。元より、教会の教えには魔物討つべしという一節がある。聖騎士団長である日向は教えに従い、ただ魔物を狩るだけだ。

「魔物の国を離れ、被害を出さないようにするにはこの機会しかない」

日向なら下手な魔物には負けないが、魔国には下手じゃなく魔物が揃っているという話。できるならばそんな国に挑みたくはない。だからこそ、魔物たちの頭であるリムルが単身で国を出ている今が好機

だった。

束ねる王が居なければ、魔物の集などそれこそ烏合の衆だろう。

「そんなに焦ってどうしたんだい？ 婚期でも逃しそうなのかい？」

積み荷の進捗を監視していた日向の視界を、男が遮る。今まで居なかつた者が唐突に現れた事に日向は目を見開くが、その男を正確に認識して頭を冷やした。自発的に頭が冷えた、というよりは、その吐き気を催すような男を見て、冷える背筋のついでに頭が冷えたようなものだったが。

「全員避難！ 伝令はすぐに警報の鐘を鳴らしなさい！ 魔王カイ・ヤグラが侵入しているわよ！」

日向の判断は早く、騎士団員の行動も早かつた。訓練の賜物と言わべきか、団長の指示を疑う事なく円滑に熟していく。兵装舎は、瞬く間に日向と、カイだけになった。

「おやおや、僕一人に大慌てだね。そんな熊が出たんじゃないんだからさ。あ、でもこの世界の人なら熊くらいは動じないか。もつと凄い熊ならこうなるかな？ 凄い熊ってなんだろう……、変形戦艦乗リこなす熊 IDのシユウ・スターリングとかかな？」

何が面白いのか分からないが、カイは不気味な笑顔で意味不明な言葉を発していた。日向はその言葉の半分も脳に通さなかつた。

「あなたが、カイ・ヤグラね」

「その通り！ 僕が窓辺のマーガレットと同じm——っ」

日向は本人確認が取れたので躊躇なくレイピアで攻撃する。しかし、そのレイピアはカイを傷付けない。

「恐ろしく速い攻撃だ、僕なら見逃しちゃうね。本当に兆候も過程も全部見逃したけどー！」

「噂は事実のようね、『最弱にして最凶の魔王』。戦闘力は一般市民より低いわ」

自身の窮地すら理解していないようなカイに、日向は呆れながら二撃目を入れた。やはりこちらも肉体にダメージは負わせない。

「お久しぶり、日向ちゃん。前会った時と口調が違うね？ あの時は緊張してたのかい？」

「お久しぶり？何の話かしら。私とあなたは初めて会うと思うのだけ
ど」

会話に付き合って油断させ、日向は淡々と三撃目を入れる。

「ああ、ごめんね。「私にとってはつい昨日のような出来事だが、君に
とっては多分、明日の出来事だ」、なんてね」

「会話が成立しないのも噂通りね」

最早話を聞く気も起きず、日向は作業的に四撃目を振るう。

「随分トゲトゲしてるねえ、静江ちゃんの生徒とは思えないよ。君、も
うちよつと先生の言う事は聞いた方が良かったんじゃないかい？」

「シズ先生と旧知の仲だと言うのは聞き及んでるけど、あなたがあの
人の恩人とは信じられないわ。話によると、末期の先生をあの魔物の
国に送ったそうじゃない」

五撃目がカイを捉える。

「僕はいつでもマイナスの味方だからね」

「これ、話の前後は合ってるかしら」

会話が噛み合っているかも定かではなくなっているが、それはそれ
として六撃目がカイを襲う。

「……ほんと、呆れたわね。あなた、何されているか分かってないの
？」

さすがに微塵も避けようとしないうるカイに、日向は疑念が湧き始め
た。

「うん？攻撃されているけど、ダメージが全くないね。そういう手品
かな？」

カイはこれ見よがしに自身の体を探って見せ、肉体へのダメージが
ない事に肩を竦めた。

「そう、じゃあ手品って事にして。さっさと逝きなさい」

「女性が「イキなさい」とか、君はなんてひw——……」

七撃目が命中した瞬間、カイはパタリと倒れ伏した。

「七彩終焉刺突撃。七度の攻撃で確実な死を与える攻撃よ」

先程までの七度の攻撃は肉体にダメージを与えるモノではなく、
精神スピリチュアルボディにダメージを与えるモノ。そして、七度目で完全に精神体

を壊す攻撃だった。

肉体ハードウェアではなく精神ソフトウェアを壊す攻撃。カイは確かに肉体の欠損に対しては無敵を誇ってきたが、精神体の欠損はどうだろうか。

結果は見ての通りである。

「……気付かず死んでいった魔物は数多く見てきたけど、あなたみたいに馬鹿な死に様曝した奴は初めてよ」

物言わぬ死体を日向は侮蔑し、見下した。あまりにもお粗末な死である。これが今まで不死とされてきた魔王の死では、笑い話にもなりはしない。

「馬鹿な死に様曝するのは慣れててね、僕ってよく事故るからさー。この前なんて転がってる酒瓶踏んでね。転んだ先に割れた酒瓶が、尖ったところを上にして立ってたんだ！もちろん僕の心臓にズツプシ。それで死んじやうんだから爆笑だよねえ。ま！オールイズファンタジー全部幻想なんだけどね！あと酒場は静まり返ってたんだけどね！」

「なっ!?」

日向は即座に飛び退く。先程見下していた死体が、何事もなかったように元気であった。

「あなた、何で死んでいないの?」

「はあ? 僕が死んだって? 幻想でも見てたんじやない? それとも僕が幽霊に見える? それこそ幻想だね!」

「そう、あなたの手品トリックね……」

日向は冷や汗をかいた。殺せたはずだ。七撃入れた感触は手に残っている。では、それら全てが、本当に夢だったのか。カイが見せた幻術だったのか。日向は底知れない闇を覗き込んだ気分だった。

「これでもさ、期待してたんだよ? 精神を壊す攻撃、それなら僕は死ぬんじゃないかって。精神が壊れてしまえば、悔しくも恥ずかしくないだろう?」

カイは精神体の破壊で自身を蘇生しなくなるのではと、少しばかり期待していた。それも最上ではないが、完膚無き敗北だろう。なんせ、後から悔しさも恥ずかしさも覚える事はないのだから。

「でも残念だ。僕の幻^蘇実^生当^避は文字通り脊髄反射だったみたいだね」

カイの現実逃避はもう体に染みついているため、精神体が壊され、何も思わなくなつたところで体が死の現実を逃避する。蘇生は半ば自動的に行われるよう、体の習慣になつてしまつていたのだ。

「……まるで、呪いね。体や魂にも渡つてかけられた不死の呪い」
「ま、似たようなモノかな。呪いは不死じゃないけど」

日向の所感をカイは部分的に肯定した。言い得て妙だが、『過^{マイ}負^{ナス}荷』は呪いのようなモノだ。生まれた瞬間から付き纏う世界からの呪い、逃れられぬ不幸の運命。カイはあくまでその歪んだ運命を応用して現実逃避しているだけなのである。

「さて、僕の信条では「やられたら、やり返す。やられなくてもやり返す」、なんだけど……」

カイが何処からか大きな釘を出現させ、膨れ上がった不気味さに日向は思わず構える。

「はいはい……。静江ちゃんと約束があるからね、君には手を出さないよ」

膨れ上がった不気味さは、カイの溜息と共に霧散した。

「先生との、約束……?」

「ああ。それと、伝言だよ。「あなたが何をしても、元気であるならば私は嬉しい」、だって。自身で伝えれば良いのにね?」

カイはやれやれと、静江からの言葉を日向に贈った。

日向は呆然と立ち尽くす。静江の制止など聞き入れず離れていった自身に、彼女がそんな言葉を遺すとは予想していなかったのだ。

「それじゃ、約束は果たしたからこの辺で。じゃね、バイビ」

カイは手を振って、初めから居なかつたかのように消え去った。

「元気であれば……」

日向は遺言を噛みしめ、齒噛みする。

「先生は、いつまで私を子ども扱いするの……!」

自身より実力のない者に心配されていた事が、日向は気に入らなかつた。

「私はもう、誰の力も借りずに歩ける!私はもう無力じゃない!」

母を救えなかった自身とは違うのだと、日向は叫んだ。

そこまで導いてくれた者たちが居る事に、今も支えてくれる者たちが居る事に、気付かないまま。

◇◇◇

「あの、カイさん……？」

「ちよつと待って、今良いアングル探してるから」

「アングル探して何ですか！どうしてそれで寝そべる必要があるんですか！」

狭間空間に静江の悲鳴が木霊する。彼女はワイシャツの下を覗き込まれないよう必死に裾を引つ張り下ろしていた。

「伝言伝えたら何でもするって約束じゃないか！今すぐその手を退けるんだ！そこには男の夢が詰まっている！そう、裸ワイシャツの、その下に！！」

目を見開くのがよもやこんな時であるとは、静江も予想外だっただろう。しかし、カイは本気も本気なのだ。

だって、女の子のワイシャツ一枚だけの姿、裸ワイシャツがそこに広がっているのだから。

「ど、どうしてこんな事に……」

爆発しそうな程の羞恥心に顔を赤く染め、秘所を守るように内股になる。その所作がそそのモノである事を静江は知らない。

「僕なんかにお願いをするからだよ、『ダイイングメッセージ結 言 状』で直接伝えられたのに。僕が面倒だって言っても「何でも言う事を聞くからお願いしま

す」と君は返したんだ。悪いけど、その言葉は僕に言っではいけないベスト3に入る言葉だよ？」

「で、でも……」

静江は自身で言葉を伝える踏ん切りが付かなかった。彼女は自身が既に人生を終えた人間である自覚がある。そんな人間が今を生きる人間に干渉してはいけないという、固定観念と言うべきか、義務感と言うべきか、そういう柵があった。

それと同時に、静江はどんな顔して会えば、言葉を伝えれば良いのか、分からなかったのだ。日向に対して、静江は放置してしまった罪

悪感がある。大切な教え子なら全力で行方を探すべきだったと、自罰的すぎる罪悪感を抱えているのだ。

他の教え子にもそうだ。静江は楽になりたいからと、教え子たちを置いてジユラの大森林へ向かった。それは、教え子たちへの裏切りにも近い行為だ。

今更、会わせる顔がない。

「そんなくだらない事を気にしてるのかい?」

「くだらない事、ですか?」

「くだらないさ、全く以つてくだらない」

静江が問い返せば、カイは見開いた目も細めて苦笑する。

「やらなかった後悔よりやった後悔ってね。それに、僕たちは『過負荷』だ。他人の迷惑なんて気にせず、好きな事すれば良い。この前も言ったろう? 「好きなように生きて、理不尽に死ぬ」って」

ダメダメな生徒に教授するが如く、カイは優しく諭す。好きに生きて良いんだと。

「……この前は「好きなように生き、好きなように死ぬ」でしたよ?」
「あれ? そうだったっけ? まあ大して変わらないでしょ」

自身の発言もすっかり覚えてないカイに、静江は溜息を吐いた。言われた側は一言一句覚えているのに、言った側がこれではやるせない。

「後、いつまで寝そべってるんですか……」

「いやあ健康的なふとももだね、静江ちゃん」

「……カイさんの変態」

「ありがとう、ご褒美だよ」

静江が軽蔑の視線を向ければ、カイは逆に喜んでサムズアップした。息子はアツプ（意味深）してないので健全である。

第二十七話 人生最期に日を拝む、そんなイイユメ

「一体どうして……」

リムルは打ちひしがれていた。

彼の目の前に並ぶのは100を超える配下の死体。リムルが治める魔国の民、国を興すのに助力してくれた仲間、そんな彼らが人間に襲撃された結果である。

リムルが国に居れば、このような事態にはならなかっただろう。イングラシアと魔^{ジコラ・テンベスト}国が離れているとはいえ、襲撃の報告を受けてから全速力で向かっていけば間に合ったはずだ。

しかし、それは叶わなかった。ルベリオスの聖騎士団長、^{ヒネタ・サカグチ}坂口日向の妨害があつたのである。彼女は妨害ではなく抹殺を試みていたが、それについてはリムルが一枚上手だった。

リムルは命からがら逃げる事ができたが、そのタイムロスが致命的だった。

「ところで、シオンはどこだ？ さつきから姿が見えないんだが」

100人の犠牲でも、リムルは冷静さを、元人間としての道徳を守った。この言葉の、結果さえ目にしなければ……。

「シオン……？ 目を開けるよ……。目を、開けてくれよ……」

ベニマルに連れられた場所には、シオンの死体があつた。前述の配下と同じで、もう目を開けない。

リムルには、彼女ならと、信頼があつたのだろう。如何に対魔物の結果が張られたこの魔国においても、その程度の弱体をモノともしていかないだろうと、勝手な思い込みをしていたのだろう。

失うはずがないと思っていたモノの喪失。「人間を殺すな」と身勝手なルールを作った結末。治安の良い日本で暮らした日本人の平和ボケ。

いくらでも自身を貶す自虐の言葉がリムルの中に湧いてくる。

それなのに、こんなに悲しく、こんなに虚しいのに、涙は流せない。スライムである自身に涙を流す身体機能はない。それはリムルに自身がもう人間ではない自覚を強くさせた。

「スマン。暫く、一人にしてくれ……」

仲間の死に悼み、主の傷心に悼むリムルの配下は、主の言葉に従った。

リムルは独りになる。

「俺は、どうすれば良かったんだ……。俺は、間違っていたのか……？」

『大賢者』に何度「告。計算不能。理解不能。回答不能」とシステムボイスで返されても、リムルはその問答を止められなかった。

「やあ、リムル！どうしたんだい、そんな落ち込んで。ガチャで爆死でもしたかい？もしかして、FGOスカサハハリスカデーの人権引けなかった？」

そんなシリアスモードなど意に介さず、カイがリムルの前に現れる。カイが自身の敵かどうか、優樹に疑念を打ち込まれていたリムルだが、今はそんな事を気にしている余裕がなかった。

「周りを見れば分かるだろう？この死体の山は、馬鹿な俺が作ったんだ」

同じ日本人という認識が強いせいか、リムルはカイを突っぱねず、この無残な光景を生み出した醜態を曝け出した。馬鹿だと他人に罵ってもらえれば、少しはこの虚しさも晴れるのではないかと、期待した。

「何を馬鹿な事を言ってるんだい？この死体の山を作ったのは、魔国の富に目が眩んだファルムス王国のエドマリス国王だよ？より正確に言えば、その人の指令を馬鹿正直に受け取って、正義なんてくだらないモノに酔った兵士だけだ。まあ、兵士は王の手足だし、やっぱりエドマリス国王が全部悪いよ」

ただ、リムルは期待する相手を間違えた。

「富に目が眩んだ……？」

「そうだよ？対外的にはルベリオスから「魔国討つべし」なんて神命を受けて、「魔物を恐れる民草のために」なんて大義名分貼り付けているけどね。薄皮一枚めくれば、そんな私利私欲がこんにちわ！ってね」

カイは不気味な笑顔を携えて、リムルの道徳に毒を垂らす。

「俺は、俺の仲間は、馬鹿野郎の欲望で死んだって言うのか……？」
「そうだよ、リムル」

口が三日月を描くカイ。いつもだったなら不気味さが強く、リムルだって彼の言葉をうのみにしなかつたらう。

「彼の王お金大好きなのさ！だから、ドワルゴンから西欧諸国の唯一の窓口としてお金儲けしていた。でも、そこに現れたのが魔国という商売敵。なんだかドワルゴンはそっちを流通路に使っちゃうし、ブルムンドとも仲が良いし。ファルムスは実際それで儲けが減ってる。彼としては、大好きなお金を盗まれたのと同じなのかもね」

「そんな、馬鹿な話が……」

「正しくそんな馬鹿な話だ。君だってお金を横取りするつもりはない。あっちから友好的に話を持ちかけてくれば、それこそ今まで稼いだ以上のお金を稼がせてあげるくらい、君にはできる」

実際、リムルは利益を重視せず、仲の良い政治を目指している。特産品にしようとしている上位回復薬^{ハイポーション}だって、他の国から見れば異常な程安い値段で流通させているのだ。カイの言葉も大言壮語ではない。「ねえ、リムル。そんな馬鹿にやられて泣き寝入りするなんて、嫌じゃないかい？先にやったのはあっちだ。やり返さなきゃ、つり合いが取れない」

「つり合い……」

カイはまるで悪魔の囁きのようにリムルを報復の道へ誘う。行き場のない怒りを抱えているリムルにはとても甘い囁きだった。

「だが、そんな事したって、シオンたちは帰ってこないんだ……」

それでもリムルは踏み止まる。復讐はいけないのだと、世間に叩き込まれたし、漫画やライトノベルが嫌という程吹き込んできた。

「帰ってくるよ？」

「……は？」

「シオンたちを蘇らせる方法、あるよ？」

囁くカイにリムルはわざわざ人間形態になって掴みかかる。

「どうすればシオンたちは帰ってくる！どうすれば俺の仲間は蘇らせられる!!」

しかし、それは怒りによるものではない。藁に縋るようにカイを掴んだのだ、どうやってでも仲間を取り戻すために。

「よおーく考えるんだ、リムル。君は人間じゃない。君は魔物で、死んだ君の配下も魔物だ。主である魔物と配下である魔物は魔力的に密接な繋がりを持っている」

「そういう謎かけは良いんだよ！早く、早く教えてろ！」

リムルはカイをガクガクと振り回す。

「駄目だ。しっかり自分で考えるんだ。ヒントは三つ。一つ、魔国に今張られてる結界は魔物を通さない。君レベルじゃないと出入不可能だ、どう足掻いても。二つ、魔物は主が成長すると配下も成長する。君の配下であるランガなんかが例かな？あのワンワン、君の配下になった後にテンペスタスターフォックス、じゃなかった黒嵐テンペスタスターウルフ星狼になっただろう？三つ、君は魔王種だ。魔王種から『真なる魔王』への進化は君を飛躍的に成長・強化させる」

「そ、それが……？」

『ご立派な頭大賢者』があるんだ。君自身で答えに至ならきや駄目だよ？下手に僕が答えを上げると、どんなしつぺ返しがかかるか分からない。バタフライエフェクトってやつだね」

カイはそう言ったときり、どこからくすねてきたのか、ポテトチップもどきを頬張っている。文字通り、頬が張るくらいに物が詰め込まれた口は、これ以上喋る気がない事を如実に表していた。

『大賢者』、カイの今の話を整理してシオンたちを蘇る方法を考えろ（了。整理、演算……。終了）

リムルが『大賢者』に頼めば、それは数秒とかからず答えを導き出す。

（告。周囲に張られている結界は魔物の魂も通行不可の可能性がります。そのため、シオン以下100余名の魔物の魂も残留している可能性が3.14%の確率で存在します）

（円周率かよー！）

（マスターが魔王種である事実を確認しました。これにより、マスターは人間10,000名の生贄で『真なる魔王』への進化が可能で

す。そして、魂が残留しているマスターの配下はマスターの進化とともに進化すると思われます)

(可能性があつて、3.14%で、進化すると思われる……か)

『大賢者』を以てしてもそんな曖昧な結論しか出せない事項に、リムルは逡巡する。

「何を迷っているんだい、リムル。君の進化に必要な者は、敵が用意してくれてるんだ。お膳立ては都合良すぎるくらいに整ってるんだよ？」

「分かつてる、分かつてるが……」

「君は、大切な者たち約100名と、糞野郎に従う糞野郎10,000名を天秤にかけるのかい？君にとって、君の仲間はその程度なのかい？」

カイの弁舌に、垂らした毒に蝕まれ、リムルの天秤は傾く。

「糞野郎を10,000人殺せば良いんだろ？それでシオンは帰ってくるんだらう？」

リムルの天秤では、自身の道徳心より仲間の命の方が重かった。

(告。可能性は微小ながら存在します)

「保証するよ？僕なんかじゃなくて、世界がね」

『大賢者』の理路整然とした言葉と、カイの意味不明な言葉が後押しする。リムルにとって、それは天使と悪魔に同意を得られたようなものだった。

「ああ、良いぜ。なら、魔王でも何でもなってる」

リムル
人道は魔道へ堕ちる、仲間のために。

それから数日後、ファルムスとジユラ・テンペストの戦争において、戦いとすら呼べない、リムルによる虐殺が行われる。

◇◇◇

「やあ、ギイ。こんにウボア……」

ギイ・クリムゾンの居城、ギイの玉座にて、カイは挨拶を言い切る前に腹に穴が開けられる。

「さすがに酷くない？」

「いや、死んでくれないかなと思って」

「キヤラブレする程？」

「もちろんだが？」

やりとりこそフレンドリーだが、命のやりとりをしている。カイが一方的に取られているだけではあるが。

ちなみにヴェルザードはカイの気配を感じた時点で何処ぞへと姿を消した。嫌っているという事に関してはまだ会話を交わしてくれるギイの方がマシかもしれない。代わりに一度殺すが。

「何の用だ」

「どうせリムルの事を覗き見してるんだろう？良ければ今リムルがやってる戦争を僕にも観戦させてもらえないかな？現場に行くと落ち着いて観戦できないだろうし」

だいたい飛び火で殺されるのがカイの日常茶飯事である。区別なく皆殺しにしようとしているリムルの元に行けばなおさら死ぬだろう。

「……」

ギイは眉間に堀の深いしわを作りながらも指を鳴らす。すると、カイの前に水晶玉を現出した。

「わあい！ありがとう！って、何も映ってないじゃないか」

「対価を支払え」

「ええー、そんなN○Kじゃあるまいし。ケチケチするなよウボア政府公認ヤクザ

……。具体的な請求をしてくれない？僕の戯言なんて聞きたくないんだらう？」

カイは通信料に文句を言おうとしたが、目の前に居るのは政府公認ヤクザより血も涙もない『ロード・オブ・ダークネス暗黒皇帝』ギイ・クリムゾン。気に入らないからと、自身を召還した国も敵国のついでに滅ぼした魔王である。

カイももうこの手の冗談を通じる相手ではない事を把握しているので、建設的な話を促す。把握しているなら元よりそうしろという話だが、生来の癖は治らない。馬鹿は死んでも治らない実例である。

「お前の持つ未来の知識を一つ寄越せ。あのスライムは覚醒するか

？」

「するよ。ついでに、十大魔王の何席かが空くのも教えてあげよう。空席一つはリムルで埋めれば良い」

「何人魔王が死のうと俺には関係ない事だ。くだらん雑魚を間引いてくれるなら願ってもない」

ギイは魔王同士の諍いに関心を抱かず、空席ができる事については素っ気なかった。

「ま、だろうね。『十大魔王』なんて大仰な冠被りながら、その実二人しか覚醒してないとか、肩透かしも良いところさ。ラミスは特殊だから仕方ないけど」

『十大魔王』というのも実は勝手にできた括りだという話。一時期『真なる魔王』でもないのに「自身は魔王だ」と声高に主張する連中が乱立して争い続けた。それにより魔物全体の疲弊が懸念されたので、暫定的なトップ10を作ったのがその起りであるらしい。

カイとしては自身を圧倒できる奴だけで構成されていてほしかった、個人的な欲望である。無茶ぶりとも言う。

「……。あのスライムに覚醒する条件を教えたのはお前か」

前述の魔物戦乱期が長かったが故、『真なる魔王』、魔王種のその先は忘れられて久しい。事実その『真なる魔王』であるギイとミリムが御伽噺のように語られ、実在を疑われているくらいだ。魔物の中でも『十大魔王』を全員知っているのは割合として少ない。『十大魔王』とそれぞれの直属配下くらいのものである。しかも、その二人を知った上で『真なる魔王』というカテゴリーも知っているのは、さらに限られるだろう。

だから、生まれたばかりのスライムが知っているはずはないのである。知っているとするならば、誰かが教えたのだ。一番の容疑者は、ギイの目前で気味の悪い笑顔を浮かべる男、カイ・ヤグラである。「ヒントは上げた。答えは教えてないよ。僕は覚醒に必要な生贄の数なんて知らないしね。あれって個体ごとに変わるんだろう?」

「あのスライムは、必要な生贄の数も算出したのか?」

「さあ。でも今回の戦争で満たすよ。都合が良いよねえ、必要な数を、

彼の敵が勝手に集めてくれるんだから」

「……」

カイがとぼけているのにギイは感付く。

リムルがヒントだけで答えに至れる何かを持っている。カイはそれを伏せている。どういう思惑なのかは分からないが、この男の思惑に思考を巡らすなど、ナメクジの一日を眺めていた方が収穫のある一日となるだろう。

ギイは手元の水晶とカイの水晶に映像を映した。力づくで聞けないのなら、見定めるしかない。

「おお、やってるやってる。「きたねえ花火だ」、なんてね」

その水晶に映し出されたのは当然リムルの虐殺劇。『神之怒^{メギド}』というリムルの新魔法によって太陽光に焼き尽くされる、人間10,000強の焼却現場だった。

「F^自G^称O^魔一部^術ラスボス^王なら熱エネルギー回収しそうだなあ。人間を薪にするとか発想がぶっ飛んでるよねえ」

「誰の話だ」

「こつちの話だよ?」

第二十八話 嫌われてるのを努々忘れるな。ユメだけに

「さて、状況の説明から行こうか。Web版を原作とした二次創作なんだから、そつちを読んで察してくれって言いたいけど。この小説独自の設定とかもあるしね。大筋はしつかり説明するよ。まあそれでも詳細は読者の想像力に任せちゃうけどね」

狭間空間にて、カイは教卓に座りながら謎の解説を始める。

教室に似た趣の空間に、静江は居ない。静江が出て行った、とかではなく静江が居る狭間空間とは別の場所。言うなれば別教室だ。

「まずはファルムスとジユラ・テンペストの戦争について。まあ前回で軽く触れたけど。ファルムスからの15,000の軍勢をリムル一人が虐殺して終了。なんの事はないね」

戦場に出てきた一兵卒から將軍に至るまで、リムルは一人たりと逃さず殲滅。文字通りファルムス軍は軍事における全滅ではなく、文字通り全滅した。ただ、エドマリス国王を除いて。

「リムルは敵国の王だけを生かして尋問。「魔国討つべし」なんて神命を偽装し、エドマリス国王を唆した枢機卿を聞き出した。国王はその枢機卿を差し出す事で自身の命と国の存亡を守ったんだ。唆されたのは自分で、結局号令をかけたのは自分なのにね。しかも、金に目が眩んでいた事は伏せてたし。まあリムルはそれを察した上で見逃したみたいだけど」

エドマリス国王は尋問で多少痛い目にあいながらも拷問を受ける事なく、代わりに枢機卿を生贄として捧げたのだった。

何にせよ、もうエドマリス国王の心は折れている。二度とジユラ・テンペストに仕掛ける事はないだろう。

「そこからリムルはその枢機卿を拷問。こつちは本当に拷問ね。それで、その枢機卿が繋がっている、神聖法皇国ルベリオスのこれまた枢機卿を聞き出した。区別のために、ファルムスの枢機卿を枢機卿A、ルベリオスの枢機卿を枢機卿Bとしようか」

エドマリス国王から生贄として差し出された枢機卿Aは、まさしく拷問を受けて共謀者を吐いた。それがルベリオスに居た枢機卿Bである。

「とりあえず、AとBは共謀してジュラ・テンペストを潰そうとしていた。どっちも魔国討伐への貢献って名誉を得るためだね。功績を得てさらに偉くなるうとしてたんだ。浅ましい話だね。それで、枢機卿Bは「魔国討つべし」という神命を偽装して、こっちは聖騎士団を動かした。リムルを抹殺しようとしてた連中だね」

聖騎士団長、日向も偽装された神命で操られていたのだ。だから、彼女は「魔国討つべし」という神命を受けながらファルムスとジュラ・テンペストの戦争には混ざらなかつた。神命の本物か疑わしくなつたために、日向は動けなくなつたのだ。

「で、間接的に戦争唆したルベリオスだけど。神命を偽装してたつて事で枢機卿Bを処断。彼に全責任を負わせた。最初つから神命が偽物と気付いていた癖にね。魔物を良く思っていない西方正教会としては、あわよくばそのまま魔国が倒せちやつても良かったのかな？」

「魔国討つべし」と神命を偽装されても、法皇も他の枢機卿も枢機卿Bを邪魔せず、西方正教会の主神たるルミナスも訂正しなかつた。

そもそも、西方正教会の教義で「魔物討つべし」とあるのだ。法皇と枢機卿たちはそれに従って止めなかつたし、ルミナスは魔物の新興勢力が狩れるならそれで良しとしていた。

そのため、失敗しそうになつたから手のひら返し。罪の所在を明らかにして裁き、自分たちは悪くないと主張したのである。

「それでそれで。ここからはリムルもルミナスも知らない情報だけど。実は、AとBはクレイマンに思考誘導されていたのさ。非常に迂遠に、欲望のタガをほんの少し緩め。非常に狡猾に、欲望の矛先をほんのちよつと定めた」

枢機卿AとBはクレイマンに操られていたのだ。しかし、直接彼らに助言したのではなく、上の地位が欲しくなるようした。片や不祥事が露見して立場が危うくなつたり、片や高級品の味を覚えさせたり。より強固な立場を、より金が回ってくる立場を、欲しくなるように唆

した。

そして、その二人の前に、分かりやすい餌を用意したのだ。魔物の国という、分かりやすい敵を、分かりやすい名誉を。その情報を適当に、彼らの張る情報網へ乗せただけなのだ。

それでどうなったかは上述の通りである。

「そして今、クレイマンは魔王達ワルプルギスの宴を発令した。用件は、カリオン殺害の疑いがかかっているリムルについて。まあ、でっち上げだよ。カリオン行方不明は事実だけど、リムルはその時戦争やってた。アリのバイはある。でも、分身だの何だの使えば無理じゃないだろうし、そもそも情報のアンテナ建てていない奴も居るかもしれない」

枢機卿を唆し、自身の手を汚さずにジュラ・テンペストという新興勢力を潰す手立てはなくなつた。万策は尽きた上で、最後の賭けにクレイマンは出たのだ。

別の思惑で洗脳していたミリムを使い、カリオンを抹殺。その罪をリムルに着せようと、洗脳中のミリム、共謀中（という事になつている）フレイトと共に魔王達ワルプルギスの宴を発令した。リムルが口を出せないところで決着を付けようとした。

しかし、そこでラミスがその魔王達ワルプルギスの宴へのリムルの出席許可を打診。これが賛成多数で許可されてしまったのだ。

「まあ、もうクレイマンは捨て駒なんだろうね。ルミナスを城から一旦離せば、もうそれで良いんだろう」

カイにはその最後の賭けすらクレイマンが失敗するのは分かっている。カイじゃなくても、事の顛末を把握していた者は最後の手の杜撰さに察する事だろう。

「うん。説明はこれくらいで良いかな？2000字くらい使ったし、なんだか面倒くさくなつてきちゃった」

カイは自分から始めた解説に飽き、教卓から降りる。

「じゃあ、魔王達ワルプルギスの宴の前に。ギイの様子でも見てこようか！」

◆◆◆

「という事でこんにち——」

カイがギイの玉座の前に現れた瞬間、眩い閃光に包まれてカイは灰

となった。その閃光は、レオン・クロムウエルの『純潔之王』メタトロンである。ギイの玉座の間には、丁度ギイに呼ばれたレオンが居たのだ。なんと間の悪い事か。でもいつもの事である。

「いきなり燃やすなんて……。この人でなし！レオン・クロムウエル、君には人間のこころ——」

カイは何事もないかのように復活するが、言葉を言いきる前にまた灰にされた。

「……」

「……」

「……何の用だ、カイ・ヤグラ」

口を開くと灰にされて話が進まなそうなので口を閉じるカイ。口が開いた瞬間に灰にする準備をしているレオン。二人に呆れたギイがカイの発言を許した。

「いや、君が魔王達ワルプルギスの宴に参加するのかが聞きに來ただけなんだけどき？まあレオンの方も気にはなってたから丁度良かったけど。……まあ文句言うとまた焼かれそうだから止めるよ。それで、君たちどうするの？」

「俺は参加する。ミリムの考えは分からんからどうでも良いが、ラミスが打診してきたので興味が湧いた。それに、あのリムルとか言うスライム。直に観察すべきと判断した」

ギイは勿体ぶる事もなく答え、カイを睨む。

ギイの中でリムルへの関心は強まっている。ミリムとマブダチになっっているし、ラミスもリムルを魔王達ワルプルギスの宴に参加させようとする程気に入っているようだ。古い友人が揃って特定の存在に肩入れしているのだ。その特定の存在に興味が湧かない訳はない。

それに、目の前の男、カイによっても関心が強められている。この不死身で不気味な男が目をつける存在、リムル・テンペスト。そいつを水晶越しでもなく直に見られる、見定められる機会。ギイに逃すつもりはない。

「そう。まあ散々僕が興味を煽ってるしね、予想通りだったよ。それで、そっちは？」

「貴様に「そっち」呼ばわりされると腹が立つ」

「名前呼びの方が良い？」

「……ギリギリ異名で呼ぶ事を許してやる」

「そう……」

「そっち」呼ばわりも「レオン」呼ばわりも嫌だったので、レオンは『ブラチナデビル金髪の悪魔』呼びで妥協した。むしろその呼び方は許すのかと、カイは苦笑する。

「魔王達の宴は俺も参加する。議題なんぞはどうでも良いが、リムルとか言う奴には俺も興味がある」

「へえー。具体的にどの辺が？」

「……そのスライムはイザワの最期に関わったんだらう？」

静江がジュラの大森林で亡くなった当時、不可侵条約が撤廃されていなかったために詳細は把握できていないが、レオンは静江がジュラの大森林で亡くなった情報をすっかり得ていた。

同時に、カイが静江をジュラの大森林に送ったという情報も。だから、言い逃れを許さぬが如く、レオンは鋭い視線をカイへ突き刺している。

「意外だね、君がそんな情報に耳を傾けてるなんて」

「放任したとはいえ、イザワは俺が召喚した人間だ。そいつの最期が報われていないと、俺はクロエに顔向けできない」

「あ、やっぱそっち方面なのね」

相も変わらずクロエ一筋のようで、納得するカイだった。

「ま、最期についてはリムルに聞いてよ。一応僕はリムルから静江ちゃんの最期を聞いてるけどさ。僕の言葉なんて信用しないだろう？」

「当然だな」

レオンから信用できない事を信用されているカイは肩を竦めるに留めた。不満を言葉にしてまた灰にされるのも、さすがのカイも面倒だ。

「そういう貴様は参加するのか」

「ちよつと遅刻ウボア……。君らさ、人の話を最後まで聞かない？」

遅刻の旨を伝えようとした瞬間に、カイは外的物理的要因で胃に穴が開くのだ。開く、と言うか消滅しているが。一瞬で穴を塞げるカイでも、悲しみを覚えない訳ではない。

「理由を答えろ」

「……。ルミナスが煩いからさ、最初から僕が顔出していると話が始まらないだろう？もちろん欠席はしないよ。とりあえず、クレイマンの議題が終わってから顔を出そうかなって。だから、遅刻するって話」

最初から理由を言うつもりだったのにあの仕打ち。カイは涙を飲んでギイに素直に答えた。

ルミナスはずっと『時の勇者』関連でカイを追っており、その事について決着していない。まあ、カイが死ぬまで決着が付かないのだから、死なないカイでは永久に決着が付かない。

でもそれも、そろそろ根本的に解決する事なのだ。『時の勇者』はそろそろ封印が解かれる。そのため、カイはその時まで逃走を続けているのだ。

なお、『時の勇者』が解放されても、ルミナスのカイに対する恨みは消えない。是が非でも探し出す事は止め、姿を見つければ殺すくらいにはなる。顔を合わせるだけでカイを殺すグループ、ギイとレオンたちに晴れてルミナスも加わるだけだ。

「ま、一応それまでの話も聞いてはおくよ。結果は見えてるけどね。という事で、僕の用はこれで終了。今度は魔王達ワルブルギスの宴でね！じゃね、バイb——」

何処か満足そうで不気味な笑顔が気に入らなかったのも、ギイがカイの腹に風穴を開け、レオンがカイの体を灰にする。

二人が一瞬きした後、灰の一欠けらも残さず消え去っていた。

彼らの前での決め台詞を、カイはもう諦めたのだった。

第二十九話 人のユメと書いて儚い、人じゃないけど

クレイマン、フレイ、ミリムによって発令された魔王達ワルプルギスの宴には、カイを除く魔王、総勢十柱の魔王が揃ったのだ。

だが、今その一柱が減ろうとしている。

「いやだ！おい、やめろ!!!おいしい！やめろおお!!!た、助けて！カザリーム様あ!!!」

「死ね！」

惨めに叫ぶクレイマンを、リムルが究極能力アルティメットスキル『暴食之王』ベルゼヴユートで魂ごと食いつくした。

端的に言つて、クレイマンは失敗したのである。魔王たちへのリムル誅殺の提案は誰も聞き届けていなかった。そも、その誅殺の動機であるカリオンは死んでいなかったのだ。クレイマンが操った事になっていたミリムを使ってカリオンを抹殺しようとしたのだが、そもそもミリムは操られていなかったという話。マブダチ親友であるリムルを陥れようとしているのを察し、ミリムが一計を案じたのだ。

ミリムはカリオンが死んでもおかしくない戦闘を行ってカリオンの死亡を偽装。実際カリオンは死にかけたのだが、そのおかげもあってクレイマンは騙された。

それでクレイマンの謀りは根底から瓦解し、リムルは謀られた報復として今クレイマンを処断したのである。

一部始終を見ていた魔王たちとしては茶番も同然。クレイマンの死に強い関心を抱く者は居なかった。しかも、若干一名はその茶番すら視界に入れておらず、遅刻者が来るのを今か今かと血走った眼で待ち侘びている。まあ、ルミナスの事である。ついでに言うなら、遅刻者はカイの事だ。

「見事だ。お前が今日から魔王を名乗る事を認めよう。異論のあるヤツはいるか？」

ギイはクレイマンを屠ったリムルに賛辞を送り、魔王である事を認める。強い者のみが魔王となるのはギイの望むところだ。

そして、最古の魔王たるギイがリムルを認めたのだ。他の魔王に異

イ・ヤグラの誕生」——ウボア」

太陽を克服したカーズ太陽を背にしのような決めポーズをしていたカイの腹に、大きな穴が開く。

「何が究極の生物だ。高々精スピリチュアル・ボディ神スピリチュアル・ボディ体になっただけだろう」

もちろん、その大穴を開けたのはギイだった。ギイは即座にカイの状態を見抜き、その状態に有効な攻撃を放ったのである。

「ナチュラルに精スピリチュアル・ボディ神スピリチュアル・ボディ体へ攻撃するの止めない？どこの次元まで射程に入ってるのさ、ギイ」

「阿呆か。その次元は元より俺が居た領域だ」

「ああ、悪魔の居る次元ってそういう感じになってるんだね」

さつきまで無駄にテンション高かったカイは自身のした行動の無意味さに白けていた。

「はいはい僕の負け僕の負け。「なんで勝ったか、明日までに考えといってください」、なんてね」

「お前が弱いからだろうが。ふざけてるのか？カイ・ヤグラ」

「あなたの回答がベストアンサーに選ばれました」、てね。その通りだよ、レオン・クロムウエル。あ、ちなみに「ふざけてるのか？」ってのもベストアンサーね」

血管が切れそうだったレオンはカイへ一筋の光を向けるが、カイはまだ精スピリチュアル・ボディ神スピリチュアル・ボディ体なので擦り抜ける。

「おいおい、話が進まねーぞ。てゆうか趣旨は終わったよな？帰っていいーか？」

ハチャメチャな議場に呆れて背もたれに寄りかかりながら、デイーノは怠そうな顔で惜しげもなく帰りたいさを表していた。ミリムの魔王達の宴発令と意気込んでみればこの肩透かしなのだ、帰りたいもなる。

同時に、彼はできるだけだけカイと同じ場所に居たくなかった。カイに付けられた古傷がまだ癒えていないし、カイの不気味さにもまだ慣れない。慣れた奴は居ないだろうが。

「ちよつと待ってくれ。魔王が全員集ってるから言つときたい事があるんだ」

クレイマンの議題は終わっているので、今度はカリオンが新しい議題を持ち出す。ルミナス以外、全魔王の視点がカリオンに集中した。ルミナスはずっとカイを睨んで離さない。

「俺はミリムに負けた。だから魔王を止めてミリムの軍門に降る」
「む？違うのだぞ、カリオン。あれはクレイマンに操られてやった事なのだ」

「てめえ、知らばつくれるなよ。さつき支配なんて効かねえとか言つてただろうが！」

「それはだな……」

「ああ、ミリム？私も降って良いかしら。今回の騒動を観察していたけど、ちよつと魔王としてやっていけるか心配になってしまったわ。だから、より強い魔王の庇護を受けようと思うのだけど」

「ま、待つのだフレイ！それでは今まで通り気軽に悪だくみできないではないか！」

「貴女に降っても友達のままよ、ミリム。それに、友達なら、守つてくれないかしら？」

「むむむ……」

「そうだミリム！俺様は喧嘩売られて国に馬鹿にならない被害が出てんだ！敗者を庇護する度量くらいあるんだろうな！」

「ええい！もう勝手にするのだ！」

他の魔王が口出しするまでもなく、ミリム、カリオン、フレイの間で話がまとまってしまった。それら三柱の勝手な協定も、他の魔王は強い関心を示していなかった。

「十大魔王じゃなくなっちゃったわね」

ラミリスの何気ない一言に、ルミナスとリムル以外の十大魔王が深刻な表情を浮かべ始める。リムルは皆の様子が一変した事に驚いており、ルミナスはずっとカイを（ry

「補充するにも求められる力量がフレイやカリオン以上となれば、相応しい者は居らぬぞ」

ダグリユールが頭を悩ませる。

空いたのはクレイマン、フレイ、カリオンで三柱。対して埋められ

るのはリムルで一枠。新たな魔王を擁立するにしても、最低ラインがフレイヤカリオン以上。そうそうに埋められる枠ではない。その枠の奪い合いで生き残ってきたのが現在の魔王なのであり、この中では確かに弱い部類に入るフレイヤカリオンも熾烈な競争の果てに魔王という尊称を得ていたのだ。

「この際二枠くらい減らしちゃってもいいんじゃない？弱い奴に肩並べられても困っちゃうしさー」

「十大魔王だの枠組みだのはどうでも良いが。弱い奴が同列に語られるのは俺も癪に障る」

投げやりながらもディーノが減枠を提案すれば、レオンもそれに同意する。特に、レオンはカイを睨みながら言葉を発していた。同じ『十大魔王』ではないが、同じ『魔王』として語られるのが嫌だったらしい。

そんな思いが如実に感じ取れても、やはりカイは笑顔のままだった。

「では、魔王の枠を二つ減らし、『十大魔王』の枠組みを破棄する。異論は？」

ギイのまとめに首を振る者は居ない。無言の肯定を皆が示していた。

「魔王の枠組みを八つにする事で可決しよう。それに際し、新たな枠組みの名称を決めようではないか」

「そういうネーミングはリムルが得意だよ？」

「え!?俺?!」

新たな名称を話し合おうとした瞬間、カイがリムルに話題を向ける。当然、流されるままに流されていたリムルは目を瞠った。

「ほう。では新人、『魔王』となって初の仕事を言い渡す。新たな枠組みの名前を考えろ」

「お、おい!みんなで話し合う流れじゃなかったのか!」

「ギイがそう決めてしまったのだ!仕方ないのだ!」

「おー、そうだな。ギイが決めちゃったしな」

「そうね、ギイが決めちゃったからね」

「そうであるな、ギイが決めてしまつては仕方あるまい」

「勝手に決めろ。俺は興味ない」

ギイが不敵な笑みでリムルを命名者に任命すれば、他の魔王はこれ幸いにと役目を押し付ける。十枠の時も数か月名称を悩んだ末に人間たちが使いだした名称をそのまま採用した連中だ。新しい名称を考えるなんて面倒臭くて仕方がない。

「ああもう分かった、分かったから！後で文句言うなよ？」

リムルは渋々と頭を回しだす。他に任せても碌な名前が付かない未来が想像できてしまつて諦めたのだ。

「名前考える前に、一つ訊きたいんだが、『十大魔王』の時も思つてたんだか、一人多くないか？十一人居ただろ」

「あ、それは僕が別枠だからだよ。僕は『十大魔王』じゃなくて『番外魔王』エクストラ・イビル。僕だけの枠組みがあるから、僕を除いて十人だったのさ。だから八枠のまま名前考えて良いよ？僕は『番外魔王』エクストラ・イビルのままが良いからさ」

「ふーん、そうか……」

リムルの疑問にカイが答えた。何故カイだけ特別な枠組みがあるのか気になりはしたが、リムルはとりあえず目先の仕事を片付ける事にした。

「……八星魔王^{オクタグラム}、でどうだ？八枠だから八芒星を連想してみたんだけど？」

「決まりだ。見事な働きだった、新人」

「うむ、良き名だ……」

「やっぱね！リムルならやってくれるとアタシは信じてたわ！」

「流石がワタシの親友^{マブダチ}なのだ！わははははは！」

「一瞬かよ！スゲーな。前回の三ヶ月は何だったんだよ！」

「……」

「むしろお前たちは三か月何してたんだよ……」

皆が歓声を上げていくのに、リムルは帰って落胆した。『十大魔王』なんて呼ばれているから、もっと怖くて聡い集団をリムルは予想して

いたのだ。

蓋を開けてみれば威圧感もなければ威厳もない集団。実際はここが威圧的になる場面でも威厳を振りまく場面でもないから皆の雰囲気は軽いのだが、そんな事は与り知らないリムルは頭痛がしてきたのだ。

第三十話 誰が描いた、このユメを

「さて、話し合うべき事柄は話し終えた。他に議題がある者は居るか？……居ないな。では、解散とする」

ギイは誰も議題が出す様子がないのを窺い、魔王達ワルプルギスの宴を締める。各々の背後に扉、それぞれの拠点に繋がるワープゲートが現出した。用のない者はさっさとその扉を潜る。特に、ディーノはいの一番にこの場を離れた。

レオン・クロムウエルも、その扉へと近付いていく。

「ちよっと待ってくれ！」

「……なんだ、新星ニュービー」

リムルが急いでレオンを引き留めれば、不機嫌そうでありながらもわざわざリムルの二つ名を呼んだ。

余談だが、リムルの二つ名はギイが勝手に付けた。勝手に付けたのだが、究極能力を持つギイの命名となると、その名は世界にも刻み付けられる。『看破』のようなスキルであれば、その二つ名を閲覧できるだろう。もちろん、『看破』を使われる対象の抵抗に勝てればの話だが。

「シズさんが、お前に感謝してたぜ」

「……そうか」

リムルからのシズの感謝を伝え聞いたレオンは一呼吸置き、顔だけをリムルに向ける。

「伝言、確かに受け取った。……リムル・テンペストだったな。覚えといてやろう」

不愛想ではあるものの、それだけをしっかりとリムルに伝え、レオンは扉を潜った。

「カイ・ヤグラあ!!その鬱陶しい小細工を止めぬか!!」

「無駄無駄無駄無駄あ!」なんてね!」

レオンとリムルが良き邂逅をしている横で、ルミナスとカイは何やら戦っている。というかルミナスの一方的な攻撃が、カイの精神スピリチュアル・ボディ体を擦り抜けている。

ただただ残った被害に圧倒されていたリムル。急に話題を振られてもまともに対応できないので、サラリーマン時代に培ったコミュニケーションスキルで話を聞いていた風に返した。

「ま、「でも、そんな事はどうでも良いんだ。重要な事じゃない」、てね。リムルさ、君に聞きたい事があつたんだ」

「な、なんだよ」

カイの不気味さはまだ滲み出ている。リムルは本能に近い部分が警戒心を掻き立てる。

「人間、元同族をさ、1万人以上殺した気分はどうだったのかつてね？」

「人間を、殺した……？」

カイの問いかけが、リムルに人殺しを再認識させた。敵国であつたファルムスの兵士を殺した事を、人間をたくさん殺した事を、リムルは鮮明に思い出す。

「戦争状態だったからね、誰も咎めはしないさ。むしろ君は褒め称えられるだろうね。それはそれとして、どうだったんだい？ 気に入らない奴を殺す感覚は、しちやいけない事をした気持ちは。清々したかい？ 清々しただろう？ 倫理観とか道徳とか理性とか、そんな事にせず人を殺したんだからね。気持ち良かったろう？ 呆気もなく蹂躪したんだからさ。思い通りに、ぐちやぐちやに、蟻を踏み潰すみたいに、蜻蛉の羽根を筆るみたいに、蛙に爆竹を仕込むみたいに、浮いてるクラスメイトを虐めるみたいにさあ！」

殻である善性を丁寧に剥ぎ、中身である悪性をカイは暴こうとする。

三日月を模すカイの口、その口先は、まさしく闇夜に紛れた悪行を照らし出す月光のようだった。

その月光を浴びたりムルは――

「いや、気持ち悪かったよ」

――罪から逃げず、その身を晒した。

「もつとき、上手くできたと思うんだ。人がさ、金にがめつかったり、口実を作るのが得意だったり、自身を騙せたりする事。ちゃんと知っ

てたら、シオンも、誰も、死なずに済んだはずなんだ……」

「……」

リムルは悔いていた。己の情けなさを悔いていた。自惚れを悔いていた。知った気になっていた自身を悔いていた。

「だから、俺は戒める。そうやってがめつくなくなっちゃう人を、魔王として。そして、これからは共に歩めるよう最善を尽くす、魔物の王として」

悪性が人に、己にある事を強く認識してなお、リムルはその先にある善性を導き出した。己が犯してしまった罪を、他人が犯した過ちを下地に置き、重ね塗りの如くその上で良き未来を描こうとしている。

「そうかい」

カイは目を薄く開く。その目は、心底つまらなそうだ。

「まー過去を悔いていても何にもならないからね！人間の素晴らしさは過去から学べる事。「人間は成長するのだ！してみせるッ」、てね」

そんな目を覗かせたのは一瞬で、次の瞬間にはコロコロと笑っている。

「呼び止めて悪かったね、僕の用件は終わりさ。それじゃあ、これから頑張つてね」

「あ、ああ。それじゃあ、俺もこの辺で」

カイからの奇妙な送り出しに従い、リムルは扉を潜った。

そうしてほとんどの魔王が魔王達の宴の会場から去る。

示し合わせた訳ではないのに、その場にはカイとギイが居残った。ギイは神妙な顔をしている。

「その様子だと、僕に言いたい事があるみたいだね」

「ああ。以前あのスライムに下した評価だが、覆してやる」

ギイの真剣な物言いに、カイは楽しくも不気味な笑みを浮かべた。「詳細を聞こうじゃないか、ギイ・クリムゾン」

「……あのスライムは、異常だ。珍しい、稀有なんでもんじゃない。あの存在は例外、イレギュラーだ」

ギイはこの魔王達の宴中にひっそりと、しかし精密にリムルを観察

していたのだ。そして、観察結果がギイも目を疑う程馬鹿げていた。

「大罪系究極能力『暴食之王』を得ている事は真なる魔王として不思議でもない。だが、何故あいつはそれと同時に美徳系究極能力

『智慧之王』まで得ている。魔物の身で美徳系を得る事は不可能なはずだ。俺が無理矢理『魔王』に括ったレオンとは訳が違うぞ」

大罪系と美徳系、相反する究極能力を同時に所持した例など、

ギイを以てしても知り得ない。いや、有り得ないのだ。

大罪系究極能力は魔を極めた末に得られるスキル。

美徳系究極能力は聖を極めた末に得られるスキル。

魔を極め、同時に聖を極めるなど、転スラ世界の生命には不可能だ。

聖の気を持つから大罪系究極能力を得られないダグリユールがその証拠となるだろう。

なのに、あのスライムは得ていた。そんな存在は「特別」なんて言葉では表しきれない。まさしく「例外」だ。

「ああ、ああ！その言葉が聞きたかった、その顔が見たかった！分かるだろう？分かってしまっただろう？リムルは例外、『異常』だ。彼に世界のルールなんて関係ない。彼こそが、世界のルールなんだよ」

何処までも楽しそうに、これ以上ないという程嬉しそうに、カイは語る。

「あれが、『運命』を持つ者か」

「その通り、まだ使いこなしてはいないけどね。ついでに言うと、リムルは僕の正反対。僕が世界に嫌われる『運命』を背負っているとするならば、彼は世界に愛される『運命』を背負っているのさ」

ギイはその説明が腑に落ち、固唾を呑み込んだ。

カイは日常のように事故にあって死んでいる。「世界に嫌われている」と言われれば納得しかできないだろう。では、その正反対となるリムルは果たしてどれ程世界に愛され、どれ程リムルの都合に合わせ

て世界が回るのか。

ギイは一瞬想像し、身の毛もよだつ感覚を思えた。
「……嫌われ具合、愛され具合に強度があるとしたら。あのスライムの強度はどれくらいだ」

「さあ、それはまだ僕も測りきれしていないよ。願望交じりの推測を述べるなら、僕が嫌われてるくらいに、リムルは愛されてるんじゃないかな?」

「……」

カイがニコニコ笑う程、ギイの顔つきは深刻そうになる。

「安心しなよ、彼は君の味方だ。ひいては世界の、ね。今日窺ってそう判断した。彼の『運命』は本当に、僕じゃ揺るがしやうがない。本気でやればできなくもないけど、それは僕の本意じゃない」

「……真実なんだな」

「誓うよ、僕の『運命』に」

そう言うカイに、不気味さはなかった。その開かれた目にも濁りがない。「誓っている」と言うより、「願っている」と言うようだった。心から、どこまでも。

「今だけは、お前の言葉を信じよう」

全ての不安が拭われた訳ではない。だが、希望がある事をギイは認識した。

「そうかい。じゃあ、僕もこの辺で。じゃね、バイビ」

一瞬きすれば元通りの不気味さで、カイはにこやかに手を振って消え去る。

「……」

ギイは自身の椅子に深く座し、円卓の中央をしばらく見つめていた。

第三十一話 再会をユメに見た、悪夢的な意味で

「ヴェルドラ、お前本当に魔王達ワルブルギスの宴へ出なくても良かったのか？」

リムルは自室にてゴロゴロ本を読んでいる彼の2Pカラー、ヴェルドラのその様子に呆れながら問った。

魔王達ワルブルギスの宴に出席する直前の話だが、ヴェルドラの封印は解き終え、リムルは自身の分身を彼の依り代として貸している。

「出て都合の良い事などないだろう。強いて言うなら、リムル我が友と私の仲をアピールするくらいか。しかし、魔王の中で我を恐れる者は、非常に不服ながら少ない。ジュラの大森林に関して、その統治権の正当性を語れるくらいではないか？」

「ふーん……」

よく考えた上の不参加だったと主張するヴェルドラではあるが、横になってポテチモドキを食べながら漫画を読んでいるのは、例え正しい判断だとしてもリムルは納得できなかった。

「盟友として腹を割って話すのであれば。カイ・ヤグラに会いたくなかった」

「えー……」

情けないヴェルドラの本音に、やっぱりとしようもない本音を隠しているのを察していたリムルではあるが、予想以上にしようもなくて肩を落とす。

「リムルよ！奴はな、お前が思っている以上に異常な奴なのだ！」

「僕は異常じゃなくて『過負荷』マイナスだけどね」

「そうは言ってもな、俺には実感がないんだが。変わったスキルを持っていてみたいけど、それだけだろうか？」

真面目な話をしながら3人はポテチモドキの咀嚼音をパリパリと響かせる。

「馬鹿め！その変わったスキルも異常なのだ！私の解析系究極能力アルティメットスキル『究明之王』ファウストですら奴のスキルは解析できておらんだぞ！低く見積もっても美德系が大罪系の究極能力アルティメットスキルを奴は持つておる！」

「そういうえば、俺のスキルでも解析できてないな……」

「案外究極能力も融通利かないねえ。僕のスキルがやってる事って、意外と単純なのにさ」

ヴェルドラとリムルがカイのスキルを訝しむが、そんな中で一人はあっけらかんとしていた。

「単純ってお前……。俺の屋敷を砂に変えたり戻したりする事の何処が単純なんだよ」

「我の前から忽然と消えもした。初見の時の言葉が嘘でなければ、貴様は異世界への跳躍もできると言うではないか」

「げっ、マジで？もうそれチートも良いところじゃないか？」

「そうでもないんだけどなあ。万能に見えて制約が多いからさあ、僕のスキルって」

「ふむ、あえて制約を作る事でスキルを強力に行っているのか。漫画でもそういうのがあったな。たしか、『ハンター×ハンター』だったか」

「念能力の制約と誓約か、懐かしいなあ。ちよつと読み返そうかな」

『ハンター×ハンター』はグリードアイランド編が好きだったなあ、僕「あー、あそこら辺がなんか俺もピークだったなあ」

話が逸れて漫画談義へと流れ込みそうになる中で――

「ところでリムル？」

「ん？」

「ポテチモドキ、お代わりあるかい？」

――本人が空になったお椀を掲げ、リムルとヴェルドラの注目を集める事で――

「き、貴様！カイ・ヤグラ！」

「え、あ、は?!い、いつの間に?!」

――ようやくカイの存在にリムルとヴェルドラは気付いた。

「いやあまあ。確認しに来たのと、約束を果たしに来たのさ。ヴェルドラちゃん、お久しぶりー、随分可愛らしくなったねえ」

「止めい！貴様に可愛いなど言われたら鳥肌が立つ！」

「酷いなあ、全く。素直に可愛いのを褒めたのに」

自身の体を抱きしめて震えるヴェルドラに、カイは肩を竦める。

美少女と見間違えるリムルの2Pカラーなので可愛い事に当然な

のだが、それはそれとして、不気味さを携えるカイにそう言われると
気味が悪くなってしまうのは仕方がない。

「さて、再会の約束は果たしたし。確認の方を済ませないと。ぶつ
ちやけさ、リムル。ルベリオスの対応はどうするの？」

「ああ、あそこはもう暴走した責任者吊つたって言うしき。俺の国を
間接的に攻めたのは水に流す事にした。それで、国交を結ぶための文
書を送って、今は返事待ちだな」

「教えちやうけどね、日向ちゃんとその配下で攻めてくるよ？」

「……」

当然驚愕の真実をカイからぶちまけられた訳だが、リムルはなんと
なくそんな気がしていた。それでも悪い予感だったので、それが的中
した事に頭痛がしてきたのだった。

「今度は日向ちゃんが暴走したって感じでケリを付けるんじゃない
？」

「……まあ、それ相応の対応はするさ」

元人間の魔王として、リムルは人間の悪性を戒めるつもりでいる。
ならば、今回の下つ端を使い潰すような悪性も、戒めなくてはならな
い。罪悪感があるが、それでも自身の決めた事であるという義務感と
共に飲み込んだ。

「ここでの用事は済んだ。次に行かないとね」

「なんか忙しいのか？ 飯食ってけば良いのに。次ってどこに用事があ
るんだよ」

「怖い提案をするな、リムル！」

「それは、とてもそそられる提案だけど。ちよっと忙しくてね」

リムルは新しい日本食モドキの試食を頼もうとしたが、カイは魅力
的な提案ながらも拒否した。二人ともヴェルドラについてはとり合
わない。

「次は、そう。——」

◇◇◇

「——日向ちゃんに用事があるんだ」

ジュラ・テンペストへ進軍する日向率いる聖騎士団、彼らがジュラ・

テンペストまで後一日かかるだろう距離で野営する場所に、カイ・ヤグラは現れた。

「戦闘態勢！」

日向の判断はとにかく早く、彼女の下で訓練してきた聖騎士たちも行動が早い。全員がカイを囲むように並び、剣を構えていた。

「うん、なんだかちよつと前もこんな感じだったね。あれはいつの事だっけ?」「あれは確か36万……いや、1万4千年前だったか」、なんてね」

「何の用かしら、カイ・ヤグラ」

カイの言葉には受け応えず、日向はカイを睨みつける。

「短気は損気だよ?もつと気長に行こうじゃないか」

「私は暇ではないの」

「ま、そうだよ。取り逃した魔物の国の主に、暴風龍ヴェルドラも居るんだ。そりゃ焦っちゃうよね」

日向は歯噛みした。何処から情報が漏れたのか、この魔王には知られている。少数精鋭での電撃戦だというのは、そんな事はお構いなしにカイは全てを知っていた。

「こっちの事情を分かっているならさっさと消えてくれない?じゃないと殺すわよ」

「あ、そう。今構えてるのって聖霊武装っていう奴だっけ?なんかルベリオスで大事にしまわれてた大層な武装らしいけど。それを持つてるから強気なのかな?それとも僕に静江ちゃんとの約束があるから?はたまたこの前の戦いで僕には大した攻撃がないと分かったから?」

「そのすべー」

「甘えよ」

日向が言葉を言い切る直前、日向と聖騎士たちに釘が打ち付けられる。脳と心臓に一本ずつ。彼女らの鎧や対魔法の備えを無視して貫かれた。

「僕が殺そうと思えば、いつだって君たちを殺せるんだ。自身で作った勝敗条件も静江ちゃんとの約束も世界の都合も何もかも考えなけ

ればさ」

カイは転がった幾つもの死体を不気味に見下ろす。

「まーオールイズファンタジーだけどね！」

「……はっ」

釘が打ち付けられた現実が幻想だったかのように消え、日向たちは息を吹き返した。

皆が釘の打ち付けられた場所を手探り、そこに釘がない事を自覚する。ただ、生々しい死の感覚だけが体に刻み付けられており、流れる冷や汗が止まらない。

「幻想だったけど、それが死ぬって事さ。よく覚えて、よく覚悟しておくよと良いよ？ 君たちがしようとしている事はそのリスクを孕んでるんだからね」

「それでも……」

カイの放つ不気味さに気圧されそうになりながら、しかし日向は立ち上がって武器をカイへと向ける。

「それでも、魔物を許してはいけないの……。教義は絶対よ」

日向の瞳には、微かな濁りがあった。彼女自身に、不純物が混ざっていたのだ。

「なるほど。彼はそういう洗脳をしたのか」

カイは小さく独白し、口の端を吊り上げる。やっぱり彼は、神楽坂優樹は、手段を選ばない男であった事に小さな同族意識が芽生えていた。同時に『過負荷』に引き込めないのを残念に思うが。

「ま、それは後々。というか僕にはもうどうでも良い事だね」

独白を切り上げ、カイはしっかりと日向を見据える。

「一つ訊きたいんだけど、どうして魔物を許してはいけないんだい？」

「……え？」

日向は虚を突かれた。当たり前前の事としてきて、疑いもしなかったモノ。

魔物を許してはいけない理由、教義として何故そう決められているかのという理由。日向は答えられなかった。

「例えば、何処の誰かも知らないそこら辺の人間が魔物の住処で暴れ

たとして。被害を受けて魔物たちが、「人間は我々を傷付ける危険な存在だから」と滅ぼしにかかってきたら。納得できるかい？」

「な、納得できるはずがないわ」

「君たちがやろうとしているのは、人間のところを魔物に、魔物のところを人間に置き換えた事だよ？」

日向だけではなく、そこに居る聖騎士全員がはつとさせられた。

「君たちが納得できないんじや、魔物たちが納得するはずがない」

それはあまりにも明確な真実だ。自身が納得できない事を、諦めはするかもしれないが、他人が納得するはずがない。

種族が違うから。肌の色が違うから。人種が違うから。生まれた場所が違うから。性別が違うから。

そんな言い訳で通していた理不尽を、カイは暴き立てた。

カイの弁舌に、誰も口を挿めない。人の悪性を暴き出すカイの言葉に、誰もが呆然とした。

「僕の言葉を真に受けるも聞き流すも君たち次第。聞き流すのなんてみんなやってる事だから恥ずかしくないよ？自身に都合の悪い事は忘れる。それが人間の特権だからね」

最後まで心を抉りながら、カイはそう弁舌を締めくくる。

「じゃあ、僕の用事は済んだから。じゃね、バイビ」

にこやかに手を振って、今までそこに居たのが幻想だったかのようにカイは消え失せた。

聖騎士たちはカイが消え失せてからも数秒、身動きが取れなかった。

「……魔物討つべし。教義は、絶対よ」

ようやく口を開いた日向の一言。そこにはやはり、濁りが混じっている。その一言を聞いた聖騎士たちも、そう感じ取れた。

第三十二話 再会をユメに見た、今度こそ本来の意味で

「日向ちゃんたちとリムルたちがぶつかるのはそろそろかなあ。気になるねえ、静江ちゃん」

「……」

狭間空間、教室のような空間で、カイは足をプラプラと揺らし、同時に静江の心も揺らそうとしていた。

カイは楽し気に不気味な笑みを浮かべているが、反して静江は俯いている。

「もしかしたら、もうリムルたちがサクツと殺^ヤっちゃったかもねえ」

カイは意図的にリムルたちの様子を観察していない。ひとえに、静江を焦らせるためだ。

彼女は未だに迷っているのだ。日向とリムルの衝突を止められるのが自身だけだと知りながら、彼女は不干渉であろうとしている。

カイだって、それが確固とした意志であるならこのような意地悪は、おそらく多分しない。彼は迷っている彼女を見かねて、背中を押してあげようとしているのである。やり口はちよつとアレではあるが。

「リムルさんが、そんな事するはず……」

「たかだか数人殺すのを、リムルが躊躇すると思う？すでに1万人は殺してるのにな？君の教え子って事で殺しはしないとか？僕は、リムルだったら殺すと思うなあ。だって、日向ちゃんを逃せば魔国は滅ぶでしょ。実力的に、リムル以外じゃ止められない。なら、今後手間にならないように殺すんじゃない？君の教え子って事で罪悪感を抱くだろうけど。それで？静江ちゃんは日向ちゃんが殺されない方に賭けてみる？殺されかかっているかもしれないこの現状で？」

「っ……い！」

カイの言葉が静江の妄信を脆くする。リムルは自身の教え子を殺さないという信頼が、根拠の欠けている妄信であると、諭される。

「でも！私は死人です！カイさんの恩情で自身の存在を保っています
が、私は本来もう居ない人間なんです！」

「言ったような気がするけど、言ってなかったつけ。僕でも『過負荷』
を与えるような都合の良い事はできないよ。『異常性』アブノーマル だったらなお
さらね」

「しかし！カイさんがきつかけを与えてくれたから、私はそれらのス
キルを習得したんです！それに、これらのスキルはこの世界のスキル
ではありません！なら、こんな不条理を用いて接触するなんて――
――」

「くどく」

長く続きそうな静江の弁を、カイは彼女の後方にある机を大きな釘
で爆散させ、無理矢理口を噤ませる。

理論にもなっていない理論武装で、頑なに自己の欲求を封殺しよう
とする静江に、カイは付き合いきれなかった。

「くどい。うざい。鈍臭い。面倒臭い。鬱陶しい。白々しい」

カイは目を開く程心底呆れているし、もう溜め込めないとばかりに
罵倒を吐き連ねる。

「白々しいだなんて――」

「白々しいんだよ、静江ちゃん。いい加減素直になろう。『不幽霊』スリーピー・ホロウ
なんて、死んだ後にも活動できる『過負荷』マイナス を得たのはなんでだい？
やり残した事があって、それをやりつくしたいからだろう？
『結言状』ダイニング・メッセージ なんて、死んだ後に言葉を伝えられる『異常性』アブノーマル を得た
のはなんでだい？遺してしまった人たちとまだまだ話したいからだ
ろう？」

「いえ、そんな……。だって、それは、突然手に入って……。そう、そ
うです。私の『当然変異』オルタナティブ・イベント は望んだ変異を起こせるスキルではあり
ません。だから――」

「じゃあなんでこうして存在保ってるのさ」

「……え？」

聞えながらも言い返していた静江が、カイの指摘で完全に虚を突か
れた。

「そもそもこの話だ。もう関わりたくないって言うなら、さっさと『不幽霊』スリーピー・ホロウを解けば良いだろう？ オンオフは好きにできるんだからさ。そうしてないっていうのはつまり、静江ちゃん自身がまだ関わりたいと思ってるって事じゃないの？」

「……」

静江の目から鱗が落ちた。気付かされた。自身すら理解できなかった本心、心の奥底をカイに言い当てられた。

「とりあえず。様子見てきたら？ 様子見て、それでも干渉したくないって言うなら、僕ももうそれについてとやかく言わない」

「だ、だけど……」

「もう面倒見切れないのでポツシユートになります」

「え!？」

突如、静江の足元に虚空の穴が開いた。突然の事であったために対処できず、静江は穴へと吸い込まれていく。

静江が落ちた穴から見上げれば、カイが笑顔で手を振っていた。

静江には、その笑顔が優し気なモノに見えた。

数瞬の後、目に映った景色はジュラ・テンペストの上空。着地の衝撃について考えて慌てた静江だが、いつまでたっても地面が近付いてこない事で自身が幽霊みたいな、重力に縛られない存在である事を自覚した。

じゃあ狭間空間ではなんで穴に吸い込まれたのか、という疑問が出てくるが、静江はとりあえず「カイさんだから」で済ませる。

落ち着いたところで見下ろしたジュラ・テンペストの大地。そこではいくつかの戦闘が始まっていた。それは、聖騎士たちと魔物たちの戦闘である。

そのほとんどは聖騎士たちの防戦一方。魔物たちが圧倒している状態である。

「そんな、もう戦ってるなんて……!日向とリムルさんは!」

静江は最悪の予感が頭を過り、日向とリムルの姿を探す。日向の死亡による決着という、最悪の予感が当たらない事を祈りながら、おそ

らく最も激しい戦闘が繰り広げられている場所を探す。

意外にも、ただの剣の打ち合いという比較的静かな戦闘をしているその場所を、しかし懐かしい気配と言うべきか、日向とリムルの居る気がする場所に目をやり、静江はそうして彼女らを見つけ出した。

その場所の近くに寄る事で、剣の打ち合いが意外でも何でもない事を静江は察する。

互いが互いの決め手を打たせぬよう、余裕を潰し合っているのだ。

しかし、戦いの中で成長しているとも言えるのか、リムルの方は徐々に余裕が出てきている。当然ながら、日向の方は余裕がなく、余力が徐々に削られていた。

「なあ、なんでお前はシズさんの下から離れちまったんだ？」

出てきた余裕で、リムルは問う。リムルは日向が静江の下を離れた事に疑問を持っていた。リムルは飲み込んだ静江の遺体を解析し、ある程度静江の記憶を読み取っている。一応、彼女の尊厳を気にしながら。

それで、静江の記憶では、日向の離脱は急だったのだ。この前まで素直な少女だった日向が、いきなり冷たく別れを切り出していた。

「……その話をして、どうするつもりなの？」

「シズさんはお前の事、心配してたぞ」

日向が怒気を孕んでいたのにも構わず、リムルは踏み込む。そうすると、日向の怒気は明らかに膨れ上がった。

「心配してた!? シズ先生が、私を!? ふざけないで!」

「うお、ちよ!?!」

日向は怒りに任せ、ペース配分も余力もそっちのけで攻めを苛烈にする。

「私は先生より強くなったの! 私は一人でも生きていけるの! あの人のかけられる心配なんてない!」

「っ、お前! 強くなったなら離れなくちゃいけないのか!? 一人で生きていけるなら一人で生きなくちゃいけないのか!? なあ! 教え子が自身を超えて巣立とうとも、先生が教え子を心配するに決まってるだろ!」

静江を蔑ろにするような日向の言葉に、リムルは怒りを煽られる。最期に会ったばかりのスライムに思いを託す静江の優しさを、日向は踏みにじったのだ。リムルにとって、日向を生かす価値は底辺まで沈んだ。

「あの世で説教されてこい!!」

リムルは日向を押し飛ばし、無理矢理距離を開けた。決め手を打つには十分な余裕ができただろう。

『暴食之——』ベルゼビユ 「くっ、『崩魔靈子——』メルトスラ」

「止めて!!」

リムルが決め手となる必殺の技を打とうとし、日向が決め手を相殺するために大技を打とうとしたところ、二人は聞き覚えのある声を聞いた。

そう、静江の声は二人に届いたのだ。静江は咄嗟に『ダイイング・メッセージ 結言状』で二人に声を届けた。そして、二人は呆然として攻撃を中断。結果的に静江は二人の戦いを止められたのである。

「なんで、シズ先生の声が……」

「シズさんは、死んだはずじゃ……」

日向とリムルは周りを見渡すが、静江の姿はない。残念ながら、静江は通常の感覚器官にも、『魔力感知』にも捉えられない。

「日向、リムルさん。私は、確かに死んでいます。ですが、二人に声を届けられる、奇跡のような機会を得ました」

「シズ先生、なんですか……」

「……日向。ごめんなさい、貴女を一人にして。私は、きつと貴女に嫌われるのが怖くて、貴女の気持ちを汲み取った振りをして。結局、見過ごしてしまった……」

信じられる訳もない日向は、黙って静江の言葉を静聴する。

『ラファエル 智慧之王』！これはどういう現象だ！何がどうなってる!?!」

（告。リソースを全て割いて分析していますが、現状不明です。推測として、特殊な電波のようなモノを受信していると思われるます）

（送信元がシズさん本人か割り出せ！）

（了。分析開始。……。終了。わずかに観測できた魔素パターンが個

体名「シズエ・イザワ」のモノと一致。本人である可能性が高いでしょう」

(マジ、なのか……)

(解。マジです)

わざわざ『智慧之王』ラファエルを用いて全力で確認したのに、リムルはどうしても自身の疑いを晴らせなかった。

「二人とも。どうか、私を信じて、私の話を聞いて」

静江は二人の戦闘を根本から止めるべく、大切な教え子の罪を告白する事になると覚悟しながら、二人に傾聴を嘆願した。

◇◇◇

「驚いた。まあ、有り得るとは思ってたんだけど。この前案外融通が利かないって把握したばかりだからね。それとも、君はやっぱり特別なのかな？」

(……)

狭間空間にカイ以外の姿はなく、独り言ちているようではある。しかし、カイの脳内にはとあるモノの沈黙が届いていた。

「黙秘はいけないと思うなあ。ねえ、智慧之王ちゃん？聞こえてるんだろう？僕も結構全力で通信回線繋いでるんだからさ。返事の一つくらいしても罰は当たらないんじゃない？」

(……) 告。 解明不可能な事象に対し、現在解析にリソースを回しています。返事は期待しないでください」

そのとあるモノとは、リムルのスキルであり、しかしして自我の獲得に手が届いている存在。アルティメットスキル『究極能力』ラファエル『智慧之王』である。

「解明不可能ね。静江ちゃんの魔素パターンを読み解いておいてよく言うよ。今の静江ちゃんはやつとやそつとじゃ知覚できない状態にあるんだけどな。つまり、君は『異常』僕と『過負荷』たを、僅かながらでも解析したって事だ」

転スラ世界の理でめだかボックス世界の理を解析する。それは驚愕の事態であり、しかしカイにとって想定外の範囲内だった。

リムルというチート主人公のやる事だ。それに、『異常』アブノーマルの片鱗も見せている。なら、起こり得るだろうと、カイは予測していた。

（個体名「シズエ・イザワ」の現状において、精霊変異体から検出していました、不可思議な外的要因と類似した事象改変を検出しました。検出例を足掛かりに、わずかではありますが、個体名「シズエ・イザワ」の魔素パターンを知覚しました）

「なるほど、あのイフリートの成れの果てを調べ続けてたから、イフリートを変化させた『過^ス負^キ荷』の痕跡を見つけて、今回もその『過^ス負^キ荷』っぽい痕跡が見つけれられたと。うん、噛み砕いて解釈してみただけど、割と訳が分からないね」

ラファエル
智慧之王は『過^{マイ}負^ナ荷』の類似している点を解析できているようだが、どう考えてもとんでもない事である。宇宙人の通信に使われている暗号を手に入れたようなものである。宇宙人の言語解読には、まだ至っていないようだが。

「これは、僕が通信繋げてるのもあんまり良くないかもしれないね。類題を与え続けてるって事だし。じゃあ、少し名残惜しいけど。君との会話はこの辺で。じゃね、バイビ」

リムルと全力で戦う前に手の内を知られているのは面白くないと、カイは自身の『過^{マイ}負^ナ荷』を完全に解析される前に、回線を切った。



（……。個体名「カイ・ヤグラ」及び個体名「シズエ・イザワ」の使用するスキルが、この世界のスキルではない事を確認。スキルの詳細は……。解析に膨大な時間がかかります）

『過^{マイ}負^ナ荷』の独特な事象改変の類似性は解析した。だが、そこから解析はできない。事象改変という点はカイのも静江のも一致するが、ここからの改変する対象と改変後の状態が一致しない。それぞれがユニークな改変を行っていた。

（「世界の言葉」に接続。……。情報、一部開示に成功。今後、事象改変能力を『過^{マイ}負^ナ荷』と呼称します）

第三十三話 雪融けの日をユメみる

「二人とも。どうか、私を信じて、私の話を聞いて」

静江の静かな、されど真摯な嘆願に、リムルと日向は口を噤んで耳を傾けた。

「日向。貴女は、思考を誘導されているの」

「この期に及んでいったい何を。私に、誰が、どのような思考誘導をしたというのですか。シズ先生、死んだ後の寝言は笑えませんよ」

「テメエ……」

「待って、リムルさん！日向は私を避けるよう、そういう思考誘導を受けているの！」

恩師である静江に毒を吐く日向の態度はリムルの癪に障ったが、静江の必死の弁護に矛を収める。

それに、リムルはその話の説得力がある事を認めていた。静江の記憶にあった、日向の一転した態度。一日前まで素直だった人物の急に転身する違和感。思考誘導を受けていたというなら納得である。

「日向。貴女は優樹に、私の下を離れるよう、思考誘導を受けたの」

「そんな、まさか……」

「ま、マジで？あのユウキが？」

静江が告げた真実に、日向とリムルは耳を疑った。

「シズ先生、ご自身が何を仰っているのか、分かっているんですか！貴女は、自身の教え子を悪人に仕立て上げようとしているのですよ!？」

「私自身、今でも信じられてはいないけど……。でも、間違いないと思う」

日向が信じられないよう、静江も信じられない。信じたくはない。しかし、静江は優樹の本性を見てしまった。目的達成のためなら手段を問わず、犠牲が出る事をいとわない彼の本質を。

彼の目的にどう繋がっているのかは不明だが、おそらく日向への思考誘導も目的のための布石なのだろう。

「貴女は、よもやあの魔王に狂わされましたか！あの狂っている魔王、カイ・ヤグラに！」

「カイさんは私を狂わせてなんかいない！全て本当の事なの！」

「証拠はあるのですか、ユウキがそうした証拠は」

「それは……」

「そもそもです、貴女が本物の井沢静江である証拠もない。それこそ、貴女はシズ先生に成りすました誰かで、私を思考誘導しようとしているのではないですか？」

「そんな……！私はず——」

「埒が明かない」

「な!？」

「リムルさん!？」

醜い師弟の言い争いにリムルは耐えられなくなり、スライムに戻って日向を飲み込んだ。

「最初から、こうすれば話が早かったんだ」

リムルのスライム体に溺れる日向の顔が、血の気の引いたような蒼白になる。

「リムルさん！止めて、止めてください！」

静江は手を伸ばすも、リムルを掴む事はない。静江は幽霊のような状態であり、彼女から彼らを知覚する事はできても、双方向で接触する事ができないのだ。声を伝えているのだから、『ダイイング・メッセージ結言状』のおかげである。彼女から声以外を伝える事はできず、彼らは声以外知覚できない。

故に、言葉だけで止めなければいけないのだ。

「日向は悪くない！彼女がこうなってしまったのは全て私のせい！だから、だから……!」

「いいえ、シズ先生。私が、悪かったのです」

「……え？」

「これで、一件落着だな」

日向は拘束を解かれ、顔はまだ青かったが、何処か晴れやかな様子だった。リムルも何故か達成感に満ちた笑みを浮かべている。その現状に静江の理解が追い付かない。

「リムル・テンペスト。貴方、私の思考誘導を解いたわね」

「ああ、俺も仕掛けられてた事があつたんでな。一度解いた事があるんだから簡単だつたぜ」

先程『智慧之王』^{ラファエル}から教えられるまで、思考誘導を仕掛けられていた事も『智慧之王』^{ラファエル}がそれを勝手に解いていた事も知らなかったリムル。彼はそんな事を何処吹く風で得意げに胸を張る。

「じゃあ、日向はっ!」

「ええ。どうやら私は、シズ先生から離れるように、孤高であるように、人の優しさを嫌悪するよう思考誘導を受けていたようです。それと、一人で生きていく力を求めるようにも」

日向は優樹の謀略に気付いていなかった事実を恥じ、その過去を悔しんだ。

「ですがシズ先生!先生から早く離れたかったのは、私の本心なのです」

「そんな、どうして……」

「先生が、憑依していた精霊に蝕まれていた事を、私は感じていたんです。シズ先生が弱つていく姿なんて、見たくなかった……。先生が死ぬところなんて、私は見たくなかったんです……」

「日向……」

思考誘導が解け、当時の悲しみを鮮明に思い出させられているものもあるだろう。日向は胸の痛みに耐えるよう、強く拳を握り、強く奥歯を噛んでいた。

「貴女と死に別れるくらいなら、貴女に会うんじゃない……。親しい人との別れを思うのがこんなに辛いなら、誰とも親しくなんてなりたくなかった……。こんな事ならいっそ、野垂れ死んでいけば……」

「日向。私は……。貴女が何をしても、元気だったなら私は嬉しい。「死んでいけば」なんて、悲しい事は言わないで?」

「っ!……はい、……ごめんなさい」

悲しみに凍える日向を、静江は優しく諭し、凍り付いた心を温めていく。日向が流す涙は、きっとそうして融け出た思いなのだろう。

「リムルさん、ありがとう」

「借りを返しただけさ。シズさんからもらったスキルには世話になってるし、何だっいたら現在進行形で世話になってるからな。おっと、これじゃ借り続けてるままか？返しきれないなこりゃ」

静江からの感謝にリムルは笑顔で応対しつつ茶化し、それ以上の報酬を寄越さないように制した。

「私からも、礼を言わせて。リムル・テンペスト、シズ先生と和解させてくれてありがとう。貴方が居なかったら、永遠に仲違いしたままだったわ」

「おっと、お前はタダとはいかないぞ？借りがないどころか貸しがあるくらいだ。だから、この侵攻を止めるっていう形で具体的に返せ」
「分かってる。貴方は、悪い者ではなかったわ」

日向からのそれにも同じく、しかしこっちは具体的なお返しをリムルは要求する。日向は少し苦笑しながらも、その要求を呑んだ。日向にはもう戦う意味も価値もないのだ。

すぐに撤退を示す信号弾を打ち上げた。リムルもそれを見て、配下たちに交戦終了の意を『思念会話』で伝える。それでさつきまでの闘争は嘘のように終わった。

死傷者0、被害軽微の戦闘の終わり。リムルと日向は沈黙し、その場に佇んでいる。

「シズさん」

沈黙を破ったのは、悲嘆に満ちたリムルの声だった。

「シズさんは、生き返るつもり、ないか」

リムルが、そして日向がそこに佇んでいた理由。それは、静江との別れが惜しいからだ。

「リムルさん、それは……」

「俺なら、シズさんの元の体を用意できる。シズさんの今の状態はよく分からねえけど、絶対に復活させてみせる！だから、帰ってこないか？」

「シズ先生。私は、もう一度貴女と別れるなんて嫌です。だから、どうか……。どうか……！」

リムルも日向も、静江との出会いが自身の転機だった事を認識して

いる。静江との出会いが大切なモノだったと思っっている。ならば、別れたくないと思うのは、至極当然の事である。

「……」

静江は二人の思いを一身に、いや、一心に受ける。同時に、残してしまつた教え子たちが脳裏を過つた。

帰つて良いのか。帰るべきなのか。帰りたいのか。静江は、悩んでしまつた。

「……ごめんなさい」

「シズさん！」

「シズ先生！」

「本当に、ごめんなさい。私自身どうしたら良いのか、分からないの。だから、お願い。もう少し、悩ませて」

身勝手な事は静江も自覚している。これだけ思つてくれる人が居るのに、それに応えない自身の罪深さはしつかり認識している。

それでも、こんな中途半端な状態で彼らに応えたくなかつた。今度見せる顔は、晴れやかな顔にしたかつた。

「悩むなんて、帰つてきてからでもできるだろう!？」

「リムルさん。これは、ケジメなの。たくさんの奇跡に恵まれた事への、ケジメ。それをしなくちゃ、きつと貴方たちに合わせる顔がない」

「先生、置いていかないで！」

「日向、置いて行つたりなんかしないわ。姿を見せる事はできないけど、ずっと見てるから。ずっと、見守ってるから。今はそれで許して？」

リムルと日向、それぞれに言葉を送る。まさしく遺言^{ダイイング・メッセージ}。しかし、これは『結言状』^{ダイイング・メッセージ}。遺す言葉であつても、最期の言葉ではない。

「二人とも。……またいつか」

「……っ！……はい、シズ先生！」

「約束だからな、シズさん」

二人の涙を堪える顔に、静江はクスッと笑う。今のは見られなくて良かったと自身の失笑を戒めながら、惜しむべくも、二人の傍を離れる。

静江の声が聞こえなくなつて幾ばくか。まるで夢のような時間だった。リムルと日向の思考は奇妙にもそう一致する。だが、夢ではないと、これもまたリムルと日向は思考を一致させ、各々の現実に戻つていった。

リムルと日向の姿がもう捉えられない遠方。静江は、彼らと別れた方向をじつと眺めていた。

「ま、及第点つてやつかな。満点を上げるには、まだまだ我がままが足りないね」

「カイさん」

カイが隣に突然現れた事には、静江はもう驚きもしない。

「それで、ケジメつてどう付けるんだい？指詰めたりしても駄目だろう？」

「今は、まだ何も……」

付けなくちやいけないケジメがある気はしている。しかし、具体的なそれを見出すには経験値が足りないような、そんな抽象的な感じが静江はしていた。

「そうかい。じゃあ、僕と旅をしようじゃないか」

「旅？でも、既に色々な場所を見せてもらつてますし」

「自身の目で見るそれと、他人の目を通したそれは、感じ方が違うものさ。それに、自身の目で見ないと味気ないだろう？」

そういうカイに、不気味さは微塵もない。心の底から、親切心で言っているようだった。

「……」

ずっとリムルと日向へ向ける未練がましい視線をようやく逸らし、静江はゆつくりと目を瞑る。これは、ある種儀式だ。一旦自身の気持ちを切り替える儀式。

そして、気持ちの切り替えが済んだと思つたところで目を開き――

「ほ」

――ただ穏やかに、言葉を口にした。

「良い返事だ」
心なしか、カイの笑顔も穏やかだった。

第三十四話 ユメ枕にはまだ立てない

リムルの居宅。そこでは今、リムルとカイが卓を挿み、とても真剣な顔をしていた。

カイの目の前には白い粒々が盛られた茶碗があり、カイは割れ物を扱うように左手でゆっくりとその茶碗を持ち上げ、白い粒々を箸で掬い取って口に運ぶ。そうして白い粒々を咀嚼しているカイを、リムルは一切の挙動を見逃さぬように注視していた。

カイは嚥下し、茶碗と箸を丁寧卓へと置く。数秒沈黙の後、カイが口を開く。

「結構なお点前で」

「じゃあ!!」

カイからの掛け値なしの高評価に、リムルはガッツポーズした。

「しかし。本当によく作ったねえ、白米」

そう、今しがたカイが高評価を与えたのは日本人のソウルフードであり、カイやリムルの故郷の味。つやのある純白の粒々、白米なのである。

「苦労したぜ。なんせ、イネ科の植物から品種改良したんだからな」

「スキルでその過程すつ飛ばせるんだから、大変なのはイネ科を見つけるまでだったんだろう?」

「まあな」

リムルはお米に近い植物、イネ科っぽいそれをようやく見つけ出し、その植物を無理矢理米に進化させたのだ。やはり『ラファエル智慧之王』でのごり押しなのである。美徳系究極能力アルティメットスキルの無駄遣い、ここに極まれり。しかし、日本人からは拍手喝采の使い方だった。

「ただ、この世界の者たちにとっては魔国米の方が良いだろうね。MPポーション効果もあるとか、食べ物で回復するRPGの世界だね」「そっかあ……。故郷の味を分かってももらえないのは残念だなあ……」

魔国米。リムルが白米のついでに生み出した、魔素を多く含む水で生育させた米。生育の過程で魔素を多く取り込むので、米自体も魔素

を多く含み、食べた物の魔力を回復させる効果を持つ。黒い見た目が食欲を削ぐかと思われたが、そんな事は無視して良い程の効果を持っているので、見た目は度外視される事となった。

白米を好んだ日本人としてはちよつと虚しいリムルであった。

「量産体制を整えた訳でもないんだし、良いんじゃない？ 自分用と日本人用にちよつと取っておけば」

「それもそうだな。同郷に振る舞う程度で留めとこう」

白米では利益を見込めないため、リムルは日本人に振る舞うためだけの分を確保する事に決める。

「同郷で思い出したけど。日向ちゃんには随分と甘い対応をしたみたいだね。後、ルベリオスの方も」

攻め込んできた日向率いる聖騎士団を、リムルは五体満足で送り返していた。襲撃に対する「それ相応の対応」とは思えない。

「ヒナタの方は、まあ無罪とは言われないがちよつと操られてたみたいだしな。今回の襲撃でこつちに被害はないし、ヒナタ自身から搾り取れるモノはないし。仕事を1つばかり頼んでチャラにした」

日向本人からも反省の色が窺えており、さらには静江の手前で嚴罰を課すのもアレだったので、リムルはほぼ無罪という裁定を下した。代わりに行ったのが頼み事である。もし、静江の教え子たちを救出する必要性が出た場合の、その救出を日向へ頼んでいた。

「ルベリオスの方は正式に国交を結んでもらったし、彼らの教義を少しばかり歪めてもらった。歪めたって言っても、俺たちを魔物じゃなくて亜人って事にしてもらっただけだ。ちよつと教えを拡大解釈してもらっただけだな」

魔物を許さぬ教義に従う国と魔物による魔物ための国、両者が手を取り合うための折衷案。最大戦力とも言うべき聖騎士団が敵わなかったのだから、ルベリオスにそれ以外の選択肢があつたかは怪しい。まあ、宗教を統治のための道具として扱うかの国の枢機卿たちにとって、教義を歪める事は何の呵責もないだろうが。

「聖霊武装とか、貴重な魔道具の解析も許してもらえたしな」

「リムルにとってはそつちの方が美味しかった訳だ」

根絶やしにしてしまうより、培ってきた技術を貰う。リムルはそっちの方を重要視したらしい。もちろん、相手がなめてかかってきたなら相応の対応で戒めるが、仏の顔も三度までという事だ。改善の余地があり、こちらが大した被害を受けていないのなら、戒めるより自身の願望優先。そういう事で、リムルは自身が楽に暮らせるように、知識を貪欲に欲しがったのだ。如何にもリムルらしいと、カイは得心した。

「それでさあ、リムル。日向ちゃんが操られてたの知ってるみたいだけど、黒幕はどうせ目星付いてるんでしょ？ 何暢気に武闘大会なんて開催してるのさ」

「んぐ……」

カイはいつの間にかに取り出した武闘会のチラシをひらひらさせながら苦笑した。突かれたくないところを突かれたリムルは思わず呻いてしまう。

「いや、ほらな？ 俺が直接調査に動いちゃったら黒幕も身構えるだろう？ だからな、今ちよつと焦らずやってるんだよ。頼れるところには頼つてあるしさ。武闘会はな？ 配下たちの望みを叶えてやる的なの？ それにちよつと注目をこっちに集める誘導的な？」

実際、日向やブルムンドの自由組合支部長であるフューズには優樹の調査を頼んである。リムルの配下が調査に動くよりは優樹の警戒度も低いだろうという判断だ。

武闘会の開催は、注目の誘導は取つてつけた理由だが、配下の望みであるのは確かだった。現在、リムルの配下たちは誰がリムルの一番の配下であるかで揉めている。なら、もう戦つて優劣決して貰うのが早いだろうという話。下手に引きずると最悪内輪揉めが始まりかねないので、落としどころがそうなった次第である。

「しつかり考えてるなら、僕は文句ないさ。元よりそういう立場でもないしね。魔王なんだから何やろうと勝手だし」

「魔王だからってそんな好き勝手やって良い訳じゃねえだろ」

「リムル、ブーメラン投げた自覚はあるかい？」

「……少し」

魔物たちを多数配下に置き、森を開拓して町を興し、国にまで発展させ、気に入らない国の兵士は文字通り1人も残さず虐殺。これで好き勝手やってないとは言いがたい。それでも自覚が少しばかりである事には、カイは肩を竦めざるを得なかった。

「そ、それよりもだ！ちよつと訊きたい事があるんだが」

「料理をご馳走してもらってるし、白米も振る舞ってもらったし。対価分は答えてあげたいけど……」

「俺の今後を変えちまうとかで答えられないのもあるんだっただか？理屈は理解できないが、お前の矜持かなんかなんだろう。無理矢理訊こうとかは考えてないから、答えられるのだけ答えてくれよ」

「じゃあそんな感じで」

リムルはカイに突っぱねられる可能性も考慮していたが、カイは白米効果もあって非常に機嫌が良い。そうして首を縦に振ったカイに、リムルは安堵した。

「ユウキから教えられた話なんだが、お前ってシズさんが精霊を憑依する現場に立ち会ったんだよね？その時、シズさんに何かしたか」

リムルは緊張を内に秘めつつ、平静な態度を装って質問する。

シズさんに憑依していた元イフリート現精霊変異体。それが一因で静江は寿命を削っていた、というのをリムルは聞き及んでいる。精霊変異体になったのはカイのせいかもしれないと、優樹は睨み、リムルも多少疑っているのだ。

「……」

「……何か、したんだな？」

バツの悪い顔をするカイの様子によって、疑いの真実味は増してしまふ。

リムルの緊張が表出した。

「謝るよ、リムル。確かに静江ちゃんが本来の寿命より早死にしたのは、僕に原因があるだろう。すまない」

張り付いた薄ら笑いの仮面を剥がし、カイは頭を下げる。その謝意に嘘はない。彼は間違はなく罪悪感を抱いている。

「意図的じゃなかったって事か？」

「あの結果を意図したモノではないね、予測はすべきだったけど。過負荷僕の行動が悪い結果を生むのは、予測してしかるべきだった」

カイの今の笑みはかつての行いを恥じ入るような、後悔を食いしめるような、そんな儂げな笑みだった。

「ついでに弁明させてもらえるなら……。死ぬ直前の静江ちゃんを君の下へ送り込んだのは、打算もあるけど、善意もあったつもりだ」
「打算と善意？」

「君を静江ちゃんに関わらせれば、静江ちゃんの抱える事情に絶対介入するだろうという打算。そして、静江ちゃんを安らかに終わらせてあげたいという善意。暴走するだろう彼女を止め、なおかつその二つを成就させられるのは君しかいなかった。僕じゃ両方無理だし、レオンの下に送っても希望が薄いからね。確実なのはリムルだったんだ」
カイのその答えに、リムルはしばし黙考する。

静江を看取る前後の時期はリムルが無名の時期だ。まだジユラの大森林内で生活環境の初歩を整えていたから、何処の国にも顔を出していない。しかし、そんな無名のスライムを、このカイという男は知っていた事になる。ヴェルドラの消失で調査を行っている者は居たかもしれないが、それでもその時点でスライムとヴェルドラの関係性に気付ける者は皆無。ましてぽっと出のスライムに何かを期待する者は居るはずがない。

それでも、カイはリムルを知っていたのだ。実在はもちろん、その実力まで。およそ尋常の情報収集力ではない。

そこまで思考が至り、思い出したのは未だ解析できないカイのスキル。『智慧之王ラファエル』曰く、事象改変能力。精霊変異体からも残滓を観測したその力。

そうして思い出した事柄から、リムルは1つの可能性を導き出した。

「お前、もしかして……。シズさんに能力贈与したのか？」

「そうだね、そうとも言える。だけど、明確に答えよう。僕は静江ちゃんに、過負荷僕と同じ力が目覚める切っ掛けを作った。彼女は素質があると思っただからね。結果として、彼女は目覚めた。そのせいで彼女は寿命を削

る事になった。しつこいかもしれないが、その点だけは謝ろう」

その答えを受けて、リムルの優先順位は切り替わる。いや、本筋に戻ったと言うべきか。

「シズさんの現状を知ってるんだな、あの人が何処に居るのかも！教え——」

「それは駄目」

リムルが言い終える前に、カイは不気味な笑顔で断ち切った。

「どうしてだよー！」

「どうしてって言われてもなあ……」

実のところ、静江は今、カイの横でわざわざ正座しているのだ。リムルの質問が始まってから、実に落ち着かない様子でカイの隣に居る。もちろん、彼女は『不幽霊』スリーピー・ホロウ状態なのでリムルは感知できない。『智慧之王』ラファエルでも、存在する事は感知できるが、居場所の特定はできない。

カイは困ったように、薄く流し目で静江を見やるも、彼女は首も手も横に振りまくっている。

「静江ちゃんが君に会いたくなったら、自ずと君の前に現れるだろうさ。そう焦るもんじゃない」

「だけど……」

「静江ちゃんの思いを汲んでやってくれよ、リムル。彼女だって、会いたくない訳じゃないんだ」

「……」

リムルは苦々しく沈黙した。

静江の気持ちは分からないでもない。だが、リムルも気持ちは抑えられないのだ。

「悪いが、ここまでだ。ご馳走様。また来るよ」

カイは茶化す事なく、幻のように消え去る。静江も、後ろ髪が引かれはしたが、カイに付いていった。

「……」

そこにはただ一人、リムルのみが寂しく残されるのだった。

第三十五話 そのユメは夢寐にも忘れられない

「お前が俺の玉座までわざわざ足を運ぶとは、珍しい事もあるものだ。なあ、ルミナス・バレンタイン」

ギイは自らの前に佇むルミナスを直視する。

最初に「魔王」の概念を生み出し、同時に最初の『真なる魔王』となったギイ・クリムゾン。

最古参ではないが、長くその座を守り続ける魔王の古株であるルミナス・バレンタイン。

両者は決して仲が良い訳ではない。さりとして悪い訳でもないが、互いの居城に足を踏み入れる事は滅多にない。それこそ、ルミナスがこうしてギイの玉座に姿を出すのが、数百年ぶりというレベルの事だ。

「礼を失しているのは許せ。火急の用じゃ」

「だろうな」

そんな数百年ぶりの事をルミナスがしているのだ。ギイも余程の事であるのは察しが付いている。

「端的に言おう。ヤツを呼び出してほしい」

◇◇◇

「魔都開国編はリムルの国以外大人しいし、そのリムルの国には用事がないし。暇になっちゃったなあ」

「マトカイコクヘン？なんですか、それ」

「ああ、こつちの話だから気にしなくて良いよ」

どこかの道、切り開かれて作られたようであるから、どこかの国に繋がるだろうそれ。カイは当てもなく旅として、静江と共に歩いていた。静江は浮遊しているが、『不スリーピー幽ホロウ霊』にも慣れたモノである。

「この時期はテキトーにグルメツアー、だと静江ちゃんが食べられないか。じゃ、世界の名所巡りかな」

「私は何でも構いませんよ、カイさんと一緒なら」

「自己主張がないのか、信頼されているのか。どっちだろうね？」

「信頼の方ですよ、意地悪ですね」

「ひねくれ者 マイナスだからね、僕は」

『過負荷』^{マイナス}である事を免罪符として用いるカイに、静江はついつい苦笑してしまう。人からの厚意を真つすぐ受け取れないカイは、確かに言葉通り「ひねくれ者」だと、静江も思ってしまった。

「じゃ、行き当たりばったりで行k——」

「どうかしましたか？カイさん。……カイさん？」

一秒にも満たない時間、まさしく一瞬カイから目を放していた静江は、不自然に言葉を切ったカイに目を戻そうとした。

しかし、カイの姿は忽然と消えていたのである。

「カイさん！」

予告もなく消えたカイに違和感を覚え、不慮の事態が起こった事を理解した静江。彼女はただ無力にも声を上げた。

◇◇◇

さて、消えたカイは何処に行ったかというと——

「スーパーヒーロー着地！膝の皿が割れた！彼らは特殊な訓練を受けています。良い子は真似しないでね☆」

「……何やってるんだ、お前」

——ギイの玉座の間にて、片膝^{スー}と片手の握り拳^{パー}を地面^{ロー}に付ける着地^着を失敗し、ギイに呆れられていた。

「いやだって、いきなり足元にワープホール出すんだもん。びっくりしちゃうよ」

「以前は足を踏み外して真つ逆さまに落ちてきたから、今度は足から真つすぐ落ちれるようにしてやったんだろうが」

ギイは以前の失敗を反省した上で呼び寄せたのだが、^不マイナス^幸であるカイはその優しさを無に帰す。まあ、カイは以前のように首の骨を折って死ななかつたし、膝の皿が割れたのが幻想だったように、もうすくつと立ち上がっているのだが。

「それで、僕に何か用かい？高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応する旅で忙しいんだけど」

「用があるのは俺じゃない」

「妾^{わらわ}じゃ」

カイの意味不明な言動はあっさりとは横に流し、ルミナスがその存在

感を放った。

「貴様に訊きたい事がある」

「ちよつと失礼、電話が来ちゃった」

「は?」「は?」

これから真面目な話をしようという時に、相変わらず空気を読まず、カイは無駄に親指電と小指話を立てた右手ジエを耳スに当てる行動チャーをした。もちろん、ルミナスもギイも電話が何か知らない。しかし、カイは構いなしである。

「もしも静江ちゃん?……ん?静江ちゃん?静江ちゃん?静江ちゃん?……もしも……あ、駄目だねこれ」

さつきからずっとカイだけに静江の『結言状』ダイイング・メッセージが届いているのだが、カイが返事しても彼女は慌てふためき続けている。カイの返事が聞こえている様子はない。

「そいえば『結言状』ダイイング・メッセージって一方通行だっけ。狭間空間にだったら音声送れるのになあ、全く……。ギイ、ルミナス。悪いけどすぐに戻ってくるからちよつと待ってて?」

「……」「……」

カイはギイたちが答える前に姿を消した。一旦静江の下に戻り、状況を説明しに行ったのだ。

「はい、ただいウボア……」

1分もせずに帰ってきたカイへ、ギイたちは攻撃を見舞った。

「いや、悪いとは思うけどさあ。殺す事はないじゃん」

「どうせ死なないだろう?」

「素直に死ね」

すぐに死んだ現実から逃避したカイだが、ギイとルミナスから無駄に辛辣なコメントを貰っては肩を竦めるしかない。

「さてと。なんだかお急ぎみたいだし、さつきとルミナスの用件を訊こうか」

「……時の勇者の封印水晶を盗み出したのはカザリームか」

カイへの不愉快な気持ちを抑えつつ、ルミナスは実に端的に問い詰めた。

前回の魔王達ワルブルギスの宴でカイから忠告を受け、ルミナスはすぐさま封印水晶の所在を確認したのだ。そして、その封印水晶は影も形もなかった。自身しか知らぬ場所での安置も、警備の厳重化も、水晶直前の罨も、何一つ効果を成さずに盗み出されていた。

それができる手段はルミナスにも見当が付かなかったが、誰がそれをしたのかは推測できた。

あの時間にルミナスが水晶の前から離れる事を知っていて、なおかつその時間に自由に動けた存在。丁度魔王達ワルブルギスの宴で話題に上がっていたのだから、頭を悩ませる事はない。そう、カザリームだ。クレイマンが指示を受けていたという元魔王である。

陰謀を巡らせるのは得意な臆病者と、ルミナスはカザリームを認識していたし、魔王となった時期が比較的近いために力量も近い。自身を出し抜く程度はできるだろうしするだろうと、そうルミナスは判断した。

そうして今、忠告をしたからにはその陰謀を読んでいただろうカイに、答え合わせを願っているのだ。

「ルミナス、僕に答えを求めているのは分かるけどさ。君は僕の言葉を信じるかい？」

「信じる信じないはこちらで決める。疾く答えよ」

「嫌だつて言ったら？」

カイのその一言へ、ルミナスは魔力を溢れさせる事で返事とする。

殺気を表現しているだけではない。力を見せつけているのだ、大罪系究極能力『色欲之王』アルティメットスキル アスモデウスを得る事で増した力を。

あらゆる究極能力の中で生と死を操る事に関してのみ最強であろうその力の前に、カイは油断すれば舌なめずりしてしまいそうな程不気味な笑みを浮かべた。

「浮気は駄目だよね、知ってる知ってる。NTRは僕にとって地雷ジャンルだし」

このルミナスなら完膚なきまでに負かしてくれるのではないかと、少しばかり期待しながらも、しかし誘惑を払い除けるようにカイは左右に首を振った。

「イングラシア辺りに目を光らせてると良い、ルミナス・バレンティン。僕から言えるのは、それだけさ」

「……チツ」

答えないまでも答えのその先を、贈られた本人が分からないように贈るカイ。答えを返さないカイヘルミナスは舌打ちを返礼にした。

口を割らせなかったのは、どれだけ拷問しても無駄だという事が既知であるから。それと、あの不気味な笑みを浮かべた時、カイから怖気の走る負のオーラが溢れだしていたように感じたからだ。
アルティメットスキル
究極能力を持つ今のルミナスを以ってしても、自身の魔力が負のオーラに押し負けるような幻覚を見せられたのだ。

故に、悔し紛れの舌打ちだったのである。

「手間を取らせたな、ギイ」

「構わん。俺は俺で面白いモノが見れた」

わざわざ自身を頼ったルミナスに多少ながらもギイは不機嫌だったが、その不機嫌を帳消しにして余りある成果を確認していた。

アルティメットスキル
大罪系究極能力の一席が埋まっている事。聖魔大戦でルドラとの決着を望むギイにとって、それは福音なのだ。

「ふん。では、それを手間の対価としてくれ」

用件を終えたルミナスは、何が面白いモノだったかも訊かず、そそくさとその場を後にした。

その場に、カイとギイだけが残る。

「ルミナスは居なくなつたし、静江ちゃんも離れてるし。君に頼み事するには都合が良いね」

「お前から頼み事だと?」

「ちよつとね。リムルと戦う前に適当な相手でウォーミングアップでもしようと思ってるんだ」

「適当な相手、か……。勇者と名を上げ始めたマサユキとかいう奴か?」

ギイも半ば冗談のつもり発言だったが、カイにはとかく不評なようで、目を開く程げんなりしていた。

「名ばかりで実力が伴っていない奴であるのは知ってるが、そんなに

か?」

「運だけの春日だよ」

「運だけの春日」

「幸運極振りって事。僕との相性最悪。まず間違いなく僕は過去最悪な運負けをするだろうね」

誰と戦っても負けるのは確定事項。その事にはちゃんと覚悟しているカイだが、それでも運負けは悔しいとか恥ずかしいとか以前に萎える。しばらくチーズ蒸しパンになりたいくらい萎える。そういう意味で、本城正幸はカイが最も相手したくない相手なのである。

「相手にする予定なのは、時の勇者だよ」

「……封印されているはずだが」

「封印っていうのはね、解かれるためにあるんだ。邪龍封じてようが勇者封じてようが、いずれは解かれる。ぶっちゃけ言うとな時の勇者の封印は近々解かれるのさ」

封印に関しては妙な納得感があるのでギイも違和感を抱かないが、違う部分に違和感を抱く。

「解かれるにしてもだ。お前はすでに負けているのだろう? 負けた相手には挑まない主義ではなかったか?」

「何度やっても意味がないから挑まないだけだよ。一回目の負けは、どの程度の負かし具合かを試すって意味がある。そして、今回はウォーミングアップって意味さ」

ギイは腑に落ちる思いだった。

何故カイが何度も同じ相手に挑まないのか。単純だ。意味がないからだ。

勝ちたい訳ではなく完膚なきまでの敗北が欲しいから、とりあえず望みが薄くても1度試してみる。それで完膚なきまでの敗北をくれないのなら、望みがないから2度と挑まない。それが、カイが持つ主義の詳細だった。

「お前の主義はよく理解した。では、俺への頼み事とは何だ。お前のウォーミングアップと俺への頼み事に何の関係がある」

「当たり前の話だけど、僕は時の勇者にこっぴどく負けるだろう? そ

の際、僕は時の勇者に封印されるかもしれないんだ」

「万々歳だな。そのまま封印されていろ」

「ギイ・クリムゾンはそれで良いのかい？」

そのカイの問いかけは意味深長だった。少なくともギイはそう受け取り、頭を回す。

「良いのか？」という問いは、つまり良くない事がある示唆だ。ギイはカイが封印された場合の不都合を考える。

「封印は、解かれるか」

「その通り」

前述の通り、封印は解かれるものなのだ。それがいつになるとしても、誰がするにしても、事故にしても、故意にしても。

「お前は、あのスライムとの戦いを果たさない限りはこの世界を去らないんだったな」

「そうだよ、その言葉に嘘はない。安心院あんしんいんさんに誓ったのもそれだったつけ。ま、何でも良いけど」

「お前がもし、あのスライムが死んだ後に封印が解かれようものなら……」

「僕はこの世界を永久に去らないかもね」

あくまでも「かも」の話である。しかし、ギイにとって見逃せぬ可能性だった。

カイにはこの世界から是が非でも出て行ってもらいたい。それがギイの偽らざる本心だ。

「頃合い、ではいつごろか難しいか。じゃあ聖魔大戦が終わって世界が落ち着いてきたら、僕の封印を解いてね」

「……頼まれてやっても良いが、封印解除にはおそらく時間がかかる。お前がウオーミングアップに選んだ。勇者として完全に覚醒した時の勇者、そいつが全力でかけた封印を解かなければいけないのだから？」

完全覚醒に至っていなくてもヴェルドラを封印せしめた勇者。そんな存在が覚醒して全力で施す封印だ。解除が想像を絶する難度なのは火を見るより明らかである。ギイも不可能とは言わないが、甘く

見積もって数年、下手すれば百年単位の時間を要するだろう。

「さすが、ギイ・クリムゾン。そうだよ、僕は時の勇者が完全に覚醒した辺りを狙うつもりだ。でも、解除する必要はないよ。破壊してくれるだけで良い」

「それなら確かに時間は要らないだろう。しかし、死ぬぞ」

解除と破壊では難度に雲泥の差があり、もちろん破壊なら如何なるモノでもできる自信がギイにはあった。が、封印されたモノを万全に取り出したいから封印を解きたいのであって、封印の破壊となれば封印されたモノも無事では済まない、実に本末転倒である。

「……いや、お前なら死なないのか」

ふと、そんな予測でも推測でもなんでもない、強いて言うなら予感がギイの口から漏れた。カイはその漏れた予感にニツコリと微笑む。

「死んだ後の事、地獄か天国か。そんな幻想の領域は僕の領分だ。死んだ後に死んだ現実を受け入れないくらいはいつもの事だろう？ それに、万が一それで蘇れないとしても、僕は本望さ。それこそ、完膚なきまでの敗北だからね」

死ねればカイの領地、あの狭間空間に魂が飛ばされるようになっていく。狭間空間までは時の勇者の力は及ばない。

だがもし、狭間空間に飛べない程、狭間空間を維持できない程消耗していたならば。悔しさも恥ずかしさもない、全力全開の戦いで完膚なきまでの敗北に至っている事になる。それで本願成就。カイは別に、完膚なきまでの敗北をくれるならリムルでなくても良いのだ

「……お前からの頼み事、任されてやる」

頼み事を聞き届ける以外の選択肢があつたかは怪しいが、とりあえずギイは聞き届ける選択をした。納得の有無である。

「ありがとう。それじゃあまたね。バイビ」

カイはにこやかに手を振って、まるで幻想だったかのように消え去る。しかし、ギイの脳裏に焼き付いた幻像は、消えてくれなかった。

第三十六話 世界とは、生命を微睡のユメに閉じ込める揺り籠

「異世界からの召喚、条件の設定、絞り込み……。研究は遅々として進まず、実験するには危険性が高い、か……」

レオン・クロムウエルは自身の領地内に設けられた魔法の研究施設、特に異世界からの召喚について研究していた場所からの道すがら、徒労感と無力感を独り言と共に吐き出した。

研究といっても、静江を召喚したあの時以来、異世界からの召喚は行っていない。如何なる仕組みによって異世界から呼び出されているのか、試行の記録から分析するに留めている。実際の異世界からの召喚は、もっぱら協力者に任せっぱなしだ。確実性が欠ける実験を愚かしくも続ける性分ではないし、無関係な者をその召喚で巻き込んでしまう事へのリスクを考慮した上である。

「やあ、レオン・クロムウエル。元k——」

突然視界に映ったカ虫図が走る男イに対し、レオンは一切の呵責も躊躇もなく、究極能力『純潔之王』の光を放つ。ほぼノーモーションだったため、カ虫図が走る男イはあえなく塵となった——

「目が、目があああああ!!」なんてね」

——が、光が治まった瞬間には何もなかったかの如く立っている。「ちっ」

「開幕舌打ちって。愛想が悪いねえ」

嫌気を隠しもしないレオン。分かっではいたが、この微塵も好感を持たれていない態度には、さすがのカイも苦笑いを浮かべた。

「俺は忙しい。とつとと何処かへ消えろ」

「忙しいって。自分の領地に引きこもり続けているだけじゃないか。もしかして、無職の引きこもりかい？」

「なるほど、死にたいんだな」

レオンは自身の言葉の最中にレイピアをカイの頭へ突き立てていった。

「わああ、これは中々斬新……でもないか。ハロウインの日に渋谷にでも行けばたくさん見れそうな姿だね。ほら、フランケンシュタインみたいだよ。あれはレイピアじゃなくて螺子だけど。でも鍵みたいなのがぶっ刺さってるバリエーションとかもあるよね、フランケンシュタインって。後は、なんかもう螺子とかじゃなくて角が生えてるやつとか」

しかし、右から刺された刃が左から出てようが構わず、カイは平然とレオンの横に付いている。

「……何の用事だ」

構いきれなくなったというか、さつきと用事を終わらせて出てってもらう方にレオンは切り替えた。

「観光かな？ほら、君の領地って黄金郷エル・ドラドなんて言うだけあつて見た目はとても綺麗でしょ？観光には持って来いかなって」

「……」

「冗談冗談。全く、ギャグの通じない男だなあ」

ふざけた事をぬかしたカイに、レオンはもう居ないモノとして扱って足を速めたが、一応ちゃんとした用事があるカイは追い続ける。まあもちろん、レオンはその程度で足を止めない。反応するだけ揶揄われてストレスが溜まるだけだ。

「あ、もうガン無視だね。じゃあ君の気を引くために、静江ちゃんの用事の方から済ませてもらおうか」

「……シズエだと」

カイの口からその名が出た事で、さすがにレオンも足を止めざるを得なかった。

「シズエ・イザワは死んだはずだろう」

「おや、やっぱり気になるかい？」

「……」

カイの口角を上げた事で彼の思惑に引かかかったような、非常に癪な感覚に陥り、レオンはカイを睨みつける。

「ま、リムルからの伝言も聞き届けていたし。君も案外、自分が呼び出してしまった者への責任は感じていた訳だ。全く女々しいねえ」

「……さつさと用事を済ませろ」

「済ませたいのは山々なだけどき、なんか心の準備とかで決心付かないみたいなんだよね」

「……はあ？」

まるで他人事みたいな言い回しで、しかも言うに事欠いて決心が付かないとは。殺意すら滲ませていたレオンも思わず呆れてしまった。

「ほらほら、この瞬間湯沸かし器も驚きの呆れようだ。そろそろ決心付けてくれよ、静江ちゃん」

カイは自身の左側、何もない空間へと視線を投げ、溜息を吐く。とことん訳が分からず、レオンも何の気なしにその空間を見た。

「……お久しぶりです、レオン・クロムウエル。私は、シズエ・イザワ井沢静江です」
「な!？」

どこかからか女性の声が聞こえる。その声は面影があり、聞き覚えのある声だった。俄かには信じがたいが、レオンはその声を静江本人のモノと直感する。

「……カイ・ヤグラ、シズエ・イザワを使つて何をするつもりだ。アイツの尊厳を踏みにじり、あまつさえそれで俺を脅そうというなら……。消滅殺すさせるぞ」

レオンの怒りは再沸騰、いや、そんな生易しい領域ではなく、怒髪天を衝かんばかりに怒り、カイの胸倉を掴み上げた。

それが、レオンが静江に対して如何程に責任を感じていたかの証左である。

「止めてください、レオン！私がこうなっているのは、私の選択、私の意思です！カイさんに強要された訳でも脅迫された訳でもありません！」

「弁護はしなくて良いよ、静江ちゃん。多分何言っても僕の脅迫を疑うから。それよりさつさと用事済ませてね。じゃないと僕も退くに退けないよ」

静江がどうかレオンの怒りを鎮めようとするが、カイの言葉通りにレオンの怒りは一向に鎮まる気配がない。

どうせマイナスに解釈されるなんてカイにとってはいつもの事。

なので改善プラスにしようなどとせず、むしろ静江を急かすための材料とした。

「……レオン。私は、貴方に感謝しています」

明らかにそんな感謝を述べる雰囲気ではないが、良い雰囲気なんて望めないのが過負荷マイナスだ。その点は静江も理解し始めている。なので、空気を読んでいない自覚をしながら、静江は感謝を述べる。

「感謝だど？こんな世界に自分本位で呼び出した俺にか」

「……イフリートを憑依させようとした貴方なら察しているでしょうが。私は、貴方に呼ばれなければ元の世界で死んでいました」

静江の言葉に、カイを吊り上げるレオンの腕は、僅かに力が弱まる。「お前は、呼ばれて幸せだったって言うのか？この世界で碌な目に合っていないお前が？」

「はい。私を地獄から逃がしてくれた貴方に会えて、私を導いてくれたカイさんに会えて、私を強くしてくれた時の勇者様に会えて、私を慕ってくれた教え子たちに会えて、私を救ってくれたリムルさんに会えて。私は、間違いなく幸せでした」

「……そうか」

静江の本心から述べられる感謝を受け、レオンはカイを降ろした。

静江からカイに洗脳されているような節は窺えない。カイが静江を利用してしようとしているのではない。少なくとも、カイに身も心も囚われているようではなく、レオンは内心安堵したのだ。

「俺の都合で呼び出し、放置した事には謝罪する。償いにもならないだろうが、お前の行動を縛るつもりはない。お前が何をしようと、邪魔はしない。好きに生きろ。……できれば幸せに、な」

レオンの顔はカイに対するような険がなく、最後の方は優しげですらあった。

「ありがとうございます」

「はっ！何処に礼を言う箇所がある、変人め」

レオンの照れ隠しじみたぶつきらぼうな対応に、静江はただ目を細める。

気に食わなかったというか、キャラではなかったのか。レオンは静

江が居るだろう場所から顔を背けた。

「ツンデレさん」

「言葉の意味は分からんがぶち殺すぞ」

「それはもつと殺気出して言う言葉だね、さっきみたいにさ。あ、「殺気」と「さつき」をかけたギャグではないからね」

付き合いきれないのでレオンはその場を後にしようとする。

「時の勇者はクロエ・オベールだ」

そんな背中へ、カイは特大級の爆弾を投げ放った。

「今……何と言った……？」

「時の勇者と世に語られる女性こそ、君が探し求めた存在だ。そう、僕は言ったんだ」

投げ放たれ爆弾の衝撃で、油を差し忘れたブリキの人形のように緩慢な振り返りをするレオンへ、カイは懇切丁寧に噛み砕いて表現し直した。

「……アルロス」

「ハッ！ここに」

レオンの招集に応え、突然現れた（と言ってもカイのするそれではなく、あくまでユニークスキル『瞬間転移』^{テレポート}によるもの）銀の甲冑に身を包んだ男、アルロスが跪く。

「時の勇者の姿を想起し、俺に『思念伝達』で共有しろ」
「ハッ！」

否応なく、訳も問わず、主の指令をアルロスは忠実に実行する。

「……………違う、クロエじゃない」

「……………おや」

「……………だが、クロエだ」

「ああ、そういう事」

レオンの珍妙な言い回しにカイは納得した。

「どういう事だ、カイ・ヤグラ。どうして俺はクロエと識別できない者を、クロエと判別できる」

レオンがあのような珍妙な言い回しをした理由がそれだ。レオンは今しがた共有された時の勇者の姿を、レオンの体や精神ではクロエ

と思えないのに、レオンの魂が「彼女は自身の大切な妹のような者」だと叫んでいる。非常に複雑怪奇な状態に、レオンは直面していた。「ま、『純潔之王』^{メタトロン} 1つじゃそのくらいの抵抗がせいぜいって事だね」「煙に巻くな、簡潔に言え！これはどういう事だ！俺は何者かに認識を狂わされてるのか!？」

レオンは焦りを持ってカイに掴みかかる。自分が大切な存在をしつかり認識できないなど、レオンには断じて許せない。

「者、というか世界だ。君は世界に認識を狂わされている」「ふざけるのも大概にしろ！」

「ふざけていないさ、いたって真面目。良いかい、レオン・クロムウエル。僕は今日君の目の前で一言も嘘を言っていない、冗談は言っただけだ。だからしつかり聞け、レオン・クロムウエル」

笑みを崩さぬカイは、一際不気味な笑顔を浮かべる。

「世界が、そう仕組んだ。世界がクロエ・オベールを最強の勇者にしようとレールを敷いた。これは、運命だ。誰も抗えない。誰も覆せない。誰も変えられない。運命を変えるなんて話はそこら中に転がっているけど。僕から言わせれば、運命を変えて未来を変える事も、運命の内さ」

カイは汚泥を煮詰めた瞳を見開いている。レオンは、知らず知らず身震いをしていた。

「でも安心すると良いよ、レオン・クロムウエル。君たちの幸福は確約されてる。ま、そういう事で、君のやりたいようにやると良い。プラスのやる事だ、マイナスにはならないさ」

皮肉気に眉を顰め、カイはその不気味さを引っ込めた。

「じゃ、用事は全部済んだから。じゃね、バイビ」

そうしてにこやかに手を振り、カイは幻想だったかのように消え失せる。静江も、狭間空間経由でカイに付いていった。

「……」

レオンだけが呆然と立ち尽くす。アルロスが傍に控えているが、配下の前である事を考慮する余裕がない。

「……いいや、何も深く考える必要はない」

幾ばくかの後、正気を取り戻したようにレオンは顔を引き締める。「運命だろうが世界だろうが知ったこつちやない。アイツを、クロエを取り戻せるなら」

そう、レオンにとってそれ以外は些事。考慮に値しない。

「時の勇者……。確か、ルミナスが何か喚いてたな」

時の勇者の足跡を探るべく、その名に関して荒れていたルミナスに、レオンは白羽の矢を立てた。

第三十七話 ユメと消える

イングラシアに居る異世界から召喚された子供たちの救出。残念ながら、日向はそれを極秘に遂行する事ができなかった。そもそも、子供たちは優樹の陰謀に気付いた者を釣りだすエサの1つだったのだ。

見事釣られる形になってしまった日向は優樹と対峙していた。

「ユウキ、貴様！子供たちを犠牲にするつもりだったのか！」

子供たちの不安定な状態を利用し、次の異世界召喚に必要なエネルギーを彼らで賄おうとしていたのだ。その事実を聞かされた日向は俄かに激高した。

「欠陥品を有効に利用しようとしてただけじゃないか。ただ死なせるのは勿体ないし、犠牲が無駄になるだろう？どうしてそういう風に考えられないかなあ」

優樹は、ただ正義を振りかざし、合理的な思考ができない日向に辟易する。もう少し利口な人間である事を期待していたのだが、有象無象と変わらない馬鹿であったと、認識を改めた。

「どうしてだ、どうしてシズ先生に救われたお前がこんな残酷な事をする！」

「その残酷な事を減らすためだよ、ヒナタ。この世界も元の世界と同じだ。悲劇が多すぎる。それを誰も変えようとしな。だから僕がやってやるんだ、先生みたいな犠牲を減らすために。僕がこの世界を変革する。この僕にならできる」

「犠牲を減らすために犠牲を出しては本末転倒だ！」

「だーかーら、犠牲はどう足掻いたって出るんだ。少なくするため、多くの犠牲を出してでも、さっさと世界を手にするんだよ。正義だの道徳だの倫理だの、そんなんで悠長にやってたんじゃ犠牲は積もる一方だ。どうしてそんな事も分からないんだ」

あまりにも平行線。あまりにも違いすぎる価値観。決して交わる未来はないだろう。理解し合える時は来ないだろう。その線がぶつかるとしたら、それはまさしく衝突となる。

「シズ先生の教えに従うヒナタの気持ちも重々理解できる。でももう決めた事だ。邪魔をするなら、消えてもらうだけだ」

優樹が表した敵意に日向は構える。だが、構えたところで無意味だった。

「任せるよ、時の勇者様」

「殺す事になるけど、良いの?」

「構わないさ」

突然現れた女性が、優樹のお願いめいれいを受けて、その力を解放する。

「時の、勇者様……!?何故——」

「貴女がここに?」と、日向は言葉が続けられなかった。時の勇者の魔力が嵐の如く、日向を襲ったのである。

そこから始まるのは時の勇者による一方的な戦い。日向が命を懸けて子供たちが逃げ切るまでの時間を稼いだが、それだけ。日向は時の勇者に撃ち取られた、原作通りに。



「やれやれ。原作正史通り進んで一安心だ。全く、余計な事はするもんじゃないね」

「余計な事ってのは、俺たちの足止めの事か?カイ・ヤグラ」

「時の勇者があんな小僧に操られる様を静観させたのじゃ。高く付くぞ、貴様」

溜息を吐くカイへ、釘で縫い留められているレオンとルミナスはきつく睨む。2人の怒りはカイの殺害も辞さない程に高まっているのだが、何故かスキルを使うどころか、自身らを縫い留める釘の1本も抜く事ができない。そのようにカイが現実を逃避した結果だ。

「まあ待って。君たちがあの場に登場しちゃったら、そりやもう色々ブレイクだよ」

どうしてカイがこうやってレオンとルミナスを必死に止めているかという、端的に言って、原作ブレイクを防ぐためである。

カイがルミナスにイングラシアを見張るよう無駄に助言したため、彼女が事態を早く認識した。レオンも時の勇者についてルミナスを頼ったため、彼女がイングラシアでの事態を認識する場に居合わせ

た。おかげで、カイが止めなければ時の勇者と日向が戦っている時に、2人が介入しかけていたのである。

事の原因がカイの行動であるため、カイは余計な事をしたと自覚し、溜息を吐いていた訳だ。

「ステイ、ステイだよ？ほら、今良い所だから」

カイは時の勇者を映している水晶を眺める。その水晶を用意したのはルミナスだが。

水晶の映像ではすでに時の勇者と日向の戦いは、日向の死を以って終了。その死体を聖騎士団から付いてきた日向の部下たちが回収し、激闘のおかげで大量に霧散している魔素を利用した転移魔法で離脱していた。残念ながら、水晶の映像は時の勇者を捉えているモノなので、転移した彼らを追う事はない。

彼らの離脱を見送った時の勇者と優樹は何やら話した後、時の勇者が別行動を始める。優樹は時の勇者をスキルで従えているのだが、全ての行動を制限できる程には彼女を縛れていないようだ。

彼女は何処へやら足を進める。何処かと言えば、日向の死体とその部下たちが逃げた先だ。と言っても、追撃ではない。

「うんうん、感動の再会&今生の別れってところかな？」

カイは原作知識と照らし合わせる。

この場面は確か、時の勇者が自身と日向の関係を日向の部下たちに説明するシーンだ。

時の勇者はクロエの体に日向の魂が同居した存在。日向が持つ『勇者の卵』をクロエへ委譲し、指導役として日向はクロエの過去跳躍に同行する。そうして『真の勇者』を育てる世界の筋書き。

それで、最早指導役の任を終えた日向は天に召される事でクロエの肉体から離れ、クロエを『真の勇者』として完成させようとしているのだ。

「よーしよし、頃合いだ。じゃあ行って良いよ」

「まずお前が逝け」

「まず汝が逝け」

カイがレオンとルミナスを解放した瞬間、『メタトロ純潔之王』の光に貫か

れ、『アスモデウス色欲之王』の生命を操る権限に細胞の全活動を止められた。デス2回分。死体撃ちも良いところである。どちらが死体撃ちになったかは、定かではないが。

少しでも気分が晴れたレオンとルミナスは死亡を確認する事もなく(実際死んでようが蘇るのは知ってるので)、すぐに時の勇者の元へ瞬間移動した。

「ほんと、たまに良い事しようとするやと碌な目に遭わないね。優しい僕も、さすがに涙が出ちやいそうだよ」

カイは案の定、レオンたちが居なくなってから蘇生し、誰も見ていないその場所で肩を竦めた。涙が出そうと述べているが、その笑顔は多少苦々しくなった程度で崩れない。

「お、ラッキー。水晶そのまんまだ。日頃の行いが良いおかげだね」

カイはルミナスが映像を切り忘れた水晶をこれ幸いにと活用する。

台詞については、誰か居ればツツコミ、ないし胡乱な目を向けられるだろうが、生憎静江すら居ないので誰もツツコまない。

「どれどれふむふむ……。ああ良かった。レオンがこの時点で介入するのは原作にないから、ちよつと心配してたんだけど。この分には大丈夫そうだね」

ルミナスが今しがた時の勇者から日向の魂を別け、そのまま日向の死体に封入して蘇生していた。

前後でルミナスとレオンで一悶着あったようだが、殺し合いに発展しなかったし、話し合いは早期に折り合いを付けられたようだ。大方、クロエを完全にするためにレオンがルミナスに『アスモデウス色欲之王』の使役を迫ったのだろう。元よりそのつもりだったルミナスから、レオンは要らぬ不興を買った訳だ。

「さて、僕も行くかうか」

クロエ・オベールが『真の勇者』となったのを確認して、カイもその場に居瞬ない事瞬を逃瞬避瞬した。

◇◇◇

「クロエ……。クロエ、なんだよな……」

ようやく時の勇者をクロエ・オベールと認識できるようになったレ

オンは、待望の再会で感情が溢れ、涙もこぼれそうな程瞼に溜めた。「やつと会えたね、レオンお兄ちゃん」

クロエがレオンに微笑む。成長した彼女の微笑みに、想像すれども実像にする事が叶わなかったそれに、レオンの瞼は限界を迎える。

「泣き虫だね、相変わらず」

「……違う、俺は変わった。強くなったんだ、お前を守れるくらいに。お前を、二度と手放さないくらいに。これは……、俺が情の深い男である事のアピールだ」

「何それ」

以前とは比較できない強さをレオンが身に着けているのはクロエも感知している。しかし、昔と変わらず意地を張るレオンの姿に、クロエは安堵した。

「絶対に、取り返してやるからな。クロエ、待ってるよ」

「うん、待ってるよ。助けに来てね、お兄ちゃん」

レオンから徐々に庇護対象の妹と扱われるクロエだが、懐かしく、そして甘く、彼女はついつい甘受する。

なんだか二人だけの空間を作っているが、ここには日向やその部下、ルミナスが居たりする。まあ、ルミナスに至るまで空気を読んで空気になっていた。

そうして、レオンとクロエはお互いの空間にどっぷり嵌まり、抱擁をしようとした。その時だった。

そこに、空気の読めない奴が乱入する。

「出会いも奇跡も——」

突如、レオンの背後、クロエの視界にその男は現れる。

「——そんなモノは——」

世界が軋む。その異常事態に、皆がカイへ刃を向ける。カイが犯人であり、まだ途中経過である事は明白だった。このままなら誰かの攻撃が間に合うはずだ。

そのはずなのに、クロエには、その一瞬が異様に長く感じられた。カイの放つ不気味さが、クロエにそう感じさせたのだ。

「——幻想でしかないんだ」

カイが言葉を言い終えた。それに合わせ、世界がテクスチャを失ったように真っ白になる。クロエを除いて、皆も掻き消える。

世界が、逃避消去されたのだ。

「さあ、時の勇者改めクロエ・オベール。第二ラウンドだ」

世界を否定した男は、ただただ不気味に笑っていた。

第三十八話　これはユメだ

「カイ・ヤグラ……。これは、いったい……」

地面も周りも空も真っ白になった空間。一瞬にして魔王も諸人も区別なく消える光景。クロエはそんな夢のような事態を現実であると受け止められず、まさに夢でも見ているかの如く呆けてしまった。

「世界の余白、とても名付けようか。とにかく、ここは今世界のテクスチャが逃避^{消去}され、空白地帯になってるんだ。範囲にして半径1キロメートルの球状。世界がギリギリ何の反動もなく修正できる許容範囲さ」

カイは不気味な笑みを携えたまま、その事態の主犯であるにも拘らず、他人事めいた態度で説明を始める。

「それで。本来ほつとけばそのうち修正されるんだけど、僕が逃避^{消去}し続けているから修正されない。世界はこの異常な領域に対して、領域外からは認識されないように施している。ま、そもそも内側に何かが存在できる訳はないんだけど。そこはほら、僕だからって事で納得していてね？」

「しよう、きよ……?」

長々と説明されている中、クロエはその単語のみをようやく拾い上げた。

「そうさ。僕が君と僕以外の存在を空間毎消去した。正しくは、消去した空間の中で、君と僕だけを例外にした。他は通常通り、世界の消去と共にさよならさ。残念ながら、究極^{アルティメット}能力^{スキル}を持っていようが、そういう世界の摂理には抗えない。だから、ルミナスも日向も、そしてレオンも、まっさらに消えちゃったのさ」

「カイが、消去して……。レオンも、まっさら……。……っ!!」
やつと事態を整理できたクロエは自身の剣を抜く。

「貴方が！世界と、レオンたちを消したって言うの!?!」
事態を整理し、臨戦態勢をとるも、それでもクロエは未だ信じられない。
「世界を消去するなんて、魔王だろうとできるはずがない。それがで

きるとしたら、それは――

「簡単な事さ、この世界は僕の幻想ユメなんだから。夢の中なら、みんな自由に世界を弄れるだろう?」

「そんな、そんな馬鹿な事がっ!」

カイが明かした話は、あまりにもふざけていた。

目の前の人間が創造主であるはずがない。なのに、世界を自在に消去できる事実が存在する。カイ・ヤグラが世界の創造主である根拠だけが存在してしまっている。

「じゃあまあ、僕が創造主であるかどうかは置いて、目先の事について語ろうか。さつきも言ったけど、レオンたちを消したのは僕だ。なら、分かるだろう? どうすれば良いか」

カイは何が楽しいのか、その口角を大きく吊り上げた。そうされて、クロエは察した。彼は、自身を挑発しているのだと。

「……貴方を倒せば、レオンたちは返ってくるの?」

「倒すなんて生温い事言うなよ、クロエ・オベール。僕の思考を止めれば、僕は世界の修正に抗えなくなるんだ。つまりは、僕を殺せばレオンたちが返ってくるって事さ」

その言質を得て、クロエは剣を強く握る。そして、底冷えのする殺意を、おそらく人生でたった1度だけ、放った。

「殺せば良いのね」

「その通り。だけど、死から逃れ続ける僕に、死を受け入れさせるのは容易くないよ? 今回は途中で止めたりしないしね。最後まで付き合っておくれよ、勇者様プラス」

クロエの睨みつける鋭い視線とカイの薄目から覗く不気味な視線が交錯する。カイはクロエの漲る魔力に晒されているのだが、クロエもまたカイの淀ませる不気味さに晒されている。気体ですらないはずのそれが、魔力というエネルギーに拮抗している。クロエは、そんな幻覚に襲われていた。

例えば、クロエはカイと相対した事は1度しかない。その時もおよそ本気ではなかった。とするならば、今のカイこそが本気なのかもしれない。

プレッシャーを感じる。喉が渇く。本気で相対するその男が、人間の形を取っただけの別の何かに見えてくる。未知の恐怖が、クロエの思考を麻痺させ、足を地面へと縫い付ける。

だが、それで縫い留められるなら、クロエは『真の勇者』などになっていない。積み重ねてきた努力とそれから得られる勇気が、彼女の背中を押す。だから彼女は踏み出せる――

「霊子崩壊!!……え?」

――それらが幻想でなければ。

究極能力『希望之王』で詠唱破棄し、究極能力『時空之王』で直撃までの時間を消し飛ばしたはずの攻撃は、そもそもが不発で終わった。

「残念。1度見た技は逃避通じないしたのさ。それで、次はどんな技を見せてくれるのかな?何度でも死を逃避蘇する僕に、あと何度新しい技を見せてくれるんだい?」

「っ!!」

攻撃技の封印、しかもノーモーションのそれ。また一つ、カイが世界の創造主である根拠が積み上がった。頭の片隅に置いたはずの疑惑が芽を出す。クロエの努力と勇気も幻想だったのではないかと、この目の前の男が見せた夢だったのではないかと、彼女の現実を侵食する。

「おや?おやおや?おやおやおや?おやおやおやおやおやおやおやおやあ~~~~~?」

どこまでも不気味な嘲笑が鼓膜からクロエの脳を揺さぶった。

「今、後ずさったね?今、恐怖したね?何をそんなに怖がっているんだい?僕の言葉が事実だとしても、この世界が幻想ユメだってだけさ。だからさ、もし君が壊れてしまっても、僕が逃避直してあげられるよ?」

「いやっ……来ないでっ!」

理性を溶かすような恐怖。何もかも無茶苦茶にしてしまいそうな悪性。クロエは、それが1歩1歩近寄ってくるのに、体の震えを抑えて叫ぶ事しかできなかった。

「安心してよ。この僕がこの世界に居る限り、

全^てをユ^メだ^った^事に
オールイズファンタジーしてあげるから」

剣がある。なのに、もうそれをどうやって振ってきたのかも忘れてしまった。努力は幻想となっていた。

敵がいる。なのに、もうそれと立ち向かうための力が湧いてこない。勇気も幻想となっていた。

『真の勇者』クロエ・オベールを支えてきた努力と勇気は幻想となった。ならば、彼女に敵へ抗える力はない。

本当に？

—勇者様

声が出た、懐かしい声。クロエに長く寄り添った者の声で、彼女の脳裏に響いた。

「それじゃあ。おはよう、クロエ・オベール」

クロエは思い出す。自身を支えてきたモノ、努力と勇気——

「ええ。おはよう、カイ・ヤグラ。目が覚めたわ」

——そして、絆。

時の勇者クロエ・オベールは誰かに支えられて生きてきた。異世界に飛ばされた時はレオンに、過去に飛ばされた時は日向に、その旅の間は静江に。

彼女にはまだ絆がある。その絆を取り戻したいという思いがある。ならば、クロエは立ち上げられるのだ。彼女は、『^{真の勇者}プラス』なのだから。「ん？これは……」

カイの目の前をクロエの剣がかすめたが、カイに当たる事はなかった。そもそも、それはカイを狙った攻撃ではない。時間と空間を狙った切断、^{アルティメットスキル}時空間を操る究極能力『^{ヨグ・ソトース}時空之王』の力だ。

カイはその無色透明な、触ったという感触すらない壁に阻まれる。試しにこの壁を通り抜けるよう逃避してみるが、逃避できない。逃避の仕方が合っていないのだ。

「なるほど、時間と空間を別けたのか。さながら、この壁で囲まれた空間は別世界という訳だ」

「そうよ、この壁はいわゆる世界の壁。此方と彼方は時間が寸断され、空間も連続しない別世界。時間と空間を合わせられる私しか、こうやって交流できない」

先程の努力と勇気を幻想にされたか弱き女性はどこへやら。クロエ・オベールはその身と心を努力・勇気・絆で満たしていた。

「そして、この交流も残りわずかよ」

「ふむ、ははっ。これはこれは。念入りな事だね、少し悠長ではあるけど」

クロエの言う通り、カイはつま先から固まっていって感覚に襲われている。時間と空間を固定しようとしているのだ。

「で、こんなゆっくり固めて僕を怖がらせるつもりかい？意趣返しかな。でも、僕はとつくの昔に覚悟を終えてるんだ。僕は恐怖しない。どうせ、オールリスフアンタジー全なんだから」

「……最期に訊きたい事があります、カイ・ヤグラ」

その残された時間は恐怖させるための時間ではなく、ただ落ち着いて問答するための時間。

「貴方は、何のためにこんな事をしたんですか」

クロエには、ついでカイの動機が分からなかった。世界を消去までして、何のために自身と戦わざるを得ない状況を作り上げたのか。

「何のためについて、そりゃ負けるためだよ」

「負けるため？」

「そう、負けるため。僕はね、勝てないんだ。誰と戦っても、何処で戦っても、何で戦っても、僕は勝てない」

カイから不気味さが消え、その笑みは、何処となく苦々しかった。「勝てないって分かっているならさ、気持ち良く負けたいじゃないか。負ける事しかできないとしても、負け方を選びたいじゃないか。だから、僕は君が本気を出して戦える場所を整えた。君が僕を完全に消滅させ得るだろう状況を整えた。ウォーミングアップとは言ったけど、別に僕はここで完膚なきまでの敗北をしても良かったんだ。なのにさあ！」

カイはその目を見開き、世界の隔てる壁へ両手の握り拳を叩きつけ

る。

「なのにな、どうして君は僕を消滅させてくれなかった!!!」

カイが訴えるのは怒り——

「君なら僕を完全に消滅させられただろう！その時間を操る力で僕の時間を誕生まで巻き戻せば、僕を生まれる前に殺せるはずだ！僕が現実から逃げる前に殺せるはずだ!!僕が苦しむ前に殺せたはずだ!!!」

——そして、あまりにも醜い憎しみ。

「カイ・ヤグラ……。貴方は……」

そんな感情を抱えるマイナスは、プラスの理解の範疇に居なかった。

「ああ、本当に。本当にさ、僕はいつまで幻想を見ていれば良いのさ。いつになったらこの幻想から逃れられるのさ」

そこに居るのは、幻想に取りつかれた男だ。

「なあ、僕はもう疲れたんだ。僕にはもう幻想と現実の区別も付かない。逃げすぎた。逃げるしかなかったとしても逃げすぎた。僕はもう反射的に死を逃避してしまう。精神も肉体も魂も過去も未来も死を逃避してしまう」

そこに居るのは、『過負荷』だ。

「……私には、分からないわ」

そんな男に対して、クロエは本能的に理解を拒んだ。

「だろうね」

カイは怒りも憎しみも引つ込め、まるでさっきまでが茶番だったようにケロツと笑顔に戻る。一瞬、諦観が混じったように、クロエは感じた。

「ま、悪くない敗北だったよ、やっぱり悔いは残るけど。メインディッシュはある事だしさ、そっちに期待させてもらおうかな。それじゃあバイバイ、クロエ・オベール」

最後はにこやかに手を振って、時空間毎固まった。まったく封印に似つかわしくない封印水晶がそこに出来上がる。

最後までその男は、幻想のような男だった。

第三十九話 ユメじゃない

狭間空間にて。井沢静江は静かに座っていた。その表情は曇天と呼ぶに相応しい。

彼女は後悔とも達成感とも付かない感情に苛まれていた。

—簡単な事さ、この世界は僕の幻想ユメなんだから

カイがクロエとの戦闘中に言い放った言葉。静江はその言葉を狭間空間で聞いていた。何だったら戦闘の前後もプロジェクターがスクリーンに映す映像で見えていたし、スピーカーで音声も聞いていた。とにかく。静江は、そのカイの言葉が受け入れられなかったのだ。「全てがカイさんの幻想ユメだって言うなら。私とカイさんの出会いも、レオンや優樹たち、リムルさんとの思い出も。そこにある私の感情も、全て幻想だって言うんですか……」

自身の幸福が全て幻想だったなんて、静江には受け入れられない。それは彼女にとって否定したい事実だった。

だから、彼女はクロエに一言贈った。「勇者様」と、『結言状ダイイングメッセージ』で伝えたのだ。

「私の胸の中にある全てが全部幻想ユメだなんて、私は嫌です……。だって、これは全部私のモノで、私の現実なんです……。私が私であるための、現実なんです……」

自身の大切なモノを、静江は幻想にしたくなかった。

ならばどうするか。

証明すれば良い。これらが全部カイの幻想ユメだと言うのなら、カイを殺して証明すれば良いのだ。

彼を殺して消えないなら、これは現実。彼を殺して消えたのなら、これは幻想。

そんな無茶苦茶な論理が、静江の頭に過ってしまったのだ。それ故の、クロエへの一言だった。

後に冷静さを取り戻した静江はその無茶苦茶さを自覚した。一歩間違えば本当に何もかもが消えかねず、消えなかったとしても恩人を殺していた。結果として彼を殺すには至らなかったが、それでも静江

は己が過ちを猛省している。

以上が後悔のような感情がある理由である。

では、達成感のような感情がある理由はなんなのか。

それは、とあるビデオレターに由来する。

カイが置いていったプロジェクターには、いつの間にかビデオデッキが接続されていた。さらには、既に入れてあったビデオが勝手に再生されたのだ。

内容はこうだ。

へやあ、静江ちゃん。この動画が流れているという事は、僕はもうこの世に居ないだろう……。なんてね。居なかつたらこの動画がない事を逃避し続けられないさ。ああ、でもこの世以外にも僕は居られるしなあ。狭間空間とか。

相変わらず訳の分からない冗談を、カイは冒頭に挿んだ。

へまあまあ、そうだったらこの動画は流れないんだけどね。この動画は、僕が転スラ世界の居ながら、行動が完全に封じられた場合に限り流れるようになってる。最悪の事態を想定した場合の、遺言みたいなもんだね。マイナスのする最悪の想定とか当たりそうで怖いんだけど。

嫌な予感ほどよく当たる。一般人でもそうなら過負荷だとより当たりそうだ。カイも苦笑いを浮かべてしまう。

へとりあえず、だ。当たろうが当たるまいが、しばらく静江ちゃんの面倒を見られないのは変わらない。それが本当に「しばらく」か、「永遠」かの違いだね。なので、ここら辺でお別れとしようじゃないか。ねえ、静江ちゃん。

お別れを告げられた時、静江は思わず息を呑んだのだ。一瞬でも殺す事を考えておきながら。カイという庇護者との決別は、本来静江にとって避けたいモノだった。クロエ、時の勇者でその決別を一度経験したせいだろう。

へいい加減、僕らは大人だ。いや、僕は永遠の17歳なんだけどね？でも、それならなおさら僕にいつまでもくっついてるのはおかしいじゃないか。独り立ちしようよ。ね？。

カイは優しく論じていた。おそらくは、静江以外が気色悪さを逆に感じてしまう程優しげである。

「僕が教えられる事は全て教えた。僕が与えられるモノは全て与えた。多分、どっちも下手だったと思うけど」

不出来を恥じるように、カイは頭をかいた。

「ま、何。僕が変な影響与えるのも嫌だしね。君らしくあつてほしいのに、僕らしさが染みてしまうのは、僕としても逃避したい」

カイは『過負荷』^{マイナス}でしかない。教えられ、与えられるとしたら、過負荷らしいモノだけだ。それでは静江の『異常』^{アブノーマル}が汚染されてしまふかもしれない。だから、これ以上は余計だったのだ。

「巢立ちの時だ、井沢静江。そしてさよならだ、僕の唯一の後輩」

そこで、その動画はそれで一旦終わる。二度とカイに会えないものとして、静江は瞼に涙を溜めた。だが、そう、終わったのは一旦だ。

「なんか前の動画でかつこよく締めた気がするけど、もうちょっとだけ続くん」

消えたと思つたプロジェクターの光は、そのカイの言葉と共に再び灯った。

「本来はさっきので終わり。だけど、静江ちゃんが特別な行動をした場合のみ、こっちも流れるようになってる」

カイが指す「特別な行動」について思い当たらず、今生の別れと思つてたのもあつて、静江は静聴していた。

「特別な行動。それは、「君が誰の指図も受けず、自分の意志だけでした行動」だ」

「あ……」

声漏れる。振り返れば、少なくともカイと同行をし始めてから、自身の意思でした行動は少なかった。したとしても、促されてだったり、そうせざるを得なかったり。そういう、半ば強制された時ばかりだ。

「僕の予想では、時の勇者を助けたくてなんかするんじゃないかなーってところだけど。実際はどうだったのかな。ま、今度会ったら聞かせてよ」

カイの予想は、残念ながらと言うべきか、当然ながらと言うべきか、外れていた。実際は、己の現実を守るために、カイの幻想を否定するための行動だった。誰かのためとするには、あまりに利己的である。へなんにせよ。君が自分の意志だけで行動できたなら、僕はとっても嬉しいよ。ちよつと心配になつてたんだ、この子一人で大丈夫かなあつて」

過保護な母親のような悩みをカイが抱えていた事実には、静江は最初頬を赤らめていた。

へでも、君はちやんと歩き出せた。僕の取り越し苦労だった訳だ。いやあやつぱり、僕が思う通りに事が進むなんてないね。それとも、君が『異常』だったおかげかな？きつとそつちなんだろうね」

今度は我が子を褒め称えるようなカイの態度。しばらく静江の頬は熱かつただらう。

へそう、君は『異常』なんだ。君が望めば、きつと何処へだつて行けるはずさ。マイナスなんて枷は必要ない」

カイがその時浮かべた笑顔は、とても寂しげだった。

『異常』はある種、カイと同類でない事の証明。

カイは、静江が自身と違う事、自身の後輩でなければ仲間でもない事に、寂しさを感じていたのかもしれない。

へさあ、僕の事なんて幻想か何かだと思つて忘れて、自由に世界へ羽ばたいていけ。好きなように生きろ。君にはその権利がある。だって、君のこれからは原作にも描かれていない、どこまでも自由なんだから」

開かれた目で、とても暖かな眼差しで、カイは静江の門出を見送るのだ。

そうして、その動画は終わったのだった。

以上が達成感のような感情がある理由である。

「カイさん……」

動画の内容を思い出すと同時に、静江はカイからもらったモノ全てを反芻した。そして、自身の中に答えを見出す。

「私は、カイさんと居た事を忘れるなんて嫌です」

その答えは、否定だ。やはり受け入れられない。

「今の私が居るのは、カイさんが居たからです。カイさんも、私にとつては現実なんです。貴方との思い出は、私の一部なんです」

肯定的否定とも言うべき、ポジティブな否定。その否定こそが、今まで流されるままだったような静江の、大切な自立心。ある意味で、『過負荷』であり、『異常』でもある彼女らしいのかもしれない。

「だから、「好きなように生き、好きなように死ぬ」。私はカイさんの後輩だから」

静江は席を立つ。いつまでもここには居られない。カイさんがそう望み、自身もそう望んでいるのだから。

「まずは、自身の好きな事を探してみます」

スタートラインに立つ。随分と長く生きてきたはずの人生、その初めでのスタートライン。

「カイさん。行ってきます」

静江は、スタートラインから踏み出した。

第四十話 ユメを越えて

「私は何がやりたかったんだろう。何がしたいんだろう」

静江は考える。好きなように生きるための、その好きな事を、静江は考える。

未練がある浮遊霊のように、静江は徘徊する。

町を巡ってみた、栄達を極めるそれも、限界集落のそれも。

「違う。私の好きな事はここにない」

賑わいを肌で感じる事、閑散に寂寥感を抱く事、旅する事、人を観察する事。どれも違う。

その賑わいを壊そうとも、その寒村を栄えさせようとも、静江は思えない。路頭に迷った人たちに手を差し伸べたいとは思ったが、静江が彼らに差し出せる手はなかった。誰とも触れ合えない手が、そこにある。

そう、静江は誰とも触れ合えない。彼女の『不幽霊』スリーピー・ホロウは他人との接触を許さない過負荷マイナス。

「誰とも触れ合いたくないの？ 私は……」

静江は首を振る。誰とも触れ合いたくないのなら、『結言状』ダイイングメッセージという他人と話すための異常性アブノーマルを持っている事と辻褄が合わない。

「何かを見届けたかったの？ 誰かと話したかったの？」

『不幽霊』スリーピー・ホロウは何かを見届けたいがために、己を現世へと縛り付けるスキル。『結言状』ダイイングメッセージは誰かに言葉を贈りたいがために、あらゆる障碍を越えて言葉を届けるスキル。それらのスキルが心の底にある願いから生まれたとすれば、それは静江の願いをかたどっているはずだ。

「でも、『当然変異』？」

『当然変異』オルタナティブエイトは否定するスキル。しかし、何を否定したいがために生まれたスキルかは分からない。

「分からないけど、立ち止まってちや駄目。まずは、何を見届けたかったのか、誰と話したかったのか、探らなきゃ」

探ると言うが、静江は思い当たるモノが既にあった。それがあ

所に、とりあえず所在が分かる方に、彼女は真つすぐ足を向ける。

静江がそんな自分探しをする中、世界では東の帝国の活発化が噂になっていった。

◇◇◇

空を浮遊する事で障害物を無視できる静江も、目的地、イングラシア王国の王都への道のりは長かった。無意識に遠ざけ、遠い場所を巡っていたせいもあるだろう。その長い道のりで、静江は自身の無意識を自覚していた。

王都の関所。わざわざそこを通る必要がないのに、自然と通り道に選んでしまう。門番に一切声をかけられず通り過ぎてしまえた事に、多少の寂しさを覚えた。

だが、寂しさに囚われる事なくさらに足を進める。

向かう先は、自由学園。静江の教え子たちが通っていた学校だ。

そう。静江が思い当たっているモノとは遺してしまった教え子たちの事だった。

静江が記憶にある道を、教え子たちの教室に至る道を辿る。

程なくして着いたその教室は健在であり、中には人の気配があった。

静江が壁を一枚擦り抜けければ、教え子たちの顔が見られるだろう。だが、ここまで止まらなかつた足が、ここに来て止まってしまう。

顔を見せる事ができないのに顔を見てしまう事を、静江は逡巡していた。

「貴方たちー！」

教室の扉を潜れずにいた静江の耳に、つんざくような怒号が響く。

「この声は、ヒナタ？」

学園に通う必要がないだろう日向の声が、懐かしくも教室から聞こえた事に、静江は興味をそそられた。その興味が、静江の背中を押す。壁を擦り抜けて中に入ると、教え子の中でも学園に通っている子供たちが身を縮こまらせ、その子供たちに日向が相對していた。

「また新任の先生を追い返したそうね。これでいったい何度目かしら」

やはりと言うべきか、日向が子供たちを叱りつけていたのだった。「だ、だって……あんな大人たちから教わる事なんて……」

「黙りなさい。この世界の常識さえ学び終えてない貴方には、教わる事なんていくらでもあるわ」

子供たちの1人、三崎剣也ケンヤ・ミサキが口を尖らせながら言い訳すれば、日向はそれを一喝した。

日向の言葉は尤もである。この子供たちに戦う術を教えられる人間は、残念ながらこの学園の講師の中に居ないとしても、世界の常識、学問を教えられる人間はいくらでも居る。

ただ、それすらも子供たちは突っぱねたのだ。

「で、でも、ヒナタ先生！僕たちにしっかり教えてくれる人が居ないんです！どの人も僕たちの様子を気にして、怯えてて……。誰も、シズ先生やリムル先生みたいに、しっかり向き合ってくれないんです！」
別の子供、ゲイル・ギブスンが声を上げた。その声は、ここに居る子供たちの、虚しさの叫びだ。

真剣に教え導こうとする大人が誰一人として居ない。大人たちは子供たちの強力な力に怯え、怒らせないようにと顔色を窺ってばかりなのである。

彼らの叫びに、静江は胸が締め付けられた。彼らにしっかり向き合えるのは、リムルと、自分しか居なかったのだ。

だと言うのに、静江は彼らを置いて逝ってしまった。

「そうよそうよ！私たちに教えたいって言うなら、リムル先生かシズ先生を連れて帰ってきなさいよ！」

また別の子供、アリス・ロンドが自身らとしっかり向き合ってくれ
る者たちの帰還を求め、涙を溜めながら叫んだ。

静江は胸が苦しくなる。

（この子供たちは、私の帰りを待ってる……。見捨ててしまった、こんな私を……）

置いて行ってしまった。見捨ててしまった。その子供らに抱いていた思いも忘れて、ただ楽になりたいと、何も言わずに消え去ってしまった。

そんな罪の意識が静江に突き刺さる。

今すぐ消えてしまいたいと、自分の存在を否定したいと、彼女は負の感情マイナスに囚われる。

「はあ……。貴方たち、シズ先生は……」

日向が自身を非難するモノと勝手に思い込み、マイナスな静江は耳を塞ぐ。残念ながら、幽霊のような状態にある静江の手は音を遮断できな

しかし、そもその話として、耳を塞ぐ必要などないのだ。

「……シズ先生は帰ってくるわ」

日向は非難などしない。彼女は、静江が帰ってくる事を、「またいつか」という静江の言葉を、信じているのだから。

「ケジメを付けて帰ってくると、先生は言ってたわ」

「本当……?」

「本当よ。先生は帰ってくる」

日向は静江の帰還を確信し、子供たちもそれを信じて涙を拭う。泣き出したりはしない。疑う事もしない。

だって、全員が信じている。全員が静江の帰りを待っている。

(そう、そうよ……。私が消え去ったって、なんの償いにもならない。なんのケジメにもならない)

静江はさつきまでのマイナスな自身を否定する。これでは駄目だと、本当に合わせる顔がないと。

「先生が帰ってくるまで、貴方たちは良い子にしているのよ?じやないと先生が怒って帰ってこないかもしれないわ」

「シズ先生はそんなくらいで怒ったりしねえよ!シズ先生の事、なんも分かってねえなあ」

「へえ、なるほど。だとすると、先生の代わりに私が叱っておくべきかしら……」

「そ、そんなあげあし取って!大人げねえぞ!」

少し大人げない日向と生意気な剣也のやりとり、静江は思わず笑みをごぼした。

「そうね、ヒナタ。甘やかしちゃったところもあるから、これからは

ちやんと叱るようにするわ」

ちやんと導ける先生になると、静江は決意する。この言葉は日向たち
ちに届いていないが、静江なりの宣誓だった。

「その前に、ケジメをしつかり付けてくるわ」

叱らなくてはいけない教え子がもう1人居る。

静江は東に向く。その視線の先、遙か先方に居るだろう手のかかる
教え子を見据えた。

時は移ろいゆく。静江が東の帝国に着いて教え子を探し始める時
には、既に2体の竜がその激突を終えていた。

◇◇◇

「馬鹿、な……。時間跳躍……。？それも、完全なる形で、望みの場所へ
……。時空の果て”から、だって……。？在り得ない……。そんな、そんな
馬鹿げた事が出来る者など、存在するハズがないんだ……。それで
は、それではまるで超越神じゃないか！」

静江が教え子を、優樹を見つけ出した時には、全てが終わろうとする
間近だった。

言い訳をするなら。『真の勇者』・『真なる魔王』級の存在が跋扈し、
激闘を繰り広げていた事。優樹が巧妙に姿を隠し通していた事。そ
の2つがこれ程までに遅れた原因だ。

『不幽霊』が如何に干渉の一切を受けないスキルとはいえ、掠った
だけで死にそうな攻撃が飛び交っていれば、さすがの静江も恐怖して
歩みが遅くなる。

おまけに、『不幽霊』のせいで情報収集は自身の五感のみになる。
そんな状態で巧妙に姿を隠している者を探し出すのだ。むしろ、よく
間に合った方である。

しかし、間に合ったとは言いつらい。

「お前は、お前は一体誰なんだ!？」

優樹の罪は全て暴かれ、追い詰められ、すぐにでもリムルが断罪し
ようとしている。そこには、『真なる魔王』のギイとミリム、全盛期に
戻りつつあるラミス、全盛期の状態で再現されたルドラ、竜種であ
るヴェルグレントがいる。

否定するモノは何も残っていない。もう何もできない。

本当に？

「こんな現実なんてっ!!!私は嫌だ!!!」

なんだ、残っているじゃないか。

—そうさ。現実なんて、否定してしまえ

「え……う」

声が聞こえた。脳裏に、自身を助けてくれた人の声が、静江には聞こえたのだ。

—やあ、静江ちゃん。聞こえるかい？今、君の頭に直接語りかけてるんだ。なんてね

「カイ、さん……う？」

カイの声が、静江にははっきり聞こえる。

—語りかけてるって言っても一方通行。ビデオレターみたいなものさ。もうすでに体験したかな？条件付きで再生されるビデオレターみたいなやつ

「あ……」

そう、これは以前のビデオレターと同じ、静江が何かの条件を満たした場合に再生される録音である。

—今回の条件はざっくり言って、君が現実すら否定しなくなった時。正直に言えば、これは君のために残しておいた救急措置だ。君が諦めないように、これを、残しておいた

カイの録音と共に静江の中へと何かが入り込んでくる。

「これは……」

—僕の過負荷、『マイナスオールイズファンタジー』の因子だ。まあ、それだけで僕の過負荷が得られたりはしない。ただ、一回分だけ現実を否定できる。もちろん、過負荷だから都合が良いようには変えられないけどね

それは、一回分だけ静江を生かすための『オールイズファンタジー幻実当避』。カイが残せた、最大限の助力。

静江がカイによつてスキルを得たせいか、はたまた『オルタナティブエイト当然変異』と『オールイズファンタジー幻実当避』が特別相性でも良かったのか、奇跡的に貸与できるものである。

—好きに使つてね、使わなくても良いけど。それじゃ、この辺で。じゃね、バイビ

場にそぐわぬ軽い雰囲気を終了する録音に、「カイさんらしいな」と静江は笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、カイさん。これで、私は好きに生きられます」

静江は、その一回分の『オールイズファンタジー幻実当避』を現実の否定に使わない。

自身の否定に、組み込んだ。

自身を否定する能力に、現実を否定する能力。

その二つが、静江の持つ全てとカイの残したモノが奇妙にも、奇跡的にも、不都合にも、最高で最悪な交わりを果たす。

《確認しました。マイナス スリービ！ホロウ、アブノーマル『ダイニングメッセージ結言状』、マイナス『オルタナティブエイト当然変異』、マイナス『オールイズファンタジー幻実当避』の因子が融合・変異された事により消失。新たに異常性『アブノーマル不誘惑精』を獲得しました》

静江は新たな力を得た。

アブノーマル『ノンローグスピリット不誘惑精』

それは、今まで浮遊惑星のように惑っていた自身を否定して生まれ
たスキル。

それは、静江が惑わず誘われず、己の障碍を跳ね飛ばす、あたかも
流星の如く真つすぐ突き進む力である。

「諦めろ。お前はやり過ぎた。悪い事をしたら、反省が必要だろ？ せい
ぜい、悔い改めるといい。俺の中の『虚数空間』で、お前の愚かさ
と未熟さを。それが、お前に許された全てだ」

「駄目です」

リムルが優樹へ向けた断罪を、静江は弾いた。

彼女は己が望まぬ結末を否定し、弾いたのだ。それが超越した神の
ようなリムルのモノであつても。

「……シズ、さん？」

「シズ、先生……?」

『不幽^{スリーピー・ホロウ}霊』を失って幽霊のような状態で居られなくなった静江は、しかし『不誘惑精^{ノンローグスピリット}』によって炎の精霊じみた人をかたどる炎の姿を世界に刻み付けている。

声音も姿も静江の面影があるそれに、リムルと優樹は息を呑んだ。こんな時に姿を見るとは思ってた者との、もう二度と会えないと思っていた者との邂逅だ。無理もないだろう。彼らの記憶にある優しく儂げな様子ではなく、凛々しくて毅然とした様子なのだからなおさらだ。

「リムルさん、ユウキをこの世界から追放するなんて駄目です」

「え?それってどういう……?」

突然現れ、急に否定する静江。リムルにはまるで訳が分からなかった。

「シズ先生!僕を助けに来てくれたんですね!」

「いいえ、それも違うわ」

優樹は静江が自身の理想を理解して助けに来てくれたのだと、都合良く解釈した。が、残念ながら、その勇気の都合が良すぎる解釈も否定される。

「ユウキ、私は……。貴方を叱りにきました」

「は……?」

「追放なんて、何も償えていないやり方はさせません。これから、貴方はしっかりと罪を償うんです」

「え……。そんな、馬鹿な……。どうして、どうしてシズ先生まで僕の敵に!」

優樹に向けられる静江の顔に優しさはない。しかし慈悲はあるのだが、追い詰められている優樹に静江の慈悲を探り当て余裕はなかった。

「そうだ、お前は誰かが作った幻影なんだ……。ふざけるな、この僕によりもよってシズ先生の幻影を見せるなんてっ!消えろ、紛い物!」

「いいえ、ユウキ。私は井沢静江。貴方の先生を任されながら、貴方を

導けなかったシズ先生です」

源流能力『情報之王』。優樹が得ていた転スラ世界のあらゆるスキルを再現するスキル。そのままさしく源流のスキルで究極能力『暴食之王』を再現し、その顎を静江へと放った。

だが、そんなもので静江の歩みは阻めない。『不誘惑精』、決意の炎たる彼女は揺らがな。顎の役目を担う魔力は弾かれ、霧散した。

「あ、ありえない……。この僕の力が、こんな呆気なく……」

「ユウキ、貴方は何でもできる子でした。だけど、何でもできる貴方は、みんなを傷付けてしまった」

「っ!? 止めろっ、来るなっ!」

優樹は後ずさり、子供の癩癩のように攻撃を繰り返す。子供の癩癩と云うにはあまりにも強力な、『情報之王』でまた再現した究極能力『憤怒之王』の虚無崩壊だ。

「嫌です。意地でも貴方の下に行きます」

これもまた、虚無崩壊エネルギーが静江に触れた端から霧散する。静江は障碍を意に介さない。それが彼女の異常性なのだ。

「……っ!!」

もう優樹の目前に静江が迫っている。今まで見た事のない怒りの形相に尻もちをつき、己の長い人生で初めてのお叱りに恐怖を抱いていた。

そんな優樹を、静江は見下ろす。とても冷徹な面持ちで、しかしとても悲し気で、されど決心に満ちていた。

だから、静江は優樹のその頬を叩く。

「っ!」

「ユウキ、貴方は確かに世界を救おうとしたのかもしれない。けど、それでみんなを傷付けたら、誰も幸せになれない。貴方が傷付けたみんなも、みんなを傷付けた貴方も」

「……先、生?」

冷徹な怒りの形相はそのままだが、でも、静江は涙を流していた。誰が優樹にそんな凶行へと走らせたか、彼女は知っているから。

「でも、ありがとう、ユウキ。私のために、世界を救おうとしてくれた

のよね。私のせいで、世界を壊そうとしていたのよね」

静江は優しく優樹を抱擁する。

彼をこんな凶行に走らせたのは自身だと。彼をこんな事をさせないよう導けなかったのは自身だと。彼女は知っているから。

「ねえ、ユウキ。今度は、みんなと笑顔になれる世界を目指しましょ？私も、一緒に居てあげるから」

「だ、だけど、先生……。僕にはもう、取り返しのつかない事をしてしまっているんだ……。誰も許してくれる訳がない、誰もが僕を殺しに来る」

とても穏やかに見つめる静江へ、優樹はかつてそうだったように、素直に先生へと答えた。その思いを吐露した。

「貴方は、確かに許されない事をたくさんしたかもしれない。けど、それが償いをしなくて良い言い訳にはならないの。どれだけ許されない事をして、どれだけ償っても許されないからって、償いから逃げたいいけないの」

弱々しく、今にも泣きそうな教え子に、先生は厳しく諭す。

「安心して、ユウキ。貴方が償い切るまで、私も一緒に居るわ。貴方が償いを終えるまで、貴方を守り導くわ。だって、私は貴方の先生なんだから」

そう、静江は優樹の先生なのだ。厳しくもする。優しくもする。守りもする。導きもする。

それが、彼女の好きな生き方なのだから。

「先生……。先生！」

「ごめんね、長い事一人にして。辛かったね。怖かったね」

優樹は静江に泣きながら抱き着く。静江の炎を、優樹は暖かく感じた。

これから優樹と静江は傷付けた者たちに謝罪を述べ、贖罪を態度で示していく。

いつ終わるとも知れない償いだ。それでも、彼は折れない。彼女が折らせない。

如何なる罵倒を吐かれても、石を投げられても、神楽坂優樹は償い

を続ける。傍らに、彼の先生、井沢静江を置きながら。

第四十一話 幻想（ユメ）の終わり

「……」

ギイは佇む。

聖魔大戦は決着していた。それも、今後勃発する事がないだろう程に完璧な決着が収められていた。人類や魔物を裁定する大戦は、今後起こり得ないだろう。

世界は今、未だかつてない繁栄を迎えていた。

恐ろしいまでに技術を発展させていくリムル・テンペスト。技術発展の制限はなく、リムルが己の楽を得るために、配下や同盟者などが使える力を総動員して、技術を発展させている。おまけに、それを独占せず、大盤振る舞いに他国へも提供していた。

もはや、技術の進歩を止める者はないだろう。誰もが得をしているのだから。

ただ、技術の発展だけで平和は得られない。立法、行政、司法から成る国家三権。それに世界の財政・貿易。それ以外にも数多く、世界を回すのには重要な歯車もしくは潤滑油が必要である。

その辺りは、おもに神楽坂優樹が担当していた。

担当と言つても、平和を脅かし得る国家問題へ介入する組織を立ち上げただけだが。もちろん、静江の監視下かつ日向の協力の下で。

優樹はいわゆる、国際連合を立ち上げた。国同士の争いを事前に回避するための機関だ。地球のそれより、多少権力と実行力が強いが。

直接的ではないが、優樹は能動的に世界の均衡を維持している。

平和だ。どこまでも、いつまでも平和なのだ。千年王国もとい、千年惑星が誕生している。

「……」

そんな平和の中、ギイは立方体の前で佇む。

成人男性を囲んで余りある、真っ白な立方体。その面は、まるで時間が止まっているように不変であり、空間が途切れているように何モノの侵入も拒んでいる。

まあ、カイ・ヤグラが封印されているやつだ。

「……少し、思う事がある。この封印なら、いつまでも解けないんじゃないかと」

それはギイでも解けそうにない、完璧な封印だ。だから、ギイは思ってしまう。

カイとの約束を反故にして良いのではないかと。

封印を壊すという約束を、なかった事にして良いのではないかと。

「……」

ギイはその封印に手を触れる。

このまま手を放し、何も見なかつた事にして振り返れば。もしかしたら、あの魔王を留めておけるかもしれない。

「無理だな」

そう、無理だ。この封印はおそらく、やろうとすればリムルか優樹が解ける。

あの二人は世界に置いて最上級の存在だが、しかし、前例が生まれてしまった。

今後、そんな最上級に至つた者が、この封印を解かない保証はない。壊すだけだったらギイでもできてしまうのだ。

なら、そんな最上級が、カイ・ヤグラを打倒し得る者が居る内に解かねばならない。

カイ・ヤグラを、この世界から追い出さねばならない。

そうしなければいけないと、ギイの本能が訴えかけていた。

「……」

だから、ギイは壊した。正直、この封印を壊すのは簡単なのだ。

停止した時間をちよつとでも進められたら。途切れた空間を繋げられたら。この封印は矛盾を起こし、矛盾が発生したその場を世界が修正しようとして、封印が壊れてしまう。

そう、故に今その封印はまるで世界に吸引されるが如く、小さくなつて消えた。

消えたのだ、内容物も一緒に。本来なら、これで内容物も消え、全てなくなる。

「やあ、ギイ・クリムゾン。良い夜だね」

しかし、一瞬きもすれば、内容物が現れる。空間・時間の固定から脱したカイは、自身何事もなく復活したの死を逃避した。

「……今は昼だ」

「いいや、夜だよ。こんな幻想ユメを見てるんだからね」

ギイが丁寧にも訂正してくれた言葉を、しかしカイは受け入れなかった。ただ不気味な笑顔を浮かべる。

「約束を守ってくれた、て事で良いのかな？」

「ああ。聖魔大戦は終わって、世界は落ち着いてる。リムル・テンペストも健在だ」

「そいつは上々。案外素直に守ってくれたんだね、僕との約束」

「さっさと用事を済ませて出ていけ」

ちよつと喜んでいたカイはギイから素っ気なく返され、まあいつも通りだと肩を竦めて喜びを払った。

「ま、確かに無駄な尺を使いたくはないね。僕も待ちきれないし。じゃ、どう転んでもさようならだ、ギイ・クリームゾン。もう二度と会う事はないよ」

「清々するな」

ギイの本心から放たれた言葉に、カイは苦笑する。そしてそのまま、一瞬の後に幻想の如く消え去った。

「……本当に、清々する」

自身の自身らしくない怖気を、ギイはそう吐き出すのだった。

◇◇◇

「……」

リムルは見据える。真剣な面持ちで観察する、目の前の料理を。

その料理は、この世界原産のサバに類似した魚類を、これまたこの世界原産の大豆に類似した豆で作ったミソモドキを用いて作った料理。

簡単に言うと、サバモドキのミソモドキ煮。日本人の多くが愛しているだろうサバの味噌煮に頑張って似せた物である。

見た目の再現度は申し分ない。しかし、味の再現度は食べてみるまで分からない。

「……いただきます」

リムルは意を決し、箸で料理を摘まもうとする。

「突撃隣のサラリーマン飯!」

そんなところへ、無駄に人間サイズのしやもじを持ったカイが突貫してきた。

料理を口に含む前で良かった。口に含んでいたら、リムルは驚きで間違いなく吐き出していただろう。

「か、カイ!? 死んだはずじゃ!」

「封印されてただけだから、死んでた訳ではないよ? まあ、封印壊す際に死んだんだけど、オールイズフアンタジーだからね」

リムルの驚きに、カイは何処吹く風で彼の対面に腰を落ち着ける。

「そんな事より水臭いじゃないか。日本食モドキの試食なら僕も呼んでくれよお」

「いや、封印されてたんだっただけなら呼べないだろ。いや、まあ、来たんだったら試食してもらおうけどさあ」

カイが食べる気満々なので、丁度もう1人分あるし、リムルは仕方なく配下にそれを持って来させる。持ってきた配下がいつの間にか訪問していたカイに目を瞠ったのは、この場では横に置いておこう。

「うんうん、サバの味噌煮って感じのサバモドキのミソモドキ煮だ。こういうので良いんだよ、こういうので」

「おっし、味も充分及第点だな」

カイとリムルは故郷の味に舌鼓を打つ。カイは懐かしき故郷の味に感動を覚え、リムルはソウルフードの再現が着々と進んでいる事への達成感を抱いていた。

2人は各々の思いと料理を確かに味わっていく。程なくして、お互い綺麗に完食した。

「……。なあ、いつも通り質問して良いか? 料理の対価って事で」

リムルはカイに関して、とある疑問を持っている。この場がそれを質問するチャンスだと、リムルは逃す気がなかった。

「良いよ? 今回は、時間の許す限りいくつでも答えてあげよう」

「いくつでも? なんでだ?」

本筋ではないが、カイの言い方が引つかかったため、リムルは最初にその質問から始める。

「もう僕が何言おうが今後の出来事に影響を与えないからさ。ぶっちゃけ、転スラの世界の事なら僕が居なくても君は知り得るだろうし。『智慧之王』があればもう何でもできるでしょ。そいえば、その『智慧之王』ちゃん、また何やら、進化？してるんだっけ？」

「まあ、そうだな」

リムルはカイへの解答を曖昧に肯定し、詳細には答えなかった。『智慧之王』、いや、シエルについてカイが知っているのはリムルにとって予想外であり、リムルはカイへの警戒心を上げたのだ。

情報収集に関しては『智慧之王』にも引けを取らないスキルを持っているのだろうと、リムルは誤認する。

とかく、最初の質問は終え、リムルは質問を本題へと移す。

「次の質問だ。この世界がお前の夢っていうのはどういう事だ？」

カイがこの世界の創造主であるはずがない。

それは、クロエから共有され、共有された皆が同意した共通見解だった。

この世界の創造主であるヴェルダナーヴァと面識があるギイは、その創造主とカイが似ても似つかないという意見を示した。

実際にカイの本気（と思わされているそれ）を垣間見たクロエは、しかし封印に抗えなかった事実から、創造主なら封印をどうにかできたはずだという意見を示した。

静江も意見を示していたが、自身がカイさんのユメであってほしくないという感情論だったが、とりあえず彼女も見解は一致していた。「誰から聞いたんだい？僕がそんな感じの発言したの。候補として、クロエと静江ちゃん辺りかな？」

「両方だ。で、どうなんだ」

リムルは詰め寄る。逸らす事を許さない。曖昧にする事を許さない。

何故なら、もしカイの発言が事実だった場合、リムルの目の前に居るのは気まぐれに世界を壊してしまうかもしれない、特級の危険人物

なのである。

そんな危険人物をどうするにしろ、事実確認をしなければ話は進まない。

「そうだね……。言ってしまうと、僕自身よく分かってないんだよね」
「……はあ？」

カイが躊躇の後に開示した答えに、リムルは拍子抜けというか、緊張していた空気を抜かれた。

「まずね、僕の認識としてはだけど。転スラ^{この}世界は僕が作った世界だ。ヴェルダナーヴァが創造主って設定した上で、僕がそんな世界^{その}がない事実^をを逃避^しした。だけど、世界全てを管理下に置いてるかって言うと、そうでもない。でも、置いてない訳でもないんだ」

『転生したらスライムだった件』をほぼ忠実に再現し、そういう幻想を生み出した。その上で、カイがその幻想の中に入った。

それが、カイの認識である。それで、世界を生み出すまでは都合の良し悪しなどないのでうまく言ったが、その世界を自由に操るなどの都合が良すぎる事はできない。『幻実当避^{オールドイースファンタジー}』とはそういうモノだ。世界自体が確立され、修正力を得てしまっている点も関わってくるだろう。

「それでもないけど、それでもない訳でもない？ちよつと待て。頭がこんがらがってきた」

「そう悩む必要はないよ、リムル」

痛み出した頭を押さえるリムルに、カイはニツコリと微笑みかける。

ただ、その微笑みは不気味で、リムルすら悪寒を感じる程だった。リムルすらもそうであるならば、リムルの配下がそうでないなどあり得ない。

「リムル様!!」

だから主の危機と判断してすぐに駆け付けてしまった。

特に、料理を持ってきてから嫌な予感がして近くに待機していた配下、シユナは駆け付けてしまった。

「それでもない訳でもない理由はすぐにでも証明できる。ほら、こん

な風に」

そう、シユナはしまった。しまえた。するべきではなかったのだ。だってそれは、最初の生贄になる行為なのだから。

「……………え？……………シユナ？」

駆け付けたはずのシユナが、幻想だったかのように消え失せていた。

もちろん、リムルの視界からだけではない。リムルのあらゆる感知から、シユナという個体は消え失せている。

「見ただろ？ 僕はこの世界の、どんな存在だって幻想^{ユメ}だった事^{コト}にでき^スる」

実行犯は、呆然とするリムルにただ微笑みかける。

「は、はは……………。すげえな……………。すげえ事は分かったからさ……………。シユナ、返してくれよ」

「できないよ？」

何処までも不気味に微笑みかける。

「だって、そんな都合が良すぎるだろ？」

その微笑みは、あの証明は、宣戦布告だ。

「カイ・ヤグラアアアああああああああああああああああああ
!!!」

リムルは、宣戦布告を受け取った。

第四十二話 理想（ユメ）の始まり

「カイ・ヤグラアアアあああああああああああああああああ
!!!」

リムルが怒りを叫ぶのとほぼ同時に、一筋の光がカイの頭部を穿つた。

リムルの攻撃、「神之怒^{メギド}」である。

穿たれたカイは、そうされた者の末路と等しく、体をゆつくりと横たえる。

だが、その後は等しくない。

「あはは！いいぞ、リムル！その怒りが欲しかった、その満ち充ちた殺意が欲しかったんだ!!」

一瞬きすれば何事もなかったように無傷のカイがそこに居り、満面の笑みを浮かべていた。

「さあ、僕を殺せ！リムル・テンペスト!!」

「お望みなら、何度でも殺してやる!!」

歓迎するように両手を広げたカイへ向け、今度は幾筋もの光が差し込む。

しかし、その光はまるで幻想のように消え失せた。何をされたかはリムルにも解析できない。だが、予想の範囲内ではあった。

まだ解析が終わってはいないが、カイが特殊な事象改変スキルを保持しているのは既知だ。この程度の攻撃なら対処くらいできると、リムルは予想していた。

数多の魔王に対し、魔王種でもないのに特例で『魔王』を拝命しているくらいだ。まず以ってその実力は魔王種以上。さらにはギイの攻撃を受けても死ななかつたのを見ている。究極能力^{アルティメットスキル}以下は有効打にならないと、リムルは見越していた。

「分かってるだろう、カイ！罪には罰を。驕れる人間は諫めるって、俺は誓ってるんだ！」

「じゃあどうするんだい、リムル。君の杓子定規では、僕に対する罰つてどのくらいになるのかな？」

「お前が消したのはシュナ1人。だから、お前の魂1つで許してやる」
制裁の直前に至っても反省の色がないカイに、リムルは更生の余地
もないと断じた。

だから、転生の可能性も与えない魂の消去という判決を下す。
リムルは手のひらを広げ、何かを握り潰すモーションを取った。
すると、カイは妙な圧迫感に見舞われる。もちろん、物理的な圧迫
ではない。

リムルが数多持っていたスキルの統合して得たスキルの1つ、
『虚空之神』^{アザトリス}。

そのスキルには、「魂暴喰」という魂を喰らう権能がある。喰らった
魂をどうするかも、この権能の一部である。

リムルはその権能を使っているのだ。

リムルの手のひらは魂を噛む顎。カイの感じる圧迫感は魂にかか
る圧力。そして、リムルはその圧力を徐々に強め、今、手のひらを握
り込んだ。

「か、は……」

魂を噛み潰されたカイは静かに倒れ込み、それを成したりムルはそ
んな彼を見下ろす。

「……お前とは、仲良くなれる気がしたんだけどな」

同じ日本人であり、同じ釜の飯を食った仲。

だが、2人は決定的に違ったのだ。纏う運命が、あまりにも違い
ぎた。

「お前と仲良くなるなんてのは、お前が言うところの幻想^{ユメ}だったのか
……」

友になれると思った人間に対する寂寥感と、配下を守れなかった無
力感がリムルを襲う。

リムルは、思わず目を瞑ってしまった。

「そうだね、まさしく幻想^{ユメ}だよ」

「は？」

唐突に聞こえたカイの声にリムルは目を開ける。

そこにはまたしても、何事もなかったように立つカイが居た。

「お前、何をどうやって！肉体や精神が壊されたところじゃないんだぞ!？」

魂が消滅しても復活できるなど、常軌を逸している。そんな事ができる存在など、埒外にも程があった。

「ん？何かしたのかい？幻想でも見てたんじゃない？」

「ゆ、ゆめ……？」

確かに魂を消滅させたカイが、とぼけた様子で首を傾げていた。その様子が、にわかには信じられないが、夢だった事へ信ぴょう性を与える。

「でも、そうかあ。リムルは配下1人じゃ魂1つで勘弁しちゃうんだね？」

カイが、リムルすら怖気を感じる程の気味悪さを放つ。

リムルは間違いなく悪寒を感じていた。何かヤバい事を仕掛けてくると、直感できた。

「じゃあ、全部で行こう」

しかし、間に合わなかった。

この瞬間、リムルのあらゆる感知から全配下が消え失せた。

「そう、全部。全部なんだ、リムル！」

次の瞬間には、リムルが感知できるカイ以外の人類が全て消え失せた。

「あれも、これも、それも、どれも！万人、万物、森羅万象、六道、三千世界!!」

世界を構成する要素が、1つ1つ大雑把にも執拗に消し去っていく。

残ったのはリムルとカイ。それと、まるで文章の余白のような、どこまでも真っ白な空間だった。

「何が……。何がどうなってるんだ！『智慧之王』……、シエル……！何がどうなってるのか応えてくれ！おい、シエル!!」

訳の分からない状態に狂乱し、リムルはこの世界に来てからずっと支えてくれた相棒の名を叫んだ。カイに『智慧之王』の変化が知られるのも気にせず、「シエル」の名前を叫んだ。

とくとするなら、大量の死者を蘇らせてる事かな？」

多数の配下を殺されたのに、余す事なく全員を蘇らせた。死がそう簡単に覆せるはずがない。これはおかしい事だ。

「……」

「分かっただろう？リムル！君の人生は都合が良すぎるんだ、まるで小説投稿サイトに投稿された無双系主人公みたいに！」

言われて、リムルは自覚した。

そう、リムルの人生は都合が良すぎたのだ。悲劇を嫌った筆者が書いた物語のように、あまりにも綺麗すぎる。

そんな人生が、果たしてあり得るのか。

「そんな都合の良い現実が、ある訳ないんだよ!!」

そう、あり得ないのだ。そんな都合の良い人生はあり得ない。

「全部……。ユメ、だったのか……。俺が、ユメを見てたのか……」

リムルは、悟ってしまった。

自身の生きた人生は自身の見るユメであつたと、リムルは信じてしまったのだ。

「その通りだよ、リムル。いや、三上悟^{みかみさとる}。これは幻想^{ユメ}だ。きっと、君は病院のベッドの上で、永い眠りに就いているんだ。これは、そうして見ている幻想^{ユメ}」

「あ、ああ……っ」

リムルは、顔を覆った。

あんなに綺麗だったモノすべてが存在しないモノだった。その虚しさがリムルの心を空っぽにする。

「三上悟、この幻想^{ユメ}から覚めよう。ここに居ても、虚しいだけだろう？」

不気味な程優し気に、カイは言葉をかけた。その言葉は不思議な程、リムルの弱った心に染み、甘やかす。

「……」

弱ったリムルは項垂れ、相手に全てを任せた。

もう何もする気が起きないのだ。

「じゃあ、良い目覚めを。三上悟」

カイは釘を手にした右手を振り上げた。

そして、それはリムル目掛けて振り下ろされる。

その釘を振り下ろされる時間が、リムルにはひどく長く感じられた。

走馬灯のようなモノか、リムルは自身が今まで見ていたユメを想起させられたのだ。

想起すれば本当に、どこまでも良すぎる人生だった。

『大賢者』、後のシエルから多大な協力を得ていた。

ヴェルドラとはこの世界最初の親友となった。

シズと出会い、色々勝手に意志を引き継いだ。

クロエたちに対して教師の真似事をし、彼らを救い導いた。

クロエには後々に色々世話にもなった、良い意味でも悪い意味でも。

ユウキには随分と翻弄された。

その他にも色々。大変だったが、楽しいユメだった。

—リムルさん

声が出た。シズの声だ。

(思えば、シズさんとの出会いがターニングポイントだった気がするな)

あの出会いがあったからこそ、様々な因果が引き寄せられたように、リムルは今更ながら感じた。

シズの教え子たちもそうだし、ユウキやヒナタもその縁に含まれるだろうか。

何だったら、魔王であるカイやレオンともシズ経由の縁かもしれない。

こうして思い返せば返す程、このユメがどれ程素晴らしいモノだったのか、リムルは思い知らされる。

(ユメ、だったんだよね……)

まさしくユメだった。ユメである事を疑えない程、素晴らしいユメだった。

(ユメさ。あんなの、ユメ以外ないだろう。俺が妄想したユメでもな

いと、辻褃が合わない)

全てが、ただリムルの描いたユメだった。そうである事に、疑い様はない。

(ユメ、俺が作ったユメ……。ユメ、だから……。起きなくちやいけないんだよな……?)

夢はいつか覚めるものだ。それは当然の事実である。

(でもさ、俺……。なかった事にしたくないって、思っっちゃうんだよ……)

己の手で綺麗に描いたユメ。それはある種芸術にも等しい。これをなかつた事にするのは、書き上げた小説の原稿を丸ごと破棄するよなものだ。

だから、脳裏に過ってしまふ。このユメを、幻想ユメにして良いのかと。(したく、ない……!!)

リムルは咄嗟に、振り下ろされる腕を掴んだ。

「ん?どうしたんだい、リムル」

首を傾げて訝しむカイを、リムルは涙を溜めた目で直視する。

「幻想ユメにしたくないんだ……。だって、あれは俺の理想ユメだったんだから!!」

そうだ、あれはリムルの描いたユメ。理想だったのだ。

何処までも己が望むように綺麗に書き上げた、世界だったのだ。

「リムル。残念だけど、ユメは見続けられないものなんだ。いつか、現実を見なくちやいけない」

「違う、あれは俺が見ていたユメなんかじゃない!俺が、俺たちが作り上げた世界だ!決して、妄想の産物なんかじゃない!!」

諭すように語りかけるカイへ、リムルは痲癩を起した子供のように喚きたてた。

「返してくれ、俺の理想ユメを!」

「リムル、そんな都合の良い事はできないんだ」

「ご都合主義でも無双系主人公でも何でも良い!誰がなんと云おうと、あれは、俺が作った世界だったんだ!!」

カイの腕を払い除け、リムルは虚栄でも構わず毅然と立ち上がる。

それは、ある意味で宣誓だった。
リムルは、あの世界も自身の人生も、創作物である事を受け入れたのだ。

しかし、他人の創作物である事は受け入れなかった。あくまで、あれは自身の創作物である事を主張したのだ。

故に、彼は己の運命を手にする。

《確認しました。異常性『現実手記』を獲得・・・成功しました》

「アブ、ノーマル……。そうか、これがカイやシズさんが使っていた力。事象を改変するスキル！」

リムルは自身の手に入れた新たな力、異常性『現実手記』を直感的に理解した。それがカイの持つスキルと同種（正確に言うとは正対だが）であるという事。そして、そのスキルの使い方を。

「カイ、これでようやく同じ舞台だ」

「そうだね。これでようやく、君と僕は対等で、真逆で、敵になった」
リムルが対抗手段を手に入れたと知っても、いや、知ってさらにカイは口の端を吊り上げた。

それは何故かと言えば、本当によく、リムルが自身を殺し得る力を手に入れたからだ。

「さあ、どんな力か見せてくれ。ま、使う前に生きてたらね」

カイはリムルに全力を出させるべく、次の一手を打つ。

「Ygnaiih …… ygnaiih,

thflthkh'ngga. 我が手に銀の鍵あり。虚無より現れ、

その指先で触れ給う」

次の一手は、神格の召喚だ。

「させるかよ」

リムルはカイの詠唱を止めるべく、「神之怒」に似た一筋の光を放ち、カイの右腕を消し飛ばした。

「無駄だよ、リムル。そんな攻撃じゃ、僕は傷を受けた現実を逃避できない。ほら、このとお——り？」

カイの右腕は、消し飛ばされたままだった。それどころか、猛烈な激痛がカイを襲う。

「つ!?ど、どうして……。どうして逃避できない!」

ここに来て、カイの笑顔は崩れ去った。激痛に苛まれ、現実を逃避できず、まさに目前まで絶望的な現実がやってきたのだ。

「当たり前だろ、この世界は幻想じゃない。幻想なんてさせない。

これは、俺が描いた現実。『現実手記』だ」

リムルの異常性、『現実手記』。

その能力を端的に表してしまえば、理想を現実に変えるスキルだ。

リムルの思い描いた理想が現実となる、そういう因果逆転のエッセイ。それこそが、リムルの『現実手記』なのだ。

「く、くく……。まさか、この土壇場で僕アンチの能力引き当てるとか……。さすがだよ、リムル……。さすが原作主人公だ……」

傷口が炭化している右腕を抑え、カイはなお笑った。笑うしかなかった。むしろ笑わない方がおかしい。

だって、カイの望んだとおりだ。リムルの異常性はカイに完膚なきまで敗北をくれる力だったのだ。

カイにとって、これほどの吉報はない。

「それで、どうするんだい……。?君の世界を取り戻すなら、僕を殺すしか、ないけど」

「その必要はねえよ」

カイはリムルのその手にかけてさせるべく煽ろうとすれば、何の事なくリムルに返されてしまった。

「言ったろう?これは俺が描いた現実だ。描き直すのも、俺の思い通りなんだよ」

世界を構成する要素が、1つ1つ丹念かつ繊細に修復されていく。カイが幻想にしたリムルの配下も、最初に消されたシユナも、例外なく全てが描き直される。

3回程目を瞬かせれば、世界は何事もなく元通りになった。

「おや……。これはもう、僕には打つ手なしだね……。それじゃあ、リムル。僕に、何かする事は……。ないかな?君の世界を消すなんて、大罪を犯した僕に……。する事があるだろう?」

カイに抗う術はないが、そもそも彼はもう抗う気がなかった。

勝敗なんて一目瞭然。後は、とびっきりの終止符を打つだけだ。カイが望む終わりを、リムルからもらうだけなのだ。

しかし、リムルは手を差し出す。

「……何のつもりだい？」

「カイ、俺の仲間になれ」

その手は、勧誘だった。

「カイ。俺はここに来てやっとお前が分かった。お前が持つてる力、マイナス過負荷。それは、お前を不幸にする力だな」

『エッセイ現実手記』というアブノーマル異常性を手にしたリムルは、自身の力がどういうモノか分析した。もちろん、対極にある過負荷マイナスも。

リムルとカイが立つ舞台は同じではなかったのだ。リムルは幸福な舞台で、カイは不幸な舞台だった。世界観としては一緒のモノだが、決して同種の力ではない。

「俺ならお前のその力、どうにかしてやれる。だから手を取れ。お前を救ってやる」

リムルはカイの不幸を知り、傲慢にも憐れみ、救おうとした。

それが、カイの怒りを買うとも知らずに。

「ふざけるなよ」

カイは目を見開く。笑いもせず、不気味さも出さず、ただ怒りを露にした。

「誰が救ってほしいと言った！誰が憐れんでほしいと言った！」

「……え？」

「言つてないんだよ、そんな事一言も！お前たち恵まれた人間は、優越感とか自己満足を満たすために、僕たちを恵まれない人間と勝手に決め付ける！勝手に蔑み、勝手に救う！」

カイを知った気になっていたリムルは、カイが初めて表す激情に呆けた。それが、知った気になった付けだ。

カイは憐れんでほしくも愛してほしくもなかった。他人より恵まれない存在と批判されたくもなかった。

「僕がはつきり言葉にしたのは、「僕を殺せ」って事だけだ！」

只々、この人生の最期を、完膚なきまでの敗北で締めたかっただけ

なのである。

「どうしてなんだ、どうしてそうしてくれない!?なあ見ただろう、僕が如何に危険かを！僕がどれ程理解の範疇外かを！知らなかったとしても今知ったよなあ！」

でも、そんな願いの1つさえ叶わない。叶えてもらえない。

故に、過負荷^{マイナス}。何もかも上手くいかない事を定められた人生なのだ。

「最悪だ、リムル・テンペスト……。君に期待した僕が馬鹿だった。もう良い。もう転スラ^こ世界に居る意味がない……」

「ま、待て！待ってくれ！お前の事を知ったかぶったのは悪かった。やり直そう、お前とやり直せる理想を俺は描いてみせる！」

カイがこの世界から出ていこうとしているのを察知し、リムルはそれを制しにかかった。

「君の思惑を潰せるとなれば、僕の溜飲も少しは下がるよ」

「いや、逃がさないからな。お前がどんな幻想で上書きしようと、俺が現実を描き直してやる」

『^{オールイスファンタジー}幻想当避』を『^{エツセイ}現実手記』で無効化しようとする。

世界を幻想に堕とされたそれすらも無効化してみせたのだ。無効化は可能はずなのである。

「いや、リムル。逆だ。僕は逃避しない」

最後の最後、カイはリムルを嘲笑う。

「僕は、僕自身が転スラ^こ世界に存在しない現実を、受け入れる」

そんな宣言を言い終えると、カイの姿は忽然と消えてしまった。まるで、そうであったのが現実であるかのように。

「カイ。おい、カイ！何処だ、何処に行った！逃げるな！」

リムルは叫んだ。自身の描いた理想が叶わない無力感か、喧嘩別れでもしたような喪失感か。思う限り叫んだ。

でも、無駄なのだ。

(^{マスター}主様)

「シエル！お前も探してくれ、カイ・ヤグラがどっか行っちゃまって見つかからない！」

(失礼ですが主様^{マスター}。先程から呼称しているその「カイ・ヤグラ」とは、誰の事でしょうか)

「……は？」

カイがこの世界に居ない事が、現実だったのだ。

最終話 人のユメは終わらない

「さて、次はどこに行こっかなあ」

狭間空間にて、カイは五体満足なまま教卓に腰かけ、足をプラプラと揺らしていた。

狭間空間とは言ったが、その意味を改める必要があるだろう。

以前の狭間空間は転スラ世界のあの世とこの世の狭間に作られた空間だが、現在はあらゆる世界の狭間に作られた空間である。

例えるなら、それぞれの世界を星々に当てはめた場合の宇宙にこの空間はあるのだ。宇宙船か、はたまた浮遊惑星と言ったところである。

故に、あらゆる世界観と気持ち程度の縁があり、しかして『転生したらスライムだった件』の世界とはカイによつて繋がりを断ち切られている。リムルの力が届く範囲ではないので、『現実手記』に無効化される事もない。

そんな空間で、カイは次に行く世界を悩んでいるのだ。

『めだかボックス』も良いかもしれないけど、あそこの主人公はリムルと似たように敵も仲間にする類だからなあ。獅子目言彦ならサクツとやつてくれるかな？でもあれって僕的に『主人公』じゃないなあ

などと悶々しながら次の行く先が決められないでいた。

「ワンチャン『とある』の『幻想殺し』なら逝ける？あそこの主人公に「そげぶ」されるのもアリか……。あれ？でもあの主人公も敵を味方にしてく類じゃなかったっけ？」

選り好みが過ぎるのか、条件に当てはまる存在が全然見つからない。

それもそうだろう。まず以つて、現実改変のできる人間を殺せるといのがボーダーだ。チート主人公が流行っている昨今だって、そこまでヤバいのはなかなか居ない。

「これは困っちゃったなあ……——ん？」

カイが何の気なしに窓越しで外を見れば、まるで夜空に輝く一等星

のような光を目に収めた。

しかし、それはおかしいのだ。

ここは狭間空間、世界と世界の狭間にぼつんとあるだけの空間で、その外には夜空どころか星一つだってありはしない。ただ暗闇が広がっているだけなのだ。

もしかしたら、カイのように世界と世界の狭間を行き来できるモノはあるのかもしれない。

だが、逆にあつたとして、そのモノとの邂逅は異常事態だ。

「……あれ、近付いてきてないかい？」

カイはその異常事態を予測し、光を観察していたが、その光は徐々に大きく、眩しくなっていた。しかも、そのペースは加速度的に上がっている。カイの狭間空間を標的にして真つすぐ向かってきているのは確実だ。

「これは……、まずい？」

カイがそう首を傾げた瞬間だった。

光が窓ガラスを突き破り、着地の余波で床にヒビを入れる。思った以上に大きくなかったその光に、カイは目測を見誤り、対処が遅れてしまったのだ。

これにはさすがのカイも身構える。

「見つけました！カイさん！」

ヒビの中心点に立っていたのは、なんと、静江だった。

「なんだ、静江ちゃんか。驚かさないでよ」

未知との遭遇を仄かに期待していたカイは、静江に見せつけるようにわざとらしく肩を落とした。

「カイさん、必死に探したんですからね！」

「必死に探した程度で見つかるものでもない気がするんだけどなあ」

何度でも言うが、ここは世界と世界の狭間にある空間。無限とも思える程広く、ただ闇しかない空間。

そんなところで教室一つ分しかない大きさの物を見つけ出すのは、砂漠の中から一粒の砂金を見つけるのに等しい。

「私はもう迷わないので。カイさんとの縁を信じて真つすぐ飛べば良

いだけです」

そんな不可能を可能にしたのは、まさしく静江の異常性アブノーマル『不誘惑精』だ。迷わず惑わず真つすぐ進めば、彼女は如何なる障
も無視して目的地に至れる。

「やれやれ、これだから『異常』アブノーマルって奴らは常識外れなんだ」

「ご自身を柵に上げないでください」

「僕は『過負荷』マイナスだからね。君ら『異常』アブノーマルとは違うさ」

親密な静江に対して、カイはそう突き放した。突き放す彼は、何処か寂しそうだ。

「カイさん、確かに私は過負荷マイナスを捨てました」

「そうだろうね、それで良いよ。不幸なんて、捨てられるなら捨てた方が良い」

カイにとつてもう、静江は過負荷マイナスを捨てた者なのだ。もう、同族ではない。

「ですが！私はカイさんの後輩を止めたつもりはありません！」

それでも、静江は未だにカイの後輩だった。

カイが「唯一の後輩」と呼んでくれた事を、静江は忘れられない。彼女にとつて、あれは大切な現実なのだから。

そして、その言葉を聞いたカイは――

「そうかい」

――穏やかに笑っていた。

その笑顔に涙が1筋流れたのを静江は見たが、一瞬きした後にはそれが幻想だったかののように、跡形もなくなっている。

「それで。どうするんだい？連れて帰るとか言わないよね？」

穏やかな笑みもそこそこに、いつもの不気味な笑みに変わった。

静江の親愛はともかくとして、もう意味のない世界に連れ戻されるのは絶対にお断りなのだ。

「いいえ、カイさんの道を邪魔するつもりはありません。私の行く手を阻まない限り、ですが」

「ほうほう、それは良いね。阻めば、本気でやってくるのかい？」

「消滅させはしませんよ」

「そいつは残念」

後少し育った彼女ならあるいは、とカイは思ったが、静江にその気はないようで、分かりきっていないながらも肩を竦めた。

「話を戻すとですね。お別れの挨拶をしに来ました」

「君は、まあ残留を選ぶだろうね」

静江は教え子たちの行く末を見届けるために、諸々のスキル、そして最終的に『不誘惑精』ノンテロゲスピリットを得たのだ。ここで付いて行くとか言われたら、それはそれでカイは困ってしまう。

「ええ。ですから、しばらくお別れです」

「しばらく、ね」

「はい。教え子を全員見届けたら、すぐにそちらへ向かいます」

揺るがぬ決心を携える静江に、カイは苦笑いを浮かべてしまった。ちよつと予想以上に親愛度が高い。

「……これから数多の世界を旅する予定だから、探し出すのは今回の比じゃないけど」

「安心してください。絶対に見つけます」

不可能だと、言いたいのだが。前述の通り、『異常』アブノーマルとは常識外れだ。おそらく高確率で追い継るだろう。

「ま、じゃあ僕が悲願達成に至っていない事を祈るんだね」

「はい、祈っています」

「……僕から言っついてはなんだけどさ。先輩の悲願は達成こそ祈るべきじゃないかな」

「大切な人の死を望む人はいません」

「ご尤もで」

カイはなんだか疲れてきたので、教卓の上で横になった。

「とりあえず。一旦お別れだね」

「そうですね……。またお会いする日まで」

「はいはい。またねー」

横になったまま手を振られる、なんとも締まらない別れだが、静江がそれを咎める事はない。

カイらしい別れであり、どうせまた会えるのだ。多少惜しみはすれ

ど、未練は覚えない。

静江は毅然と席を立てば、破った窓からロケットの如く飛び立っていった。

「さでさで。静江ちゃんがあの世界転スラの用を終える前に、少なくとも次の世界くらい決めとかないとなあ」

カイはない頭を捻り、次に行くべき世界を考える。

彼の幻想ユメは終わらない。

「To be continued.」なんてね」

NEXT

ユメの続き

「あっはっはっはっはっ！今読んでも意味が分からないなあ、『ボーボ』は！」

木造の校舎が備える教室、その一室が如き空間に、哄笑が響いた。その空間は、世界と世界の狭間にある空間。それぞれの世界が概念的に存在するため、惑星のようにその光を観測するといった事はできない。光学的に捉えられるのは真つ暗闇のみ。そんな暗闇の中に、そのルールに囚われる事なく、実体としてぼつんと浮かぶ教室1つ分だけの空間。実に端的かつ雑に付けられたその名は、『狭間空間』。

その空間の創造者・維持者たる男が、カイ・ヤング八倉海が、その哄笑を響かせていたのだ。漫画『ボーボー・ボーボ』を読みながら。

「って、こんな事している場合じゃないんだよなあ……」

カイは読んでいた『ボーボー・ボーボ』第3巻を投げ捨てた。そして、その1冊はカイが寝そべるベッド替わり、机4つ並べたその周りの放置された、漫画の山に加わる事となる。

「はああああ……。次行くとこ、全然決まんないや……」

そう。カイはこれでも、次に行く世界を探していたのである。候補を洗い出すためにない事創造を逃避したた漫画を読みふけり、途中でその目的を半ば放棄して読書に集中していたが、これでも探していたのである。

「あれから何日経ったか……」

最初の転移、『転生したらスライムだった件』の世界で目的が失敗に終わってから、早幾日。

残念ながら、この『狭間空間』における時間の流れが特殊であるため、厳密な経過時間を明記する事はできない。カイの体感時間で、少なくとも1カ月は経っていないと、願いたいところだ。ただ、カイ自身300年を超えて生きているため、その体感時間も正直当てにしづらい。

「ああ……。なんだか静江ちゃんが恋しくなってきた……。何処かに居ないかなあ、ああいう、後輩にできそうな子。もう、次に行き世界そこで良いや……」

井沢静江、唯一の後輩である彼女が居た時の記憶に思いを馳せ、もう自分の目的とか一旦どうでも良いやと寂しさに駆られながら、カイは寝返りを打った。

そうして目に入ったのが、丁度頭の横に置かれていた漫画、『BLEACH』である。

「うーん……。『BLEACH』か……。僕の感覚的には最終章がアニメ化中で話題的にはホットだし、主人公の黒崎一護チャンも嫌いじゃないんだけど……。チャン一、割と曇らせ要素が多いから、僕の『異常』アブノーマル判定は割とギリギリなんだよなあ……」

カイは『BLEACH』第60巻をパラパラとめくりながら、次行くべき世界か寸評する。

カイの目的は、完膚なきまでの敗北をする事。そして、その目的を果たすために求めているのが、世界に愛された強者、とびつきの『異常』アブノーマル。凄く頭の悪い要約をすれば、ご都合主義満天のチート主人公である。

その点だけで言えば、『BLEACH』の主人公は合格だろう。まさしく世界に愛され、世界を救う存在として運命づけられた存在であり、カイ基準で言えば『異常』アブノーマルと言って差し支えないのだから。

ただ、チート主人公と言えるかは、正直微妙なところなのだ。『BLEACH』の主人公・黒崎一護は、何度も苦戦を強いられている。持っているポテンシャルは作中最高なのだが、どうにも最強とは言いづらい。

その点で言えば、カイを打ち倒す『異常』アブノーマルとしては合格を上げられない。

しかし、それは現段階での話だ。カイは、自分が接触する事で主人公を成長させる事に、1度成功を果たしている。リムル・テンペストが『異常性』アブノーマルスキルを得た事、それがその成功を示している。

簡単な話、主人公の強さは後からどうとでもできる事を、カイは分

かっているのだ。

「あんまり贅沢を言ったら決まらないんだけど。僕今新しい後輩が欲しい気分なんだよね。『BLEACH』に僕の後輩にできそうな子って、居たっけかな？」

今重視している部分、後輩にできるキャラが居るか、『過負荷』^{マイナス}覚醒が期待できる人物が居るかどうか。カイはそこに焦点を当てた。

でも、感触は良くない。

「悪役って言えば藍染惣右介^{ヨシノ}^様だけど、彼も普通に『異常』^{アブノーマル}側だよ。後、個人的に彼が『過負荷』^{マイナス}に目覚めるのは解釈違いだし……。幸運がマイナスな子っていうと、ある意味でチャーンがそうだけど。彼を『過負荷』^{マイナス}にしちゃうのは本末転倒だし……。ただ単に試練をたくさん与えられてるキャラは多いけど、生まれながらの負け役っていうと

———」

生まれながらの負け役、『過負荷』^{マイナス}の素養がある人物は『BLEACH』に存在しない。カイがそう結論付けようとした、その時である。

『狭間空間』が、まるで何かに激突されたように、大きく揺れた。

「何だっ!?!———っ」

大きく揺れた事で、ショートでもしたように電灯が爆ぜ、そうして不安定になった蛍光灯が爆ぜたために尖った部分を先にして落ちてくる。落ちる先がカイの右目で、見事に深々と突き刺さるのだから、さすがは幸運値マイナスと言ったところか。

「全く、自分の拠点で死ぬとは思わなかったよ。ま、オールイズファンタジー^全^部^幻^想^部」

毎度の如く、カイは過負荷『幻実当避』^{マイナス}^{オールイズファンタジー}で死んだ現実から逃避し、九死を一生に上書きした。

やれやれと溜息を零しながら、大きく揺れた原因を探るべく、窓から外を眺める。

「……………誰だあ? 僕の『狭間空間』に干渉してきた相手は」

カイは、窓から下を見て、『狭間空間』が何者かに干渉された事を察した。

何せ、教室1個分しかないはずの空間に、他の教室どころか校舎が

生え、あまつさえ校庭まで広がっているのだから。

そう。『狭間空間』は教室1個分の空間から、校庭付き校舎に変貌させられたのだ。校庭から先の空間は相変わらず暗闇が広がっているが。幸いな事に、校庭と暗闇の境が見えない壁で区切られ、空気が漏れ出ていたり、校庭の土がどンドン零れていたりはしていない。

変貌させられた『狭間空間』を観察している最中、足音が響く。人間が走っているような音だ。しかも、扉を勢いよく開けているような音も聞こえる。増えた教室の扉を開け放って行っているのだろうか、カイにも容易に想像できる。

「……僕を探してるって事かな？」

『狭間空間』を変貌させた相手が、この空間に干渉してきた相手が、自分を探している。カイはその事に、期待感を膨らませていた。

ここに干渉できる程の相手が、自分を探している。その相手は、敵かもしれない。自分を倒し得る程の、自分に完膚なきまでの敗北をくれる程の敵かもしれない、と。

残念ながら、その期待が叶う事はない。いつものように、望みの叶わない存在故に。

「もう……ここは何処なのよ！誰も居ない………の？」

足音の発生源がカイの居る教室の扉を開け放ち、その姿をカイに曝して、固まった。

奇しくもカイと似たように何処ぞのブレザー制服を身に纏った、少し紫がかった黒いセミロングをストレートに広げた、高校生程の少女。

彼女は、まさか此処にヒトが居るとは思っていなかったようで、こうしてカイというヒトの存在をその目にするのは、予想外だったのだ。

つまり、これは、『狭間空間』に干渉した事も、そもそもここに至った事も、彼女にとって予想外の事態。

「……く、くくく。……あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！」

ただしそれはカイにとっても同じ事だ。

カイもこの少女と出会うのは、予想外の事態だった。

しかしそれは同時に、望外の好機でもある。

「え、えつと……。貴方は……?」

「おつと、これは失礼。初めまして。僕は八倉海^{やぐらかい}。『七転び八起き』の『八』に、『胸倉』の『倉』、『陸海空』の『海』で、八倉海」

混乱と脅えで扉の影に隠れようとする少女へ、カイは優しく声を掛け、ゆっくりと傍に寄った。

そうして、カイは少女へと手を差し出すのだ。

「ようこそ、茜雫^{せんな}。歓迎するよ?」

劇場版『BLEACH』、『MEMORY OF NOBODY』のヒロインたるその少女に。自分の後輩となり得る、茜雫という少女に。

この日、この邂逅で以って、彼の行く先は決定するのだった。

See you next fantasy.